

# 上開田村平遺跡

徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財  
発掘調査報告書 第6集



1999

水資源開発公団

財団法人 岐阜県文化財保護センター



上開田村平遺跡遠景（東より）



発掘状況（左上が北）

## 序

揖斐川最上流部の旧徳山村を舞台にした、映画「ふるさと」の記念碑が建つ旧徳山村上開田地区。昭和62年に廃村となるまで集落が営まれていたその下に縄文時代以来の先人の生活の跡が遺されていました。

本報告書は、徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第6集であり、平成4（1992）年度に実施した「上開田村平遺跡」の発掘調査結果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代と中近世、さらには近現代までの生活の跡や遺物が発見されました。中でも縄文時代中期末葉の土器がまとまって出土し、貴重な資料を得ることができました。

この報告書の刊行にあたり、発掘調査および出土品の整理、報告書の作成に際しまして、御指導、御協力を賜りました関係諸機関、各位に厚くお礼申し上げますとともに、今後ともより一層の御指導、御協力をお願い申し上げます。

平成11年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター  
理事長 村 木 光 男

## 例 言

1. 本書は、岐阜県揖斐郡藤橋村大字開田字北ガイ戸に所在する「上開田村平遺跡」(遺跡番号G19F-06693)の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、徳山ダム建設事業に伴うもので、水資源開発公団から岐阜県が委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は、平成4年度に実施し、大参義一元愛知学院大学教授(故人)の指導のもとに、北洞勝臣・武藤貞昭が、また平成5年度(残務分)は篠田通弘が担当した。
4. 報告書作成は平成7年度に武藤貞昭が担当し、権田絵里(平成7年度補助調査員)が補佐した。そして、平成9・10年度に小谷和彦が引き継いで行った。本書に掲載した石器の実測は、安田(大知)正枝・小谷和彦・村瀬俊哉・高島桂子が、陶磁器の実測は高島俊美が、和鏡の実測は澤村雄一郎が、木製品の実測は千藤克彦がそれぞれ行った。その他の遺物の実測・拓本・トレースは江間香代子・服部みどり・松岡美代子・傘木文恵・竹内恒子・権田絵里・今尾さち子・小木曾美智・国井悦子・轟下賀代子・高島・高田桂子・村瀬・山口百合子・足立豊子・小谷が行った。
5. 遺物の写真撮影は、佐藤右文氏(奈良県在住)に依頼した。
6. 本書の執筆は、武藤貞昭・安田(大知)正枝・小野木学・高橋幸仁・小谷和彦が分担執筆し、執筆人名は文末に示した。さし銭・銭貨の計測表および岐阜県内の和鏡一覧の作成は北洞勝臣が行った。全体の編集は武藤貞昭が担当し、小谷和彦が引き継いだ。なお、報告書執筆にあたり、谷口和人・河村一彦・千藤克彦・早野壽人・堀田一浩・成瀬正勝・藤田英博・長屋幸二・澤村雄一郎・近藤大典の協力を得た。
7. 地形測量および空中写真撮影と空中写真測量は、柳イビソクに委託して行った。
8. 自然科学分析は柳ハレオ・ラボ、柳吉田生物研究所、岡田文男氏(京都造形芸術大学)、吉田寿徳氏(朝日大学歯学部)および、岐阜県繊維試験場、岐阜県公衆衛生検査センターに依頼して行った。その結果は第4章および本文中に掲載した。
9. 発掘調査および報告書作成にあたって、次の方々や諸機関から御助言・御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略・順不同)  
(故)大参義一・八賀晋・吉田英敏・千葉豊・森下章司・富井眞・大石崇・久保智康・高橋順之・浅野弘光・鈴木元・伊藤禎樹・岩田隆・木下哲夫・白川綾・海道順子・加藤善暉・加藤実・細尾重平・白井キミコ・水資源開発公団徳山ダム建設所・藤橋村・久瀬村・揖斐川町・揖斐川町歴史民俗資料館・揖斐県事務所・西濃教育事務所
10. 発掘調査作業、ならびに調査記録および出土品の整理などには、次の者が参加した。  
中石たけ・竹中としま・高橋花子・竹中直太・増本なつ美・土屋重義・高橋寛治・高橋つや  
(故)清水義太・清水おさの・扇間重男・小倉富恵・小玉春子・川口ふじま・本多博道・市田信子・山岸孝枝・長瀬重一・(故)高橋利美・田中和一・小西政次郎・小西かの・小倉ふみ子・渡辺あき美・江口もと・村山みつ子・月加田哲・竹中栄子・木村剛・佐々木勝・島田崇正・林大智・前田周子・森本成絵・太田晴貴・高島桂子・脇野伸子・河本節子・中村とよみ・水谷八重子・松岡美代子・江間香代子・伊藤節子・酒向邦子・山本真理・米津光江・傘木文恵・進藤有美子・竹内恒子・浅野紀美代・広瀬寛子・佐藤まさみ・服部みどり・加納恭子・岩平澄子・豊田主子・山岡順美・後藤けい子・小田富士子・直井江里子・近藤千世子・北島直子(敬称略・順不同)
11. 調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

## 凡 例

1. 遺物挿図の縮尺は次のとおりで、それぞれスケールを添付した。
    - ・住居跡（炉跡）…1/10、1/15
    - ・集石遺構……1/15
    - ・埋設土器……1/10
    - ・焼礫集積遺構…1/30
    - ・その他の遺構……1/10、1/15、1/20、1/30、1/40
  2. 遺物挿図の縮尺は次のとおりで、それぞれスケールを添付した。
    - ・縄文土器…1/3、1/4
    - ・石器類……2/3、1/2、1/3、1/4
    - ・陶磁器類…1/4
    - ・銭貨類……1/1
    - ・和鏡……1/1
    - ・木製品……7/10
  3. 図中の方位は、第1・2・5図は真北を示し、その他はすべて磁北を示す。
  4. 本書で使用した土色名については、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。
  5. 水糸高は標高を示し、土層図の右または左側に記した。
  6. 本文・表・図中に必要に応じて遺構記号を使用した。これらは次のように遺構の種類を表す。
    - ・SB…住居跡、炉跡
    - ・SZ…埋設土器
    - ・SI…集石遺構、焼礫集積遺構
    - ・SK…土坑
    - ・P……ピット
  7. 遺物番号は種類によって次のように表記した。なお、本文・挿図・表・図版とも統一してある。
    - ・土器類…… 1～404 (404点)
    - ・石器類…… 504～643 (140点)
    - ・銭貨類…… 901～996 (96点)
    - ・和鏡……1000 (1点)
    - ・木製品……1001 (1点)
    - ・歯……1002 (1点)
    - ・陶磁器類…2001～2044 (44点)
    - ・茶臼……2045 (1点)
- 以上の688点を掲載した。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表 目次	
図版目次	
第1章 調査の概要	
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 発掘調査の経過	4
第3節 遺跡の環境	6
第2章 遺跡の層序と遺構	
第1節 遺跡の層序	11
第2節 縄文時代の遺構	13
第3節 その他の時代の遺構	33
第3章 出土遺物	
第1節 縄文土器	49
第2節 石器	85
第3節 古代以降の土器	121
第4節 その他の遺物	124
第4章 自然科学分析	
第1節 木製品の分析	135
第2節 炭化材の分析	136
第3節 土壌の分析	147
第5章 結 語	163
引用・参考文献	165
図版	168

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡分布図	2	第34図	SK・P出土土器(1)	54
第2図	遺跡周辺地形図	1	第35図	SK・P出土土器(2)	56
第3図	グリッド設定図	4	第36図	SK・P出土土器(3)	57
第4図	調査区域図	5	第37図	SK・P出土土器(4)	58
第5図	遺跡周辺土地利用図	7	第38図	SK・P出土土器(5)	59
第6図	遺跡土層断面図	12	第39図	SK・P出土土器(6)	60
第7図	遺構配置全体図	14	第40図	SK・P出土土器(7)	61
第8図	遺物出土状況図	16	第41図	包含層出土土器(1)	64
第9図	縄文時代の遺構配置図	18	第42図	包含層出土土器(2)	65
第10図—1	第1号炉跡	13	第43図	包含層出土土器(3)	66
第10図—2	第2号炉跡	19	第44図	包含層出土土器(4)	68
第11図	第3号・第4号炉跡	20	第45図	包含層出土土器(5)	69
第12図	第1号埋設土器	21	第46図	包含層出土土器(6)	70
第13図	第2号埋設土器	22	第47図	包含層出土土器(7)	72
第14図	焼礫集積遺構平・断面図	24	第48図	包含層出土土器(8)	74
第15図	SI3炭化材出土状況	24	第49図	包含層出土土器(9)	75
第16図	SI3礫計測資料	25	第50図	包含層出土土器00	76
第17図	SI3底面付近の礫出土状況	23	第51図	包含層出土土器01	78
第18図	SI3発掘平面	26	第52図	包含層出土土器02	79
第19図	第1号・第4号集石遺構	28	第53図	包含層出土土器03	80
第20図	第2号集石遺構	27	第54図	包含層出土土器04	81
第21図	第5号・第6号集石遺構	29	第55図	包含層出土土器05	82
第22図	その他の時代の遺構配置図	34	第56図	包含層出土土器06	84
第23図	和鏡埋納遺構	35	第57図	第2号埋設土器出土土器	89
第24図	中世墓 (SK88)	36	第58図	SK・P出土土器(1)	90
第25図	中世墓 (SK97・98)	38	第59図	SK・P出土土器(2)	92
第26図	積石塚	40	第60図	SK・P出土土器(3)	94
第27図	厩跡 (SK20)	41	第61図	SK・P出土土器(4)	95
第28図	厩跡 (SK5・6・10・11)	42	第62図	包含層出土土器(1)	96
第29図	鍛冶遺構 (SX3)・井戸跡 (SK18)	44	第63図	包含層出土土器(2)	98
第30図	ホーロ (SX2、SK68)	45	第64図	包含層出土土器(3)	99
第31図	カマバ (SX1)	46	第65図	包含層出土土器(4)	100
第32図	芋穴 (SK67・69)	48	第66図	包含層出土土器(5)	102
第33図	遺構出土土器 (SB4他)	52	第67図	包含層出土土器(6)	103
			第68図	包含層出土土器(7)	104

第69図	包含層出土石器(8) .....	105
第70図	包含層出土石器(9) .....	106
第71図	包含層出土石器(10) .....	107
第72図	包含層出土石器(11) .....	108
第73図	石錘重量分布図 .....	87
第74図	中近世陶磁器(1) .....	121
第75図	中近世陶磁器(2) .....	122
第76図	さし銭拓影(1) .....	125
第77図	さし銭拓影(2) .....	126
第78図	さし銭拓影(3) .....	127
第79図	さし銭拓影(4) .....	128
第80図	さし銭拓影(5)・銭貨拓影 .....	129
第81図	和鏡・木製品 .....	132
第82図	茶臼 .....	134
第83図	SI 3 炭化材取り上げ番号 .....	137
第84図	便所様遺構試料採取位置 .....	148
第85図	便所様遺構ステロール組成 .....	157
第86図	便所様遺構脂肪酸組成 .....	158
第87図	動植物等の脂肪酸組成 .....	159

## 表 目 次

第1表	人口の変遷 .....	9
第2表	土地利用の変遷 .....	10
第3表	縄文時代の SK・P一覧表(1) .....	31
第4表	縄文時代の SK・P一覧表(2) .....	32
第5表	縄文時代の SK・P一覧表(3) .....	33
第6表	その他の時代の SK・P一覧表 .....	47
第7表	石器計測表(1) .....	109
第8表	石器計測表(2) .....	110
第9表	石器計測表(3) .....	110
第10表	石器計測表(4) .....	110
第11表	石器計測表(5) .....	110
第12表	石器計測表(6) .....	114
第13表	石器計測表(7) .....	111
第14表	石器計測表(8) .....	114
第15表	石器計測表(9) .....	114
第16表	石器計測表(10) .....	112
第17表	石器計測表(11) .....	113
第18表	石器計測表(12) .....	114
第19表	石器計測表(13) .....	115
第20表	石器計測表(14) .....	119
第21表	石器計測表(15) .....	119
第22表	石器組成表 .....	86
第23表	遺物観察表 (陶磁器類) .....	123
第24表	さし銭・銭貨計測表(1) .....	130
第25表	さし銭・銭貨計測表(2) .....	131
第26表	岐阜県内の和鏡一覧 .....	133
第27表	SI 3 炭化材樹種同定結果(1) .....	143
第28表	SI 3 炭化材樹種同定結果(2) .....	143
第29表	SI 3 炭化材樹種 .....	144
第30表	上坑出土炭化材の樹種 .....	145
第31表	ステロール .....	153
第32表	脂肪酸 .....	153
第33表	ステロール・脂肪酸分析結果 .....	155
第34表	ステロール組成・脂肪酸組成 .....	156
第35表	一般性状分析結果 .....	161
第36表	主成分組成 .....	162

## 図 版 目 次

- |      |                  |      |                 |
|------|------------------|------|-----------------|
| 図版1  | 上開田村平遺跡調査前の様子    | 図版35 | 包含層出土土器①        |
| 図版2  | 作業風景・土層          | 図版36 | 包含層出土土器②        |
| 図版3  | SB1・2・3          | 図版37 | 包含層出土土器③        |
| 図版4  | SB4・SZ1・2        | 図版38 | 遺構出土石器(1)       |
| 図版5  | SI3              | 図版39 | 遺構出土石器(2)       |
| 図版6  | SI1・2・4          | 図版40 | 遺構出土石器(3)       |
| 図版7  | SI5・6、切目石鍾集積     | 図版41 | 包含層出土石器(1)      |
| 図版8  | 和鏡埋納遺構           | 図版42 | 包含層出土石器(2)      |
| 図版9  | SK88・97・98       | 図版43 | 包含層出土石器(3)      |
| 図版10 | さし銭出土状況          | 図版44 | 包含層出土石器(4)      |
| 図版11 | 積石塚、SK5・6(厨跡)    | 図版45 | 包含層出土石器(5)      |
| 図版12 | SK11・20(厨跡)      | 図版46 | 中近世陶磁器(1)、茶臼    |
| 図版13 | ホーロ、芋穴           | 図版47 | 中近世陶磁器(2)       |
| 図版14 | 遺構(SB・SI・SZ)出土土器 | 図版48 | 中近世陶磁器(3)       |
| 図版15 | 土坑・ピット出土土器(1)    | 図版49 | 中近世陶磁器(4)       |
| 図版16 | 土坑・ピット出土土器(2)    | 図版50 | さし銭(1)          |
| 図版17 | 土坑・ピット出土土器(3)    | 図版51 | さし銭(2)          |
| 図版18 | 土坑・ピット出土土器(4)    | 図版52 | さし銭(3)          |
| 図版19 | 土坑・ピット出土土器(5)    | 図版53 | さし銭(4)          |
| 図版20 | 土坑・ピット出土土器(6)    | 図版54 | さし銭(5)、銭貨類      |
| 図版21 | 土坑・ピット出土土器(7)    | 図版55 | 和鏡、木製品、甗        |
| 図版22 | 包含層出土土器(1)       | 図版56 | 和鏡紐、黒色物質の断面     |
| 図版23 | 包含層出土土器(2)       | 図版57 | SI3出土炭化材(1)     |
| 図版24 | 包含層出土土器(3)       | 図版58 | SI3出土炭化材(2)     |
| 図版25 | 包含層出土土器(4)       | 図版59 | SI3出土炭化材(3)     |
| 図版26 | 包含層出土土器(5)       | 図版60 | SI3出土炭化材(4)     |
| 図版27 | 包含層出土土器(6)       | 図版61 | SI3出土炭化材(5)     |
| 図版28 | 包含層出土土器(7)       | 図版62 | SI3出土炭化材(6)     |
| 図版29 | 包含層出土土器(8)       | 図版63 | SI3出土炭化材(7)     |
| 図版30 | 包含層出土土器(9)       | 図版64 | SI3出土炭化材(8)     |
| 図版31 | 包含層出土土器①         | 図版65 | 土坑出土炭化材(1)      |
| 図版32 | 包含層出土土器②         | 図版66 | 土坑出土炭化材(2)、炭化種実 |
| 図版33 | 包含層出土土器③         | 図版67 | 便所様遺構土壌中の寄生虫卵   |
| 図版34 | 包含層出土土器④         |      |                 |

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至るまでの経緯

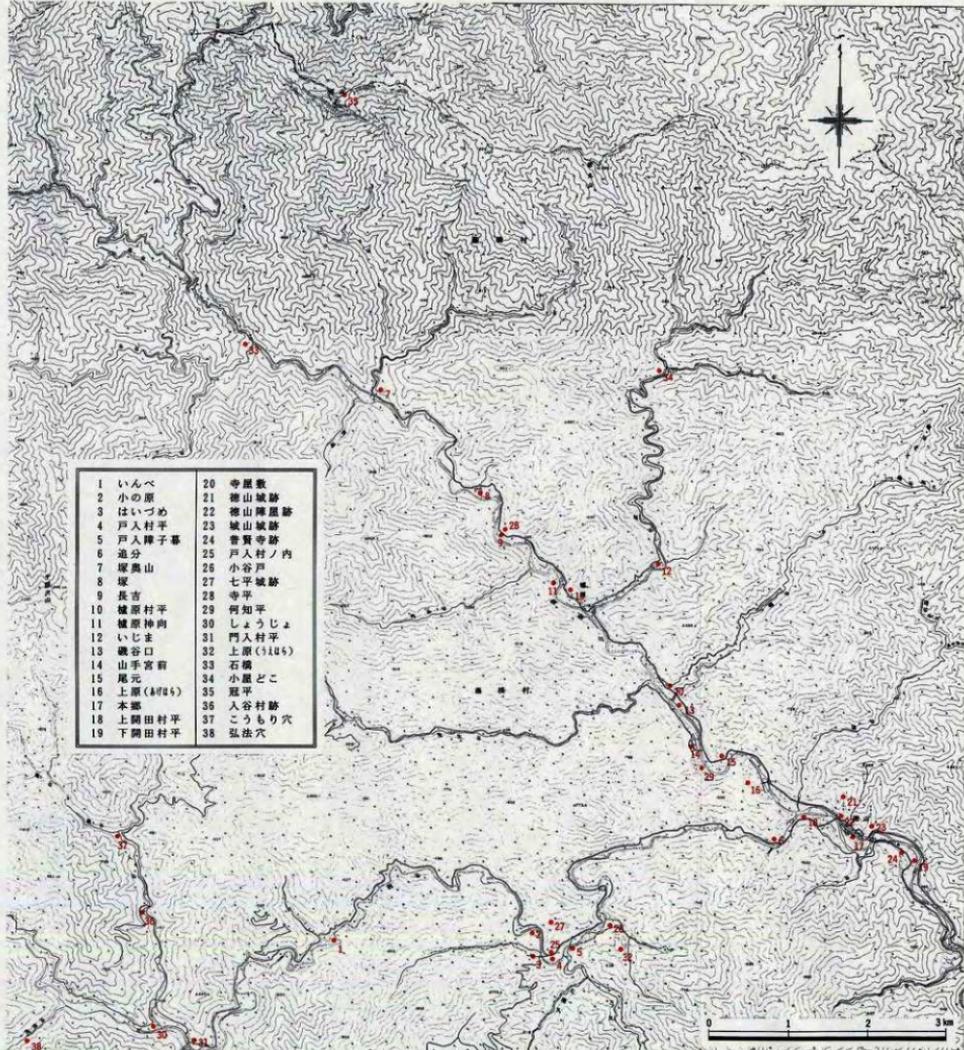
岐阜県揖斐郡藤橋村徳山地区<sup>1)</sup>の発掘調査は、1987(昭和62)年3月に水資源開発公社と岐阜県の間で締結された「徳山ダム建設事業に伴う水没地区埋蔵文化財発掘調査に関する協定」(以下、基本協定)に基づき、一部の先行調査<sup>2)</sup>を除いて、1987年から岐阜県教育委員会が実施してきた。1991(平成3)年4月に基本協定の変更が行われるとともに、財団法人岐阜県文化財保護センターが発足し、県より委託を受けて調査を実施してきている。なお、徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査の経緯の詳細と現況については、本書においては割愛したので、第8集<sup>3)</sup>を参照されたい。

上開田村平遺跡は1986(昭和61)年に発見された遺跡である。旧徳山村内の遺跡は、(故)根尾弥七氏をはじめとする『徳山村の歴史を語る会』の分布調査によって、数の増加を見てきた。上開田の集落内における遺跡の存在はこれまで確認されていなかったが、徳山ダム建設に伴う家屋の移転・撤去作業の中で地面が掘り返された際に、石鏃や切目石鏃等の石器類が出土した<sup>4)</sup>。1986年10月に徳山村教育委員会から遺跡発見届が提出され、岐阜県遺跡番号G19F06693 上開田村平遺跡として登録された。前述の基本協定においては調査計画に入っていなかったため、基本協定変更の際に調査対象として全体計画の中に位置づけられた。

上開田村平遺跡は、協定書に基づき、1992(平成4)年度の発掘調査計画により実施し、1930m<sup>2</sup>を発掘調査した。



第2図 遺跡局辺地形図(1/2000)



第1図 旧彌山村地内の遺跡分布図

(津波省国土地理院発行の2万5千分の1地形図より)

## 第2節 発掘調査の経過

上開田村平遺跡は、旧徳山村上開田集落の西端に位置する。揖斐川支流西谷川が揖斐川本流に合流する地点の右岸に形成された段丘の、最も高い西端山際に「六社神社」が位置する。神社境内前より北東に向かってゆるやかに下がる標高296~298mの平坦地が遺跡にあたり、廃村前の上開田集落（旧池田村）が形成される時点で、最も早く宅地や畑が作られた場所にあたる。調査時には、廃村から数年を経ており、家屋は解体され、荒蕪地となっていた。

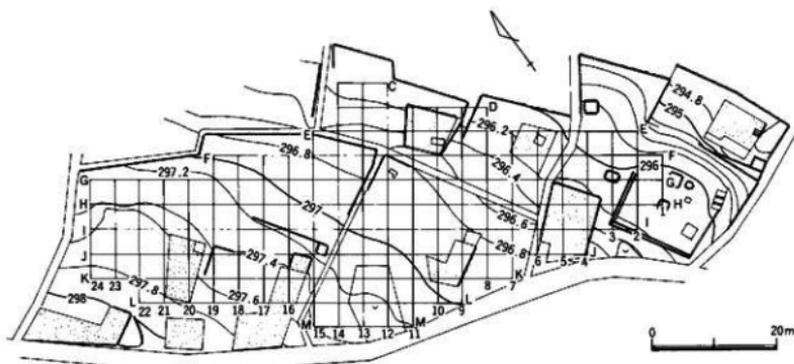
調査方法は、グリッドを設定し、グリッド単位のトレンチ発掘により遺跡範囲を確定し、面的に広げる方法をとった。グリッドは六社神社前の村道を基線に設定し、4m単位とした。そのため磁北に対して18°00'00"東に振っている。北東端を基点に、南北方向に北からA、B、C…とアルファベットの大文字を、東西方向に東から1、2、3…とアラビア数字を順次付し、グリッドの北東のコーナーにグリッド名を記した。

掘削はすべて人力で実施し、遺跡の層序と範囲確認のトレンチ掘削ならびにコンクリートや廃材等の除去にのみ重機を使用した。

遺物の取り上げは、調査年度より導入したトータルステーションの遺跡システムを使用して、出土地点の位置・標高を記録した。ただし、システムの導入が調査開始に間に合わず、7月20日以前の分については、遺構外の場合はグリッド単位の層序別で一括して取り上げた。遺構の場合は平面分布とレベルを記録して取り上げた。

土層セクション図のほか、遺構の平面図・断面図・エレベーション図などは、必要に応じて実測し写真の記録を行った。なお、560余に上る土坑・ピットについては、一部を除いて、平面図と観察記録の作成のみに留めた。発掘調査区全体の遺構プラン図作成および写真の撮影は、模型ラジコンヘリコプターを使用しての空中写真測量によって実施した。

次に発掘調査経過について、簡単に述べておく。



第3図 グリッド敷設図

## 5 第1章 調査の概要

5月1日より現地での調査を始め、5月7日の「調査始め式」をもって正式に調査を開始した。

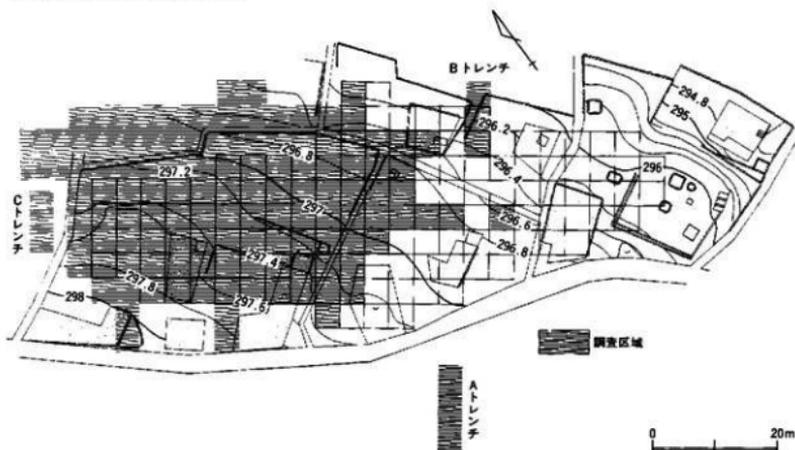
5月は遺跡の層序および範囲確認のため、H列を1～2グリッドおきに掘削する作業から実施した。その結果、表土下10cmあたりから縄文時代および中近世以降の遺物が混在して出土することが判明した。また、移転家屋の諸施設や廃材がいたる所に残っていた。遺構面が浅いため重機による表土除去は困難と判断した。ただ、移転家屋のコンクリートなどの基礎や廃材については、遺構に影響が及ばない範囲で5月下旬に重機により除去した。同時に、範囲確認と土層確認の目的で、9列の川側と山側および25列に深掘りのトレンチを入れた。

6月に入り、グリッド掘削の範囲を広げ、各グリッドともII層面での遺物・遺構検出に努めるとともに、M22グリッドに中心をもつ、塚状の遺構の調査も開始した。また、II層・III層を掘り込んで構築している厨跡・井戸・紙すき用かまど跡（カマバ）・貯蔵穴（字穴）・釜蓋用暖炉（ホーロ）などについても調査の対象とし、検出に努めることとした。下旬に入り、II層の攪乱も激しく遺構確認が困難なことから、検出面を必要に応じてIII層面まで下げることにした。

7月から、H列と19列を残してアゼはずしを開始した。14日にI15グリッドII層中より和鏡を検出した。20日よりトータルステーションの遺跡システムの運用を開始した。アゼの除去とともに、残した2本のアゼにより、調査区を4区域に区分し精査を継続していくこととした。縄文時代の炉跡と焼礫群を検出しているNW区と、住居跡の存在が予想されるNE区については、特に精密に力点を注ぐことにした。8月26日には、厨跡などの近世以降の施設について、浅野弘光岐阜県歴史資料館長（当時）の現地指導を受けた。

9月より土坑・ピットの掘り下げを開始した。

10月に入り、川よりの区域において調査区を一部周辺に拡張した。28～30日には、公団主催の移転者対象の見学会が実施された。



第4図 調査区域図

11月より山手宮前遺跡の調査を開始し、調査体制を2分するとともに作業員のほとんどを山手宮前遺跡に投入することとした。本遺跡では、全体の精査とともに遺物の取り上げおよび遺構実測を進め15日に現地説明会を実施した。25日、空撮および写真測量を行い、26日の「調査納め式」をもって作業員体制による調査を終了した。11月30日以降は、調査員および補助調査員のみでの作業となり、降雨・降雪の合間をぬって遺構実測を進めた。

12月11日以降は降雨と積雪により残務調査を断念し、21日に機材の撤収を、22日にプレハブの撤収を実施して、1992（平成4）年度の調査を終了した。

1993（平成5）年度、一部の遺構の最終確認調査を実施したが、前年度の検出遺構面にトレンチを入れたところ、砂礫層の下からも若干の遺物（縄文中期後半の土器他）の出土、遺構（土坑・ピット）の検出を見た。このことから、本遺跡は縄文中期後半の洪水によって埋没し、その後まもなく人々の生活が再開されたと考えられる。しかしその一方で、最終遺構面の検出と確認についての課題も残す結果となった。

#### （第1・2節 武藤貞昭）

- 1) 1987（昭和62）年3月廃村となった揖斐郡徳山村の行政区域を指す。揖斐川本流沿いに、上流より塚、権原、山手、本郷、上開田、下開田の6集落が、揖斐川支流西谷川沿いに、上流より門入、戸入の2集落の、合わせて8集落があった。
- 2) 岐阜県教育委員会では1986（昭和61）年度に「はいづめ遺跡」の発掘調査を600㎡実施した。これは、協定書締結のための基礎資料を得る意味も合わせ持った試行的発掘調査になった。
- 3) 1997「山手宮前遺跡」（岐阜県文化財保護センター調査報告書第28巻・徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8巻）
- 4) 篠田通弘 1986 「大昔の徳山村－縄文人の息吹きを追って－」（徳山村教育委員会）

### 第3節 遺跡の環境

#### 1. 遺跡の位置を知る

環境についてであるが、旧徳山村全体・揖斐谷全体のことは、それぞれ第4集（『戸入村平遺跡』1994）・第5集（『長吉遺跡・普賢寺跡』1994）に述べられているので省略し、遺跡のある上開田を中心に狭い範囲を対象とすることにした。

さて、遺跡に限らず、その物体の位置を確認することは、その物体を理解するにあたって基本的に重要なことである。今回述べられていく遺跡は、揖斐郡藤橋村（旧徳山村）にあり、岐阜県泉邊地方では北西端に位置する。揖斐川の最源流部に相当し、北と西は1,200m程度の山並みが福井県との境界をなしている。岐阜・大垣からは60～70kmの道のりにもなり、古い時代ほどむしろ福井県方面との結びつきが色濃く見られもした。

旧徳山村は昭和62年3月をもって廃村になり、現在は藤橋村の一部になっている。この旧徳山村には多くの遺跡（平成8年現在38か所）が確認されており、内徳山ダム水没地区内には29か所を数える。今回述べる「上開田村平遺跡」は集落「上開田」があったところに存在し、徳山地区では比較的下流域に相当する（第5図参照）。



第5図 集落「上開田」とその周辺における昭和40年頃の土地利用図 水資源開発公団より提供の地図を一部改変

## 2. 低い河岸段丘上に立地

集落「上開田」の場所は、揖斐川本流（東谷）と西谷川の合流点右岸に約4mの比高を持つ、低い河岸段丘上にある。徳山地区の揖斐川本流に沿って存在する河岸段丘は、その河床からの比高においておよそ3面になるという。すなわち5・10・20～30mの3面であり、上開田の場合はこの内で最も比高の小さいグループにはいる<sup>1)</sup>。

西谷川の流れが本流の流れを対岸（集落「本郷」）の方に押し出しているため、本郷側が凹岸（攻撃斜面）となり浸食されるのに対し、上開田側は凸岸（滑走斜面）となって堆積作用が進むことになる<sup>2)</sup>。おそらく上開田側は洪水時には何度となく浸水を繰り返し、その都度河岸段丘の上や横に土砂が堆積して、その段丘面は成長・発達をみたと思われる。縄文時代にあった集落も絶え、このたびの発掘調査によると、その後は早くも鎌倉時代以降になるという結果が、非常に興味深く感じられる。

遺跡範囲の大部分が標高296m以上の高さになるところをみると、段丘の中でも最も高いところに立地したことがわかる。明治21年の字絵図によれば集落「上開田」は24戸からなり、標高295m以上に限られているが、内23戸までが字「北ガイ戸」にあり字「池田嶋」には1戸のみである。ちなみに、上開田は池田橋取付道路あたりを境界に、上流側を北ガイ戸、下流側を池田嶋としていた。昭和55年になると47戸に増え、標高292m以上にまで拡大してくる。低い方はほぼすべて池田嶋分であるが、逆に標高の高い方にも拡大がみられ、これは北ガイ戸・池田嶋の両方にある。しかし、高くても300m止まりである。

以上の結果、伊勢湾台風などの大洪水時には集落に浸水・流失の被害があったが、いずれも標高294m以下の低く新しい集落部分に限られている。このような状況は平野部、とくに「自然堤防・後背湿地」地域や三角州地域の、いわゆる低湿地における集落立地の特色に通じるものがあり、一般的な傾向といえる。上開田の場合、低地を洪水から防止する対策がみられ、石垣や蛇籠が施されているが、大洪水の場合はそれでは防ぎきれないのである（第5図参照）。

## 3. 人口は廃村直前まで増加傾向

旧徳山村集落別の人口変遷をみると、明治から昭和の戦後しばらくまではすべての集落において、ほぼ増加ないしは現状維持基調を示しているが、高度経済成長期以降は減少基調に転じている。これを集落別にもう少し詳しくみると、明治22年を100とした場合、昭和36年・45年・59年は、旧徳山村全体がそれぞれ145・98・96であるのに対して、開田（上開田と下開田の合計）はそれぞれ159・151・146となり、昭和36年は3位（1位は本郷177・2位は山手159）であるもののその後は全部の集落のなかでの最高値を示している。このことは、高度経済成長期以降も人口の減少が他の集落と比べても少なく、この面からの特異な存在といえよう。この場合、上開田のみの値が得られないのが残念であるがやむを得ない（第1表参照）。

上開田は旧徳山村の中心集落「本郷」に近く、河原の陸地化が進んで土地に余裕があったために明治以降他の集落に比べ、人口が増加しやすい条件を備えていたといえる。昭和30年代になって中学校校舎・寮が新築され、引き続き体育館も建築されるが、これらの面積だけでも莫大である。学校が立地する場所としては、中心集落の近辺を候補地として掲げることが一般的であり、その意味では本郷の隣接地としてその有利性が十分考えられるところである。

一方、下開田も揖斐川の流れからみれば凸岸（滑走斜面）で堆積が進む現象を持つ共通点があり、土地面積の増大傾向は人口受け入れの素地になる可能性は大きいといえる。

#### 4. 開発・開墾進む

埋蔵文化財発掘調査により、上開田の集落は古くは鎌倉時代までさかのぼることが分かった。池田嶋は上開田の集落の場所（字北ガイ戸）の下流側に続いて、比較的新しい時代に陸地化したと思われる地区である。その大半が標高294m以下の土地である。川原からの比高はせいぜい1～2mであり、わずかの増水でも浸水する可能性は十分にある。先述のように、揖斐川の滑走斜面にあたるため、堆積作用が進行したはずである。天明年間に池田村（後の上開田）池田嶋の開墾が、本郷から36名と池田から6名の計42名で行われることになる。これはいわゆる新田開発であり、江戸時代には全国的に各地で実施されている。旧徳山村では、この他に糠原・揚原（本郷・上原）・漆原（後の下開田）などにあり、比較的平坦な土地で未利用地がその対象になった。

池田嶋の場合、開発が池田と本郷の両者（内訳は本郷が人数の上で86%を占めた）でおこなわれたが、その後土地争いが続く。明治6年に一応の話し合いが行われるものの、池田は納得していない。すなわち、

- ① 池田嶋の内、本郷の村民が作付しているところは本郷の持ち分である。
- ② ①の余地で、池田の町歩不足分を受ける。
- ③ その他の地所は両村入会とする。
- ④ 出水があっても、川木は持ち主のある地所では勝手にとってはいけない。
- ⑤ 両村入会の地は勝手にとってよい。

のような内容であるが<sup>9)</sup>、①が問題の発端であった。面積は増加傾向にありながら、人口の少ない池田には土地の余裕もあり、本郷からの出作が多くみられた。この状況は今日まで継続し、上開田（旧池田）のどくに池田嶋には本郷の持ち分の土地が多くあった。

#### 5. 土地利用の特色

慶長14年（1609）の統計によると、池田（後の上開田）では水田は少なく、しかも「下田」であるから、水稻の生産はかなり少なかったと思われる。その限られた水田の場所は、推測の域を出ないが、おそらく両側の小規模な谷（柿ノ谷と、少し下流の谷）で、標高300m以上の高い場所にみられる水田

第1表 旧徳山村集落別人口の変遷（村役場調べ）

年	本郷	開田	山手	糠原	塚	戸入	門人	徳山村
明22	411	232	119	221	160	286	181	1,610
明36 (指数)	727 (177)	369 (159)	212 (178)	301 (136)	202 (126)	321 (112)	199 (110)	2,331 (145)
45 (指数)	524 (127)	351 (151)	144 (121)	139 (63)	146 (91)	178 (62)	103 (57)	1,585 (98)
59 (指数)	469 (114)	338 (146)	138 (116)	202 (91)	104 (65)	180 (63)	108 (60)	1,539 (96)

単位は人、( )内の数値は明治22年を100とした場合の指数。

開田は、上開田と下開田を合計した数値。

〔徳山ダムの記録〕・〔徳山史〕より作成

第2表 上開田の農業的土地利用の変遷

慶長14年(1600)の池田村(上開田) (畝未満は切り捨て)		
下田	1反5畝	
上畝	2反4畝	中畝 2反3畝
下畝	4反2畝	下畝(当荒) 1反9畝
上畝(かみ原)	8反9畝	
下畝(かみ原)	8反5畝	下畝(かみ原当荒) 3反0畝
山落	0反8畝	
以上	合計	3町3反8畝
明治14年(1881)の開田(上開田・下開田の合計)		
田	6町7反	
畑	10町4反	

『徳山村史』による。

あたりではないかと思われる。また、畑については、やはり「下畝」の比重が高く、下畝(当荒)おそらく揖斐川の出水で畑の用を成さなくなったものと考えられる(第2表参照)。

一方、「かみ原」が他の集落に比べて圧倒的な面積を占めるのが特色である。耕地の60%近くにもなり、ちなみに、他の集落で例えば植原0.5%・塚0.0%(これら以外の集落の数値は確認できない)であることをみても、群を抜いていたことがわかる。それだけ和紙の生産があったことが分かるが、この「かみ原」の場所こそ十分な検討の余地があると思うが、ときどき浸水をみるような悪条件の場所、ないしは、山かげで農作物の生産が期待できないところに、大々的に作付されたのではないかと考えられる。まさに、陸化の進む池田嶋において、江戸時代の土地利用形態の特色を示すものといえる。慶応4年(1868)の村高によると、楮は本郷において多くなっている。これは本郷からの出作により池田嶋で楮が栽培されたことを示している。

明治8年(1875)には、旧池田・旧漆原が合併して開田となり、池田は上開田、漆原は下開田と呼ばれることになる。明治14年になると、田畑ともに相当増加しているようである。幕末から明治にかけては灌漑用水路の整備が進むが、土地利用上の数値にもよく現れている。

(第3節 高橋幸仁)

## 参考文献

- 1) 岐阜県文化財保護センター 1997 『山手宮前遺跡』
- 2) 高山茂美 1986 『理科年表読本 川の博物誌』 丸善
- 3) 徳山村史編集委員会 1986 『徳山村史』(徳山村)
- 4) 藤橋村企画課ダム対策室 1990 『徳山ダムの記録』(藤橋村)

## 第2章 遺跡の層序と遺構

### 第1節 遺跡の層序

上開田村平遺跡が立地する段丘は、河川との比高が4mほどしかなく、旧徳山村内の河岸段丘の中では最も比高の小さな部類に入る。本遺跡が位置する段丘上流部は、上開田の集落形成の過程において最も歴史の古い一角にあたり、「六社神社」が山際に鎮座していた。このことから段丘内では一番安定した場所にあたる。従来より宅地および畑地として利用されてきており、大規模な掘削は受けていない反面、集落形成に伴う整地や攪乱が多いことが予想された。

調査に伴い、19列東壁とH列北壁に堆積土層確認のためのセクションベルトを残したほか、遺跡の周辺部に3箇所ので掘りトレンチを入れた。

村道を挟んで山側の9列の延長ラインに入れたAトレンチ(第6図)では、地表下40cmから暗黄褐色土(Ⅲ層)となり、地表下80~120cmより砂質土(Ⅳ層)および砂礫層(Ⅴ層)になる。Ⅴ層は小粒の円礫( $\phi$ 3mm~10mm)と砂から成り、砂の多い層と礫の多い層が交互に7層以上にわたって堆積している。

遺跡の上流側端にあたる25列に入れたCトレンチ(第6図)においては、地表下30cmでⅢ層となり40~60cmで厚さ40~80cmのⅣ層に変わる。Ⅴ層はAトレンチより大きな礫(川原石)が入る。

以上の2つのトレンチと各セクションベルトの上層断面(代表的な部分を第6図に図示)から、本遺跡の基本的な層序を述べることにする。

第Ⅰ層：表土および耕作土などがこれにあたる。場所によっては、宅地・路地などに伴う整地土も含む。厚さは4~20cm程度である。

I a層：表土あるいは畑土にあたる。褐色土で円礫( $\phi$ 2~3cm)が混じる。

I b層：宅地あるいは路地などに伴う整地土である。暗黄褐色土で粘性・しまりとも強い。

第Ⅱ層：表土層の下に堆積している暗褐色土層である。粘性・しまりともある。 $\phi$ 1~10cmの礫を含む。厚さは20~40cm程度である。縄文中期末~後期の遺物包含層であるが、上層からは中近世の遺物も出土する。

第Ⅲ層：暗黄褐色土層で、第Ⅱ層と第Ⅳ層の漸移層にあたる。砂を多く含み無、しまりはややある。SW区を中心に、縄文時代早・前期の遺物が出土する。縄文時代中期米の遺物も混在する部分がある。厚さは20~30cmである。

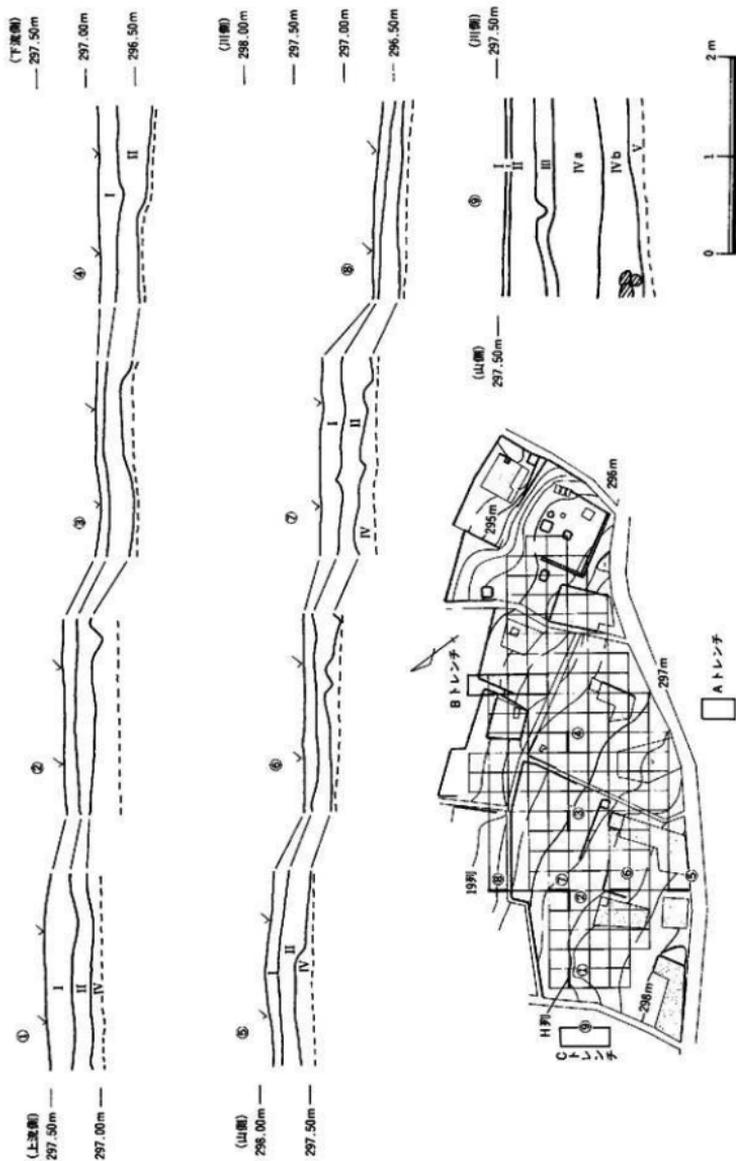
第Ⅳ層：黄褐色砂質土層である。厚さは20~100cm程度である。山側ほど堆積が厚い。Ⅳa層とⅣb層に区分できる。

Ⅳa層：礫( $\phi$ 5~10cm)はほとんど含まない。しまりはややあり、砂粒は非常に細かい。

Ⅳb層：a層に比べて粘性が少なく、色もやや暗い。砂粒はややおおきくなる。中に円礫( $\phi$ 2~10cm)を含む。

第Ⅴ層：黄褐色砂礫層である。大小の川原石が豊富に入る。砂粒も大きくなり、しまりは悪い。

(第1節 武藤貞昭)



第6図 遺跡土層断面図

## 第2節 縄文時代の遺構

本遺跡で検出した縄文時代の遺構は、住居跡(炉跡)4軒(基)、土器埋設遺構2基、焼礫集積遺構1基、集石遺構5基、土坑・ピット184基である(第9図)。

焼礫集積遺構は早期末葉と考えられ、その他の遺構の大半は中期末葉と考えられる。

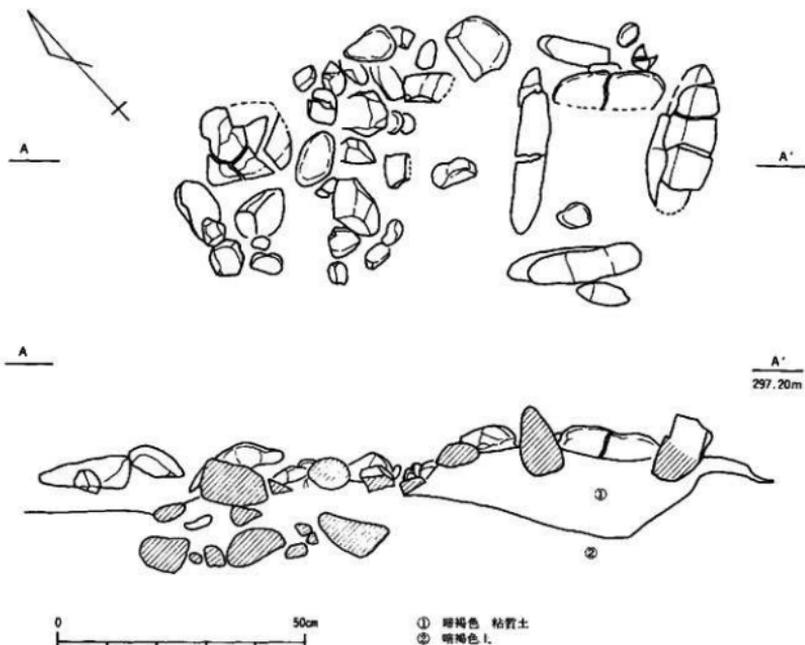
なお、ピット60からは切目石錘6点、SK79からは切目石錘7点がまとめて出土している。

以下、それぞれの遺構について、述べていく。

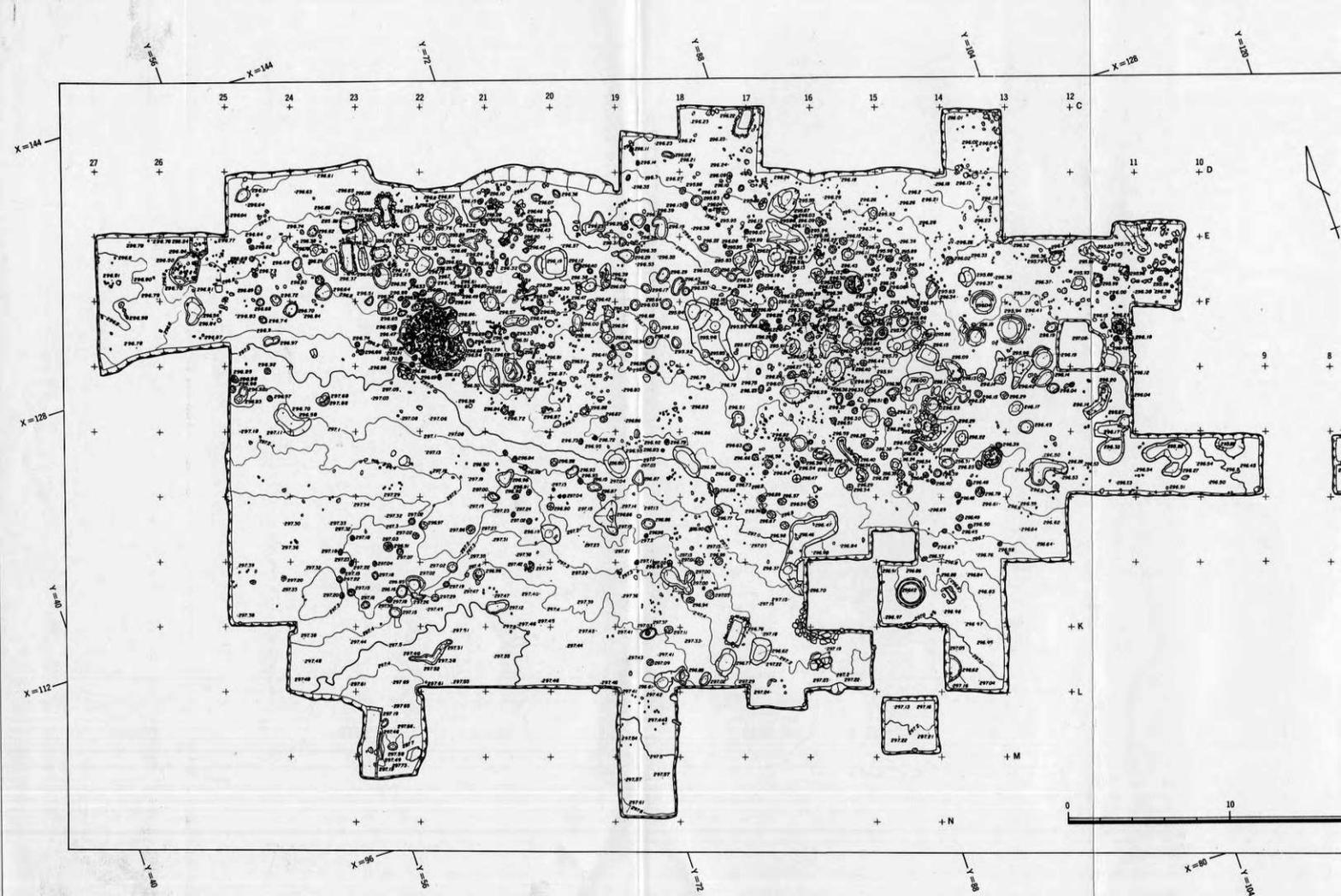
## 第1項 住居跡(炉跡)

## 1. 第1号住居(炉)跡(SB1)

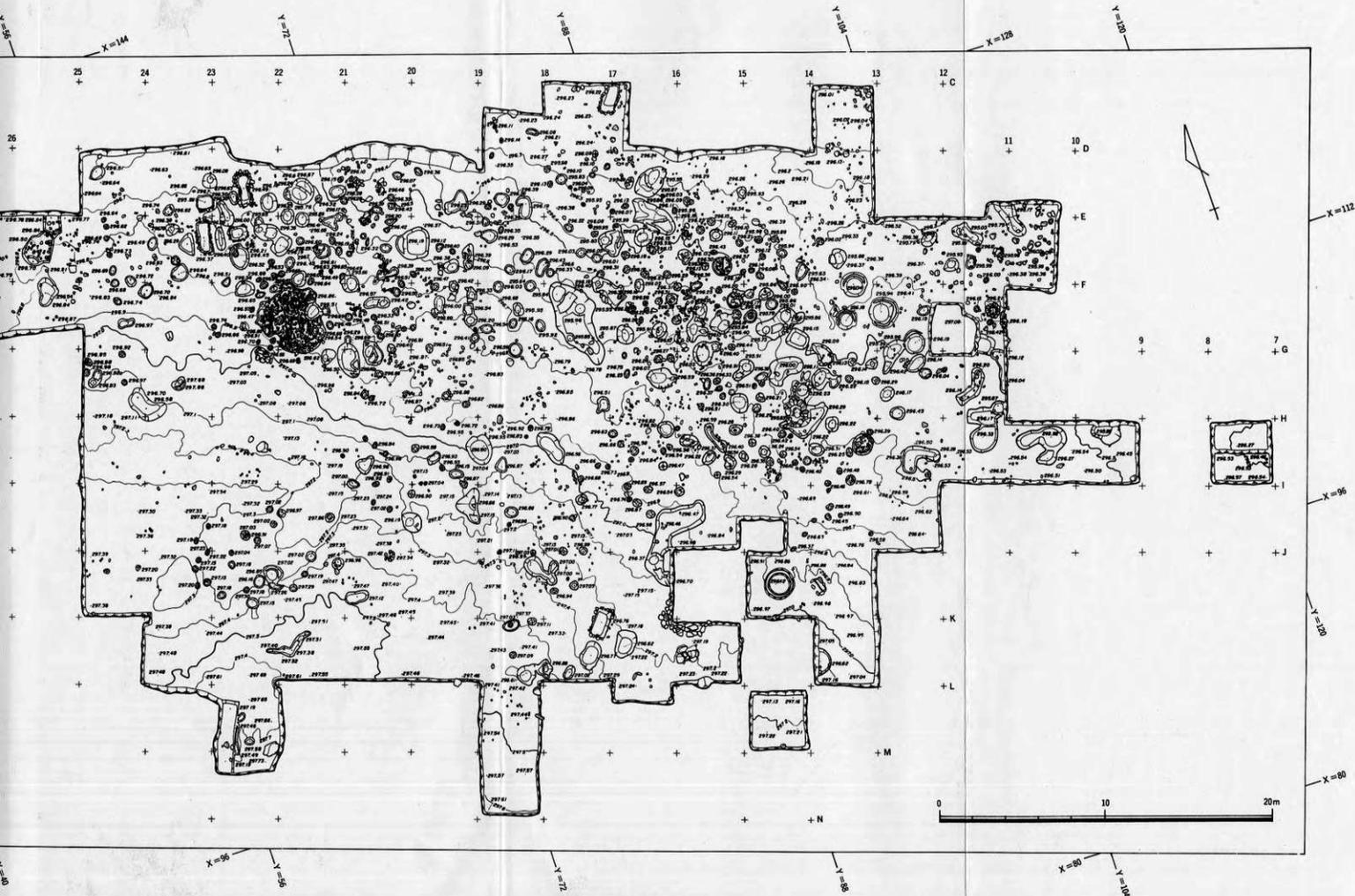
F20グリッドに位置する。住居跡のプランは検出できなかった。周辺には、近世の土坑(SK57)やピット(P303)が散在するほか、焼礫集積遺構(SI3)に関係すると思われる焼礫が西側に集中していた。検出時すでに、床面はとんでおり、炉跡のみを検出した。炉は川原石を方形に組んだ石囲い炉で、石はいずれもよく焼け割れていた。炉は40cm四方の大ききで、南側の石は少し動いていると考えられる。断面図(第10図-1)の①が炉の掘り込みと考えられる。炉内よりの出土遺物はなく、時期については不明であるが、周辺の土器等より中期末葉から後期初頭と推測される。



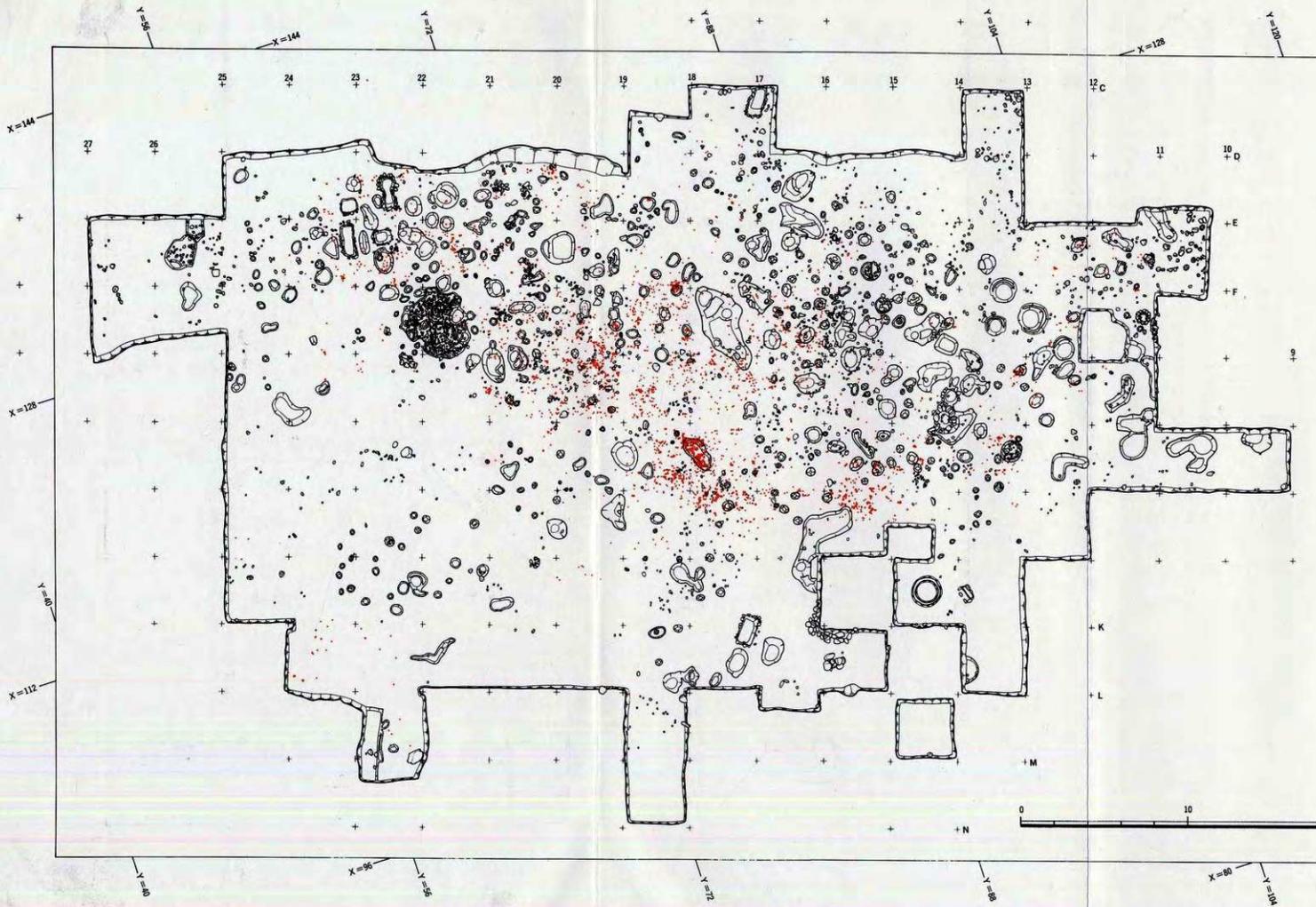
第10図-1 第1号炉跡



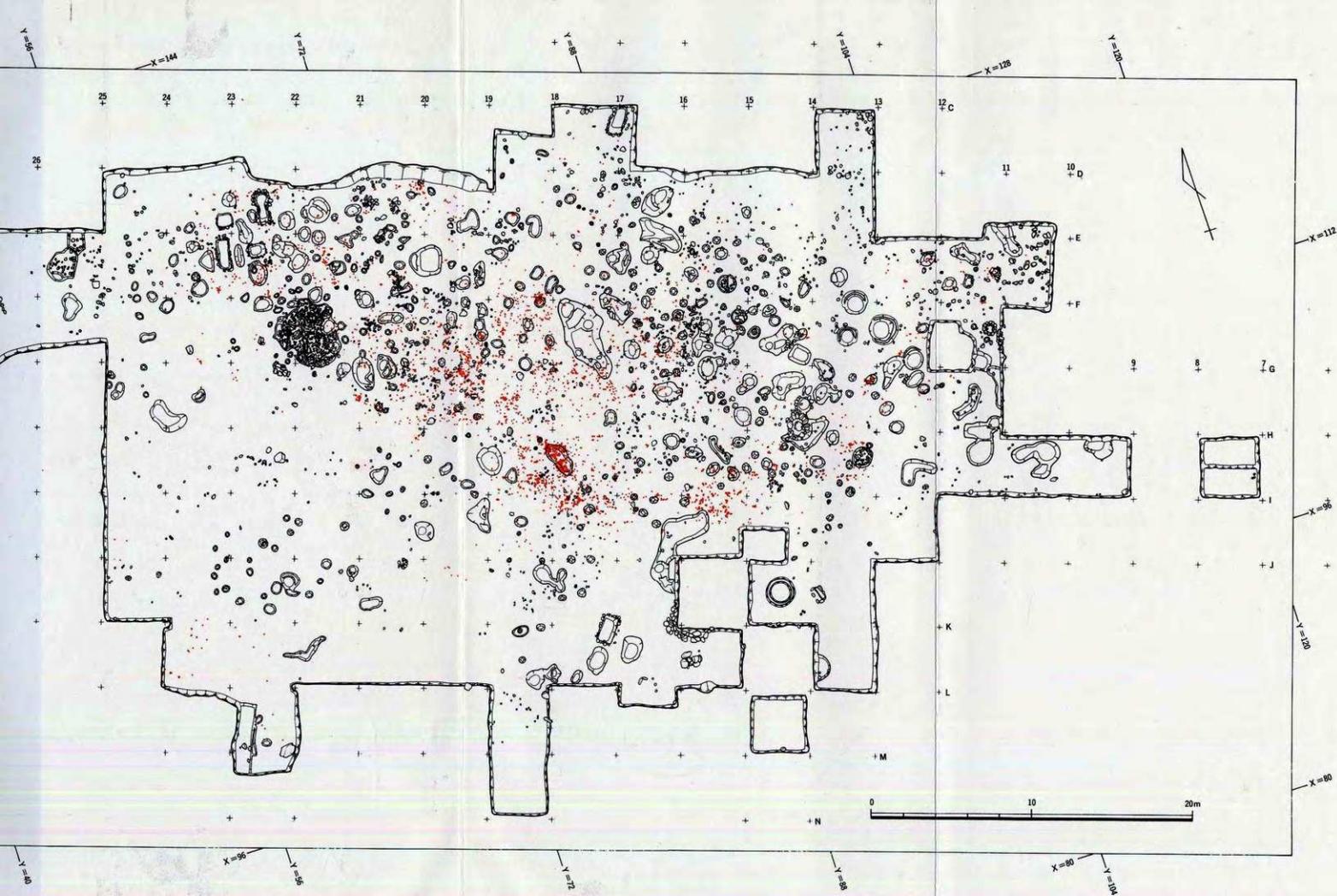
第7图 遺構配置全体图



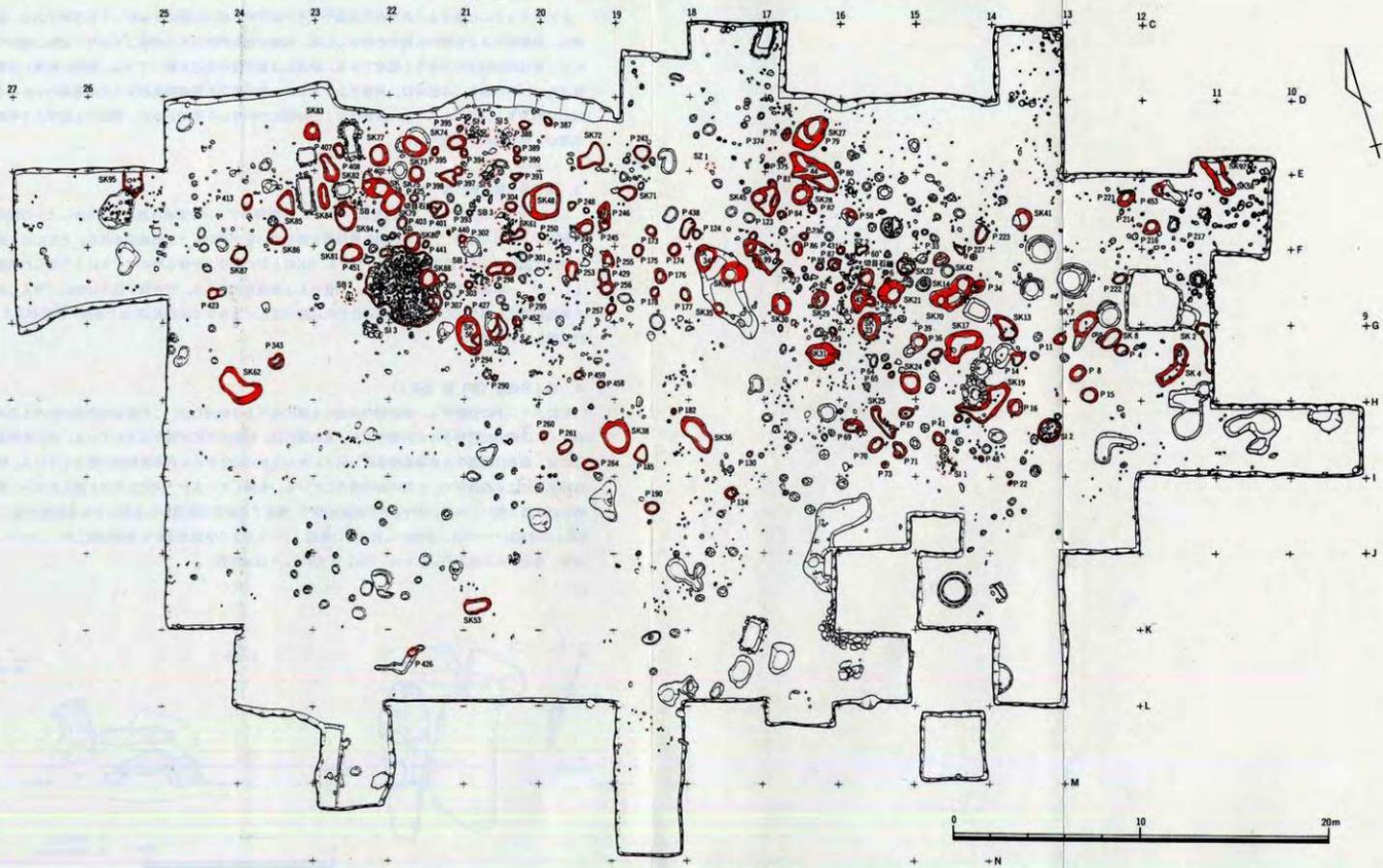
第7图 遺構配置全体図



第8图 遗物出土状况



第8圖 遺物出土状況



第9図 縄文時代の遺構配置図

## 2. 第2号住居(炉)跡(SB2)

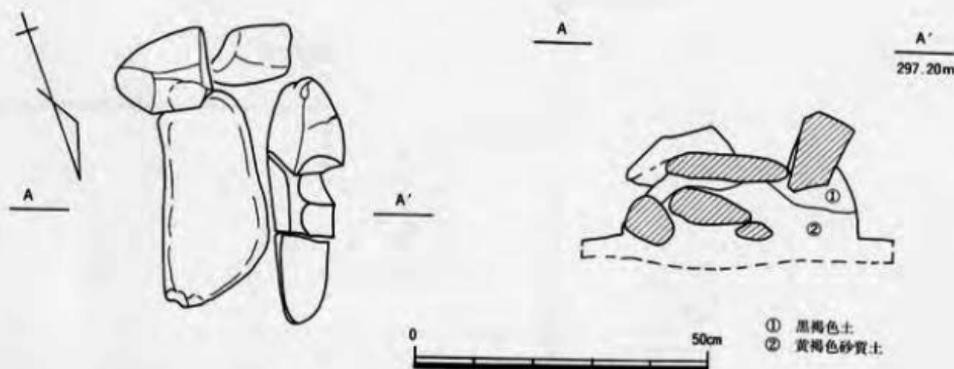
F22グリッドに位置する。住居跡の床面やプランは不明。柱穴に該当するピットも不明である。炉跡は、川原石による方形の石囲炉と考えられる。西側と南側の炉石のみ残存しており、被熱し割れている。炉は50cm四方の大きさと推定できる。炉床には扁平な川原石を敷いている。敷石に被熱した形跡はない。炉の掘りこみ部分は、黒褐色土であるが、敷石直下は暗黄褐色砂質土で本遺跡のいわゆる地山に相当する。炉内からの出土遺物はなく、時期については不明であるが、周辺の土器等より中期末葉から後期初頭と推測される。

## 3. 第3号住居(炉)跡(SB3)

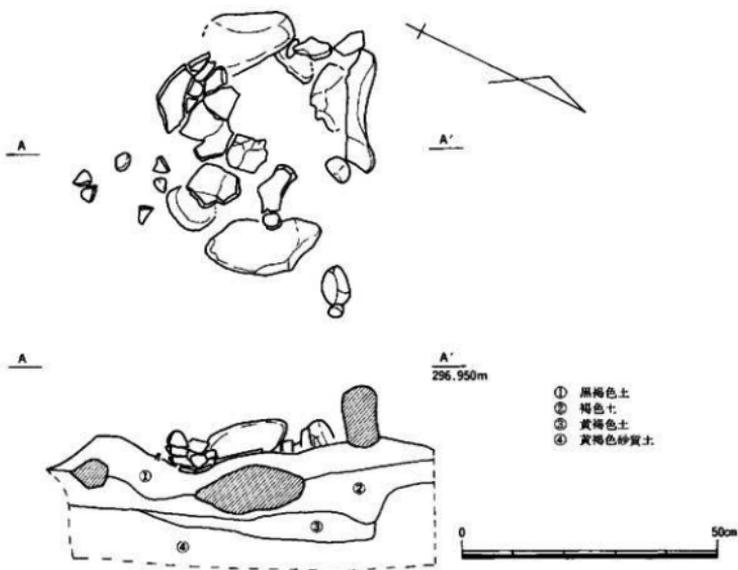
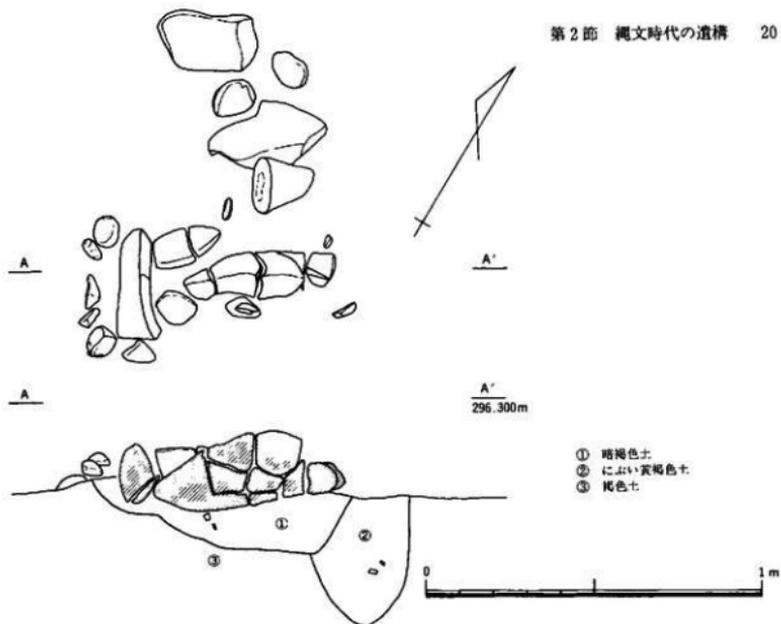
E20グリッドに位置する。SK61を切っている。住居跡のプランや床面は検出できなかった。石囲炉の炉石が1個のみ残存し、その西側に原位置を動いている炉石がもう1個検出された。ともに火を強く受けて割れている。炉そのもののプランも、SK61と炉の掘り方を切る別のピットにより切られ判断としない。一部残存する炉内の埋土は、粘質のある暗褐色土である。炉の掘り込みは地山と考えられる褐色砂質土を掘り込んでいる。周辺は近代以降の新しい大きな土坑(SK48)など後世の攪乱があり、柱穴等も不明である。

## 4. 第4号住居(炉)跡(SB4)

E22グリッドに位置する。移転前の住宅の土間の直下より検出した。この周辺は住宅の柱の土台石がすでに遺構面に設置された状態であり、北西隣には、住宅の芋穴が掘り込まれている。また炉跡周辺には、南東に位置する焼礫集積遺構(SI3)から上がったと考えられる焼礫群が集中している。炉は川原石による石囲炉で、3個の石が残存している。被熱しているが、劣化はさほど見られない。炉床には土器を敷いている。炉の大きさは50cm程で、残存する炉石の配置から方形になる可能性が強い。SB4の時期については、炉内から出土した土器(1~7)より中期末葉から後期初頭と考えられる。なお、推定される床面のレベルは、SB1やSB2より15cm程低い。



第10図-2 第2号炉跡

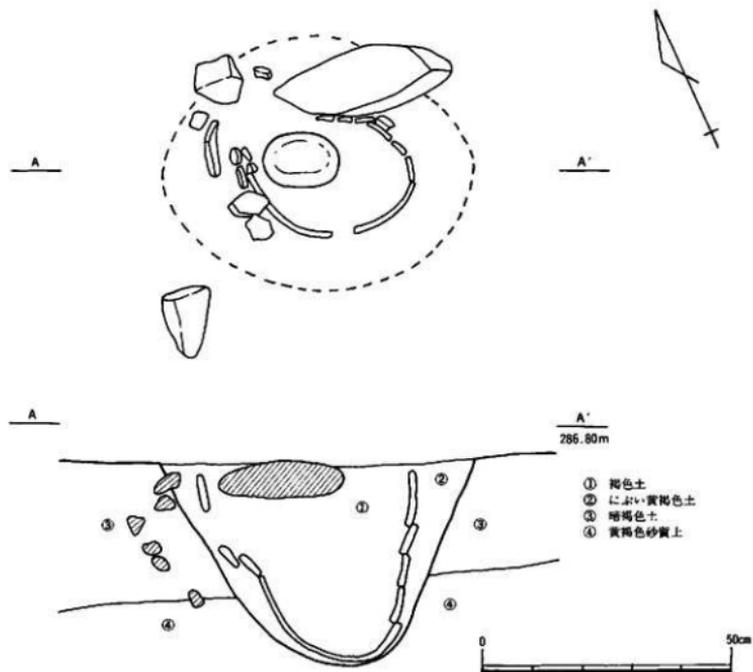


第11図 第3号・第4号炉跡

## 第2項 土器埋設遺構

## 1. 第1号土器埋設遺構 (SZ1)

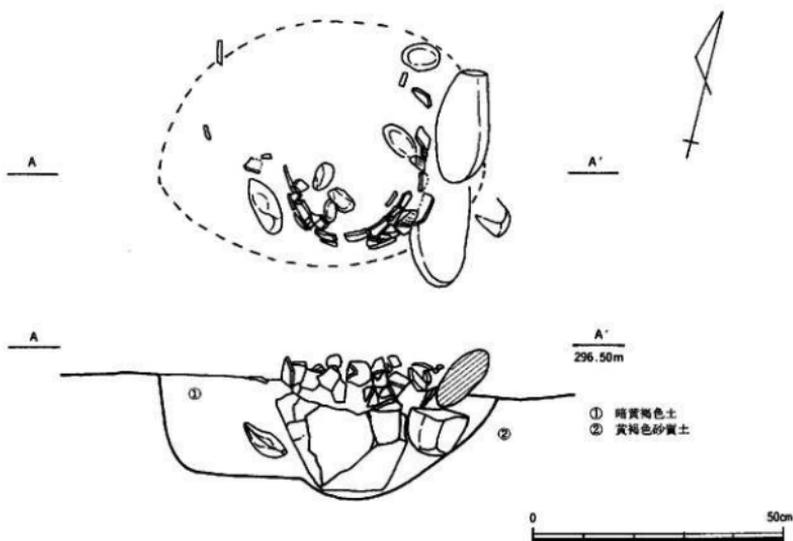
D17グリッドに位置する。集落内の路地のすぐ脇から検出した。路地中央には、簡易水道の埋設管（ビニールパイプ）があり、わずかにそれていたため残存していた。現地表面から8cmほど掘り下げたところで扁平な川原石を検出し、精査により直径60cmほどのプランを検出した。現存の埋設遺構の深さは40cmで、暗褐色土と黄褐色砂質土を掘り込んでいる。埋設土器の内部の土は、小礫を含む褐色土で、土器と掘り込み（ビット）の間には、にぶい黄褐色砂質土が入れられていた。後世の削平等により、遺構上部はとばされており、土器の口縁部は残存しない。土器の上部で検出した扁平な川原石は、土器埋設時に土器の上部に置かれたと考えられる。



第12図 第1号埋設土器

## 2. 第2号土器埋設遺構 (SZ2)

F15グリッドに位置する。第III層暗褐色土を削平し、第IV層検出時に川原石2個とともに、長径65cm、短径50cmの楕円形プランを検出した。上部は後世の削平により残存せず、現存の深さは約25cmである。埋設されていた土器は平底の深鉢で、胴部中央付近より上部を欠いている。胴部の最大幅は、25cmぐらいと思われる。埋設土器の掘り込みは西側に広がっており、埋設の際、土器と掘り方との間を暗黄褐色土で埋めているが、土器に隣接するようにして打裂石斧(504)が出土した。この外にも打裂石斧(505)・フレイク(506)が出土している。



第13図 第2号埋設土器

## 第3項 焼礫集積遺構

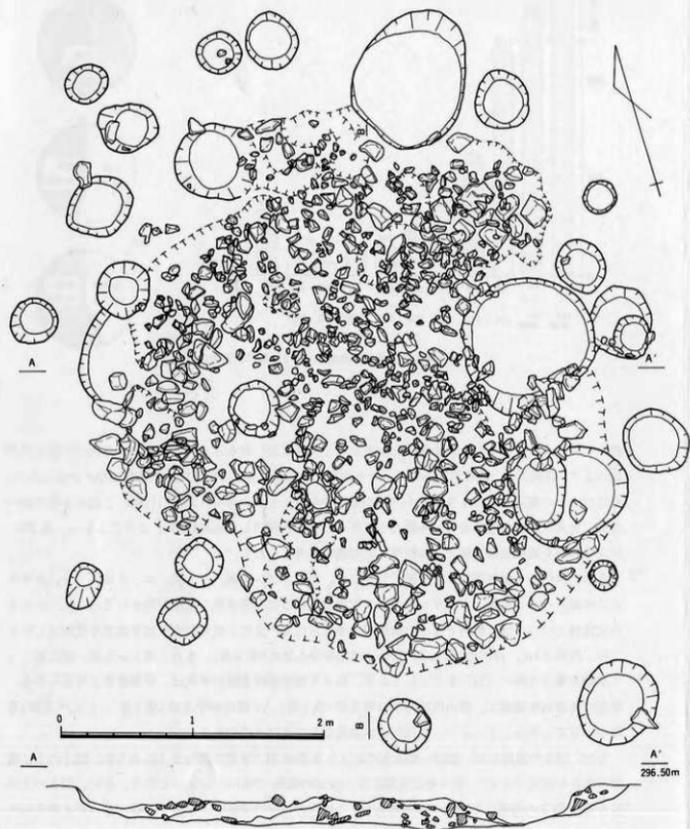
## 1. 焼礫集積遺構 (SI 3)

F22・F23グリッドに位置する。径約4m、深さ約20cmの円形の竪穴状遺構内に、5~30cm大の礫多数が充填されていた。礫の数は10110個におよび、そのすべてを観察した結果、礫のほとんどは円礫(98.8%)で、53.0%は欠損しており、56.5%は被熱していた。更に被熱によって割れた割れ口にも強く焼けた跡がみられ、これらの礫が繰り返し使用されたと考えられる。次に質量分布をみると、100g以下の小石が一番多く、その次は200g以下で重くなるにしたがって数が少なくなっている。しかし中には、1000g以上の礫もみられた(第16図)。

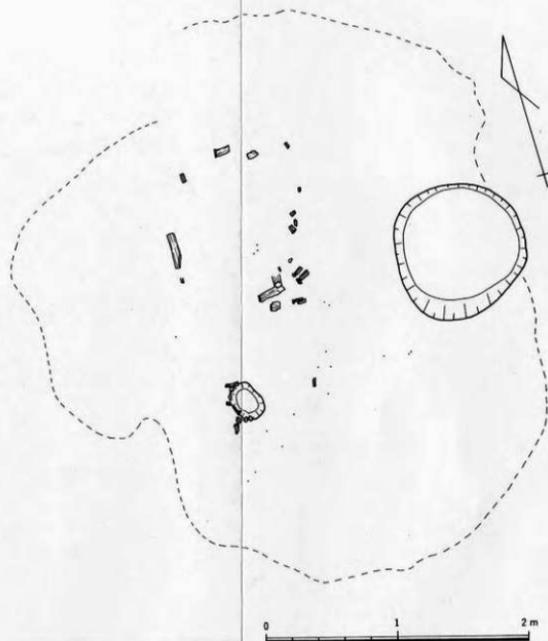
竪穴状遺構の底面付近からは、礫に混じて多量の炭化材も出土した(第15図)。炭化材は、竪穴状遺構の中央部付近から北にかけての底面付近より出土し、中には炭化した木材が折り重なった状態で



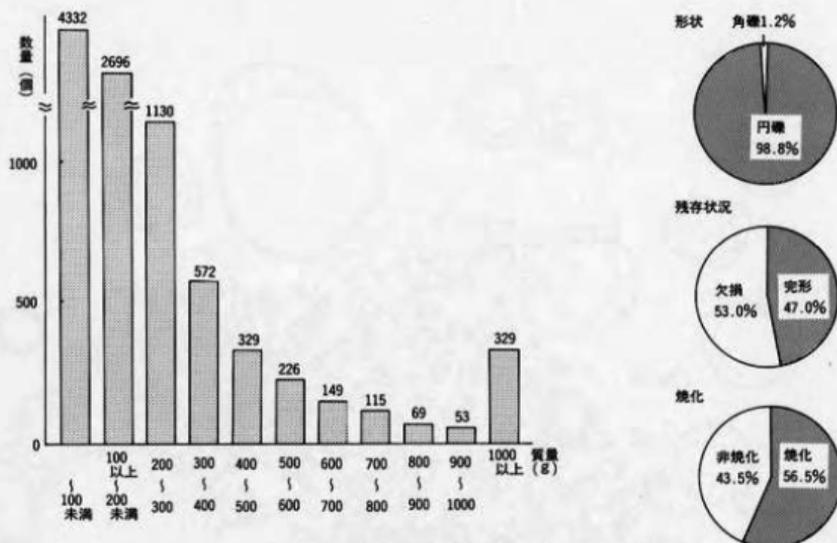
第17図 SI 3 底面付近の礫出土状況



第14图 烧窑集積遺構 (SI3) 平・断面図



第15图 SI3 炭化材出土状況



第16図 焼礫集積遺構 (SI 3) 礫の計測資料

検出されたものもあった。長さ20~25cmとかなり大きな炭化材もみられた。なお、中央やや南よりの地点より、径約25cm、深さ約10cmのピットを検出し、このピットの周辺には炭化材の小片がみられた。炭化材の下の底面直上にも多数の小円礫が炭化物小片とともにみられた(第17図)。これらを取り除いた後、竪穴状遺構の底面からは多数の不定形のピットを検出した(第18図)。このことから、SI 3は、竪穴住居跡を焼礫集積遺構として転用した可能性も考えられる。

なお、炭化材を樹種同定した結果、リョウブ、ヤシヤブシ亜属、ブナ属、エノキ属、クリ、ケヤキカエデ属、ハンノキ属、トネリコ属、コナラ属他といった多種多様な樹種が散在してみられ、これらの炭化材については、燃料となった薪炭材と考えられる。また、炭化材を放射性炭素年代測定したところ、 $7890 \pm 110$ 、 $7970 \pm 120$  yrBP という結果が得られた(第4章)。また、SI 3からは、礫に混じって早期末葉の土器片(14)も出土しており、第3号焼礫集積遺構の年代は、早期末葉と考えられる。早期の焼礫集積遺構は、徳山地区の小の原遺跡(第2集)、下開田村平遺跡(第3集)、いんべ遺跡(整理中)等でも検出しているが、これだけ大規模なものは初めてである。

なお、SI 3の周囲には、径30~40cm大のピット多数がSI 3を取り囲むようにみられ、SI 3の上に覆屋の存在が推定できる<sup>1)</sup>。SI 3の北東部には、後世の攪乱(SK88)が入っており、また、SI 3の上の包含層やSI 3の周囲にも多数の礫がみられ、これらが後世の開墾によりSI 3の礫が動いたと考えられることから、SI 3内の礫の数はいっと多かったと考えられる。

1) 小の原遺跡(第2集)の第5号集石炉跡でも覆屋の存在を推定できるピットの配列を検出している。



第18図 SI 3 完場平面

## 第4項 集石遺構

## 1. 第1号集石遺構 (SI1)

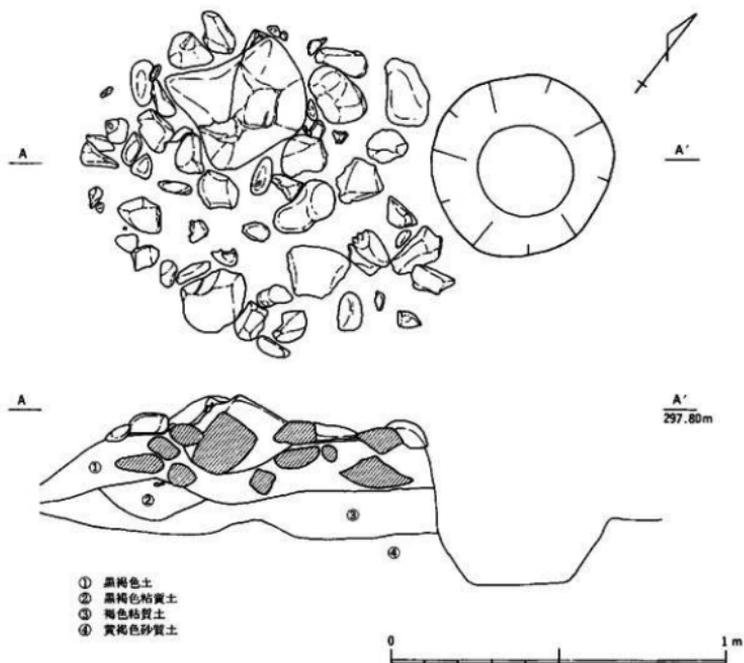
H14グリッドに位置する。5～20cm大の亜円礫80余个が、長径約120cm、短径約80cmの楕円形に配されている。集石の下には、深さ約25cmの土坑があり、土坑内にも5～15cm大の亜円礫が多数混入していた。出土遺物はなく、時期は不明である。

## 2. 第2号集石遺構 (SI2)

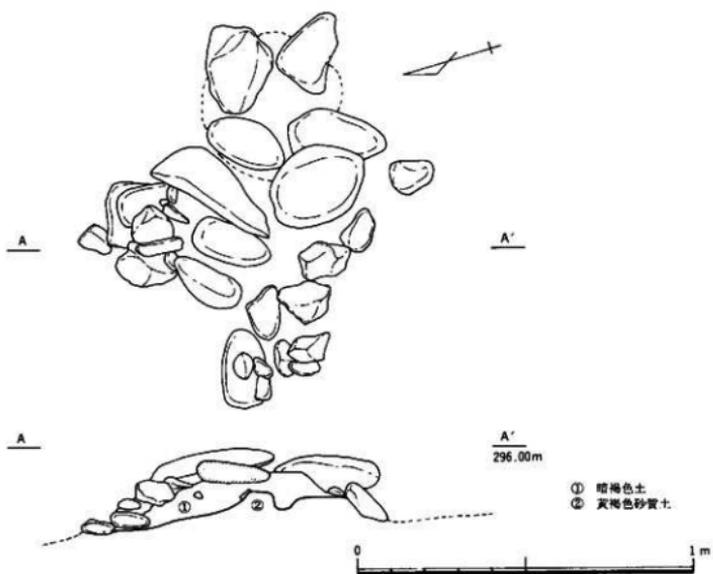
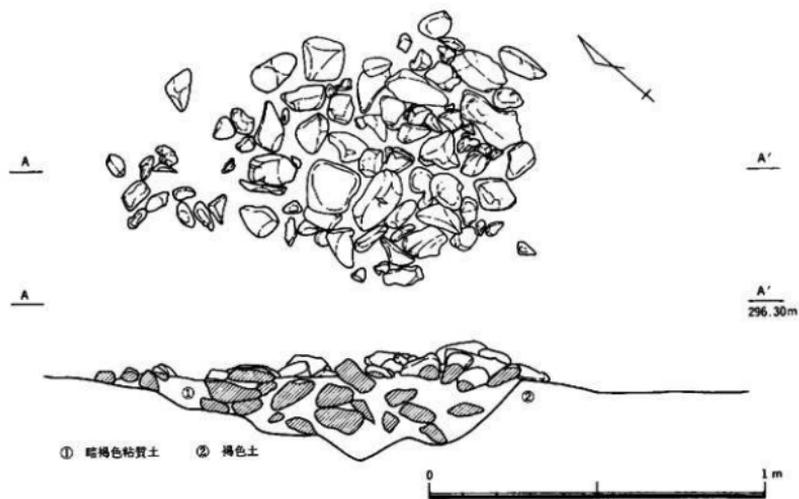
H13グリッドに位置する。5～40cm大の亜円礫約10個が、径約100cmの円形に配されている。集石は黒褐色土中に20～30cmの厚さでみられる。集石に関する土坑はみられない。出土遺物はなく、時期は不明である。

## 3. 第4号集石遺構 (SI4)

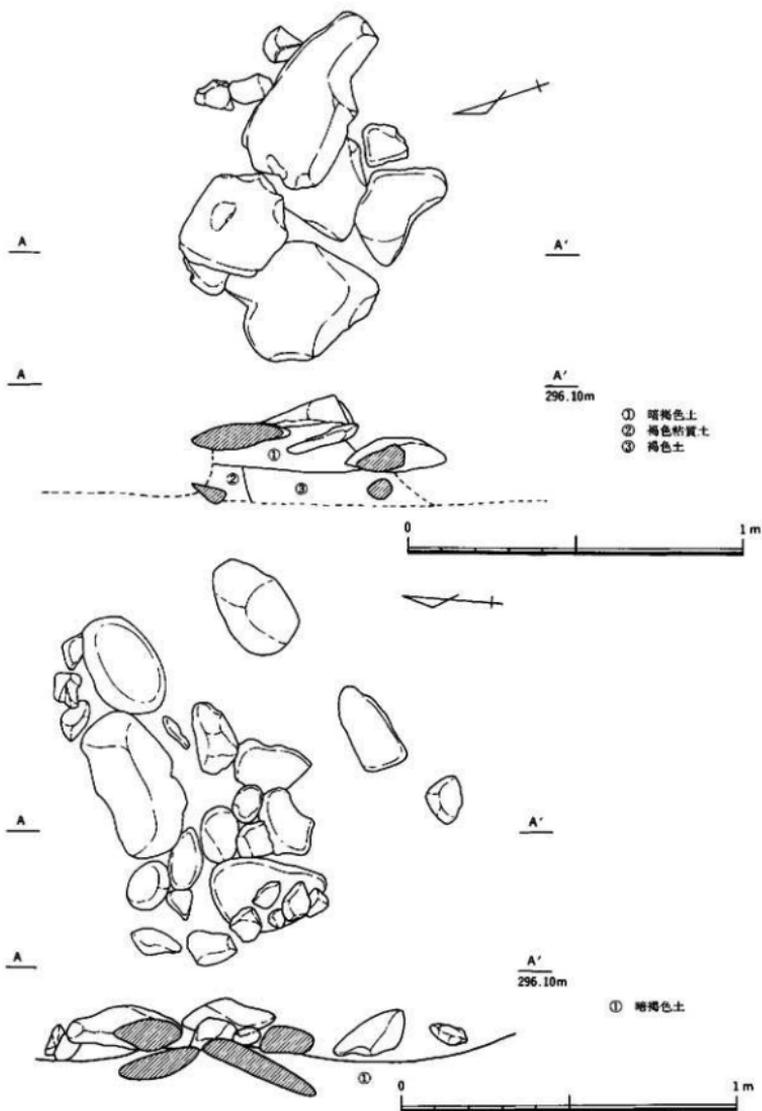
D20グリッドに位置する。5～40cm大の亜円礫20数個が、110×120cm程の規模で無造作に配されて



第20図 第2号集石遺構



第19図 第1号・第4号集石遺構



第21回 第5号・第6号集石遺構

いる。東側部分では30cm大の扁平円礫が近接して配されている。集石は、暗褐色土中に約20cmの厚さで見られる。集石に関連する土坑はみられない。出土遺物は土器片約40点（15～18）で、時期は後期前半と考えられる。

#### 4. 第5号集石遺構（SI5）

D20グリッドに位置する。10～50cm大の垂円礫約10個が、80×110cm程の規模で配されている。中でも30～50cm大の扁平円礫数個が密集して配されている。集石は、暗褐色土中に約20cmの厚さで見られる。集石に関する土坑はみられない。出土遺物はなく、時期は不明であるが、SI4と近接しており後期前半の可能性も考えられる。

#### 5. 第6号集石遺構（SI6）

D20グリッドに位置する。5～45cm大の垂円礫20数個が110×110cm程の規模で配されている。中でも西側部分は密集しており、北西側と南西側は一直線上に端をそろえるようにして配されている。集石は、暗褐色土中に20～30cmの厚さで見られる。集石に関連する土坑はみられない。出土遺物はなく、時期は不明であるが、SI4と近接しており後期前半の可能性も考えられる。

### 第5項 その他縄文時代の土坑・ピット

本遺跡からは多数の土坑やピットを検出した。このうち遺物の出土より縄文時代の土坑・ピットと考えられるものについては、第3表にまとめた。その総数は、土坑63基、ピット121基である。出土遺物より中期末葉と考えられるものがほとんどであるが、後期と考えられるものもある。

切目石錘がまとめて出土したピット60（P60）とSK79について以下に少し述べる。

#### 1. 切目石錘集積（P60・SK79）

ピット60（P60）はF15グリッドに位置する。長径約60cm、短径約40cmの楕円形プランで、深さは約10cmである。P60の底部片隅からは、切目石錘6点（545～550）がまとめて出土した（図版7）。6点中5点は切り目を入れた長軸方向がほぼそろっており、糸状のもので結ばれていた可能性も考えられる。SK79はE16グリッドに位置する。SK79からは、切目石錘7点（538～544）がまとめて出土しているが、詳しい出土状況は不明である。

徳山地区では、山手宮前遺跡でも、切目石錘13点がまとめて出土したピット、切目石錘9点と打欠石錘1点が出土した土坑を検出している<sup>1)</sup>。

1) (財)岐阜県文化財保護センター 1997 「山手宮前遺跡」

(第2節は、遺構カードを基に小谷和彦が加筆した。)

第3表 縄文時代の土坑・ピット一覧表(1)

No	グリッド	大きさ (cm)	平面形	出土 遺物		遺物 番号	時期	切り合い他
				土器 点	石器 点			
S K	2 G 1 1	250×(70)	不定形	5			中末	
	4 G 1 1	250×70	不定形	3	3		中末	
	7 G 1 2	130×100	楕円形	4			中末	
	8 G 1 2	120×70	楕円形	8		45	中末	
	13 G 1 3	170×120	不定形	2	2		中末	
	14 F 1 4	80×80	円形	2			中末	> S K 42
	17 G 1 4	220×120	不定形	1 8	5	535	中末	
	19 H 1 4	220×(80)	不定形	8		2 3	中末	< S K 18
	21 F 1 5	110×110	円形	9 3	5	36 48	中末～後期	
	22 F 1 5	80×80	円形		1 3	523		
	23 G 1 5	110×80	楕円形	1 4	1		中末～後期	
	24 G 1 5	100×80	楕円形		1	508		
	25 H 1 5	210×70	不定形	1	2	46 524 525	中末	
	26 I 1 5	60×60	円形	3 2	1	106 125	中末～後期	
	27 D 1 6	200×120	不定形	2 9	1 2		中末	
	28 E 1 6	120×100	楕円形	7 4	2 1	40 78 100 511 517 526	中末～後期	
	29 F 1 6	90×70	楕円形	5 4	6	80 85 109	中末～後期	
	30 F 1 6	110×80	楕円形	8 2	3		中末～後期	
	31 G 1 6	120×120	円形	8 5	6	37 58 59 92 107 513	中末～後期	
	34 F 1 7	100×70	楕円形	5 3	1 0	119 510	中末～後期	
	35 F 1 7	70×50	楕円形	3 0 3	1 7	19 27 35 70 95 101 102	中末～後期	
						111 121 527 529 530		
	36 H 1 7	190×80	不定形	1 1	1 9	20 21 33 39 516 521 528	中末～後期	
	38 H 1 9	270×150	不定形	2 9	6	25 61	中末～後期	< F 14
	41 E 1 3	100×100	円形	1 2	1	71	中末～後期	
	42 F 1 4	80×(80)	円形	7			中末～後期	< P 77 < P 80
	43 F 1 5	120×70	楕円形	2 0	4		中末～後期	
	44 D 1 6	(210)×110	楕円形	1 2	5			
	45 E 1 6	170×120	不定形	4 0	8	22	中末	
	47 E 1 9	80×60	不定形	1	1		中末	
	48 E 1 9	200×200	円形	2 0	5	108	中末	
	49 H 1 9	170×60	不定形	3 4	1	110		< P 293
	53 J 2 0	140×80	不定形	2				
	55 G 2 0	(130)×100	楕円形	7	1			
	56 G 2 0	(200)×140	楕円形	1 6	2			< S B 3
58 E 1 0	130×60	楕円形	1 3	2		中末		
61 E 2 0	(50)×50	楕円形	2 0	4	514	中末		
62 G 2 4	180×100	不定形		2				
66 D 2 4	170×110	楕円形	3	2				
70 F 1 4	80×80	円形	6			中末		
71 E 1 8	80×70	楕円形	1 6			中末		
72 D 1 9	120×60	楕円形	8			中末		
73 D 2 1	80×80	円形	4 1	7	52			
74 D 2 1	100×50	楕円形				中末		
75 E 2 1	70×50	楕円形	7	1		中末		
77 D 2 2	80×80	円形	2 5	3	99 118	中末～後期		
78 E 2 2	(130)×90	楕円形	7	1		中末	> P 402 < S K 79	
79 E 2 1	110×110	楕円形	1 4	1 0	537～544	中末	> S K 78 切目石籠?	
80 F 2 1	120×90	円形	1 1	1		中末		
81 E 2 2	80×70	楕円形	1 5	1		中末		
82 E 2 2	90×70	楕円形	2 3	8		中末		
83 D 2 3	100×80	円形	1 4		114 123	後期		
84 E 2 2	130×30	不定形	1 2	3		中末		
85 E 2 3	120×100	不定形	3 5	2	515	後期		
86 E 2 3	120×100	楕円形	2 2	1 0	122	中末～後期		
87 F 2 4	90×90	円形	8	2		中末		
88 F 2 1	80×80	楕円形	1 6	1 3	77 531	中末	> P 305	
92 D 1 1	(120)×80	楕円形	7			中末		
94 E 2 2	130×110	楕円形	2 5	3	41 112 113	中末～後期	< S K 64	
95 E 2 5	140×(130)	円形	6	5				
96 F 1 7	80×60	楕円形	1 1	1	89	後期(?)		
99 F 1 7	150×120	楕円形	1 9		30	中末		
P	4 G 1 2	60×60	円形	1 9			中末	
	6 G 1 2	20×20	円形	1				
	8 G 1 2	80×80	円形	5 5	2	53 62	中末	
	11 G 1 3	80×80	円形	5 2		86 88 91	中末	
	14 G 1 3	50×40	楕円形	5	2		中(?)	
	15 G 1 2	70×70	円形	3		93	中末	
	16 H 1 3	80×80	円形	1 3	3		中末	
	22 I 1 3	20×20	円形		1		中末	
	26 I 1 3	30×20	楕円形	1			中末	
	33 F 1 4	40×40	円形	3 2		56 63	中末	
34 F 1 4	50×50	円形	9		38	中末		
36 G 1 4	70×80	不定形	7			中末		

\*グリッド：復原にかんする場合は面積の広い方のグリッドとした。

( )：残存部の大きさ・形

中末は中期中葉、後期は後期初頭

切り合い：&gt;切る、&lt;切られる

第4表 縄文時代の土坑・ピット一覧表(2)

No	グリッド	大きさ (cm) 長軸×短軸	平面形	出土遺物		遺物番号	時期	切り合い他
				土器点	石器点			
39	G 1 4	70×70	円形	1	8	165 551	中末	
41	H 1 4	40×40	円形	3			中末	
46	H 1 4	60×50	楕円形	3			中末 (?)	
48	H 1 4	30×30	円形		1	507		
58	E 1 5	30×30	円形	1	7	31	中末	
60	F 1 5	100×70	楕円形	3	7	545 546 547 548 549 550	中末	切目石跡 6
64	G 1 5	30×20	楕円形	1			中末	
65	G 1 5	20×20	円形	1			中末	
67	H 1 5	80×60	楕円形	1	1	79	中末 (?)	
69	H 1 5	90×60	楕円形	2			中末	
70	H 1 5	100×50	楕円形	8	1	26 44	中末	
71	H 1 5	90×50	楕円形	1	6	96 103	中末	
73	H 1 5	20×20	円形	2		4 9	中末	
76	D 1 6	70×50	楕円形	3			中末 (?)	
79	D 1 6	10×10	円形	4	2			
80	E 1 6	70×70	円形	1	4			
81	E 1 6	30×30	円形	8	3			
82	E 1 6	40×40	円形	9			中末	
84	E 1 6	40×40	円形	1	1			
86	F 1 6	80×50	楕円形	7	1		中末 (?)	
87	F 1 6	60×60	円形	1	9	126	後期	
88	F 1 6	80×60	楕円形	8	2		中末	
92	F 1 5	50×50	円形	5		116	中末-後期	
97	G 1 6	10×10	円形	1				
120	E 1 7	40×40	円形	5	2		中末	
122	E 1 7	50×50	円形	3				
123	E 1 7	40×40	円形	8	2	533	中末	
124	E 1 7	50×50	円形	2	3		中末	
126	H 1 7	20×20	円形	2			中末 (?)	
130	H 1 7	40×40	円形	1				
134	I 1 7	70×50	楕円形	9		87	中末	
139	I 1 7	10×10	円形	4		104	中末	
173	E 1 8	60×60	円形	3	1		中末	
174	F 1 8	70×60	楕円形	3	1	75 82	中末	
175	F 1 8	80×60	楕円形	6	2	32 55 66 518 536	中末	
176	F 1 8	90×70	楕円形	4	2	3 24 28 83 84	中末	
177	F 1 8	60×60	円形	3	9	54 64 65 90 512	中末	
178	F 1 8	30×30	円形	3	1		中末	
182	H 1 8	40×40	円形	9			中末	
185	H 1 8	80×60	不定形	1	2		中末 (?)	
190	I 1 8	100×60	楕円形	2			中末 (?)	
214	E 1 1	20×20	円形		1			
216	E 1 1	100×80	楕円形	5	9	37	中末-後期	
217	E 1 1	30×30	円形	8	1		中末 (?)	
221	E 1 2	110×60	楕円形	3	4	74 81	中末	
222	F 1 2	60×60	円形	1	0		中末	
223	E 1 4	120×60	楕円形	6	1	94	中末	
227	F 1 4	30×30	円形	1				
233	F 1 5	30×30	円形	4		51	中末	
236	E 1 6	30×30	円形	4			後期 (?)	
237	F 1 6	20×20	円形	2				
239	G 1 6	40×40	円形	8			中末	
241	F 1 7	50×50	円形	1	3	29 115	中末-後期	
243	D 1 8	50×50	円形	4	5		後期	
245	E 1 9	40×40	円形	8			中末	
246	E 1 9	80×60	楕円形	1			中末	
248	F 1 9	40×40	円形	5			中末 (?)	
249	E 1 9	100×90	不定形	1	1		中末	
250	E 1 9	40×40	円形	6			後期	
253	F 1 9	50×(50)	円形	2	9	69 509	中末	
254	F 1 9	30×30	円形	1	2		中末 (?)	
255	F 1 9	50×50	円形	2	1		中末 (?)	
256	F 1 9	110×80	楕円形	6	4	60 67 68 73 128	中末	
257	F 1 9	50×50	円形	4		117	後期	
260	H 1 9	40×40	円形	5			中末	
261	H 1 9	90×40	不定形	3				
264	H 1 9	80×40	楕円形	7		50	中末	
290	G 2 0	30×30	円形	3			中末 (?)	
294	G 2 0	40×40	円形	1	9		中末	> SK54
295	F 2 0	20×20	円形	2				
298	F 2 0	100×50	楕円形	1	4	519		
301	F 2 0	30×30	円形	3				
302	E 2 1	30×(30)	円形	2			中末 (?)	< SK57
303	F 2 0	30×30	円形	5	1			

\*グリッド：複数にかかるときは面積の広い方のグリッドとした。  
( )：残存部の大きさ・形

中末は中期中末  
切り合い：>切れる、<切られる

第5表 縄文時代の土坑・ピット一覧表(3)

No	グリッド	大きさ (m) 長軸×短軸	平面形	出土 遺物		遺物 番号	時期	切り合い 他
				土器 点	石器 点			
304	E 2 0	70×50	楕円形	8		98	中末	
305	F 2 1	60×(60)	円形	2 1	1	76 520	中末	<SK88
307	F 2 1	90×80	円形	3			中末	
343	G 2 3	80×50	不定形	3 9		120	後期	
374	D 1 6	30×30	円形		1			
375	D 1 6	20×20	円形	6			後期	
378	D 1 7	20×20	円形	1			後期(?)	
384	D 1 9	40×40	円形	1			中末(?)	
387	D 1 9	30×30	円形	5	1		後期(?)	
388	D 2 0	40×40	円形	4			中末	
389	D 2 0	40×40	円形	2	1			
390	D 2 0	60×40	楕円形	3				
391	E 2 0	70×50	楕円形	3		42	中末	
393	E 2 0	30×30	円形		2			
394	D 2 0	40×40	円形	4		127	後期	
395	D 2 0	40×40	円形	3			中末	
396	D 2 1	40×40	円形	1				
397	E 2 1	40×40	円形	1			中末	
398	E 2 1	30×30	円形	4	1	97	中末	
401	E 2 1	100×100	円形	7		34	中末	
402	E 2 2	40×40	円形	1			後期	<SK78
403	E 2 1	70×30	楕円形	2	1		中末	
407	D 2 3	50×50	円形	1	1			
408	D 2 3	50×50	円形	1			中末	
410	D 2 3	70×50	楕円形	3	1		中末	
413	E 2 3	80×50	楕円形	1				
423	F 2 4	30×30	円形		3			
425	E 2 1	50×50	円形		1			
426	K 2 1	50×30	楕円形		1	522		
427	F 2 0	40×(40)	円形	7		2	中末	<SK56
429	F 1 9	80×80	円形	5		7 43	中末	
430	D 1 8	10×10	円形			1		
431	F 1 6	50×50	円形	2			中末	
432	E 1 1	40×40	円形	1 9			中末	
438	E 1 8	70×40	楕円形	3	1		中末	
440	E 2 1	20×2 0	円形	1			中末	
441	F 2 1	30×30	円形	2	1		中末	
450	E 2 1	20×20	円形	2			中末	
451	F 2 2	30×30	円形		1			
452	G 2 0	30×30	円形	3				
453	E 1 1	80×80	円形	6				
458	G 1 9	20×20	円形	7			中末	>P211
459	G 1 9	40×40	円形	3			後期(?)	
460	F 1 9	20×20	円形	4			後期	
463	F 1 9	20×20	円形	3	1	534	中末	

\*グリッド：複数にかかる場合は面積の広い方のグリッドとした。  
( )：残存部の大きさ・形

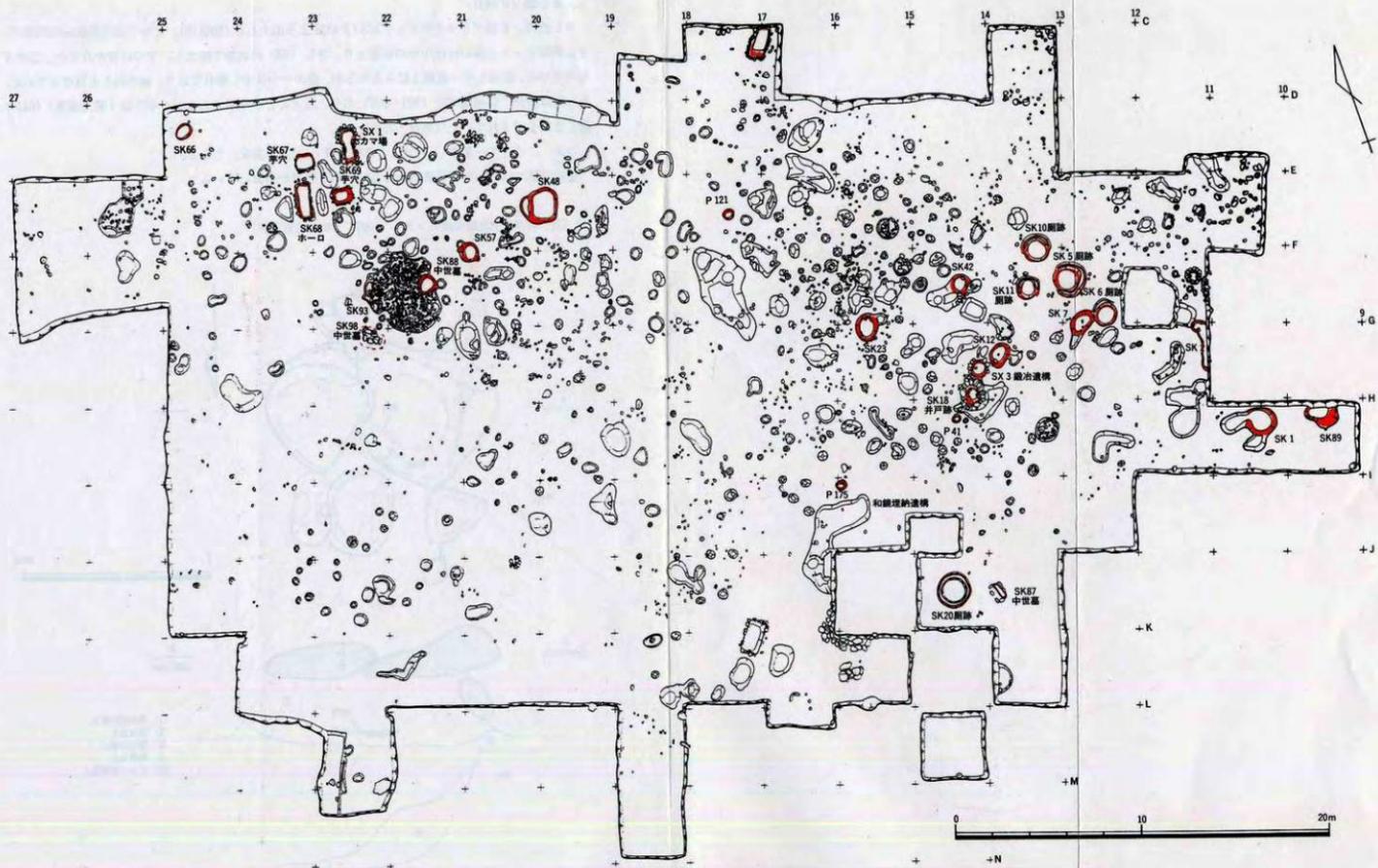
中末は中期中末、後期は後期初頭  
切り合い：>切る、<切られる

### 第3節 その他の時代の遺構

本遺跡では、縄文時代以外の遺構も多数検出した。即ち、さし銭の出土したピット (P433)、和鏡埋納遺構、中世墓 (SK88・SK97・SK98)、積石塚といった中近世の遺構や厨跡 (SK5・SK6・SK10・SK11・SK20)、鍛冶遺構 (SX3)、井戸跡 (SK18)、ホーロ (SX2・SK68)、カマバ (SX1)、芋穴 (SK67・SK69) といった近世から近現代の家屋に伴う諸施設 (遺構)、土坑・ピット14基である (第22図)。

これらの中で、厨跡などの近世から近現代までの遺構は、昭和62年1月に徳山村が廃村になるまでの上開田地区の成立や人々の暮らしを探る重要な遺構である。

厨跡、鍛冶遺構、井戸跡、ホーロ (養蚕の際の暖房施設)、カマバ (紙すきの原料を蒸す施設)、芋穴などの旧徳山村の人々の生活をうかがい知る民俗的な遺産 (遺構) についても、紙幅の許す限り触れてみたい。



第22図 その他の時代の遺構配置図

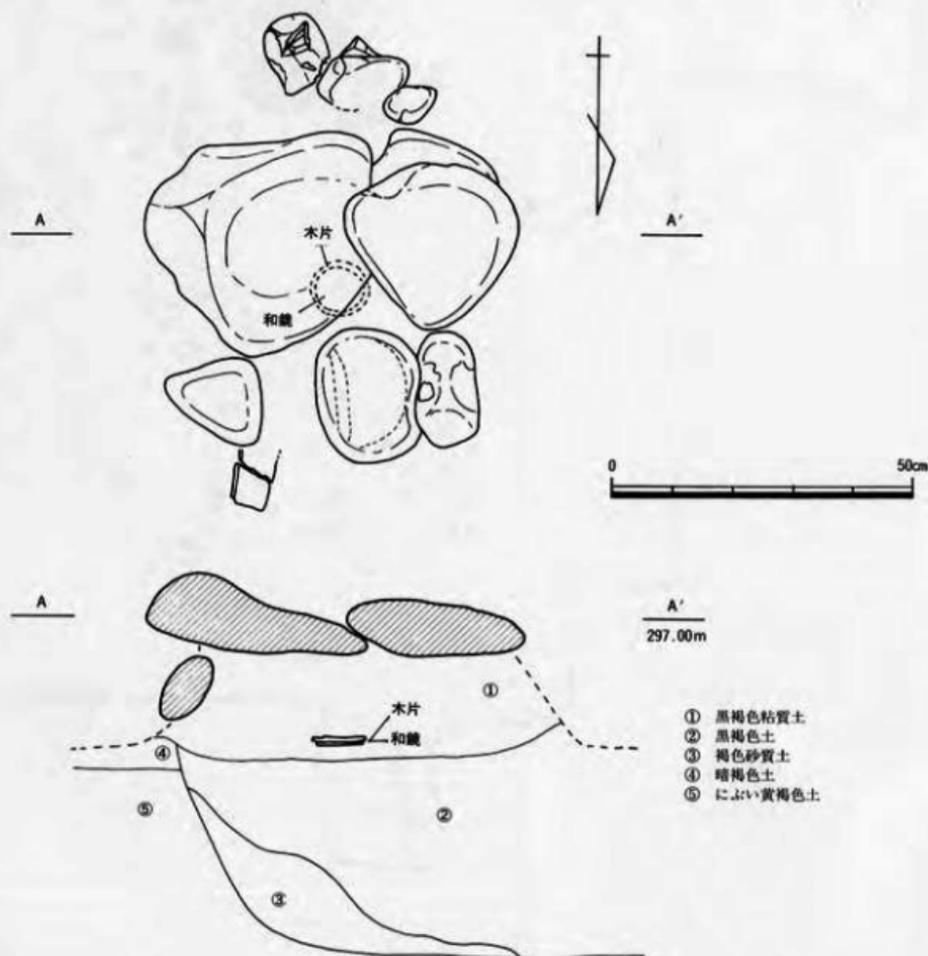
## 1. さし銭 (P433)

さし銭は、F20グリッドのビット433 (P433) より出土した (図版10)。ビットは径約60cmの円形で、さし銭はビット上部のほぼ中央の位置より、さし (縦) の状態で出土し、3つに分かれてた。このうちの2つは、近接して一直線上にみられるが、他の一つは少し離れており、軸の向きも異なっていた。さし銭は全部で21種類87枚 (901~987) あり、ほとんどが宋銭であるが、中には「開元通寶」(621年唐) 9枚も含まれていた (第24・25表)。

なお、この中で一番新しいのは、「淳熙元寶」(1174~南宋) である。

徳山地区では、山手宮前遺跡からも81枚のさし銭が出土している。

## 1) (財) 岐阜県文化財保護センター 1997 「山手宮前遺跡」



第23図 和鏡埋納遺構

## 2. 和鏡埋納遺構

和鏡埋納遺構は、I15グリッドに位置する。径約70cm、深さ約50cmの土坑で、土坑上には、20~40cm大の扁平円礫10個が配されていた。この石組みの下の①層より和鏡が背面を上にし、その上に円形の木片を乗せた状態で出土した。これ以外に遺物の出土はなかった。和鏡は、土坑墓への副葬あるいは供献の可能性が考えられる。

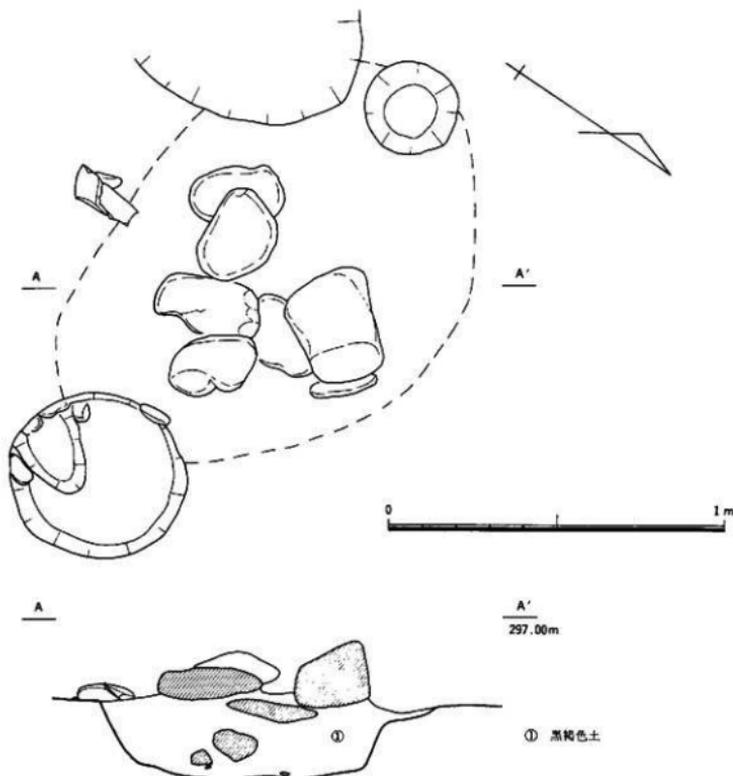
和鏡(1000)は、15世紀~16世紀前半と考えられ、和鏡埋納遺構もその時期の遺構と考えたい。

1) 京都国立博物館 久保智康氏の御教示による。

## 3. 中世墓

(1) SK88

SK88は、F21グリッドに位置する。焼礫集積遺構(SI3)の上面に位置し、SI3を切っ



第24図 中世墓 (SK88)

る。径約100cmの円形の土壌上に、20～40cm大の扁平円礫7個が配されている。土壌の深さは約25cmで土壌内にも5～25cm大の亜円礫がみられた。出土遺物はなく時期は不明であるが、SK98と近接しており、中世墓の可能性が考えられる。

## (2) SK97

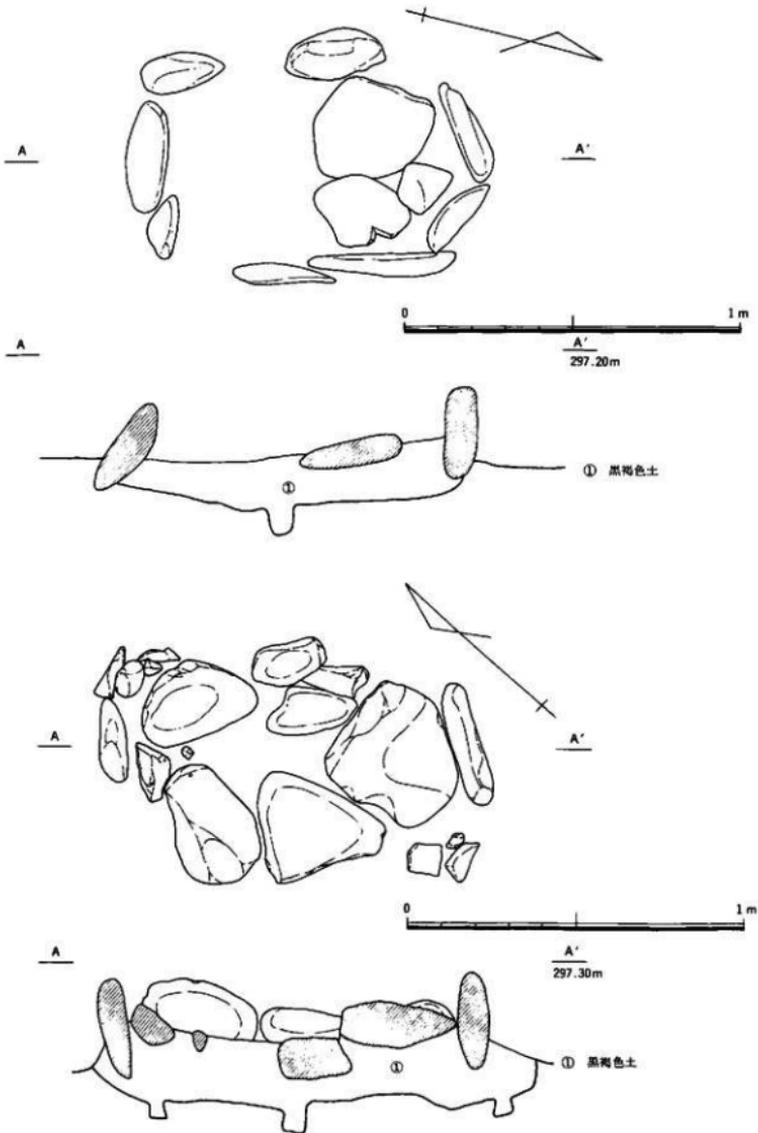
SK97は、J13グリッドに位置する。南北方向に主軸をもつ、長径110cm、短径70cmの隅丸方形のプランをもつ。周囲を扁平な立石を主とする川原石で囲み、北半分には、15～30cm大の扁平な川原石がかぶせた状態で残存していた。地山を15cm程の深さで掘り込んでおり、立石上部からの深さは35cm程になる。埋土は黒褐色土であるが、内部からの遺物は検出できなかった。SK98と形態が類似しており、中世墓の可能性が高い。

## (3) SK98

SK98は、G22グリッドに位置する。長径130cm、短径60～70cmの隅丸方形のプランをもつ。地山と考えられる褐色砂質土を掘り込んでいる。長径の両側に扁平な川原石を立て、その間のプラン全面に20～40cm大の石が6個かぶせてあるのが検出された。プランの周囲にも10～20cm程の石を並べた形跡があり、北側は一部が残存している。埋土は黒褐色土である。西側の立石から20cmの底面5cm上より、人間の歯が多数検出され、中世墓と考えられる。このうちの残存状況のよかったものについて鑑定してもらったところ、1点(1002)は、下顎左第2大臼歯で、エナメル質が残っていた。咬耗が少なく(磨耗していない)、若い可能性があるとのことである(図版55)。これ以外にも、下顎左第1大臼歯、上顎第1大臼歯などもみられたり。

なお、底面には、直径5cm、深さ5～10cmの小ビット多数がみられた(図版10)。

1) 朝日大学歯学部 吉田寿穂氏の鑑定による。



第25図 中世墓 (SK97・98)

#### 4. 積石塚

M22グリッドに位置する。拳大から人頭大の垂円礫多数と暗褐色土が塚状に積み上げられており、その規模は、径約5mの円形で高さは現地表面から約1mである。塚の上面は、径2mほどのほぼ平らな面となっている。基底部は窪地になっており、礫はそこから積み上げられていて、この基底部から塚上面までの高さは約1.2mである。

積石塚からは、礫に混じって15世紀の壺の破片や17世紀前半の天目茶碗(2014)、そして18世紀の陶器片(2025)などが出土したが、埋納物等の出土はなかった。積石塚の築造年代は、混入していた遺物より18世紀、江戸時代中頃以降と考えられる。

積石塚の築造年代については不明であるが、すぐ西側には「六社神社」が鎮座しており、何らかの信仰とのつながりが想定される。なお、地元では、この積石塚の上に乗ってはいけないという言い伝えがあったそうである。

積石塚の類例としては、恵那市の正家積石塚<sup>1)</sup>や各務原市の北山遺跡から31基、持田遺跡群から4基が検出されており、北山遺跡の積石塚は13世紀頃の築造と考えられる。持田遺跡の積石塚の1基からは、5cm大の懸け仏一対が埋納されていた<sup>2)</sup>。

1) 南山大学人類学博物館 正家積石塚群 (1983)

2) 各務原市埋蔵文化財調査センター 北山遺跡B・C地区 発掘調査報告書 (1994)

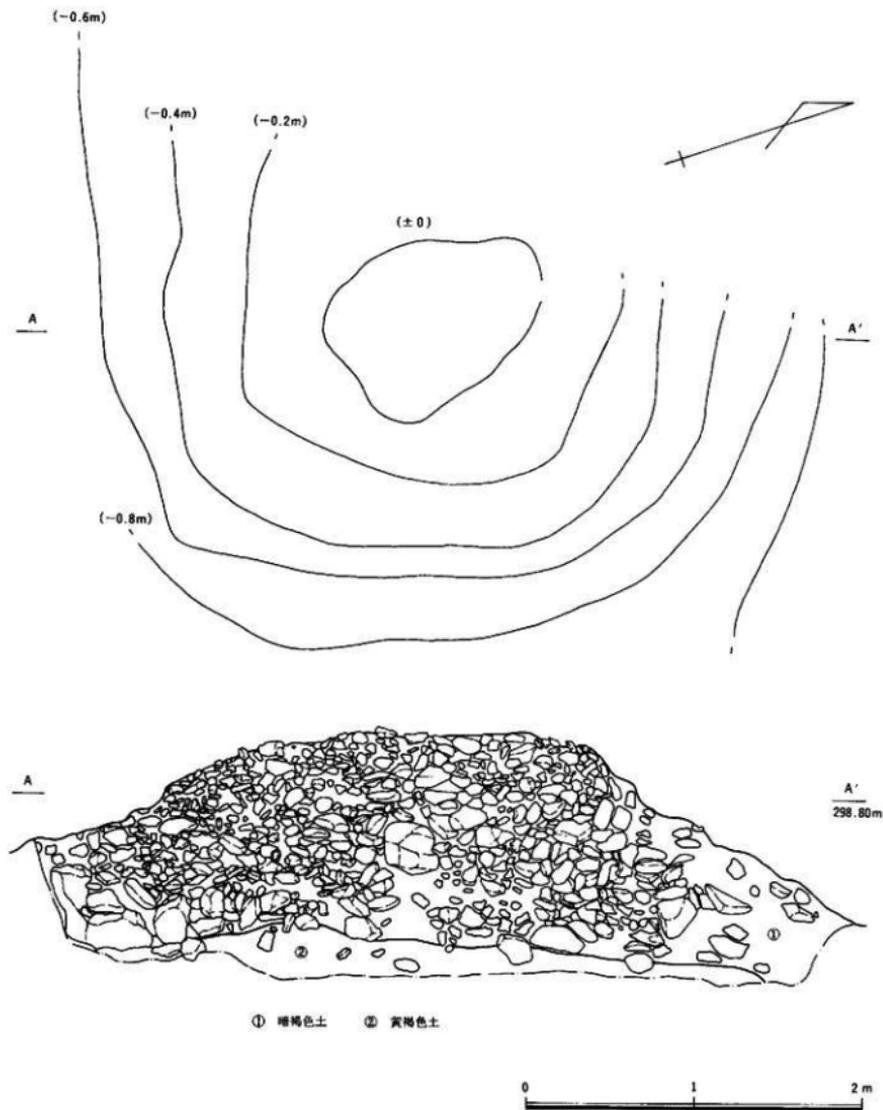
#### 5. 厨跡

##### (1) SK20

J14グリッドのほぼ中央に位置する。厨の遺構は、桶部分は残存せず、廃棄時に除去されたと考えられる。検出時でのプランは、直径約135cmの円形である。深さは約50cmであるが、現地表面から底までの深さは95cm前後になる。上部は、後世の攪乱や整地により欠損しており、本来の深さは不明である。厨の掘り方は、最初直径180cm程(下部で170cm)の円筒形の穴を掘った後、さらに底部を直径約145cm、深さ8~10cm掘り下げている。この地点で地山であるにふい黄褐色土層を掘り込んでいる。まず、底に直径10~20cmの礫を敷き、その上に黄褐色の粘土質の貼り土をしている。桶をその上に設置したことは、底面の縁に円形の凹みがあることで判明した。その後、桶の周囲に褐色の粘質土を3~4cmの厚さで貼り付けている。その後、掘り方と貼り土を施した桶とのすき間に5mm程の礫を含む黒褐色土をつめている。下半分程には、5cm程の礫も混じっており、しまりはあまりよくないが、上部はかたくしまっていた。廃棄後の埋土を除去したところ、側面に3~4cm幅の溝が2本巡っており竹のたが(タガ)の跡と判明した。たがは、下から7cm程上と、30cm程上の2本である。

埋土からの遺物はなく、時期の確定材料に欠けるが、この厨跡の検出位置は、集落内の路地の直下にあたる。この厨が、どの家屋に所属するか不明であるが、路地が昭和期から変わっていないだけに、江戸時代に遡ると考えられる。形態的にも、垂直の円筒形の桶であり、近世(江戸時代)的な古いタイプのものである<sup>1)</sup>。

なお、SK20の北西には、汚水をためるための「たまりや」とよばれる施設もみられる<sup>2)</sup>。

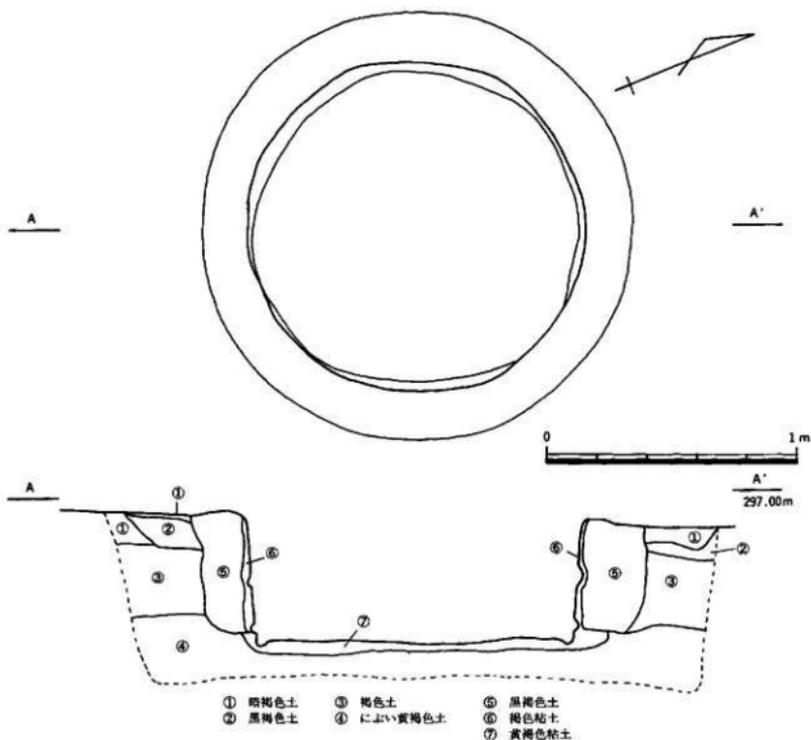


第26図 積石塚

41 第2章 遺跡の層序と遺構

1) 浅野弘光氏の御教示による。

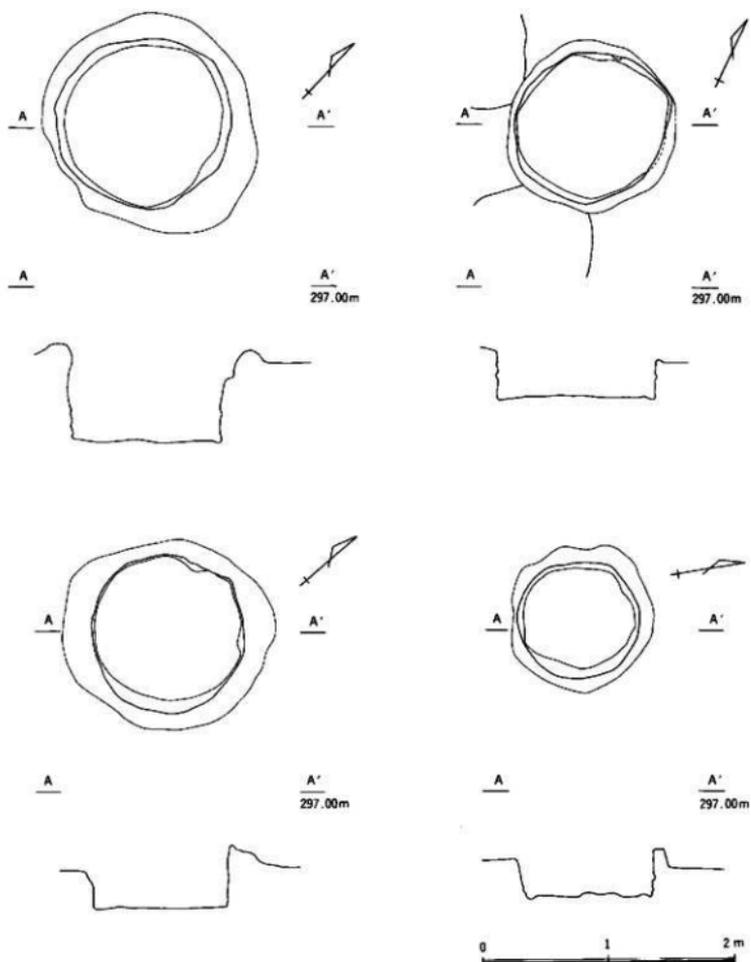
2) 「たまりや」は、一見、井戸のようにみえるが、汚水をためる施設で、雨水も流れ込む。下の砂礫層にしみ込んでいく。同様の施設を徳山の人は、「せせらぎ」と呼称し、流しの水や風呂の水などをため、そのまま土にしみ込んでいくようになっていたそうである。



第27図 周跡 (SK20)

(2) SK 5

F13グリッドに位置する。プランは円形で、南北約140cm、東西約135cmを測る。深さは、70～75cmを測る。壁面はほぼ垂直であるが、若干上部が開く。たがの跡は、底部のすぐ上と、25cm程上に2本巡っている。桶の貼り土は、黄白色粘質土である。



第28図 跡跡 (SK 5・6・10・11)

(3) SK6

F12グリッドに位置する。直径約125cmの円形プランである。壁面は垂直で、現存の深さは東側で約38cm、西側で約32cmである。底面より18～20cmの高さのところなたがの跡の溝が巡る。壁面にあたる貼り土部分は、黄白色粘質土である。

(4) SK10

F13グリッドに位置する。直径約120cmの円形プランで、東壁上部が崩れているが、壁面は垂直であり、桶の形態も上下の直径が等しい円筒形のものであったと考えられる。深さは、南壁面で約30cm、北壁面で約50cmを測る。桶の貼り土は、黄白色粘質土である。F13グリッドに位置する3基の中では一番古いものと思われる。<sup>1)</sup>

1) 浅野弘光氏の御教示による。桶の形は古いものは垂直で、新しくなると上へ開くとのことである。

(5) SK11

F13グリッドに位置する。直径100～110cmの円形プランである。廁の掘り方のプランは、直径115～120cmを測る。現存する深さは、南側で約30cm、北側で約40cmである。たがの跡は2本あるが、上のたがの跡は、南側では不鮮明である。桶の外回りに貼った貼り土は、黄白色粘質土で、掘り方との間には褐色の粘質土を入れている。なお、穴の上部と底部では、わずかではあるが上部の幅が広く、桶そのものが上の広がる形態であったことが推測できる。

## 6. 鍛冶遺構 (SX3)

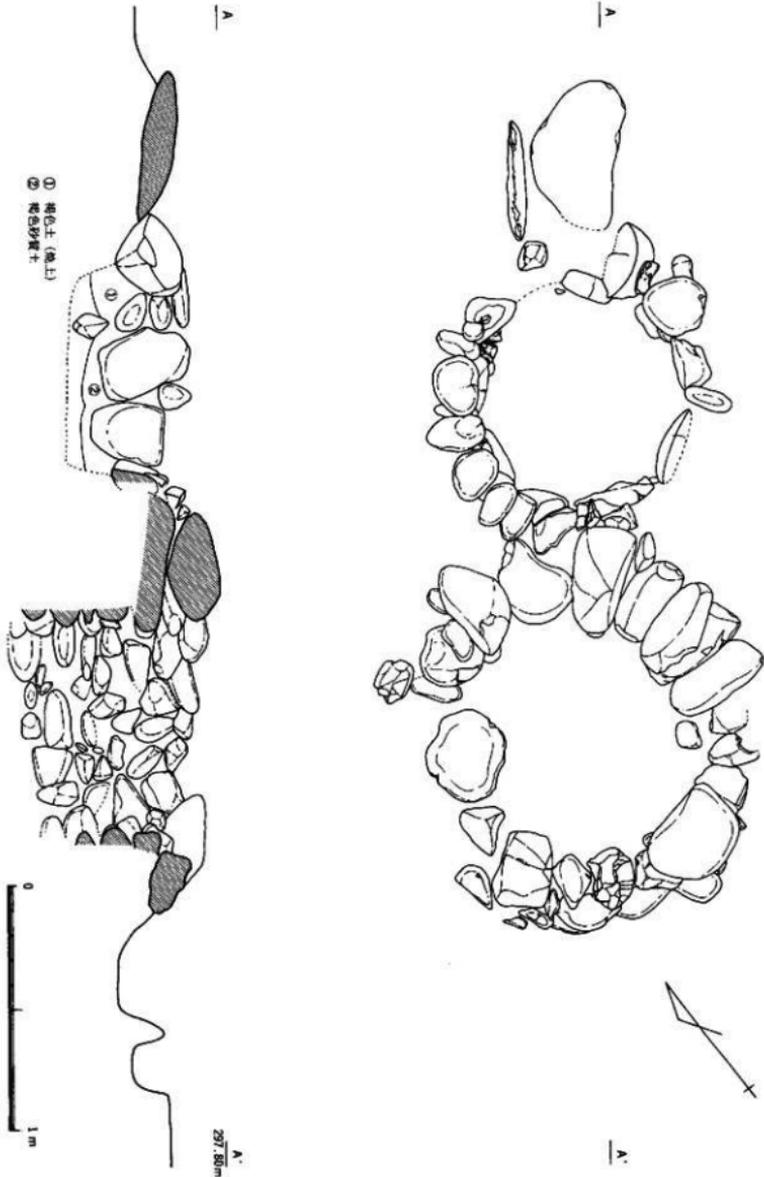
G14グリッドに位置する。径約80cm、深さ約50cmの円筒状土坑の壁面および土坑の縁に10～40cm大の円礫を配した作りとなっている。土坑内には焼土がみられ、金属片も出土した。

SX3の南隣には、井戸跡 (SK18) が位置する。

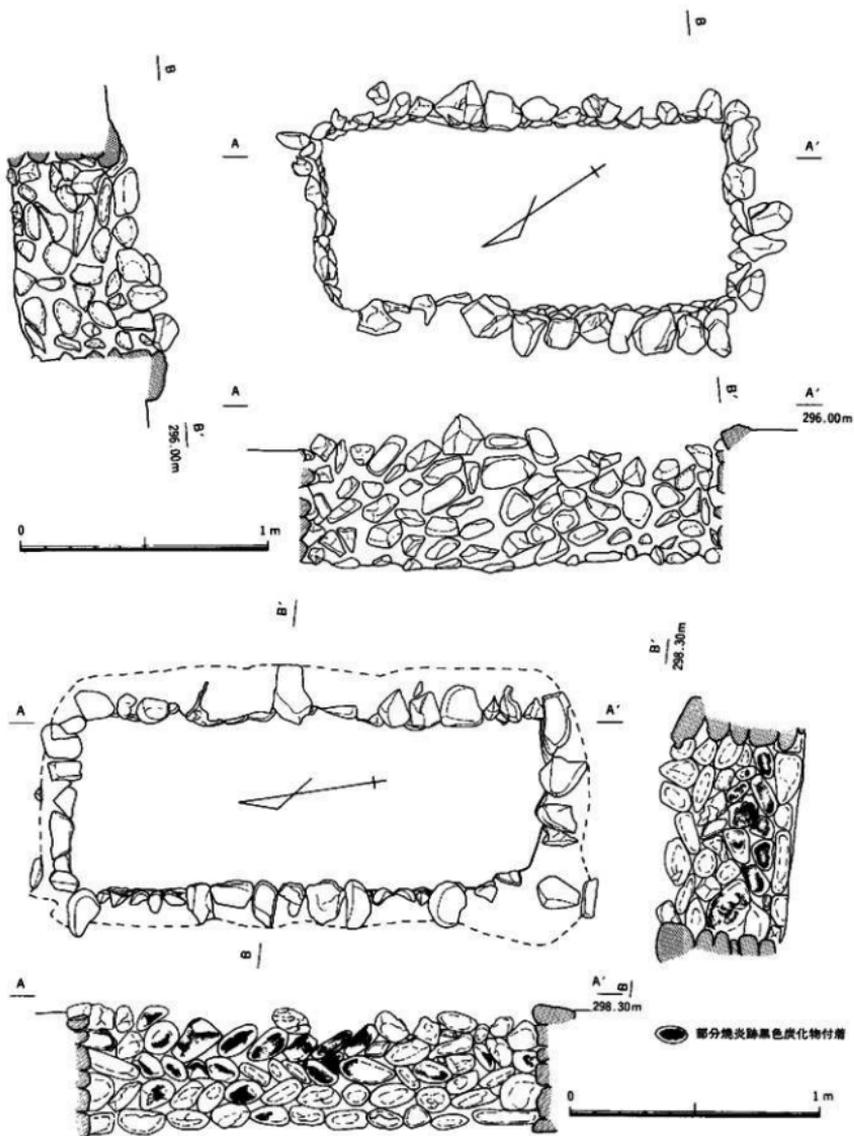
## 7. 井戸跡 (SK18)

G14グリッドに位置する。10～50cm大の円礫を筒状に積んでおり、井戸の内径は80～90cmである。出土遺物はないが、聞き取り等より明治時代以降と考えられる。

なお、すぐ北隣に鍛冶遺構 (SX3) が位置する。



第29図 鍛冶遺構 (SX3)、井戸跡 (SK18)



第30図 穴一〇 (SX2・SK68)

## 8. ホーロ (SX2、SK68)

SX2とSK68は、養蚕の蚕室の暖房用のホーロと考えられ、SX2はC17グリッド、SK68はE23グリッドに位置する。共に10～30cm大の円礫を積んで石室(いしむろ)を作っており、SX2は平面形が短辺70～80cm、長辺約160cmの長方形で深さは約60cmである。SK68は、平面形が短辺約60～70cm、長辺約180～190cmの長方形で、深さは約50cmである。

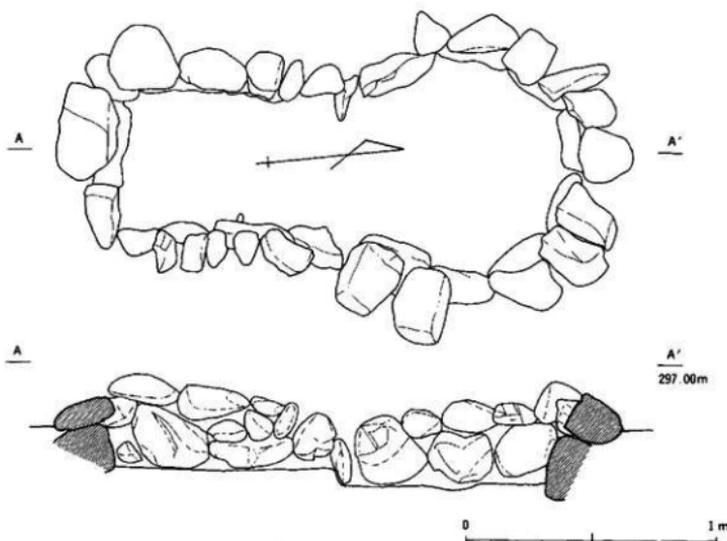
なお、徳山地区では、養蚕は江戸時代末期に入り、大正間がピークであったとのことである。

1) 浅野弘光氏の御教示による。

## 9. カマバ (SX1)

D22グリッドに位置する。10～40cm大の円礫を積み上げて、鍵穴状の石室を作っている。石室の全長は、約1.8mで南側は短径約60cm、直径約90cmの長方形、北側は径約80cmの円形を呈している。深さは南側の長方形部分が30数cm、北側の円形部分が約40cmと、北側がより深くなっている。

SX1は、紙の原料になる楮(こうぞ)や着物にする麻などを蒸したカマバと考えられる。



第31図 カマバ (SX1)

## 10. 芋穴

SK67とSK69は、通称「芋穴」と呼ばれる方形の地下式石室（いしむろ）で、SK67はD23グリッド、SK69はE22グリッドに位置する。共に、平面形は長方形を呈しSK67は70×90cm、SK69は70×100cm程である。深さは、SK67が約90cm、SK69が約60cmである。

SK67の壁は垂直に立ち上がるのに対して、SK69は底が60×80cm程と狭くなっており、壁面に傾斜がみられる。共にしっかりとした作りである。

## 11. その他の土坑・ピット

以上の遺構以外にも、中近世陶磁器の出土した土坑・ピットを15基検出した（第6表）。内訳は土坑・11基、ピット4基である。

（第3節は、遺構カードを基に小谷和彦が加筆した。）

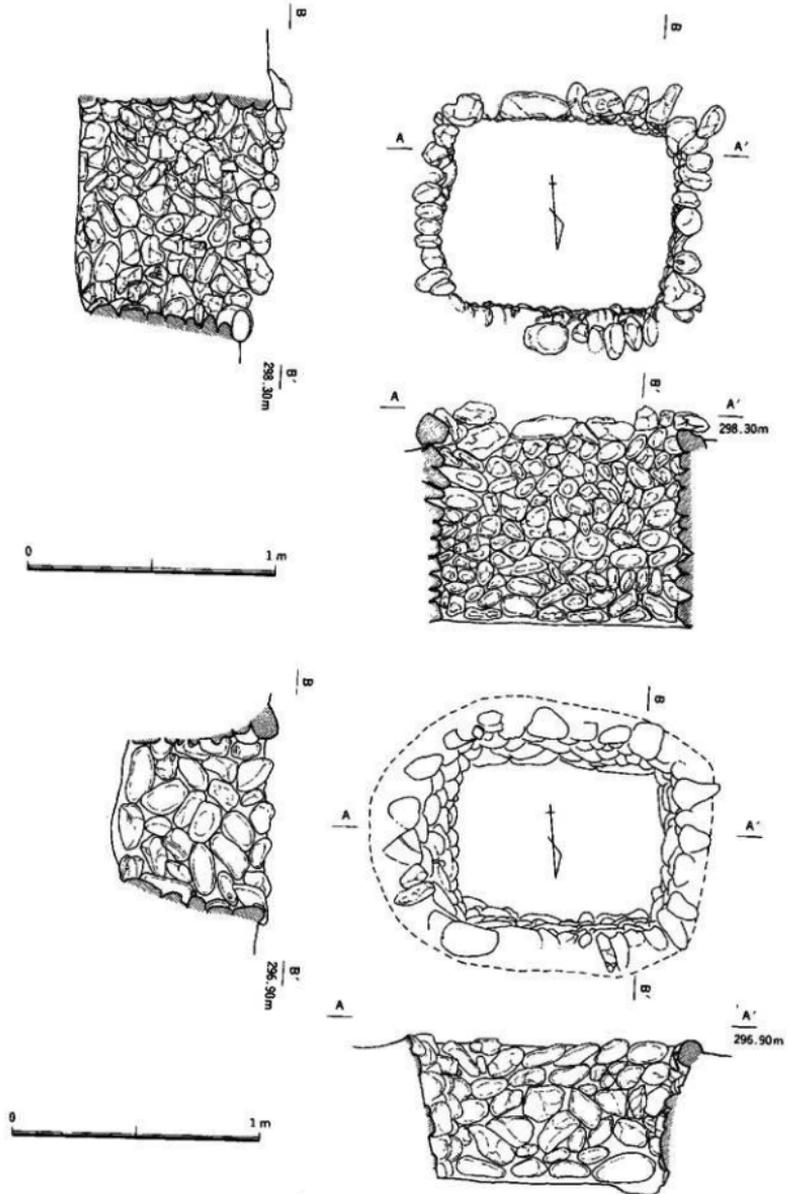
第6表 その他の時代の土坑・ピット一覧表

No	グリッド	大きさ (cm)		平面形	出土遺物	遺物番号	時期	切り合い地	
		長軸	短軸						
SK	1	H 10	180×150	楕円形	1点				
	2	G 11	250×(90)	不定形	1				
	7	G 7	150×100	楕円形	1				
	12	G 13	150×100	楕円形	1	2033			
	23	G 15	110×80	楕円形	2	2017			
	42	F 14	80×80	円形	3	2029 2044		<SK14	
	48	E 19	210×210	円形	1				
	57	F 20	110×110	円形	5	2003 2021 2032		15C	
	66	D 24	170×110	楕円形					
	89	H 9	160×(120)	楕円形	7	2002 2019 2027		17C	
	93	F 22	120×60	楕円形	1	2001			
	P	41	H 14	40×40	円形	2			
		121	E 17	70×50	楕円形	1	2008		
175		I 15	60×50	楕円形	1				
433		F 20	70×70	円形	87枚	901~987		さし鏡出土	

※グリッド：複数にかかると場合は面積の広い方のグリッドとした。

切り合い：>切る、<切られる

( )：残存部の大きさ・形



第32図 芋穴 (SK67・SK69)

## 第3章 出土遺物

### 第1節 縄文土器

#### 1. 土器分類について

本遺跡では、縄文時代中期末葉を中心として、早期から晩期までの土器約1万点が出土した。今回の報告にあたり、有文系土器を中心に、文様要素・文様構成・型式等を考慮し、時期的変遷によりⅠ～Ⅴ期に分類した。各期の内容は次の通りである。

- Ⅰ期 早期
- Ⅱ期 前期
- Ⅲ期 中期
- Ⅳ期 後期
- Ⅴ期 晩期

Ⅲ期 中期の土器については、以下のように分類した。なお、中期の七器のほとんどは中期末葉と考えられる。

深鉢A類 頸部から口縁部にかけてやや外反し、胴部が膨らむ、平口縁もしくは主文様部が波状を呈する深鉢で、原則的には口縁部文様帯と胴部文様帯が区画される。

A-1類 口縁部文様帯が隆帯による楕円区画と渦文で構成される。比較的厚手の土器。楕円区画内の充填文様により、以下のように細分する。

- a 縄文を充填するもの
- b 沈線文を充填するもの
  - ① 矢羽根状沈線を充填
  - ② 斜行する沈線を充填
- c その他のもの
  - ① 条線文を充填
  - ② 複数の文様を組み合わせているもの

A-2類 口縁部文様帯が沈線による楕円区画と渦文で構成される。比較的厚手の土器。楕円区画内の充填文様により、以下のように細分する。

- a 縄文を充填するもの
- b 沈線文を充填するもの
  - ① 矢羽根状沈線を充填
  - ② 斜行する沈線を充填
- c その他のもの
  - ① 条線文を充填
  - ② 複数の文様を組み合わせているもの

A-3類 その他のもの

- a 口縁部文様帯が幅狭になっているもの
- b 胴部文様帯が口縁部まで押し上がったもの

深鉢B類 区画文がくずれ、不整円環文や不規則な渦状の沈線文を施し、充填文様に刺突文を多用する土器。口縁は平口縁や波状口縁のほか、山形口縁や刺突状を呈するものが多い。頸部に把手がついたり、底部に脚台がつく場合がある。

B-1類 山形口縁を呈するもの。北白川C式深鉢C類に類似している。

- a 山形口縁部分が筒状にならないもの
- b 山形口縁部分が筒状を呈するもの

B-2類 箱状突起をもつもの

B-3類 B-1、B-2類に属さないもの（平口縁・波状口縁）

B-4類 その他、頸部把手類を一括する

深鉢C類 その他の沈線文土器を一括する

C-1類 口縁部文様帯と胴部文様帯を区別しているもので、バケツ状器形を呈するもの

C-2類 口縁部文様帯と胴部文様帯の区別がないもの

C-3類 その他のもの

深鉢D類 無文系の縄文土器・栴檀条線文土器・無文土器を一括した

D-1類 縄文を施すもの

D-2類 栴檀条線を施すもの

D-3類 無文のもの

胴部の分類

1類 胴部に隆帯による唐草文をもち、隆帯間を沈線文で充填しているもの

2類 胴部に隆帯を垂下させて、縦位に区画しているもの

- a 区画に縄文を充填しているもの
- b 区画に矢羽根状沈線文あるいは斜行沈線文を充填しているもの
- c 区画に栴檀条線文を充填しているもの
- d 区画内が無文のもの

3類 胴部に沈線を垂下させて、縦位に区画しているもの

- a 区画に縄文を充填しているもの
- b 区画に矢羽根状沈線文あるいは斜行沈線文を充填しているもの
- c 区画に栴檀条線文を充填しているもの
- d 区画内が無文のもの

4類 不整円環文や不規則な渦状の沈線文を施し、刺突文を充填しているもの

5類 その他の沈線文・条線文を施すもの

6類 無文系土器群に付属する胴部

- a 縄文を施すもの
- b 縦位帯縄文を施すもの
- c 擬縄文を施すもの
- d 栴檀条線文を施すもの

壺類

浅鉢類

底部・脚部

(土器分類については武藤貞昭)

## 2. 遺構出土土器

### (1) 第4号住居跡 (SB4)

(1)～(7)は第4号住居跡出土土器で、炉内に敷かれていたものである。(1)・(2)は口縁部片(7)は底部片である。(2)の端部は内湾し、口唇部に高さの異なる小突起がみられる。(3)～(6)は胴部片で、(3)には縦の貼付隆帯がみられ、(4)は縄文を縦に転がしている。(5)にはやや斜行する条線が施され、(6)には磨消縄文がみられる。(3)～(5)は中期末葉、(2)・(6)は後期前半と考えられる。

### (2) 第1号埋設土器 (SZ1)

(8)～(13)は第1号埋設土器 (SZ1) で、同一個体である。口縁部から胴部にかけて斜行する条線を左上から右下、右上から左下と交差するように引いており、胴下半部は無文である。口縁端部は平らに整形されている。底部は約12.6cmである。時期は中期末葉と考えられる。

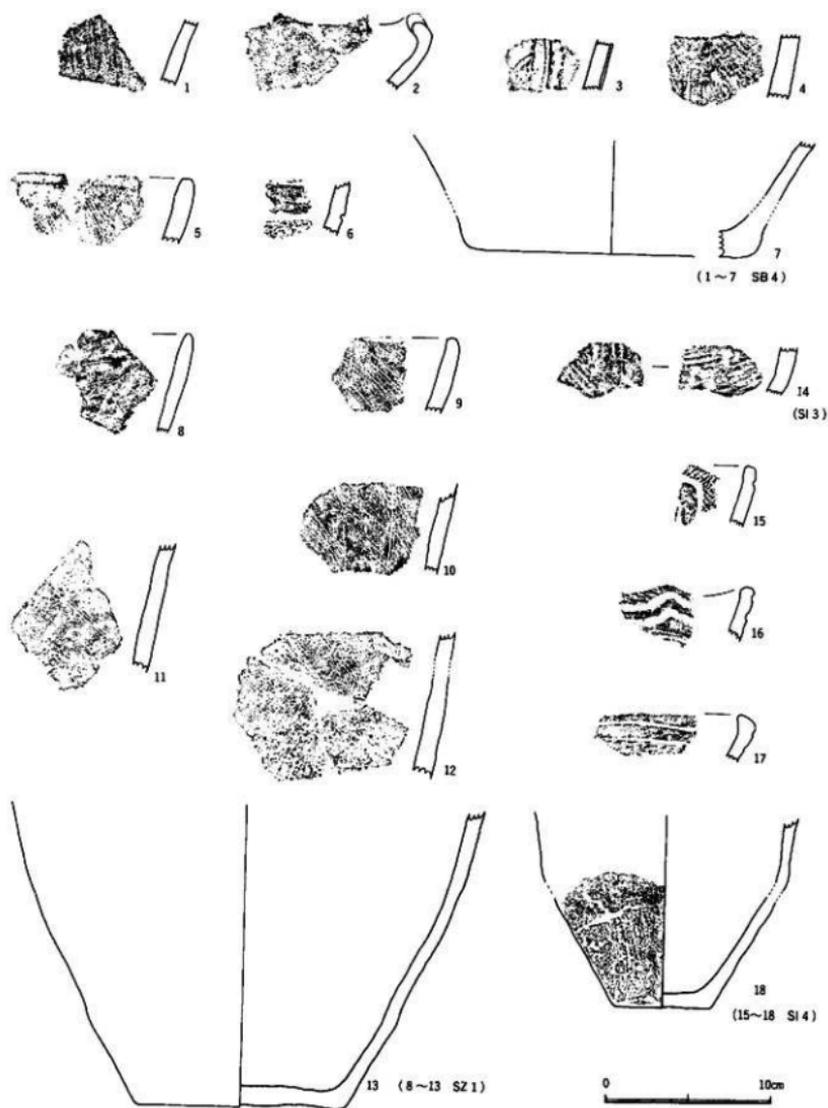
### (3) 焼礫集積遺構 (SI3)

(14)は焼礫集積遺構 (SI3) の集石の間より出土した土器で、表裏ともに貝殻条痕文が施されている。胎土に繊維を含む早期末葉の土器である。

### (4) 第4号集石遺構 (SI4)

(15)～(18)は第4号集石遺構 (SI4) より出土した土器で、(15)～(17)は口縁部片、(18)は胴下半～底部片である。(15)は磨消縄文が施され、(16)は小波状を呈し、縄文地に棒状工具による2条の沈線を口縁に沿って波状に引いている。(17)は肥厚した口縁部をもち、外面には2条の横位の沈線が引かれている。(18)の胴下半部には、縦方向に削った痕がみられる。底径約5.8cmである。

(15)～(17)は後期前半と考えられる。



第33図 SB4・SZ1・SI3・SI4出土土器

## (5) 土坑・ピット出土土器

## Ⅲ期 中期

## A-1類

(19)・(22)～(33)は隆帯による楕円形区画と渦文で構成されるもので、(22)・(23)・(25)の楕円区画内には縄文が、(19)・(24)・(26)～(31)の楕円区画内には斜行沈線や矢羽根状沈線が、(32)には条線、(33)には縄文と刺突が施されている。

(19)は口縁部が外に開く深鉢で、口径約27.5cm、頸部の径は約15cmである。口縁部のやや下がった所に隆帯による渦文を作り、区画内には矢羽根状沈線を充填している。隆帯は所々肩状にせり出している。渦文と渦文の間には、沈線による蕨手状の文様が施されている。胴部には、縦に引いた沈線による文様がみられる。(26)の口縁部に引かれた沈線内には刺突が施され、(27)の楕円区画と楕円区画のあいだには、沈線によるS字状の文様がみられる。(33)の口縁部と胴部の境目には指頭による横位の沈線が引かれ、沈線内には刺突状の刻み列が施されている。

## A-2類

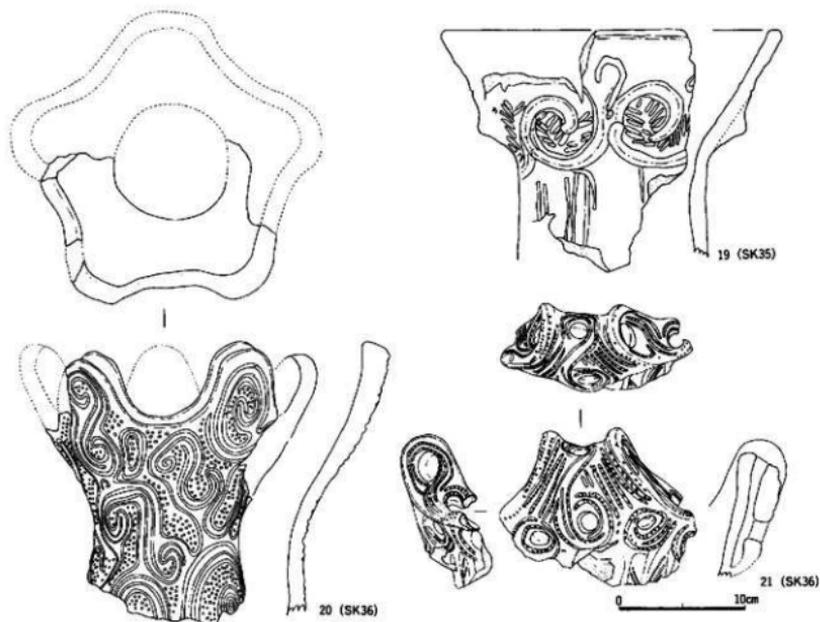
(34)～(39)は沈線による楕円区画と渦文で構成されるもので、(34)の楕円区画内には矢羽根状沈線が、(35)～(39)の楕円区画内には斜行沈線が充填されている。(38)の口縁上端部には、2段の刺突列が施され、(37)の口縁上端部には1列の刺突列、口唇部にも1列の刺突列が施されている。(39)は波状口縁を呈し、楕円区画と楕円区画の間の波頂部には、沈線による渦文が施されている。胴部には隆帯による縦の区画がみられる。

## A-3類

(40)は口縁部文様帯が幅狭になっており、(41)は胴部文様帯が口縁部まで押し上がっている。(40)は沈線で楕円区画と渦文をつくり、その外側の部分には縄文地に刺突を施している。幅狭の口縁部と胴部の間には沈線を引き、その中を刺突状に刻んでいる。(41)は小波状口縁を呈し、波頂部より垂下する二重の沈線による蕨手状の文様を何本も引き、その間を斜行沈線で充填している。

## B類

(20)・(21)・(42)～(52)は深鉢B類である。(20)は頸部がややくびれ、口縁部が開く器形で、波状口縁を呈しており5単位と考えられる。各波頂部は、角の丸い山形口縁状で内側に少し肥厚し、口縁端部に幅広の面をもつ。外面は、棒状工具による不規則な渦状の沈線文を引き、その間を刺突文で充填している。波頂部には、逆S字状の縦長の渦文や、楕円に近い不規則な渦文がみられる。残存高約24cm、口径約24cm、頸部径約12cmである。(43)・(44)は山形口縁部が筒状を呈するものである。(42)・(45)・(46)は波状口縁の波頂部が刺突状になっており、(42)には矢羽根状沈線、(45)・(46)には刺突が施されている。(47)も突起部分で、外面と上面には刺突状の刻みが施され、穿孔もみられる。(49)・(52)は沈線区画内を刺突文で充填し、(51)は沈線文による不規則な渦文内に刺突列を施している。



第34図 土坑・ピット出土土器(1)

(51)の口縁部には沈線による文様がみられる。(50)は口縁部に橋状把手が付き、口縁部上面から把手部にかけて引かれた沈線内に連続刺突が施されている。

(21)は箱状突起をもつもので、外面に3個、両側面に各2個、そして上の面に1個の穴があげられており、外面中央の穴と、上の面の穴をつなぐように逆S字状の2本の沈線が引かれ、沈線内は細かい刺突列が施されている。外面の残り2個の穴のまわりにも、渦状の沈線を引いて刺突を施し、その上の部分にも波頂部より山形に左右に流れる数条の沈線を引いて刺突を施している。箱状突起の両側面にも眼鏡状にあげられた2個の穴をつなぐように2~3本の沈線を引き、その中に細かい刺突を施している。胴部には貼付隆帯による縦の区画をつくり、区画内を斜行沈線で充填している。非常に手の込んだ装飾が施されている。なお、箱状突起は4単位と考えられる。(21)は(20)と共にSK36より出土した。

## C類

(53)～(57)はその他の沈線文土器で、(53)・(54)は口縁部文様帯と胴部文様帯を区別しているが、(55)～(57)はその区別がほとんどなくなり、特に(57)は胴部文様帯が口縁部までせり上がったものである。(53)の口縁部楕円区画内には不規則な矢羽根状沈線が引かれ、(54)の口縁部・胴部楕円形区画内も矢羽根状沈線が引かれ、区画内や区画と区画の間には、逆S字状の縦長の沈線文が施されている。(55)・(56)の口縁部付近には、横位の沈線2本が引かれ、(55)には縄文、(56)には刺突が充填されている。(57)には縦長の楕円形区画状の文様を連続して施している。

## D類

(58)～(66)は無文系の土器で、(58)・(59)は縄文を施すもの、(60)・(61)は構描条線を施すもの、(62)～(66)は無文のものである。このうち(62)の口縁上端部には、棒状工具による刺突列が施され、内面には折り返し口縁をもつ。(63)の口唇部には棒状工具による刻みが施されている。(59)の口唇部にも縄文が施されている。

## 胴部2類

(67)～(73)は胴部片のうち、隆帯を垂下させて縦位に区画をつくり、区画内に矢羽根状沈線あるいは斜行沈線を充填するもので、(67)・(68)には蛇行する隆帯、(71)には蛇行する沈線文が施されている。(72)には刺突もみられる。

## 胴部3類

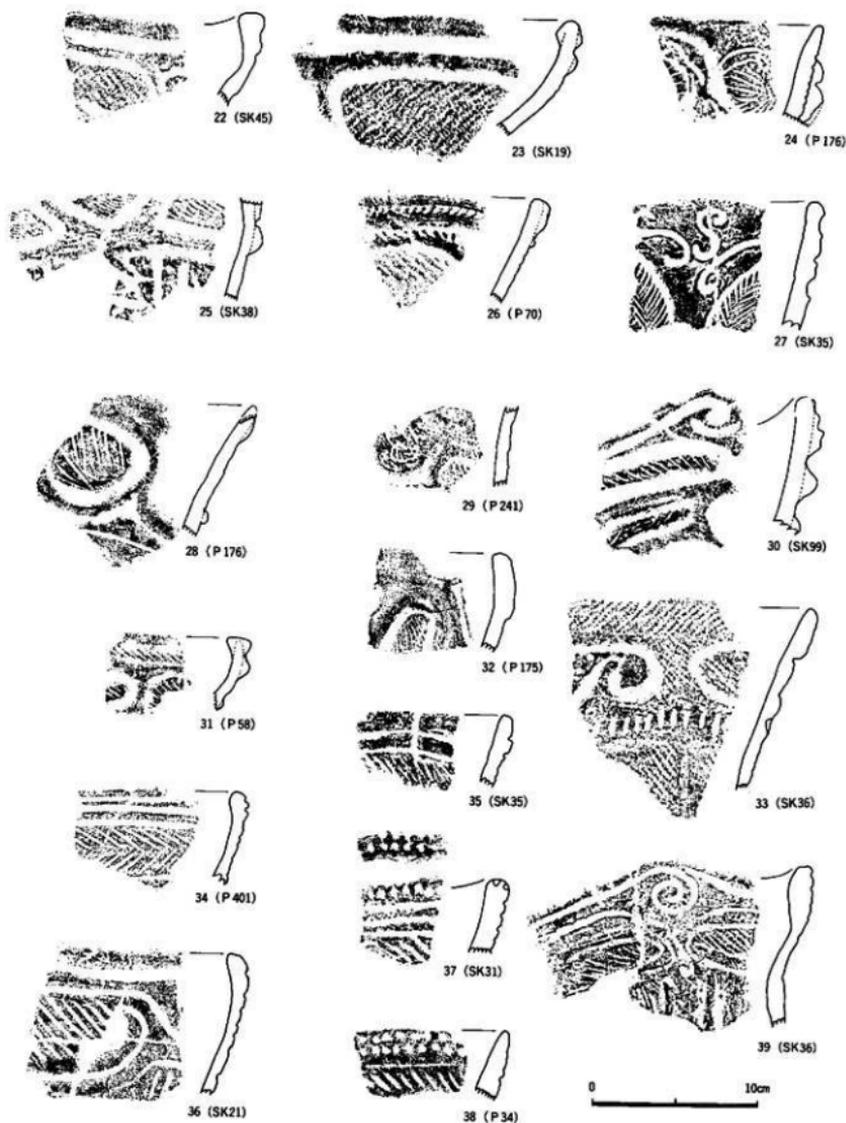
(74)～(95)は胴部片のうち、沈線を垂下させて、縦位に区画をつくり、区画内に文様を充填するもので、(74)～(82)は区画内に縄文を充填するもの、(83)～(92)は区画内に矢羽根状沈線あるいは斜行沈線を充填するもの、(93)・(94)は区画内に構描条線を充填するもの、(95)は区画内が無文のものである。このうち、(74)・(76)には6本以上の縦の沈線が引かれ、(81)は区画内に無節の縄文が充填されている。(82)には結節縄文が認められる。(85)は縦位に不規則に引かれた矢羽根状沈線で充填され(86)・(87)には区画と区画の間に蕨手状の沈線が引かれている。(88)・(91)は同一個体である。(94)の区画内には蛇行沈線もみられる。

## 胴部4・5・6類

(96)～(98)は不規則な渦状の沈線文を施し、刺突文を充填する4類である。(99)はその他の沈線文を施す5類で、縄文地に3条の波状の沈線を横位に引いている。(100)～(105)は6類、無文系土器で、(100)～(102)には縄文が、(103)には縦位帯縄文が施され、結節もみられる。(104)・(105)には構描条線文が施されている。

## 壺類

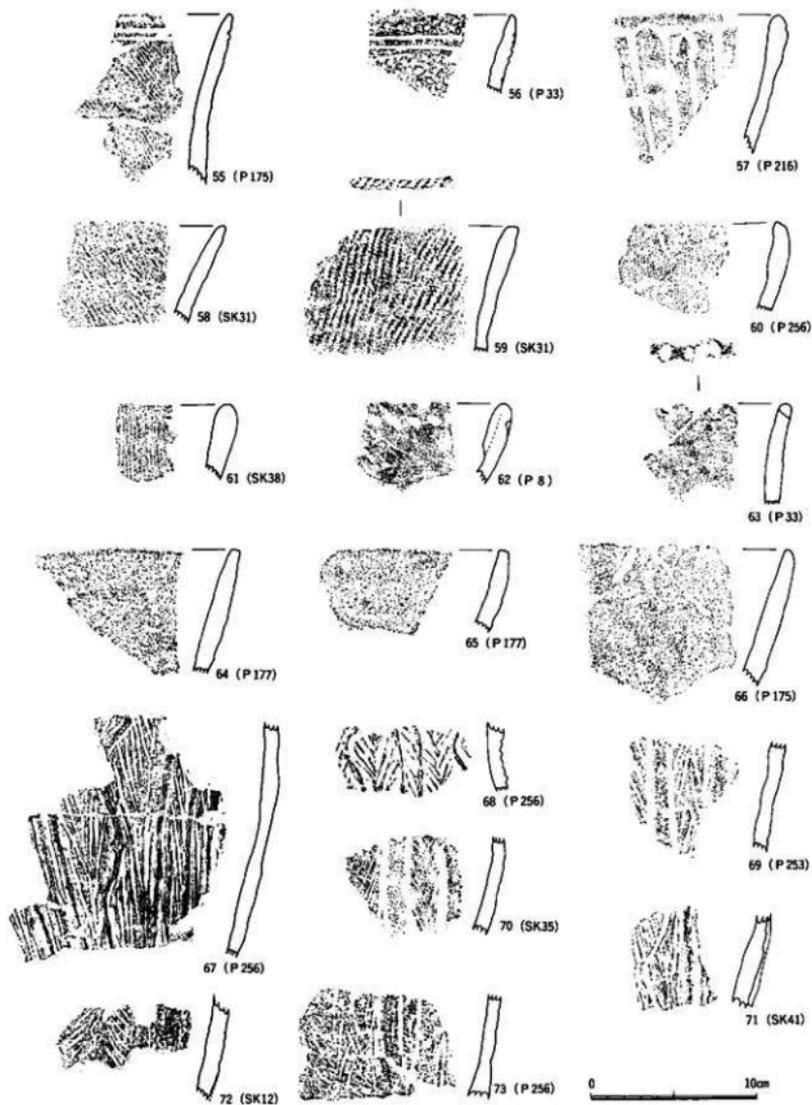
(106)は壺類の把手部分である。



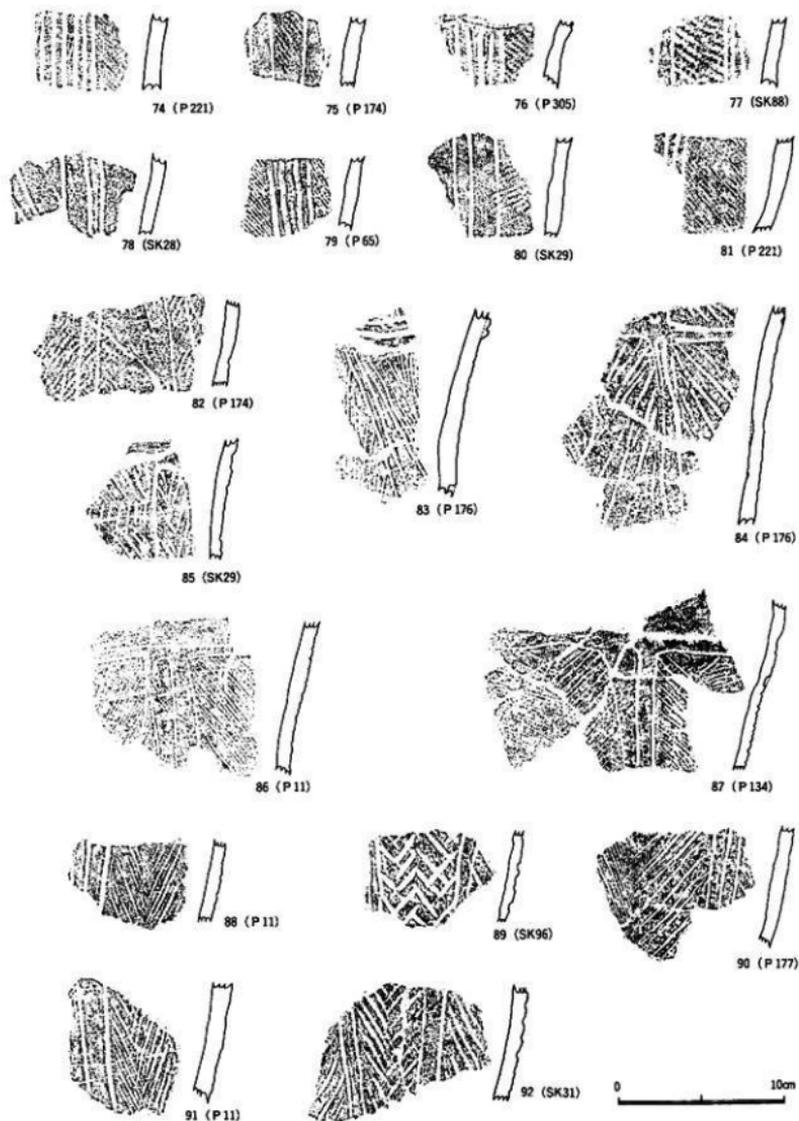
第35図 土坑・ピット出土土器(2)



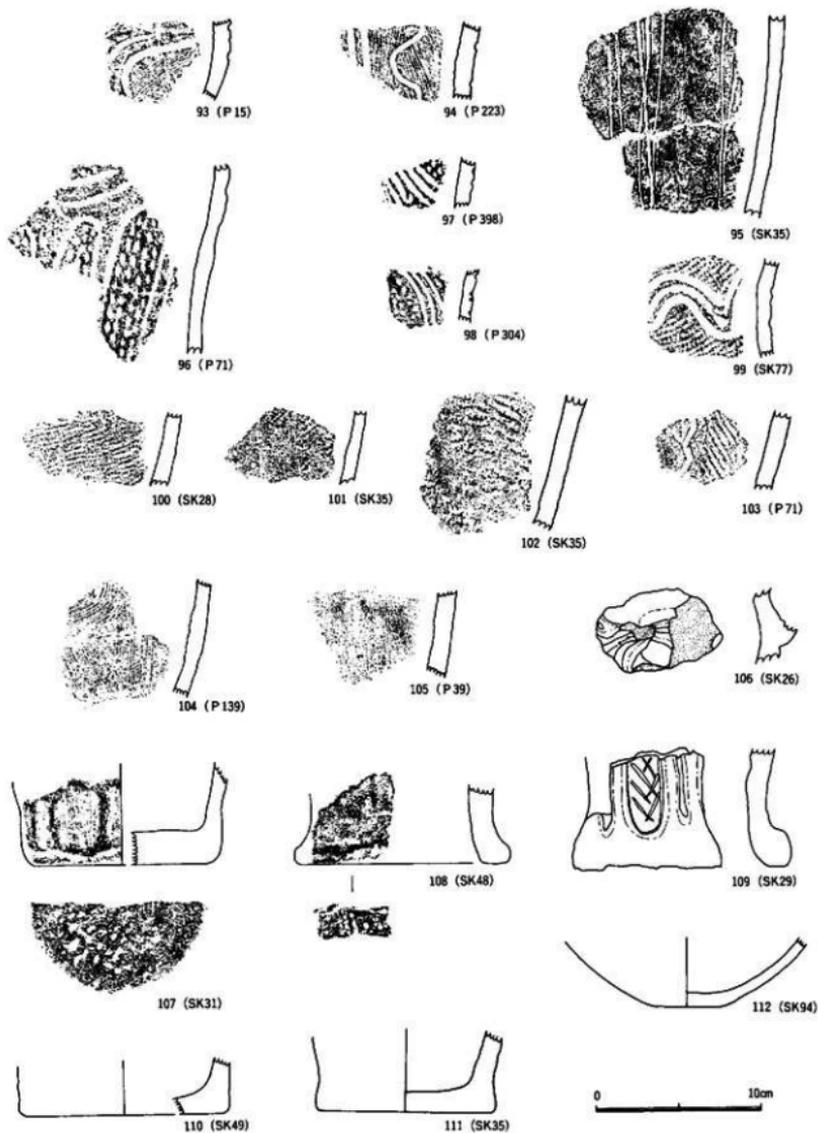
第36図 土坑・ピット出土土器(3)



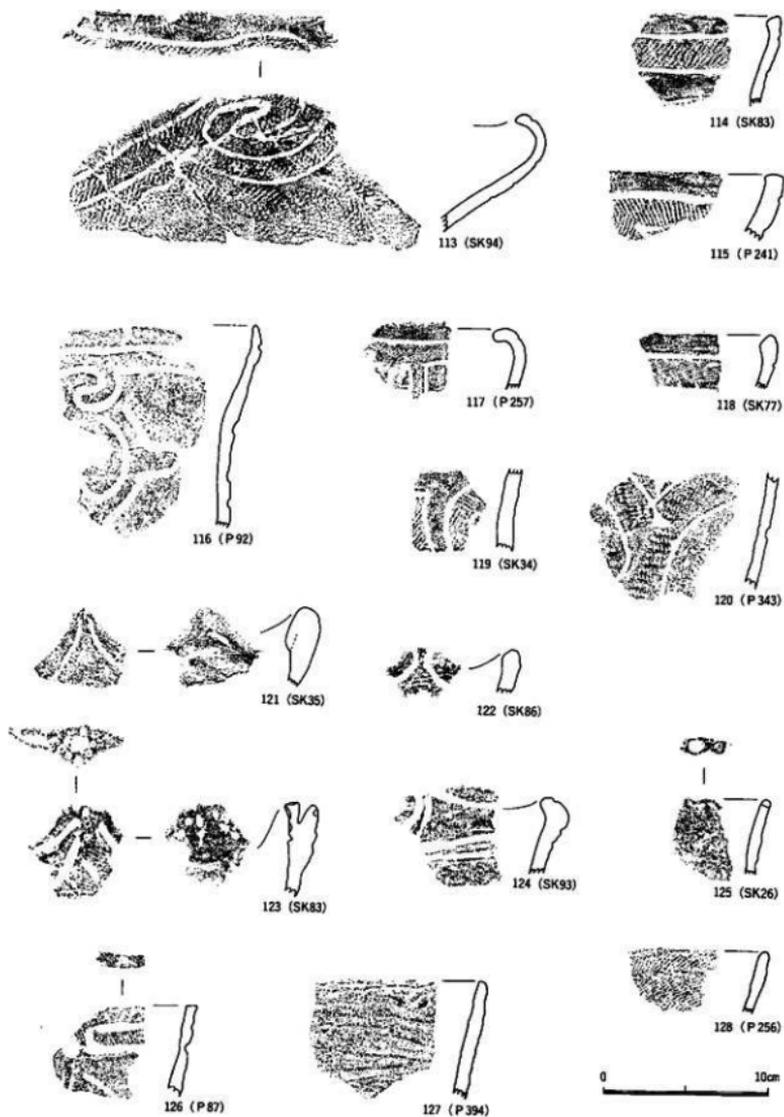
第37図 土坑・ピット出土土器(4)



第38図 土坑・ピット出土土器(5)



第39図 土坑・ピット出土土器(6)



第40図 土坑・ピット出土土器(7)

## 底部・脚部

(107)～(112)は底部および脚部で、(107)の胴下半部には隆帯による縦の区画もみられる。(107)の底部と(108)の脚部の底面には網代痕も認められ、(107)は1本越え・1本潜り・1本送り、(108)は1本越え・1本潜り・2本送りである。(109)の脚部は隆帯により楕円区画をつくっており、区画内に矢羽根状沈線を描いている。透かしも認められる。

底部はどれも平底であるが、(112)の底部は底径約4.5cmと小さく、他と比べて薄手である。

## IV期 後期

(113)～(128)は土坑(SK)、ピット(P)より出土した後期の土器である。

(113)～(115)および(117)～(120)には磨消縄文が施され、(116)には沈線によるJ字文がみられる。

(113)～(118)は口縁部片、(119)・(120)は胴部片である。(113)は波状口縁で、波頂部には渦文がみられ、やや内湾している。(115)の口縁部は平らに整形されている。(121)～(123)は波状口縁の波頂部で、口縁に沿ってせり上がった沈線がみられる。(121)は内面に肥厚帯をもつ。(123)の波頂部は筒状を呈し、上面、側面、および外面と内面に刺突が施されている。(124)は縁帯文系の土器で、肥厚した口縁部およびその下に沈線による文様が施されている。(125)は無文であるが、口唇部に刺突が施されている。(126)は沈線による楕円区画文や指頸状の刺突を施し、その上から部分的に縄文を転がしている。口唇部にも縄文が施されている。(127)は無文、(128)には縄文が施されている。

## 3. 包含層出土土器

## I期 早期

(129)～(131)および(133)～(138)が早期の土器で、(129)～(131)が口縁部片、(133)～(138)は胴部片である。(129)は外反する口縁部片で、端部は丸く整形されている。内面には斜行沈線がみられる(133)と(136)は胎土に繊維を含む厚手の土器で、(133)は外面に格子目状の押型文が施されている。(129)と(136)にも格子目状の文様がみられる。(129)および(133)と(136)は高山寺式土器である。(130)と(131)は口縁端部に平坦な面をもち、(131)は口縁上部に指による横位の凹線文を1条、その下には斜位の凹線文を引き、凹線文間には浅い刺突を小刻みに充填している。

(134)・(135)・(137)・(138)は胴部片で、(135)～(138)は屈曲部である。(135)には屈曲部の隆帯上に縦位の刻みを入れ、その下には棒状工具による連続刺突が施されている。(134)にも刻みが施され補修孔と考えられる穿孔もみられる。(130)・(131)および(134)・(135)・(137)・(138)は胎土に繊維を含み、早期後半の土器と考えられる。

## II期 前期

(132)は非常に薄手の土器で、外面には爪形文がみられる。やや外反する器形である。本遺跡で出土した前期と考えられる土器は、この1点だけである。

## III期 中期

## A-1 a類

(139)～(146)は楕円区画内に縄文の充填がみられるもので、いずれも隆帯の両側に棒状工具による沈線が引かれている。(139)と(140)は同一個体で、楕円区画・渦文とともに円形の文様もみられる。(143)は楕円区画の上の口縁部や胴部にも縄文が施されている。胴部の縄文は、口縁部と胴部を区切る2本の横位の沈線の下に引かれた縦の沈線による区画内に充填されている。(145)は小波状口縁を呈し、渦文と楕円区画の間の隆帯上に円棒状工具による刺突がみられる。(146)は小波状口縁を呈し、肩状に突き出した隆帯の内側に引かれた沈線内に連続刺突を施している。口縁部と胴部の境には、同様の工具による縦の刻みを連続して横位に施している。

## A-1 b類

(150)～(160)は隆帯による楕円区画内に沈線を充填するもので、(151)・(153)・(155)・(156)・(156)・(157)・(158)は矢羽根状沈線文、それ以外は斜行する沈線が引かれている。(150)～(154)は平口縁、(155)～(157)および(159)・(160)は小波状口縁である。(152)は楕円区画の上の沈線内に連続刺突が施され、楕円区画内には横位に引かれたS字状の文様もみられる。(153)と(154)は楕円区画の上の沈線内および、口縁端部に引かれた沈線内に径2ミリ程度の円環状工具による連続刺突状の刻みが施されている。(155)には、渦文と楕円区画の間の隆帯上に、沈線をはさんで向かい合う1対の刺突がみられる。(156)は、楕円区画内と渦文をつくる沈線内に細かい棒状工具による連続刺突が施されている。(157)と(158)には沈線区画内に斜行沈線を充填し、(158)の区画と区画の間には蕨手状の沈線を引く胴部文様もみられる。(151)および(159)・(160)には隆帯上に沈線が引かれている。

## A-1 c類

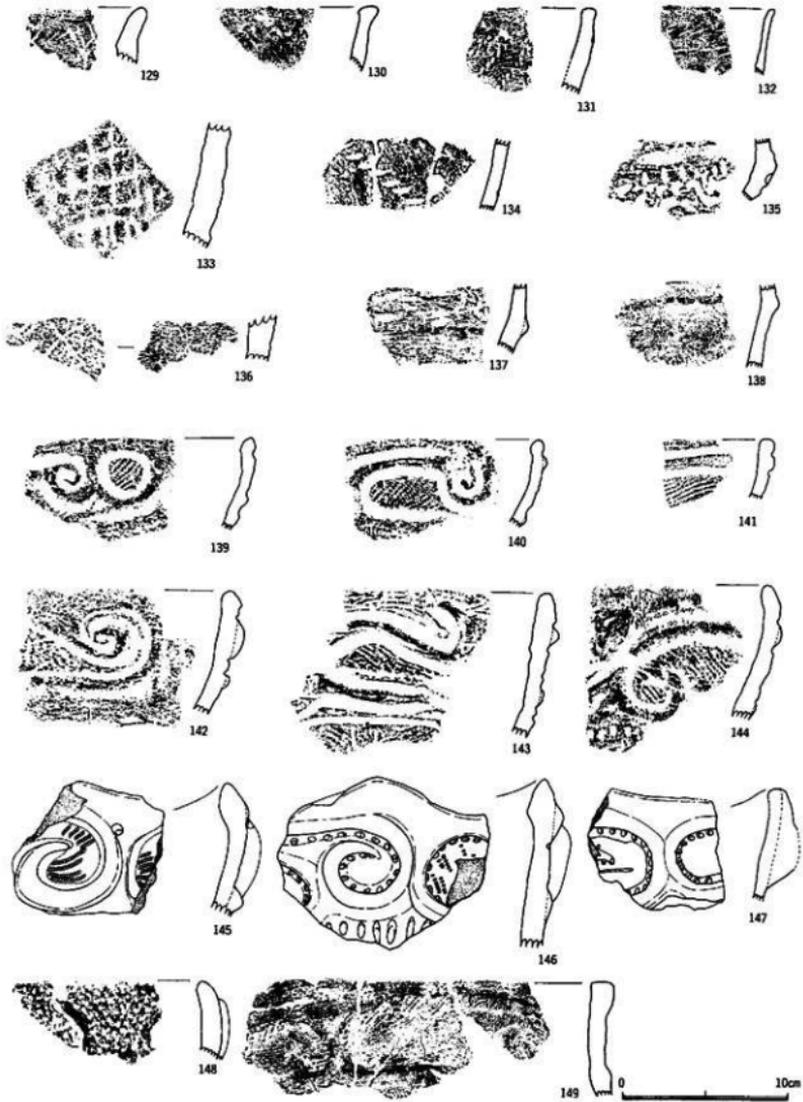
(147)も(146)と同様に小波状口縁を呈し、肩状に突き出した隆帯の内側に引かれた沈線内に連続刺突を施している。(148)は、隆帯による区画の内外全面に、串状の工具による刺突の充填がみられる。(149)は区画内に播描条線(4本単位か)を引いており、特に楕円形区画内には、矢羽根状に引いている。

## A-2類

(161)～(166)は、沈線による楕円区画内に斜行沈線もしくは、矢羽根状沈線を引くもので、(161)および(163)・(164)は平口縁、(162)と(165)・(166)は小波状口縁を呈する。(166)は、沈線内に連続刺突が施されている。(164)には沈線区画内を斜行沈線で充填し、区画と区画の間には、蕨手状の沈線を引く胴部文様もみられる。

## A-3類

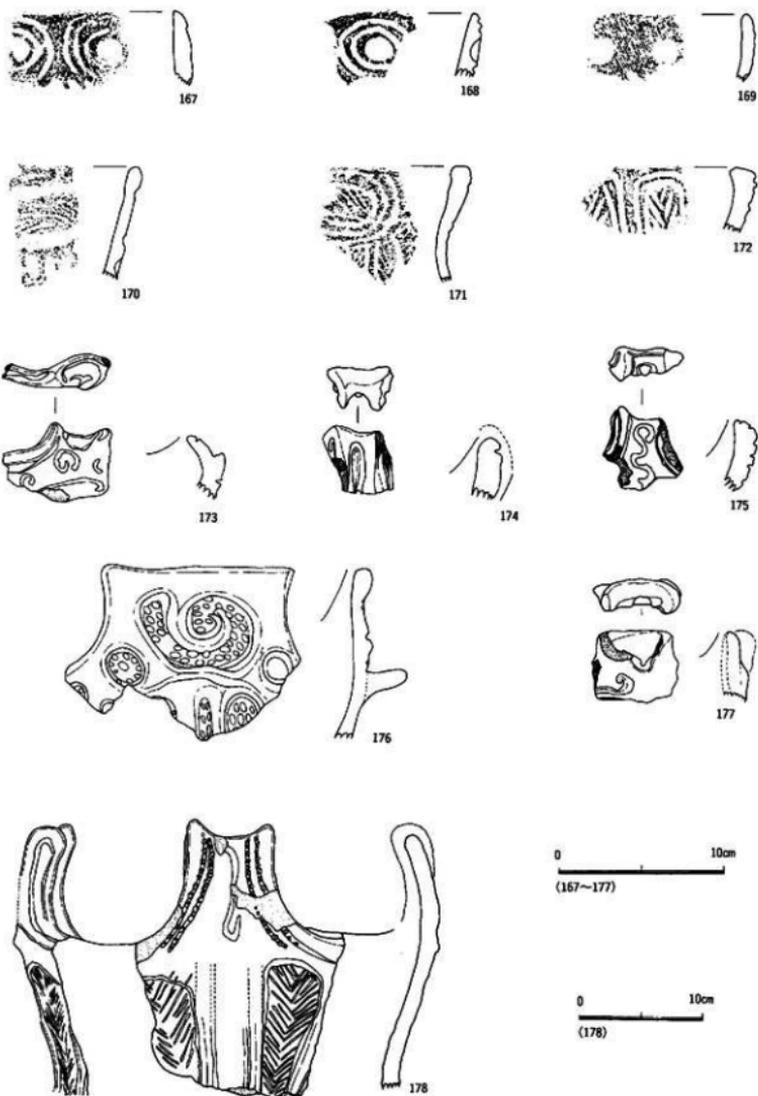
(167)～(172)はその他のもので、(167)と(168)は沈線による円環状区画内に、指頭状の刺突を施している。(169)は細かい条線地に指頭状の刺突がみられる。(170)と(171)は、口縁部文様帯で



第41圖 包含層出土土器(1) 早期、前期、中期A-1類



第42図 包含層出土土器(2) 中期A-1・2類



第43圖 包含層出土土器(3) 中期A-3・B-1類

ある楕円形区画が幅狭になっており、(172)は胴部文様帯が口縁部まで押し上がっている。(170)の楕円区画内には斜行沈線が引かれている。(171)の胴部文様は沈線区画の内外を斜行沈線で充填しており、(172)は楕円形区画内に矢羽根状沈線を引いている。

#### B-1 a 類

(173)～(191)は山形口縁を呈し、口縁部分が筒状にならないものである。(173)～(175)は同一個体で正面および側面に沈線による文様がみられる。(176)は、山形の部分に沈線による渦文状の区画をつくり、その中を刺突で充填している。区画の下には舌状の突起をつくり、口縁部と胴部を分けている。胴部にも縦の沈線区画内を刺突で充填している。(178)は、山形の部分の中央に逆S字状の沈線を引き、その左右には各2列の沈線内刺突がみられる。山形口縁の両側面にも蕨手状の沈線が引かれており、胴部は隆帯と沈線による縦の楕円(逆U字状)区画内を矢羽根状沈線で充填している。

(179)は沈線区画内を刺突で充填し、山形口縁の両側面は矢羽根状沈線を引いている。さらには、山形口縁の突起部を内側に肥厚させ、上の面には沈線による文様を、内面肥厚部には、刺突(凹点)を施している。(180)・(182)の山形口縁突起部も内側に肥厚し、上に平らな面をつくっており、(182)には沈線による円の中に指頭状の刺突がみられる。外面は、縦に流れる貼付隆帯の間を斜めや矢羽根状に刻むように引かれた沈線で充填している。(181)は山形の部分を丸く仕上げ、それに合わせるように内側へ粘土を貼り付けて肥厚させた部分にも緩やかな曲面をもたせている。上の部分には、沈線による円が施されている。(183)は、山形というよりも波状口縁を呈し、波頂部には2個の刺突が施され、両側面には楕円区画文が配されている。正面には沈線による文様が施されている。(184)は波頂部の先端を丸く平らな面に仕上げ、沈線による文様を施している。(185)～(191)は山形口縁部分の破片で、(186)を除いて先端部を欠損している。(188)・(189)・(191)は山形の根元の部分である。沈線による文様を主体とし、(187)・(188)には刺突文、(186)・(189)・(190)には縄文が施されている。(190)の側面には渦文もみられる。

#### B-1 b 類

(192)～(199)は、山形口縁部分が筒状を呈するもので、(192)～(194)、(196)・(197)はその先端部分である。(197)は沈線で楕円文を引きその外側に縄文を充填しており、後期の可能性も考えられるが、それ以外のものは、沈線や刺突による文様を施している。(198)は波底部にも小突起がみられる。(195)と(199)は山形口縁の根元の部分で、共に沈線による楕円文様の中を刺突で充填している。(192)と(195)は同一個体と考えられる。

#### B-2 類

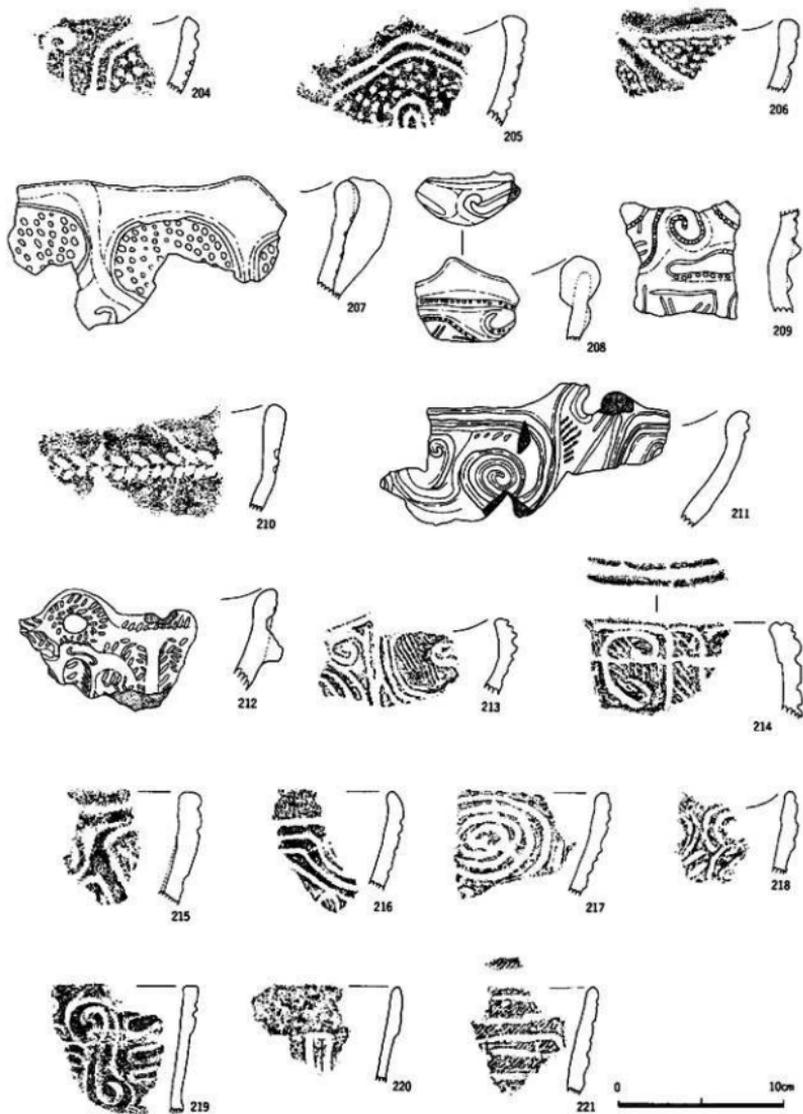
(200)～(203)は箱状突起をもつもので、沈線内に刺突を施し、突起部の正面、側面、および上の面に透かし状の穴があげられている。(203)の内面には端部に刺突列を施し、やや下にふた受け状の段を有する。(200)と(202)は同一個体である。



第44圖 包含層出土土器(4) 中期B-1類



第45図 包含層出土土器(5) 中期B-1・2期



第46圖 包含層出土土器(6) 中期B-3・C類

## B-3類

不整円環文や不規則な渦状の沈線文を施し、充填文様に刺突文を多用するB-3類は(204)～(214)である。口縁部を欠損する(209)以外は口縁部片で、(214)が平口縁、残りは波状口縁を呈する。二重の沈線内に刺突を充填する(204)と(205)は同一個体である。(207)は楕円区画の間の隆帯が肩状にせり出している。(208)は口縁端部を肥厚させ、上の面に沈線による文様を施している。(210)は口縁部にハの字状の2列の連続刺突が施され、波頂部にも刺突による文様がみられる。(212)は刺突状の刻みが全面に施され、波頂部には指頭状の刺突もみられる。(211)の渦文や楕円文内には縄文が、(213)・(214)の渦文や楕円文内には斜行沈線が充填されている。

## B-4類

(222)～(227)は、頸部把手類で橋状の把手部に棒状工具による沈線や刺突による文様が施されている。(225)は橋を2つ重ねて立体的な把手をつくり、正面および両側面を沈線文で飾っている。(226)は把手上の正面に隆帯を逆S字状に貼付し、指頭による押圧がみられる。(227)は把手上部を欠損するものの、(225)と同様に橋を2つ重ねた把手と考えられ、正面には逆S字状の指頭大の沈線が引かれ、その周囲や把手の両側の頸部楕円区画内には、刺突が施されている。(228)は突起部分で、外面には縄文が充填され、突起の下には肩状にせり出した隆帯がみられる。突起上の片側は平らな面を持ちその中央には指頭による沈線がみられる。

## C類

(215)～(221)はその他の沈線文土器で、(218)は波状口縁、残りは平口縁である。(217)には、5重にめぐる渦巻き文様がみられ、(219)には逆S字状の文様が施されている。(220)の口縁部は無文で、逆U字状の胴部文様帯がかなり上までせり上がった感じである。(221)は縄文地に多重沈線を引いており、口唇部にも縄文を転がしている。

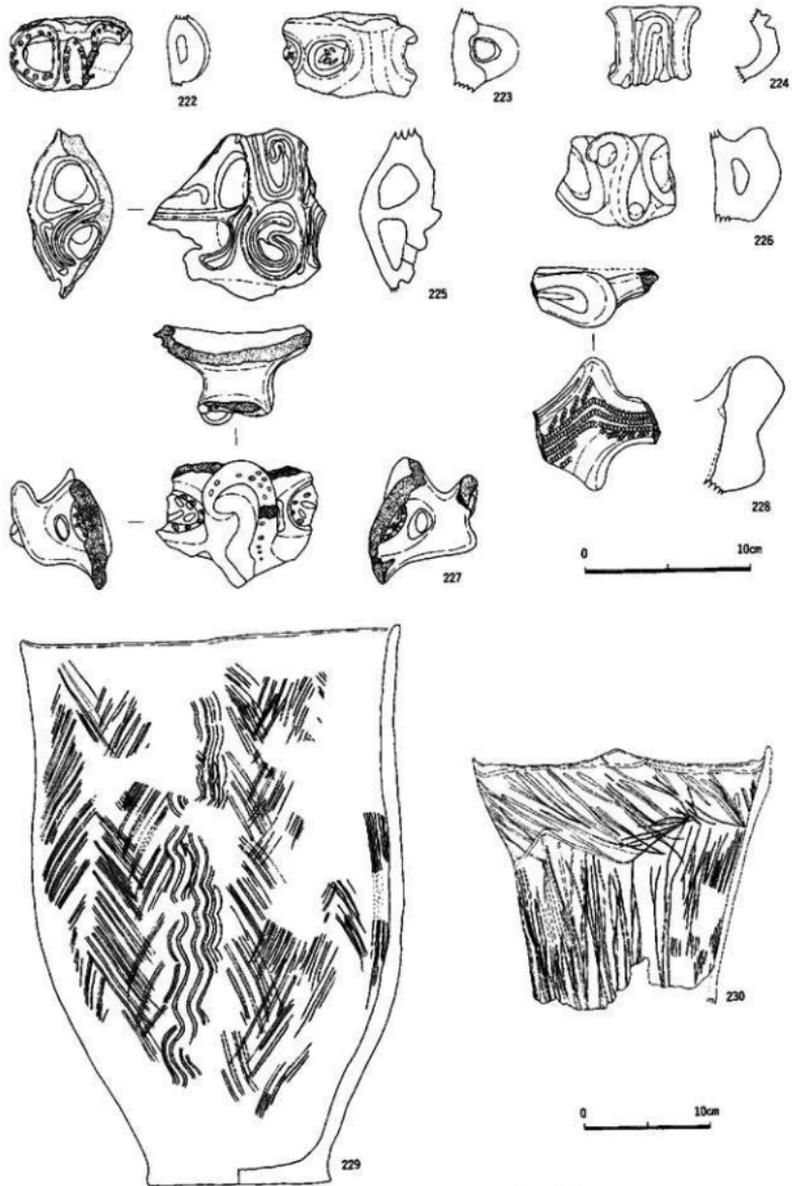
## D-1類

(231)～(235)は縄文の施されたもので、(231)は口縁部と胴部の境に横位の沈線が引かれている。(232)と(233)は口唇部にも縄文を転がしており、(232)と(235)は口唇部に刻みを施している。(233)の口唇部にも横位の沈線がみられる。

## D-2類

(229)と(230)および(236)～(239)は条線を施すもので、(229)は高さ約45cm、口径約35cm、底径約15cmの平口縁の深鉢で、外面には櫛描条線で矢羽根状や蛇行した文様を施している。(230)は4単位の波状口縁を呈し、底部を欠くものの、口径約24cm、残存高約21.5cmの深鉢で、口縁部と頸部には棒状工具による沈線を横位の波状に引いている。口縁部には左上から右下へ斜行する沈線が、また胴部には縦に引かれた条線が全面に施されている。

(236)～(239)は口縁部片で、(236)は4本単位の櫛描条線を縦・横に引いており、(237)と(238)は口縁部に無文部を残して櫛描条線を縦に引いている。(239)は5本単位の櫛描条線で口縁部に横位の波状文を施している。



第47回 包含層出土土器(7) 中期B-4・D-2類

## D-3類

(240)～(250)は無文の口縁で、(240)・(241)および(245)の口唇部には刻みを、また(242)は刺突を施している。(243)と(244)は折り返し口縁をもっている。(248)は内面に肥厚帯をもつ。(250)の口縁はやや内湾し、口縁端部に内側への注ぎ口状のくびれもみられる。

## 胴部1類

(251)と(252)は胴部に隆帯による唐草文をもち隆帯間を沈線文で充填しているもので、隆帯の両サイドには沈線もみられる。

## 胴部2類-a

(253)～(255)は区画内に縄文を充填するもので、(253)の隆帯は樹枝状に分枝するものもみられる。<sup>1)</sup>(254)の隆帯と隆帯の間の沈線内には、連続刺突も施されている。

- 1)「右近次郎遺跡」(福井県大野市)でも樹枝状に分枝する隆帯をもつものが多数みられる。  
(大野市教育委員会 1985「右近次郎遺跡II」)

## 胴部2類-b

(256)～(271)は隆帯区画内に矢羽根状沈線文あるいは斜行沈線文を充填しているもので、(256)～(263)には矢羽根状沈線文が、(264)～(267)、(269)～(271)には斜行沈線文がみられる。(268)には縦に垂下する沈線文が施されている。(257)・(258)・(261)・(264)・(264)・(265)には、縦に蛇行する隆帯がみられ、(259)には樹枝状に分枝する隆帯がみられる。

## 胴部2類-c・d類

(272)～(274)は隆帯による区画内に構描条線文を充填するもので、(275)の区画内は無文である。(275)の隆帯の中央には沈線がみられる。

## 胴部3類-a

(276)～(288)は沈線による縦の区画内に縄文を充填するもので、(278)と(279)には縦位帯縄文、(280)～(282)には結節縄文がみられる。(283)～(288)には縦に蛇行する沈線が施されている。

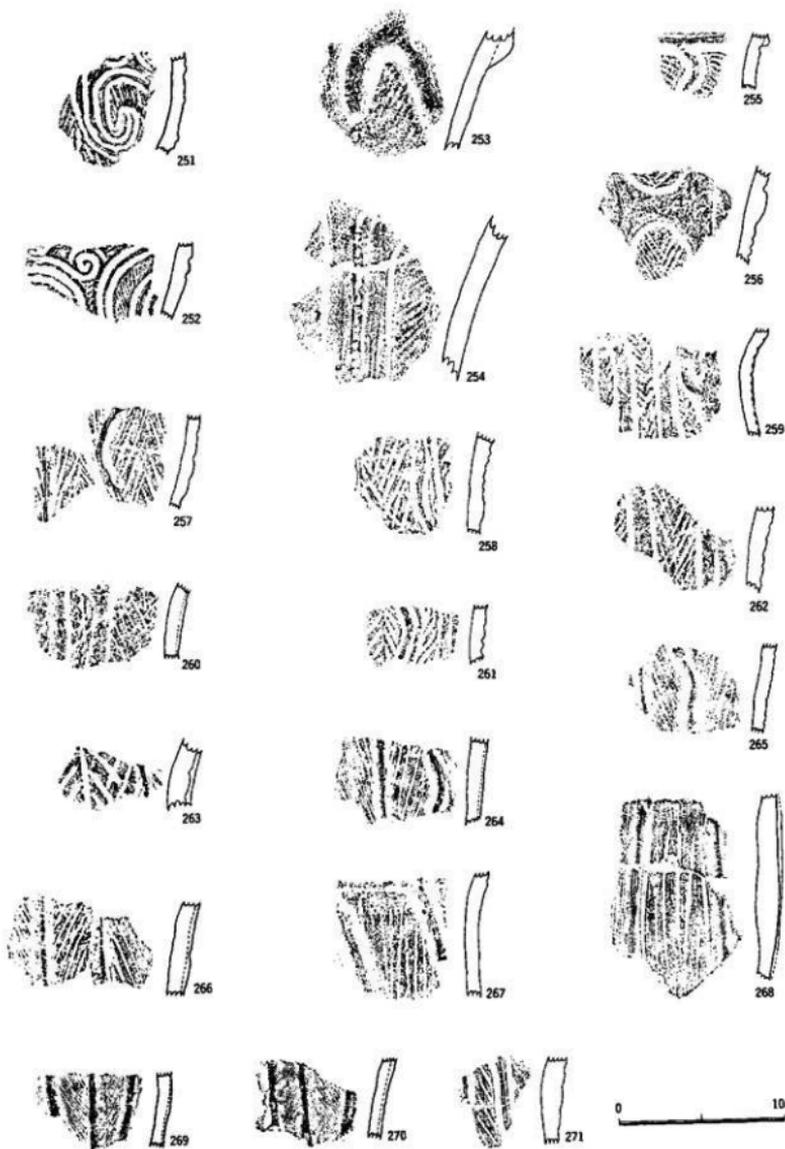
## 胴部3類-b・c

(289)～(309)は沈線による区画内に矢羽根状沈線文あるいは斜行沈線文を充填しているもので、このうち(289)～(304)には矢羽根状沈線文が、(305)～(308)には斜行沈線文がみられる。(309)には縦方向の雑な沈線がみられる。(291)には炭手状の沈線が引かれ、(294)～(298)には縦方向の刺突文が施されている。(305)～(307)には縦方向の蛇行する沈線もみられる。

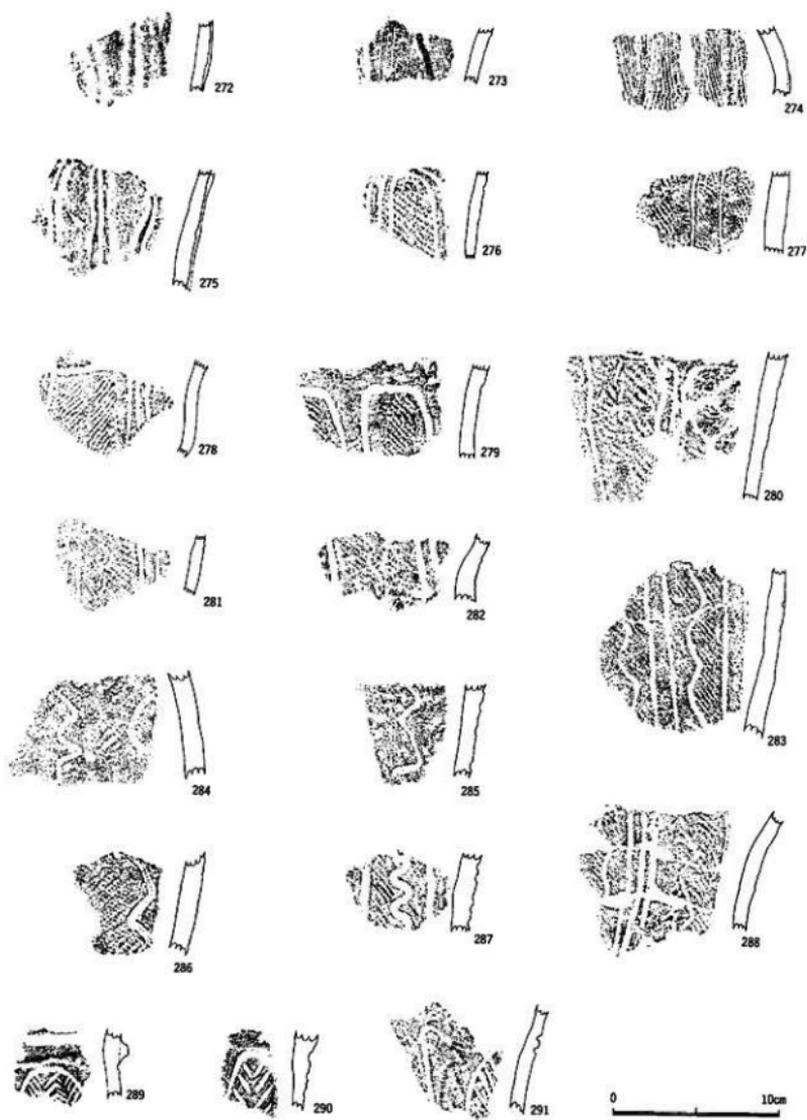
(310)の区画内には、構描条線文が充填されている。



第48圖 包含層出土土器(9) 中期D-1・2・3類



第49回 包含層出土土器(9) 中期胴部 1・2類



第50圖 包含層出土土器⑩ 中期胴部 2・3類

## 胴部4類

(311)～(316)は、不整円環文や不規則な渦状の沈線を施し、刺突文を充填しているもので、(311)・(312)は隆帯で、(313)～(316)は沈線で区画をつくり、やや細目の棒状工具による刺突文を充填している。

## 胴部5類、6類・a・b・c・d

(317)～(322)はその他の沈線文・条線文を施すもので、(317)・(319)・(320)には沈線文、(318)・(321)・(322)には条線文がみられる。(323)～(333)は無文系土器群に付属する胴部片で、(323)には縄文が施され、(324)～(327)には縦位帯縄文、(324)と(327)には結節縄文がみられる。(328)には擬縄文が施されている。(329)～(333)は節描条線が施され、(330)には曲線文様がみられる。(332)の節描条線は9本単位である。(330)と(331)には結節縄文もみられる。

## 壺類

(334)～(338)は壺類で、(336)は口縁部、他は肩部である。(334)はふた受け状の段を有し、上面に沈線による文様が施されている。(335)のふた受け状の段は一部小波状を呈しており、外面には沈線による文様と刺突が施されている。(337)と(338)には、貼付隆帯による楕円区画文がみられる。

## 浅鉢

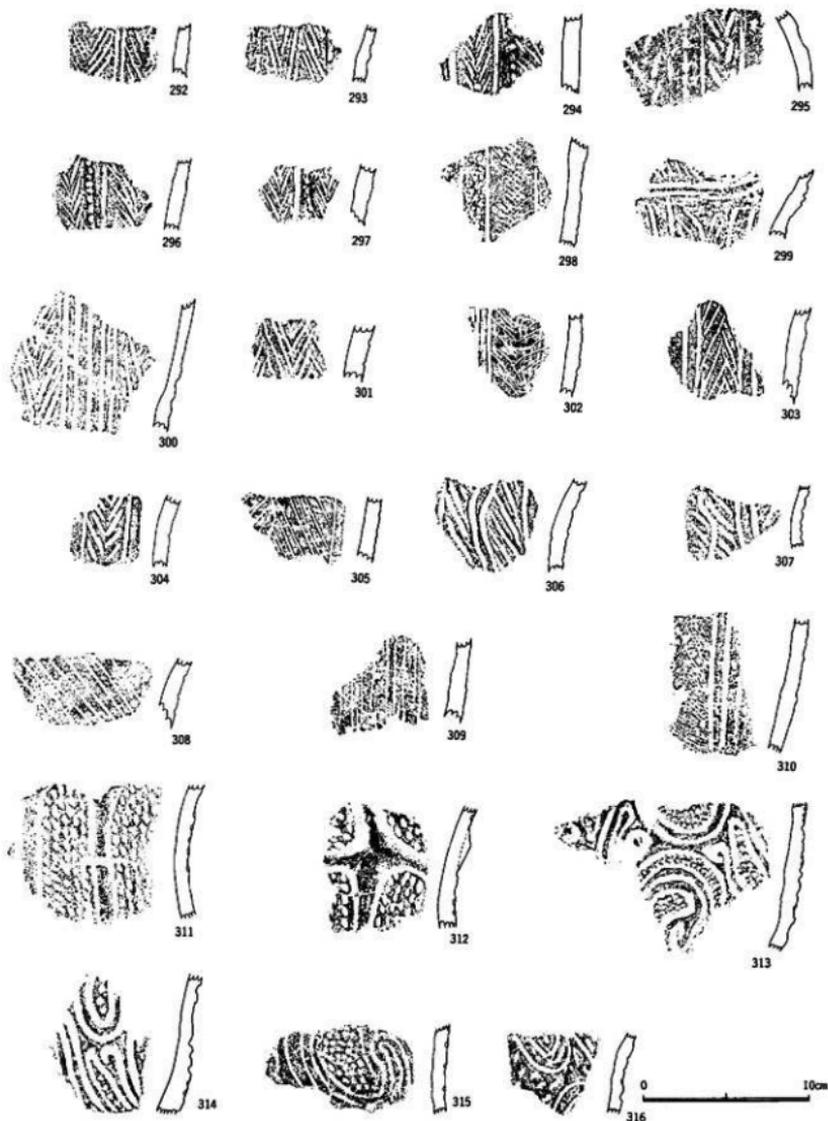
(339)～(343)は浅鉢で、ともに把手部である。(339)と(340)は把手部に沈線による文様が施され、内面には横位に引かれた1条の沈線内に刺突列がみられる。(340)の外面には縄文が施されている。(341)の外面にも縄文が施され、把手に沿って沈線が引かれている。

## 底部

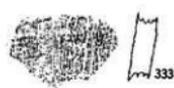
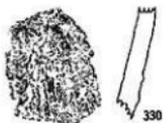
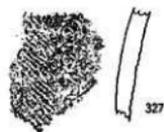
(344)～(362)は底部で、このうち(334)～(349)には網代痕が認められる。(345)は1本越え・1本潜り・1本送り、(347)は2本越え・1本潜り・1本送りと2本送りを変互に、(348)は2本越え・1本潜り・2本送りである。(349)には笹類(チシマザサ類)と考えられる幅の広い植物の葉の跡が残っていた。(350)～(357)の胴下半部には、文様が施され、(350)・(351)・(357)は隆帯による縦区画をつくり、(350)と(357)は区画内を沈線で充填している。(353)は沈線による楕円区画をつくり、(352)と(354)には縦方向の沈線による文様が施されている。(356)にも沈線による文様が認められる。(355)には刺突が施されている。(362)が凹底である以外は平底である。

## 脚部

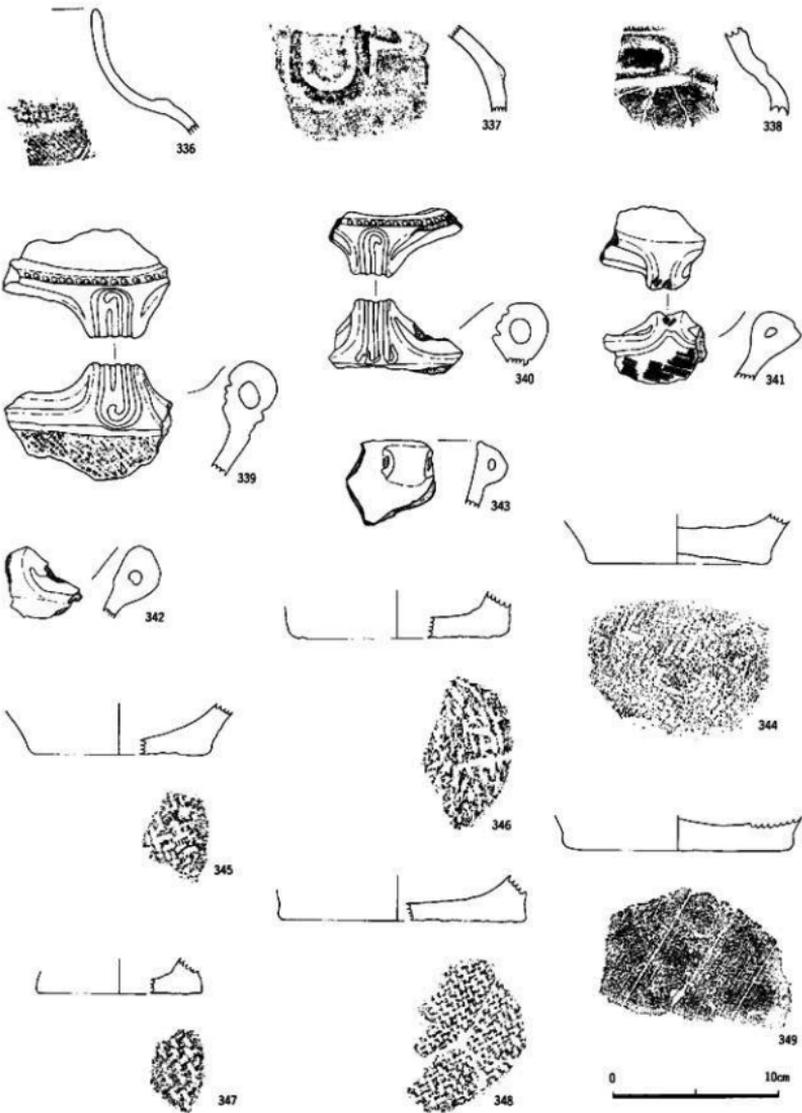
(363)～(368)は脚部で、(363)～(367)には隆帯による文様が施されている。(363)・(364)・(366)～(368)には透かしも認められ、(363)・(366)・(367)には穿孔も施されている。(365)の楕円区画内には刺突が施されている。(368)の脚部は無文である。



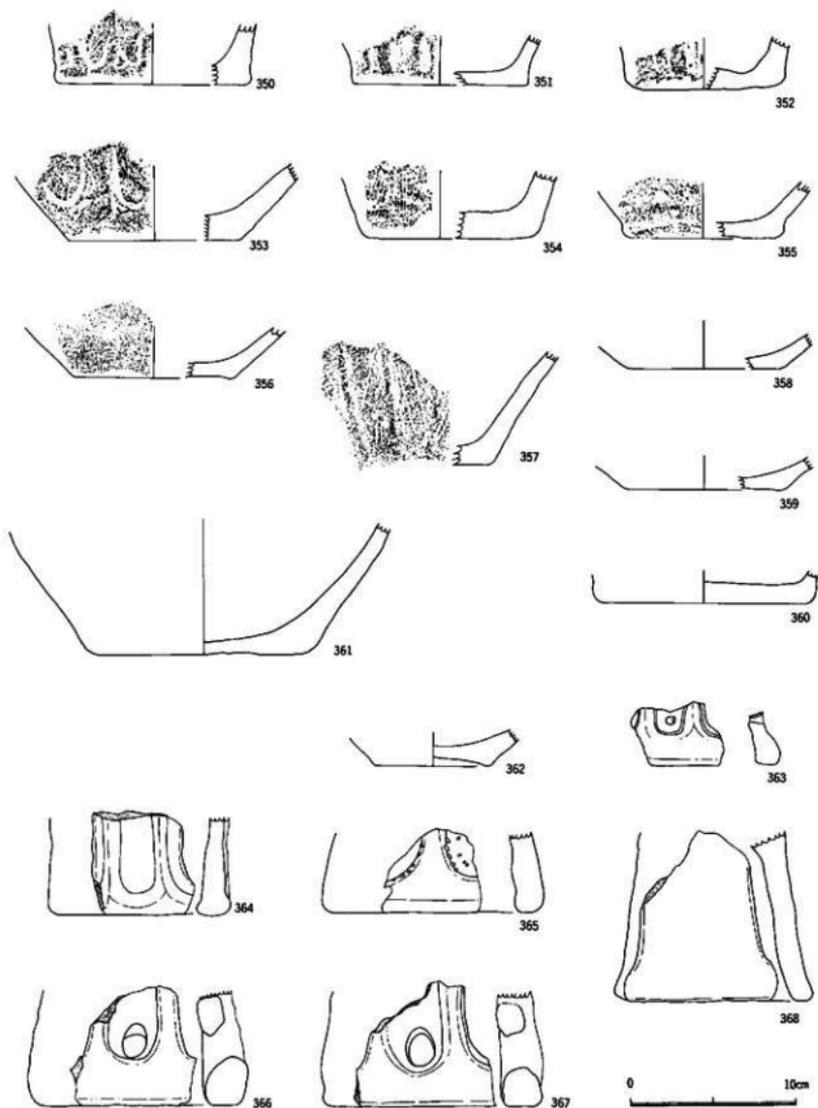
第51圖 包含層出土土器00 中期前期 3・4類



第52図 包倉層出土土器(12) 前期胴部5・6類、巻類



第53圖 包含層出土土器(3) 壺類・淺鉢・底部



第54図 包含層出土土器00 底部・脚部



第55図 包含層出土土器(9) 後期

## IV期 後期

(369) と (370) は口縁部に沈線区画をつくり、区画の間には渦文の退化した縦の沈線（蛇行沈線）のみられるもので、中期末葉から後期初頭と考えられる。(371)～(399)までは後期の土器で、このうち(371)～(394)までは、(378)と(383)を除いて磨消縄文の施された後期前葉の土器である。(371)～(383)は口縁部片で、(371)と(372)は平口縁、残りは波状口縁である。(375)・(376)・(377)は口縁部の文様帯が口縁端部までせり上がっており、(377)～(379)は波頂部上面に刺突が施されている。

(380)の波頂部前面には指頭状の刺突が施され、その下には沈線によるJ字文様がみられる。(381)の波頂部は内面に折り返され、両側面には棒状工具による穿孔がみられる。(382)の波頂部には、沈線の屈曲部に棒状工具による穿孔2個がみられる。(383)は外面および口唇部に縄文（撚り戻し）が施されている。(384)は双耳壺の把手の部分と考えられ、手前に突き出た部分の端面には、細い棒状工具による刺突が施されている。さらに把手部の根元の部分には上下に貫通する穿孔もみられる。

(385)は双耳壺的な壺類の肩の部分と考えられ、指頭による横位の沈線が引かれている。

(386)～(393)は磨消縄文の施された胴部片で、(391)にはJ字文もみられる。(393)には擬縄文が施されている。(394)は口縁部片で、肥厚した口縁部の端面に2本の沈線を引き、その中に擬縄文が施されている。(396)は頸部に強くびれをもつ深鉢で、波状口縁を呈し口唇部には沈線と刺突がみられ、波頂部には縦の沈線と刺突が施されている。頸部から胴部にかけては、沈線による横間区画の様子が施されている。(395)・(397)・(398)は縁帯文系の土器で、肥厚した口唇部には沈線による文様が施され、(395)と(397)の波頂部には(395)には2個、(397)には3個の刺突がみられる。

(397)の頸部には、波頂部より垂下する3本の沈線がみられる。(399)は頸部に連続する弧状文がみられ、後期中葉（元住吉山I）の土器である。(400)は無文精製土器である。

## V期 晩期

(401)～(404)は晩期の土器で、(401)～(403)は無文粗製土器である。(402)の内面には指頭による横位の沈線が1条引かれている。(404)は突帯文土器で、突帯上には指頭による刺突が施されている。口縁端部には平坦な面をもつ。



第56圖 包含層出土土器(8) 後期、晩期

## 第2節 石 器

### 1. 石器分類について

今回の発掘調査で出土した石器の総数は2050点である。石鏃39点、石錐8点、石匙6点、ピエス・エスキュー5点、石筥2点、スクレイパー20点、打製石斧42点、磨製石斧8点、RF44点、UF54点、未製品などで不明なもの29点、石核144点、剥片1315点、石錘179点、敲石・凹石・磨石52点、石皿2点、石剣1点である。石材は主にチャート1678点、サヌカイト4点、黒曜石3点、下呂石3点、凝灰岩6点、安山岩7点、砂岩182点、濃飛流紋岩129点、粘板岩38点である。黒曜石は京都大学原子炉実験所薬料哲男氏による蛍光X線分析法によりSK34出土のチップが霧ヶ峰産という分析結果を得ている。

#### 石鏃

製品の総数は30点で、他に石鏃と思われる未製品や脚部の折損が激しく分類不可能のものが9点である。石材はチャートが35点、下呂石が1点、サヌカイトが2点、黒曜石が1点で、手に入りやすいチャートが断然多いが、下呂石、サヌカイト、黒曜石といった搬入された石材のものも少数ながら存在する。

形態に関しては、基部に着目して次のように分類する。

- |    |  |        |
|----|--|--------|
| A類 | いわゆる無茎鏃で、基部に抉りのはいるもので<br>鏃身：抉り＝3：1を基準として抉りが深いもの。 | A……5点  |
| B類 | いわゆる無茎鏃で、基部に抉りのはいるもので<br>鏃身：抉り＝3：1を基準として抉りが浅いもの。 | B……21点 |
| C類 | いわゆる平基鏃で、基部が直線状をなすもの。                            | C……1点  |
| D類 | いわゆる平基鏃で、基部がわずかに凸状になるもの。                         | D……1点  |
| E類 | いわゆる有茎鏃で、基部に茎を持つもの。                              | E……2点  |
| F類 | 基部が折損しており上記の分類が不可能なもの。                           | F……4点  |
| G類 | 未製品の可能性が高いもの。                                    | G……5点  |

調整手順より調整の傾向について見てみる。

調整手順は基部を最初に調整する……………1

調整手順はぐりりと一周して調整する……………2

調整手順は基部を最後に調整する……………3

とすると表面は1が8点、2が9点、3が13点であり、表面は1が10点、2が7点、3が12点である。調整手順的には基部を最初や最後に調整するものが多いといえそうである。調整の表裏の先後関係は裏面に先に調整し表面を後に調整するものが多いということがいえる。すなわち主要剥離面から先に調整するものが多いと言える。また裏面には素材面の残るものが多い。形態から見るとほとんどがB類である。

## 石匙

縦型 縦長剥片の石匙

横型 横長剥片の石匙

## スクレイパー

素材の一部または全体に調整を施し刃部を作したのもの。

## 打製石斧

I類 短冊形

II類 撥形……紐かかり部がくびれ、基部が細くなる。

## RF

素材縁辺部の性状を利用して剥片に大小の剝離痕を連続して施す小形な剥片石器。

## UF

素材の鋭い縁辺に使用痕と思われる微細な剝離痕が不規則に連続し「刃こぼれ」状を呈するもの。

## 石核

形態については次のように分類する。

I類 原石もしくは節理等で分割された石塊を素材とする。打面・作業面固定タイプ。

II類 原石もしくは節理等で分割された石塊を素材とする。打面固定。作業面2枚。

III類 原石もしくは節理等で分割された石塊を素材とする。打面・作業面も固定しない。打面・作業面転移を繰り返すもの。

(分割面を作業面とする。)

IV類 剥片を素材とする。剥片の背面を打面に主要剝離面を作業面とする。打面調整みられる。

V類 剥片を素材とする。剥片の小口面を打面に、主要剝離面を作業面とする。

VI類 剥片を素材とする。剥片の背面と主要剝離面を打面としたり、作業面としたりする。

VII類 原石を素材とする。打面と作業面を交互に交換し、残核がチョッピングツール状を呈するもの。

第22表 石器組成表

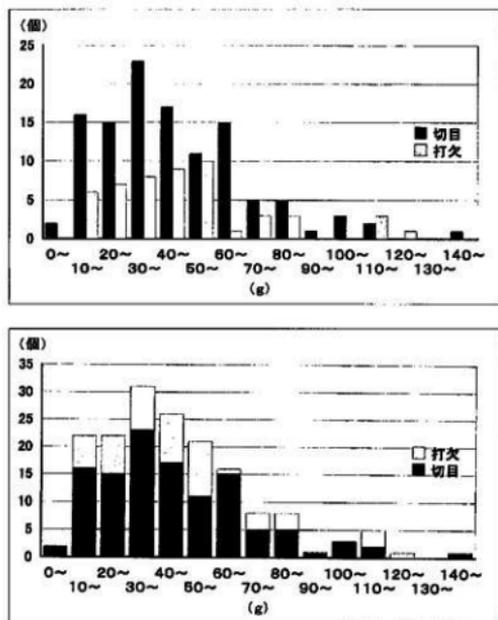
	石鏃	石鏃	石匙	ビース	石鏃	Sc	打斨	磨斨	RF	UF	未製品	石核	剥片	石鏃	鋸型	石皿	石剣	合計
チャート	35	8	6	3	1	20			44	154	28	144	1235					1678
サヌカイト	2			1	1													4
黒曜石	1			1									1	1				3
下呂石	1												2					3
凝灰岩								6										6
安山岩							4						2	1				7
砂岩							6	2			1		43	118	9	2	1	182
濃飛流紋岩							18						8	61	42			129
粘板岩							14						24					38
合計	39	8	6	5	2	20	42	8	44	154	29	144	1315	179	52	2	1	2050

※Scはスクレイパー

## 石錘

総数は179点で、打欠石錘が52点、切目石錘が122点、打欠と切目の両方が見られるのが5点である。石材はほとんどが砂岩と濃飛流紋岩である。両面に帯状痕が見られるものがほとんどである。縄が巻かれた部分はざらざらしており帯状痕以外の部分や側面は水流によって転がり磨れたり磨耗している痕跡があり帯状痕部と差があるものはすべて帯状痕有りとした。

重量分布は打欠石錘のみでは50gがピークであるが、切目石錘のみでは30gにピークがあり、10g～60gの間に分布の幅がある。また、打欠石錘と切目石錘を両方合わせても同じ様な分布になっている。



第73図 石錘重量分布図

## 敲石・凹石・磨石

形態に関しては次のように分類する。

- I類 敲打痕を持つもの。
- II類 敲打痕と凹（くぼみ）を持つもの。
- III類 敲打痕と磨面を持つもの。
- IV類 敲打痕と凹（くぼみ）と磨面を持つもの。

計測の詳細について。

石器文章中の右側縁、左側縁の左右は表面側から見たときの位置を示している。

石鏃	折損部位	先端部	3点
		片脚部先端	5点
		両脚部先端	1点
		基部	9点
		先端部+両脚部先端	9点
		先端部+片脚部先端	10点
		茎部+先端部+脚部	2点

素材面………主要剥離面

表裏後：先に調整した方の面を記入。

石鏃 擦り切り工程（切目）Ⅰ：円礫先端に対して垂直に1工程で。

Ⅱ：表裏両面から2工程で。

Ⅲ：表裏両中央部深くまで4工程。

石核 作業面数………剥離面数

打 角………ネガティブな打痕が残存する剥離痕に限って計測し、それらの平均値を示す。

RF・UF・剝片 加撃方向 a：背面と腹面の剥離方向が同一。

b：背面と腹面の剥離方向が正反対。

c：背面に腹面の剥離方向と直行する剥離痕を持つ。

d：背面の全面が礫面からなるもの。

e：斜交

端 部 a：フェザーエンド

b：蝶番剥離

c：節理面

d：2次加工、刃こぼれ

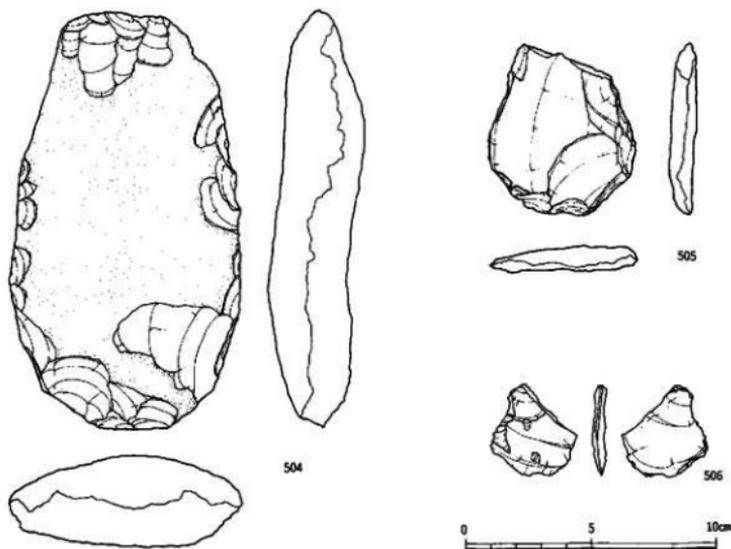
e：礫面

f：折損

## 2. 遺構出土石器 (第57図)

## (1) 第2号埋設土器 (SZ2)

(504、505)の2点の打製石斧が出土している。504の石材は濃飛流紋岩でやや外湾する短冊形の川原石をそのまま利用して刃部と側面と基部に調整を施すのみで、自然面を両面に大きく残している。505の石材は粘板岩で両面ボジ面である。厚さが薄く小型な打製石斧である。基部が折損している。刃部はかなりつぶれて摩耗している。(506)はフレイクで1点出土している。石材はチャートで両面ボジ面である。



第57図 第2号埋設土器出土石器

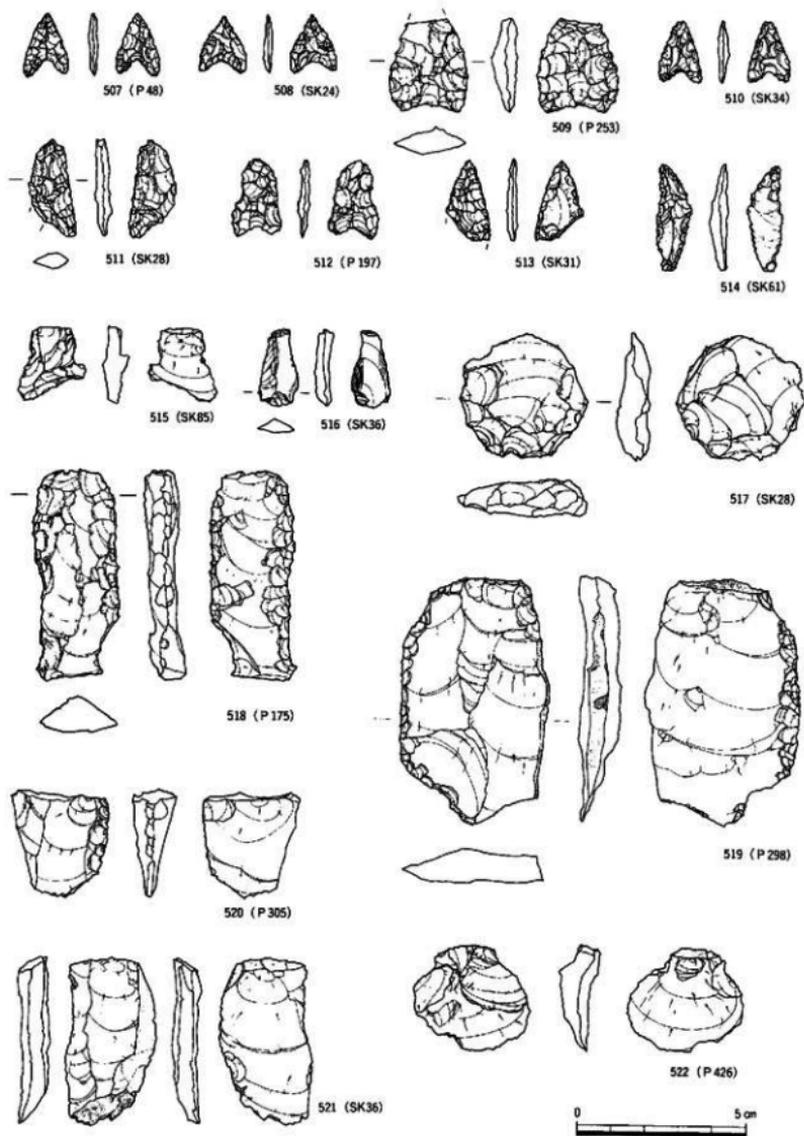
## (2) 土坑・ピット出土石器 (第58～61図)

## 石鏃 (507～513)

510は石材が下呂石でその他はすべてチャートである。511は左脚部、509は先端部が折損している。A類が1点、B類が5点、F類が1点である。両面がボジ面になり高い部分が中央部に残るような調整の仕方をしている。B類には側縁が外湾するもの(508・509)、直線(510・511)、内湾(512)がある。

## 石鏃 (514)

514はSK61より出土している。石材がチャートで胴部中央が膨らむやや不整形な木葉形をしている。裏面に主要剥離面を残し表面と裏面では調整の剥離の大きさと位置が違う。表面の剥離は裏面より大きく全周縁におよぶが、裏面は先端部と基部にのみ小さく調整が見える。断面は三角形をしている。



第58図 土坑・ピット出土石器(1) 石鏃、石匙、ピエス、スクレイパー、RF、UF

## 石匙 (515)

515は石匙のつまみ部で袂り部から基部にかけてか折損している。石材はチャートで打点部がつまみ部になっている。

516は石材が黒曜石で分析はしていないが和田峠産の様な雰囲気である。上部に打痕が有り下部がつぶれていたためピエスと判断した。SK36より出土している。

## スクレイパー (517~519)

517石材はチャートでボジ面の膨らみを刃部に利用するために大きめの剥片を作った後、刃部にする位置で裏面から剥離を行い製品により大きさにしている。SK28より出土している。518は石材がチャートで打点を上部に残し、自然面を下部に残し、表面に節理面を残している。裏面はボジ面で表面は大きく2枚の剥離で断面の厚みを減らすような感じになっている。刃部は両側縁にあり両面に細かく調整が施されている。刃部は両刃になっており調整の主流は表面は右側縁、裏面は右側縁で主な調整の裏側は細かい調整のみが行われている。P175より出土している。519は石材がチャートで表面がネガ面、裏面がボジ面で、打点の方向は同じで打面が残っている。刃部は左側縁にのみ残り、右側縁は刃部を調整中かもしくは使用中に節理面ではがれたものと思われる。P298より出土している。

## RF (520)

石材はチャートで打点の方向は同じで表面がネガ面、裏面がボジ面である。刃部は右側縁にのみ有りネガ面にのみ調整を施し片刃である。

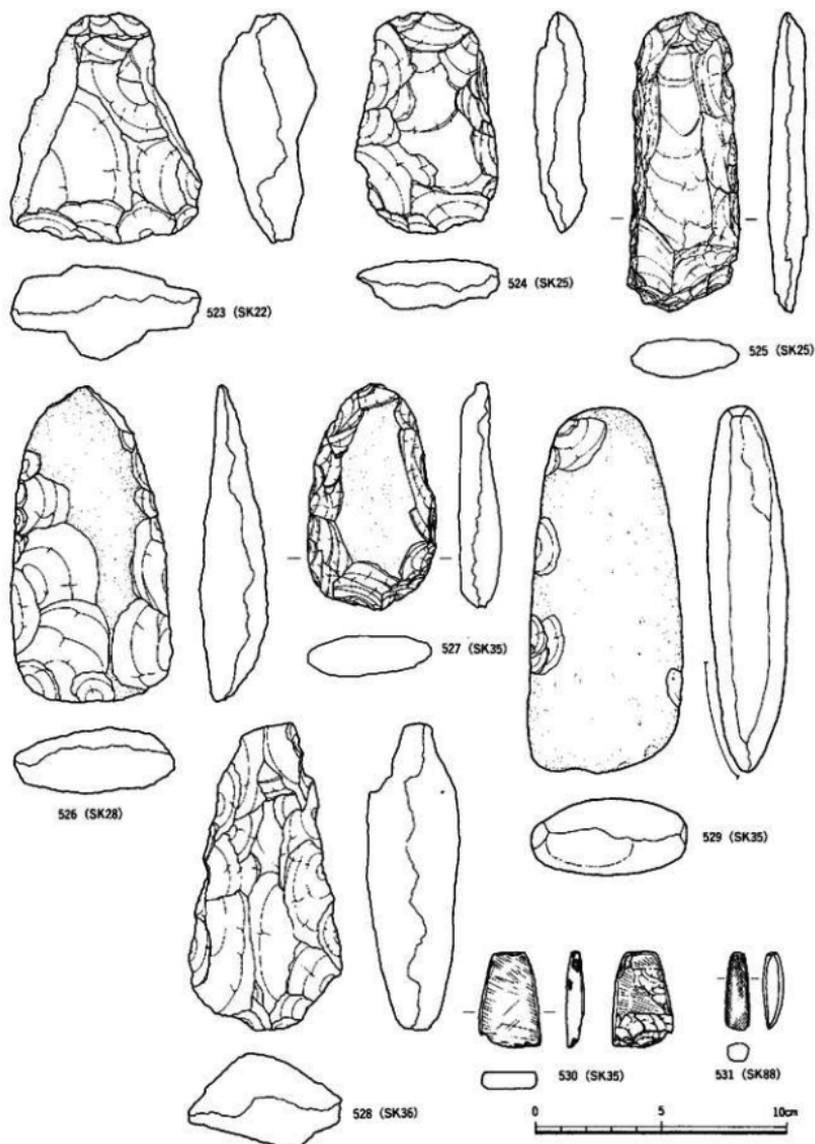
## UF (521, 522)

521の石材はチャートで表面がネガ面、裏面がボジ面で表面には自然面が残っている。使用による微剥離痕は打面以外にすべてある。522の石材はチャートで打面と打撃の方向が同じ剥片で両面がボジ面である。端部が薄くなっている部分を利用した使用痕と思われる微剥離痕がある。端部に一部ノッチのようなくぼみがある。

## 打製石斧 (523~528)

523はSK22から出土している。石材は安山岩で撥形をしている。両刃で刃部の調整は両面とも右から左へ一方方向に行われている。表面と裏面では剥離の方向は異なるが刃部側に打点があり基部は分厚い剥片の端部側になる。全体的に荒削りな調整であるが基部のくびれや基端部の細さの調整も行われている。紐がかかったと思われるくびれ部が一番厚みを持つ。表面がネガ面で左側面に礫面を残している。裏面はボジ面である。

524, 525はSK25から出土している。524の石材は安山岩で打点の方向が同一の両面ボジ面の剥片から作られている。撥形をしている。刃は片刃で表面側の調整がされており裏面側はつぶれている。右側縁はくびれ部のみ調整が行われており礫面が残っている。打点側が基部になり紐かけ部が一番厚みを持つ。525は粘板岩で短冊形をしている。両面ボジ面で打点の方向は斜行し打点側が基部になっている。打点側は剥離調整が施されており薄くなっている。刃は両刃で裏面側がつぶれている。全体的に調整が細かく行われている。一番厚みがあるのは刃部の上部である。



第59回 土坑・ピット出土石器(2) 打製石斧、磨製石斧

526はSK28から出土している。濃飛流紋岩で基端部側が細くなる撥形をしている。表面側がほぼ平坦な礫面で裏面はボジ面である。打点の方向は右側縁のほぼ中央のあたりになる。調整の多くは表面側で基部側以外の全縁に刃の調整が行われている。表面側は基部側に多く礫面が残っており裏面は素材面がほとんどになる。打点側にあたる刃部側上部が一番厚くなっている。

527はSK35から出土している。安山岩で基端部側が細くなる撥形をしている。表面側がほぼ平坦な礫面で裏面はボジ面である。打点の方向は左側縁の刃部のあたりになる。調整は両面の全縁に調整が行われており基部側は使用痕がない。摩耗痕は両面の刃部側にあるが裏面側がより摩耗が激しくなっている。表面側は中央に多く礫面が残り裏面側に素材面が残る。打点側にあたる刃部側が一番厚くなっており、大きい剥離で調整がされている。

528はSK36から出土している。濃飛流紋岩で基端部側が細くなる撥形をしている。基端部が裏面の打点方向で打面の礫面が残っている。表面側がネガ面で裏面はボジ面である。調整は両面の全縁に調整が行われており、くびれ部に大きい剥離が施されている。使用痕は刃部側にある。裏面側に素材面が残る。打点側にあたる紐かかり部が一番厚くなっている。全体的に粗く大きい剥離調整が施されている。

#### 磨製石斧 (529、530)

529、530はSK35から出土している。529は砂岩で定角式をしている。片刃横斧で平面形は丸みがあり左端部側が出ている感じになり、出ているところを使用しているために欠けたと思われる。他には基端部側で表面は左側、裏面でも左側が欠けている。表面側の刃部側、全体では下1/3が摩耗している。530は凝灰岩で定角式をしており刃部裏面側が破損している。基部側に敲打痕が数カ所ある。

#### ミニチュア磨製石斧 (531)

531はSK88より出土しており全面に細かい研磨が行われている。石材はチャートと凝灰岩の中間のような感じである。片刃で裏面の刃部側がつぶれており、使用しているように思われる。

#### 石核 (532～537)

532がI類でSK98より出土、533・534がII類で533がP123より出土、534がP463より出土、535がIII類でSK17より出土、536・537類がVI類で536がP175より出土、537がSK79より出土している。すべて石材はチャートである。

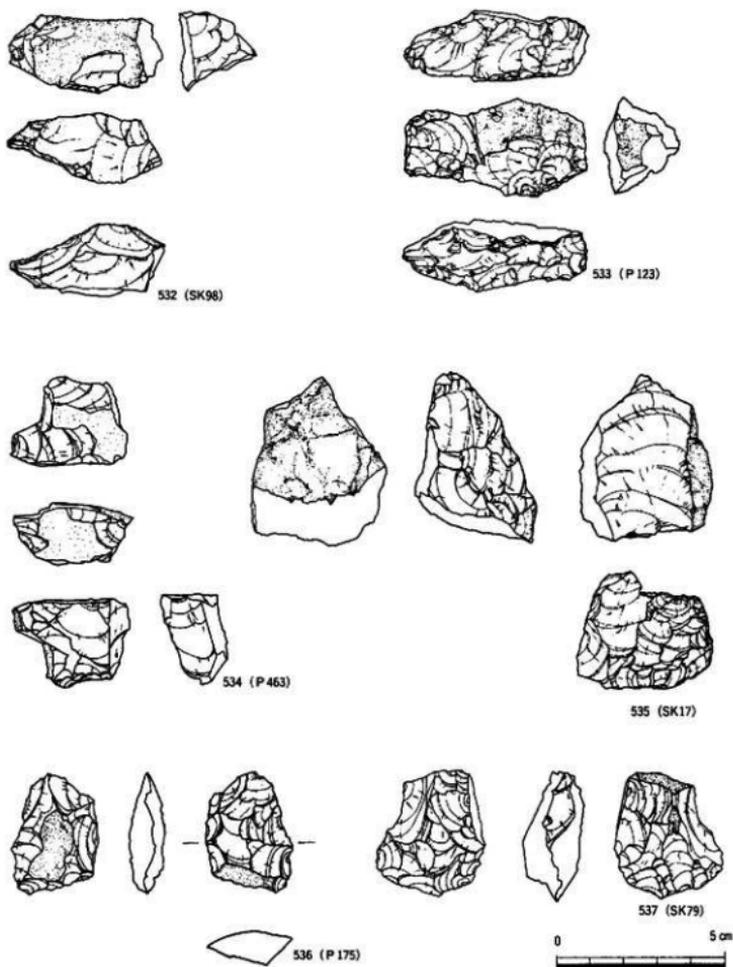
#### 石錘 (538～550)

538～544はSK79より出土している。7個ともすべて石材が砂岩で種類はすべて切目石錘である。重量が10g～40g台で全体的に小型のものでそろっている。円形のものが5点、縦長のものが2点である。539と541が欠損している。図版では重量の軽いものから重いものへという順に並べてある。

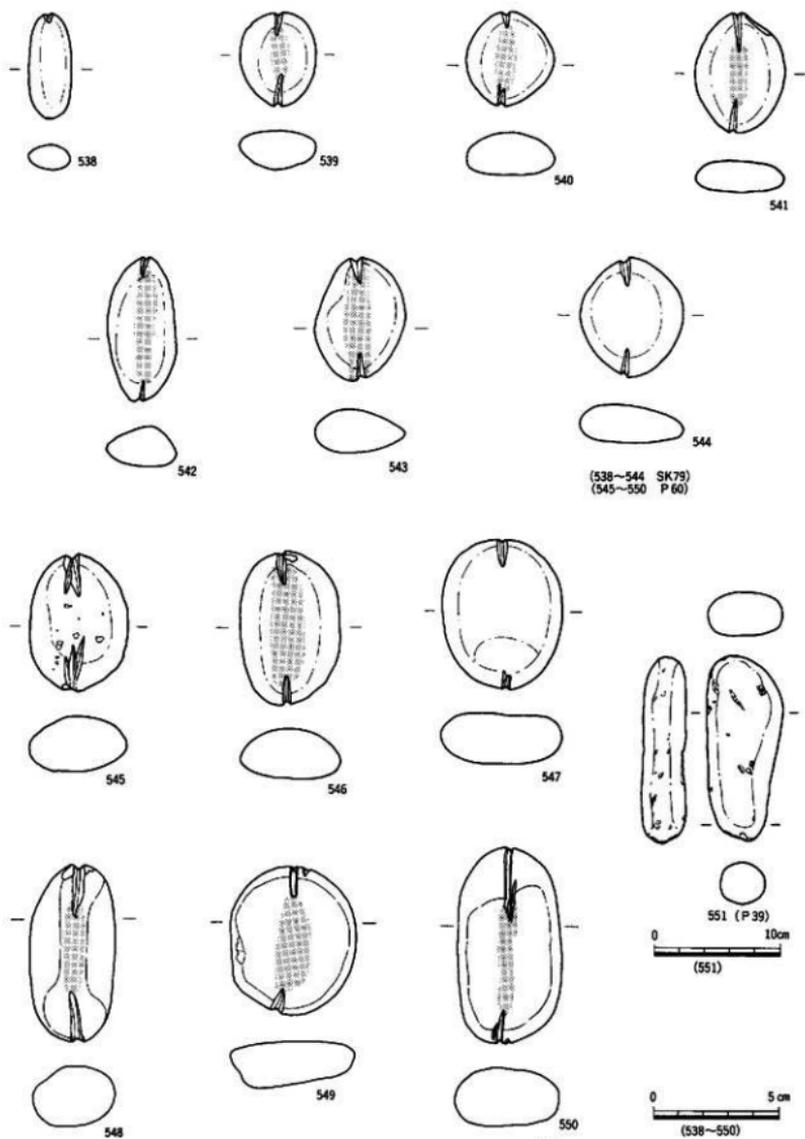
545～550はP60より出土している。6個とも切目石錘である。2点が濃飛流紋岩で、4点が砂岩である。60g～110g台でSK79と比べても全体的に大型のものでそろっている。図版では重量の軽いものから重いものへという順に並べてある。

#### 敲石 (551)

P39より出土している。石材は濃飛流紋岩で一点が集中して敲きによりくぼんでいる。比熱のためか赤くなっている。



第60図 土坑・ピット出土石器(3) 石核



第61図 土坑・ピット出土石器(4) 石鏢、敲石

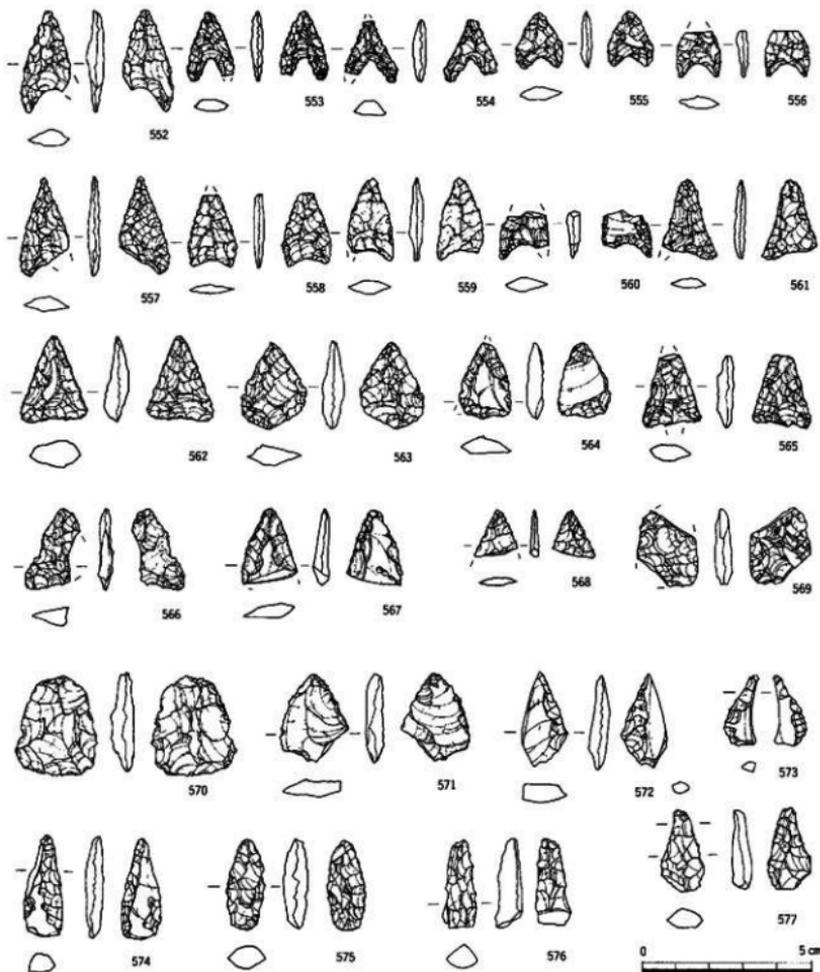
## (3) 包含層出土石器 (第62~72図)

石鏃 (552~568)

A類は552~554、B類は555~561、C類は562、D類は563、E類は564・565、F類は566~568、G類は569~573である。石材のほとんどはチャートであるが、それ以外の石材は559のサヌカイト、560の黒曜石、568の下呂石がある。欠損部のあるものがほとんどである。

石錐 (574~577)

石材はすべてチャートで、胴部中央が基部近くで膨らむやや不整形な木葉形をしている。錐部横断面形状が三角形のもの2点と菱形のもの2点である。



第62図 包含層出土石器(1) 石鏃、未製品、石錐

## 石匙 (578~582)

578・579は縦形石匙、580は斜形石匙、581は横形石匙の未製品、582は石匙のつまみ部のみで石材はすべてチャートである。

578は表面ネガ面、裏面ポジ面で打点方向は斜行しており剥片端部には自然面を残す。打点側バルブ付近につまみ部がある。両刃で刃部は裏面側が両側縁とも摩耗しており、刃部平面形状は外湾している。579は表面ネガ面、裏面ポジ面で打点方向は同じで打点側バルブ付近につまみ部がある。左側縁上部は両刃だがその他は片刃になっている。刃部の平面形状は左側縁が外湾しており右側縁が内湾している。

580は両面ネガ面の横長剥片を使用して剥片端部を左側縁にしている。つまみ部には自然面を残している。両刃であるが左側縁は裏面側、右側縁は表面側に大きい調整を行っている。刃部平面形状は左側縁が外湾、右側縁が直線である。

581は打点が同一方向の横長剥片を利用して剥片端部を左側縁にしている。つまみ部作成途中で左側縁を折損し刃部調整を断念したようである。表面側剥片端部に自然面を残している。

582はつまみ部のみで他は折損している。

## 石篋 (583・584)

583は石材はサスカイトで打点が同一方向の表面ネガ面裏面ポジ面の縦長剥片で打面が残っている。刃部は左側縁は欠損して分らないが下部と右側縁は片刃で下部は摩耗している。刃部平面形状は外湾状をしており刃部側面形状はジグザグしている。この1点は他のものに比べ時期が古く早期にさかのぼるのではないと思われる。

584はチャートで両面ポジ面で打点方向は直行している横長剥片である。全体的に細かい調整のみが施されている。両側縁は両刃で表面側は右側縁裏面側は左側縁がやや反対面より大きめの調整が施されている。下部は表面側にのみ調整を施している。刃部平面形状は左側縁が直線状で他は外湾状をしており、刃部側面形状はすべてほぼ直線状をしている。

## スクレイパー (585)

585はチャートで打点が同一方向で表面がネガ面裏面がポジ面の横長剥片で剥片の端部に稜面を残している。実測図は刃部を下にして書いている。剥片の打点部を上にしてみると左側縁の表面側に大きな調整を施し、刃部平面形状はほぼ直線状で刃部側面形状はジグザグしている。また、下部の表面側に小さな調整がまばらにあり、刃部平面形状、刃部側面形状ともに直線状をしている。

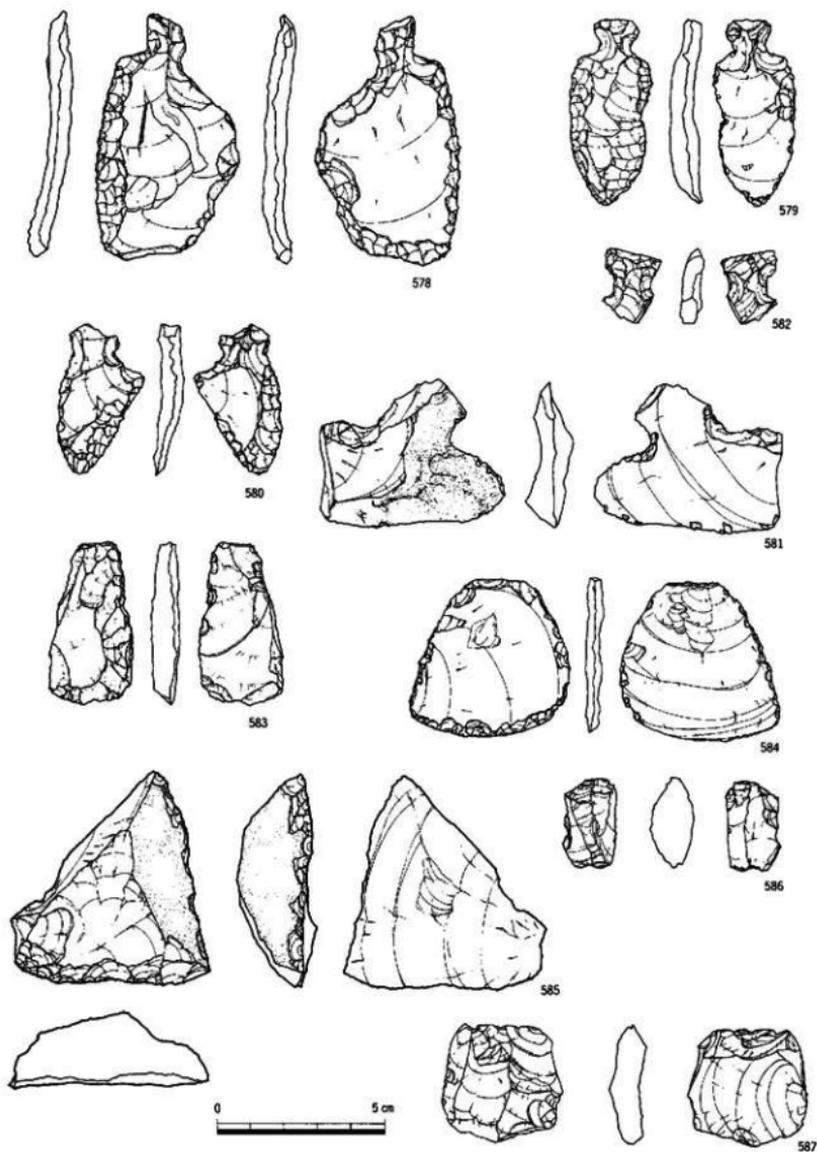
## ピエス・エスキーユ (586、587)

586は石材がチャートで両端部がつぶれており両端を加撃に使用している。

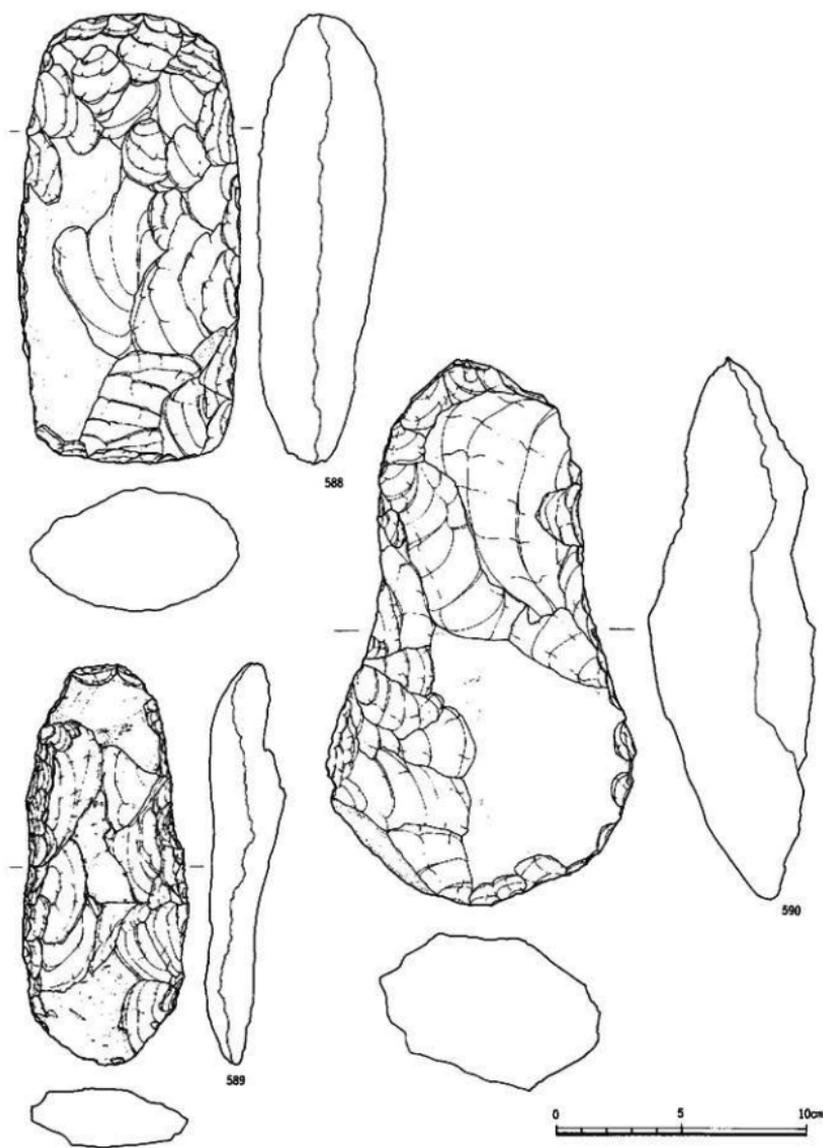
587は石材が安山岩でおそらくほとんどすべての方向(4方向)を加撃に使用しているのではないと思われる。586に比べ厚みが薄く剥片状にしか残っていない。

## 打製石斧 (588~590)

588、589は短冊形で形状的には588は下部が直線状589は尖頭形をしている。590は楕円で形状的には尖頭形をしている。588は石材が流紋岩でやや扁平な縦長の川原石をそのまま使用しており重量感がある。調整は基部、刃部、側縁の周縁部にのみ施され両面に自然面を残している。刃部は両刃で平面形状は直刃、刃部側面形状はジグザグで断面は三角形をしている。589は石材が砂岩で打点が表面側からみる



第63図 包含層出土石器(2) 石匙、スクレイパー、ピエス・エスキュー



第64図 包含層出土石器(3) 打製石斧

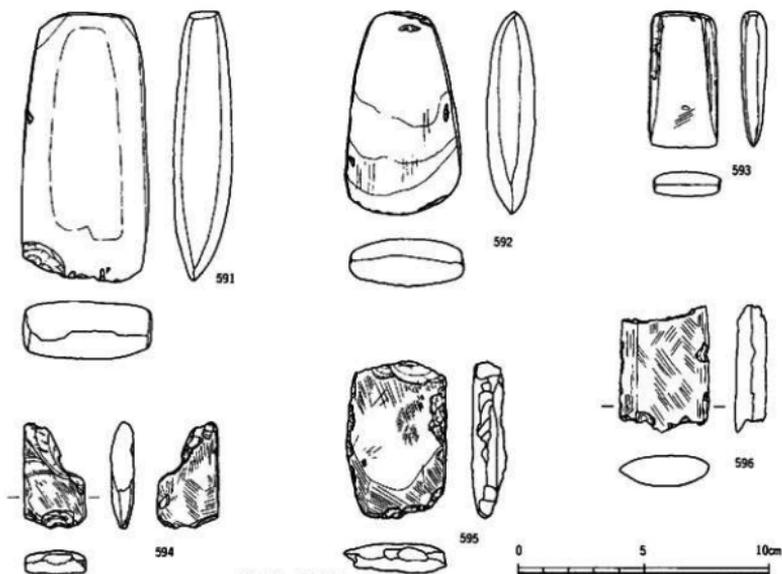
と左側縁基部よりで横長剥片を素材にしている。裏面はボシ面で表面は礫面で調整が入っているところ以外はすべて礫面が残っている。主に使用した刃部は両側縁で下部の刃は調整がほとんどなく使用による刃こぼれ状の使用痕と表面の礫面側に摩耗痕がある。両側縁の刃は両刃で大きく剥離調整した後さらに細かく調整した刃部になっている。刃部平面形は左側縁がほぼ直線状右側縁が中央部がやや突出した円刃で、刃部側縁形は左側縁が直線状、右側縁がジグザグ状になっている。刃部断面形はかまぼこ形をしている。590は石材が砂岩で重量のある川原石を利用しており、表面からみると左側縁くびれ部付近が打点の横長剥片で表面に礫面を残している。刃部とくびれ部を作るための調整は細かく行っておらず表面側に少しあるのみである。刃部が使用のためかつぶれている。片刃の円刃である。

#### 磨製石斧 (591~595)

591は石材が石英の入る凝灰岩で断面が樽形の定角式をしている。両刃で偏刃で裏面側が主に使用による減りがあり表面側は一部欠けている。592は溶結凝灰岩、593は砂岩で断面が樽形の定角式をしている。基部はつぶれており、両刃で直線刃で、特に裏面全体が摩耗し欠けている。593は小形である。594、595は摩斧破損品の再利用である。594はチャートと凝灰岩の中間の石材をしており、刃部の破損したところをさらに利用してつぶれていたり、折損したところを刃部として利用したりしている。595は凝灰岩で断面から見ると裏面側1/3ほどの欠損により磨製の面は一面残るのみで、剥片状になり鋭くなったところを利用して表面側に調整を施し4側縁に刃部を作っている。

#### 石剣 (596)

石材は砂岩で上部と下部が破損しており両側縁がつぶれている。断面はレンズ状に近いがより磨いであるほうがやや直線に近い断面になっている。



第65図 包含層出土石器(4) 磨製石斧、石剣

## 石核接合資料 (597~599)

石材はチャートで597はII類の石核、598、599はフレイクである。手に入るぐらゐの角礫に近い素材を半分にしたのが3点の接合を完了した大きくなる。半分に割った後のネガ面を打面にして5片ほど剥片をつくっており接合資料はそのうちの2片である。

## 石核 (600~606)

600はI類、601はII類、602・603はIII類、604はIV類、605はV類、606はVII類である。石材はすべてチャートである。残核としては603が一番大きく重量もあるがほとんどが手で持てるぐらゐの大きさのようである。

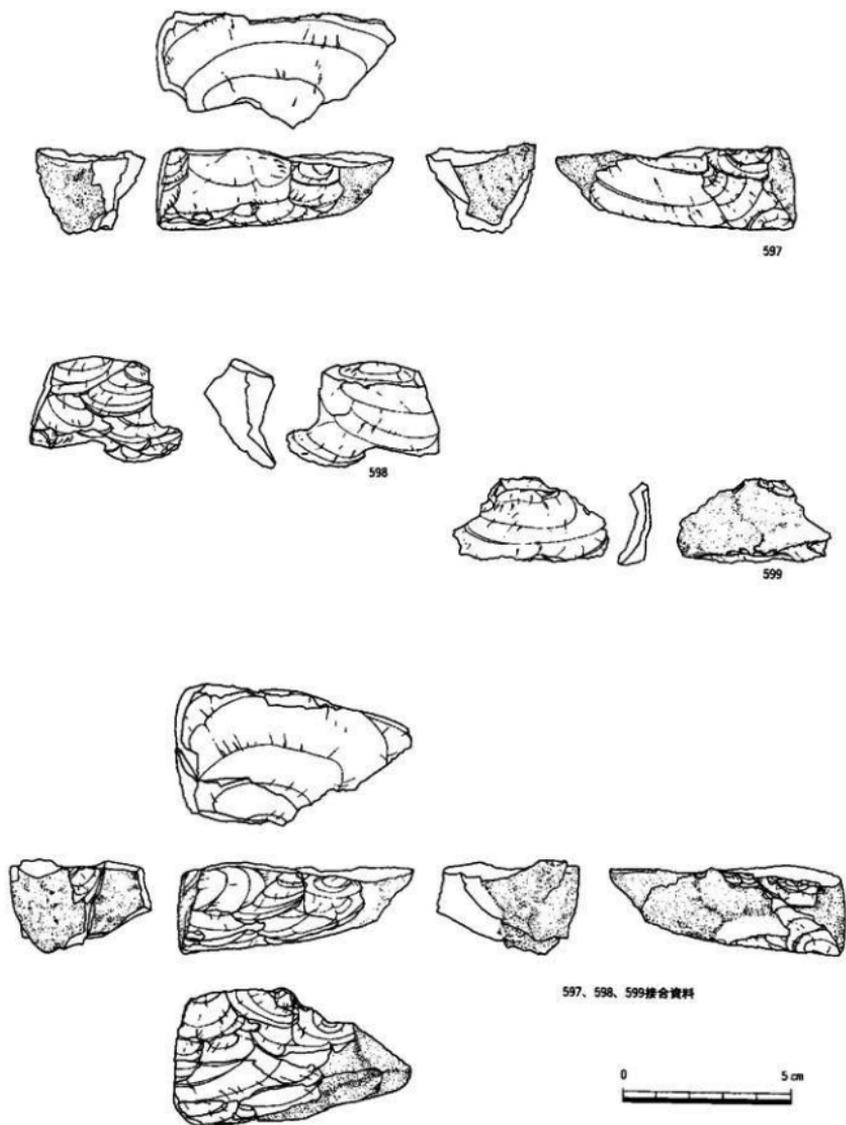
## 敲石・凹石・磨石 (637~641)

637は砂岩で平面形が扁平楕円形をしており全側縁に敲打痕を持ち平坦面に磨り痕を持つC類に分類した。特に表面側の平坦面中央部はよく使われている。638は濃飛流紋岩で稜線のある直角礫を利用して稜の部分に敲打痕がある。A類に分類した。639は安山岩質で平面形が扁平な細長い楕円形をしており敲打痕と凹を持ちB類に分類した。平坦面に右上がりに凹痕が2段になって両面にある。また側縁にも敲打痕があり、特に上部と下部に敲打痕が集中してある。握り方が数通りあったようである。640は砂岩で扁平な楕円形をしており敲打痕、凹、磨り痕を持ちD類に分類した。敲打痕は全側縁にあり凹は両平坦面にあるが特に磨りが多い面側には1ヶ所のみあり磨りが少ない面には2ヶ所にある。一部欠損している。641は砂岩で円形をしており、D類に分類した。両平坦面に磨り痕があり凹痕は両平坦面に1ヶ所ずつあり、敲打痕の多くは側縁部に集中している。側縁部の敲打痕の中にはかなり集中していて凹痕に近い部分もある。

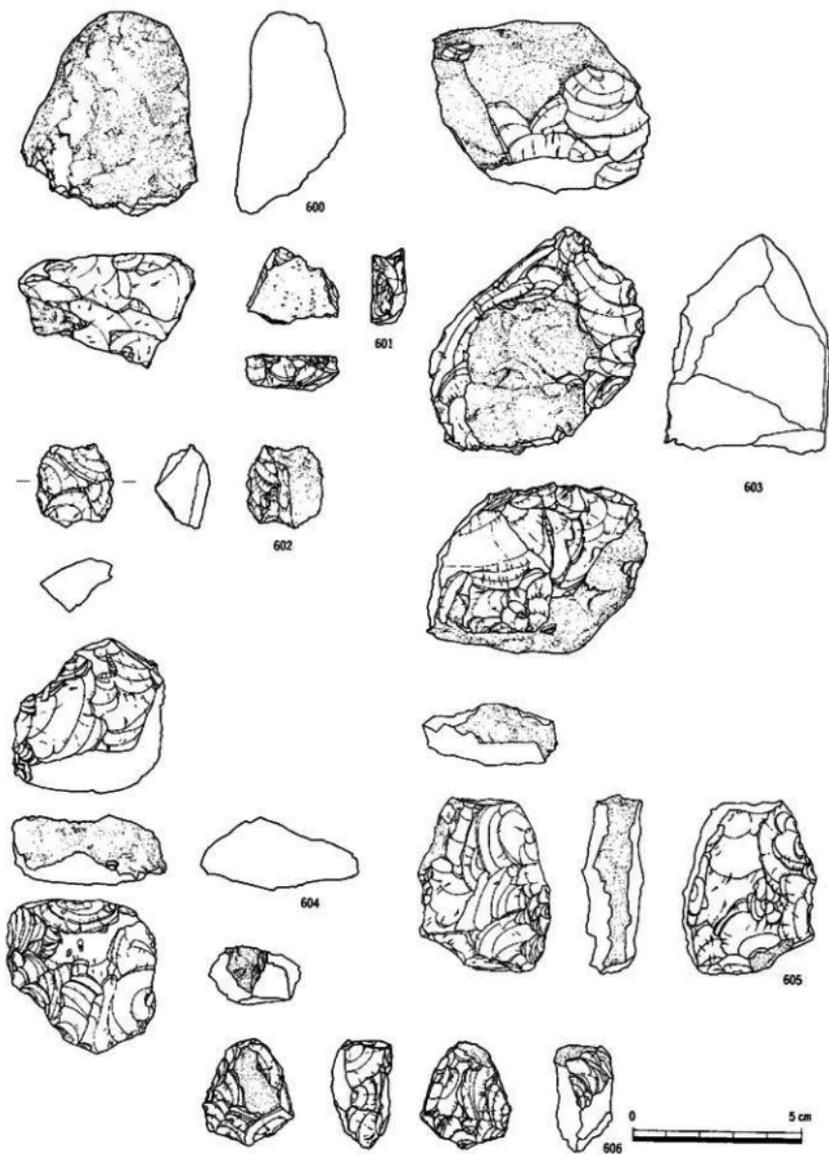
## 石皿 (642、643)

642の石材は砂岩で左右の側縁が反り上がり中央部が自然に凹んだ比較的扁平な川原石をそのまま利用しており、中央部の凹み部を使用している。大型で据え置き式と思われる。

643の石材は砂岩で薄い扁平な川原石を利用している。両面に磨り痕が有り、両面に比熱によると思われる真ん中からリングがまわる割れがある。上面・下面とも比熱割れのとなりに磨り痕があり、比熱割れは厚みのある部分にあり、磨痕は厚みが薄いところにある。時期差をおいて両面使用した可能性もある。



第66圖 包含層出土石器(5) 石核(1)



第67圖 包含層出土石器(6) 石核(2)



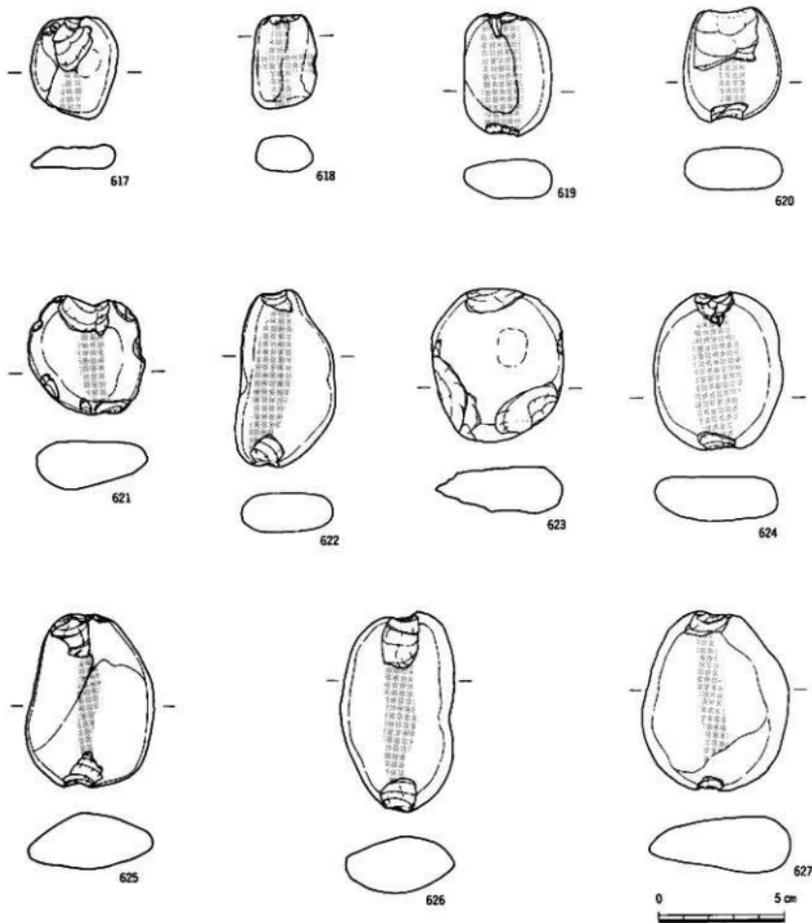
第68図 包含層出土石器(7) RF、UF

## RF (607~615)

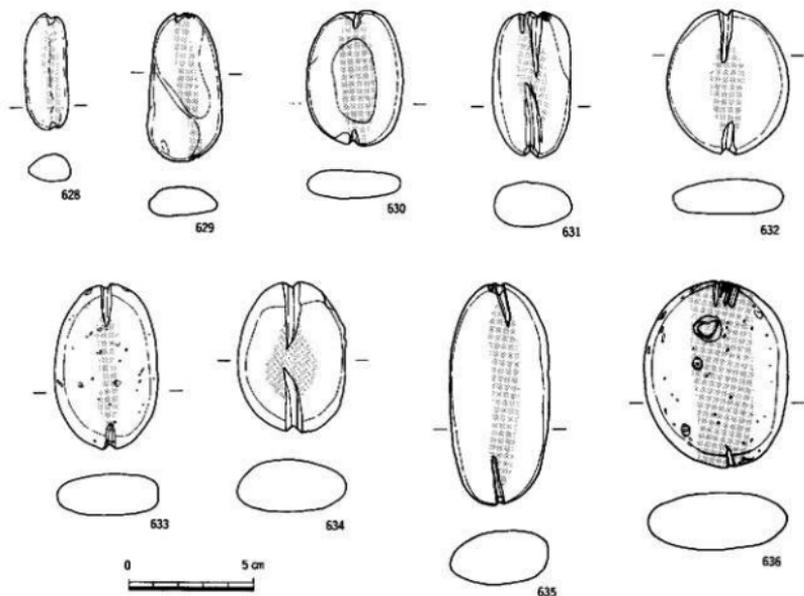
607・608・609・613は細かい調整を施し未製品と思われるもの、610は片面に自然面を残したフレイクを使用しているもの、611・612・615は片面ネガ面片面ポジ面の大きい剥離面に細かい調整を施すもの、614は打点部の分厚い部分を刃部にするものである。折損しているもの607・609・613・614、打面を残すもの610・611・612である。石材はすべてチャートである。

## UF (616)

616は石材がチャートで表面がネガ面裏面がポジ面の剥片を利用しており両側縁に使用による剥離がみられる。



第69圖 包含層出土石器(8) 打次石錘



第70図 包含層出土石器(9) 切目石錘

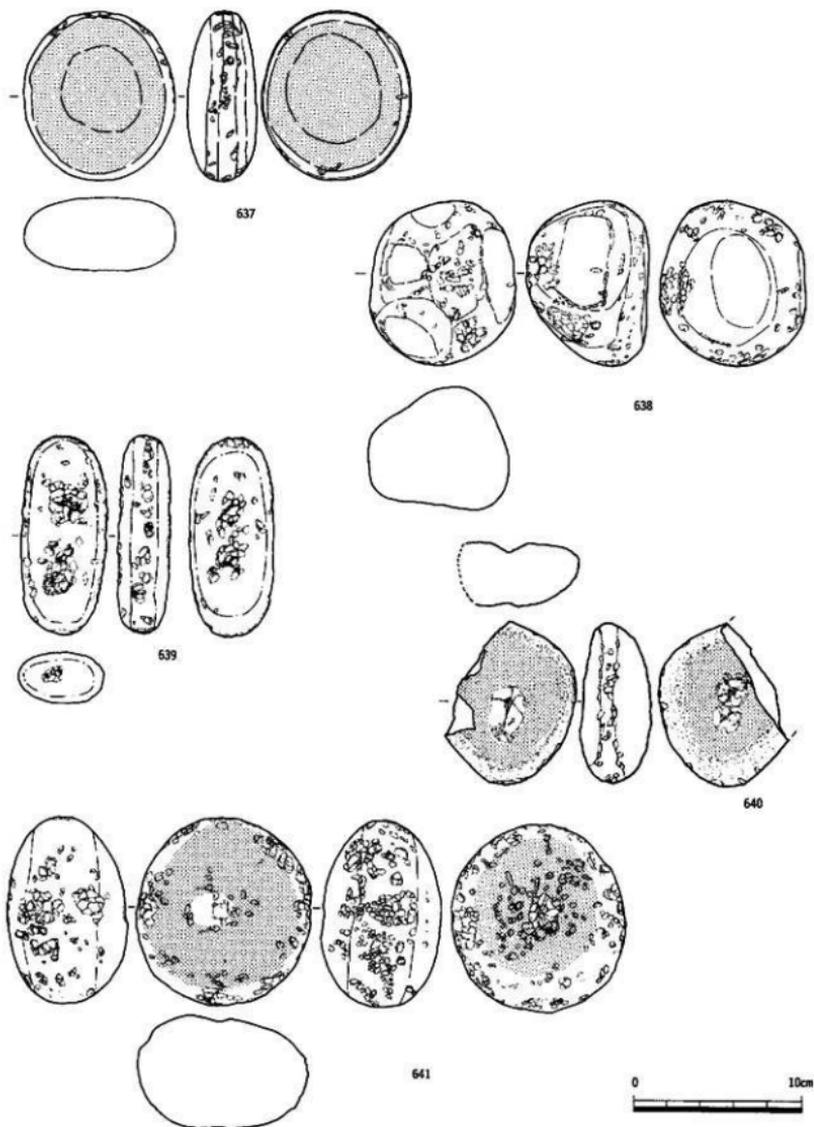
## 打欠石錘 (617~627)

石材は618・619・625が砂岩でその他は濃飛流紋岩である。図版は10g台~100g台と120g台の順番に並べてある。比較的扁平な粒子の粗い川原石を利用している。

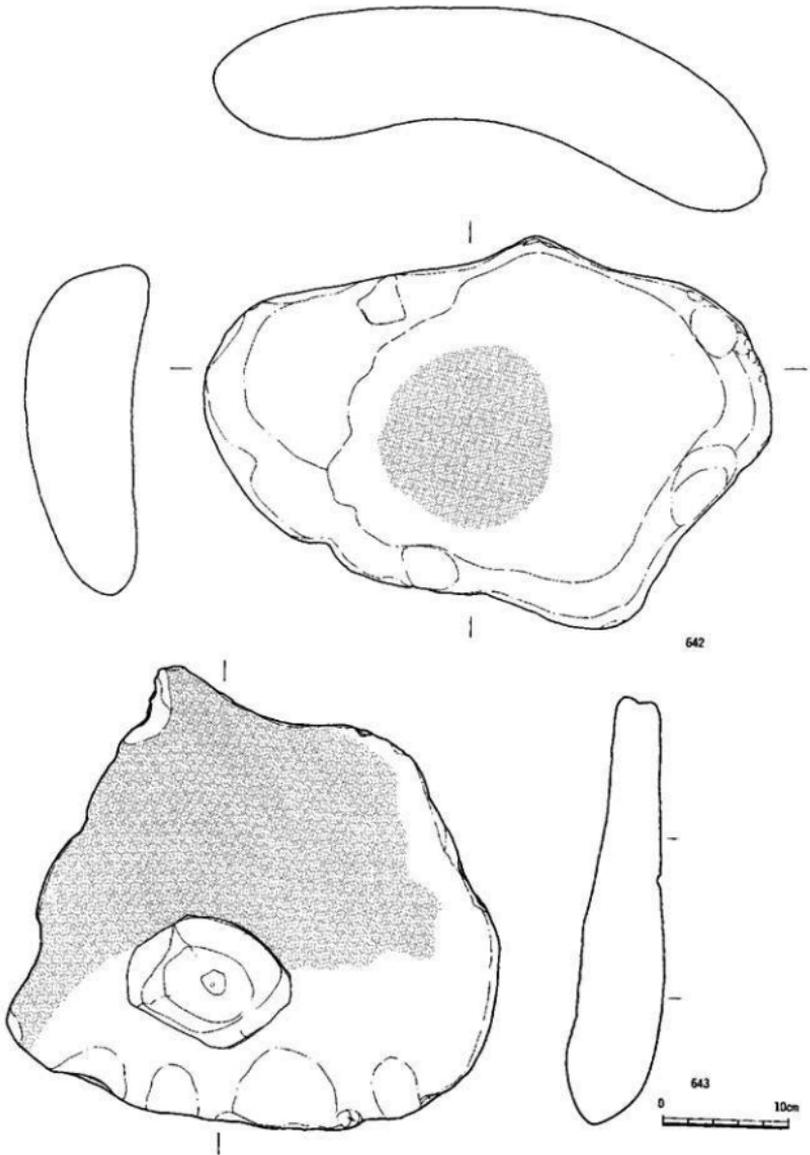
## 切目石錘 (628~636)

石材は633・634・636が濃飛流紋岩で、その他が砂岩である。図版は10g台~70g台と100g台と140g台の順番に並べてある。打欠石錘に比べ小形で縦に長い粒子の細かい形の整った川原石が目立つ。631~636の重い方は切り目が長く軽い方は短い。

(第2節 安田(大知)正枝)



第71圖 包含層出土石器⑩ 敲石・凹石・磨石



第72圖 包含層出土石器00 石皿

第7表 石器計測表(1) 石鏃

番号	出土位置	部位	名	村	最大幅(mm)	長さ(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	器内番号	所属番号	全長	刃長	幅位	柄	器表	器底	器厚	器底厚	器底平	器底平	器底平	備	考
1	23K	II	石鏃	石	13.5	24.8	0.41	1.2	569	破損品	全長			無	本刃	44			1	2	真鍮製		
2	11H	II	石鏃	石	14.9	29.8	0.39	1.3	557	破損品			片断部	無	外刃	41			2	2	真	丁部	
3	16F	II	石鏃	石	14.4	22.4	0.29	0.9	558	破損品			片断部	無	外刃	39			1	2	真	阿方部破損	
4	15C	II	石鏃	石	12.4	33.5	0.4	0.7	560	破損品			無	無	内刃	37			2	1	真		
5	15S	II	石鏃	石	12.4	33.5	0.4	0.7	560	破損品			無	無	内刃	37			2	1	真		
6	23K	II	石鏃	石	14.4	16.5	0.48	0.6	561	破損品			無	無	内刃	37			2	1	真	細部の穴多き点あり	
7	16E	II	石鏃	石	16.3	12.9	0.4	0.8	562	破損品			無	無	内刃	44			2	1	真	細部の穴多き点あり	
8	14I	II	石鏃	石	16.4	23.3	0.3	0.9	563	破損品			無	無	内刃	49			2	1	真	細部の穴多き点あり	
9	13P	II	石鏃	石	13.6	16.7	0.41	0.5	555	破損品			無	無	内刃	47			2	1	真		
10	13E	II	石鏃	石	13.6	16.7	0.41	0.5	555	破損品			無	無	内刃	47			2	1	真		
11	12E	II	石鏃	石	13.2	18.6	0.34	1.3	564	破損品			無	無	内刃	55			3	1	真	器底に細部が欠損	
12	12E	II	石鏃	石	13.2	18.6	0.34	1.3	564	破損品			無	無	内刃	55			3	1	真	器底に細部が欠損	
13	24H	II	石鏃	石	17.3	17.3	0.29	0.5	565	破損品			無	無	外刃	64			3	1	真	工利細部が欠損	
14	22I	II	石鏃	石	16.2	15.4	0.39	1.1	558	破損品			無	無	外刃	58			1	2	真	半利部を欠損	
15	19E	II	石鏃	石	13.9	15.4	0.46	0.9	559	破損品			無	無	外刃	53			3	3	真	半利部を欠損	
16	22E	II	石鏃	石	11.2	18.4	0.36	0.3	560	破損品			無	無	外刃	45			2	3	真	半利部を欠損	
17	22E	II	石鏃	石	11.2	18.4	0.36	0.3	560	破損品			無	無	外刃	45			2	3	真	半利部を欠損	
18	17G	II	石鏃	石	23.3	28.3	0.7	4.3	509	破損品			無	無	外刃	46			2	1	真	穴あり	
19	5K34	II	石鏃	石	12.4	18.1	0.33	0.5	510	破損品			無	無	外刃	48			1	2	真	細部が欠損	
20	5K34	II	石鏃	石	13.6	17.3	0.24	0.5	508	破損品			無	無	外刃	60			1	2	真	細部が欠損	
21	5K38	II	石鏃	石	14.1	28.6	0.44	1.8	511	破損品			無	無	外刃	52			2	3	真	細部が欠損	
22	1717	II	石鏃	石	14.7	25.1	0.29	0.9	512	破損品			無	無	外刃	59			2	3	真	細部が欠損	
23	1717	II	石鏃	石	14.7	25.1	0.29	0.9	512	破損品			無	無	外刃	59			2	3	真	細部が欠損	
24	24B	II	石鏃	石	13.1	18.6	0.27	0.6	507	破損品			無	無	外刃	50			3	3	真	半利部が欠損	
25	14G	II	石鏃	石	14.4	20.4	0.4	0.8	553	破損品			無	無	外刃	50			3	3	真	半利部が欠損	
26	18E	II	石鏃	石	14.9	20.4	0.57	1.7	552	破損品			無	無	外刃	42			1	3	真	丁部	
27	12F	II	石鏃	石	17.5	0.38	0.6	0.6	566	破損品			無	無	外刃	79			3	3	真	先利部が欠損	
28	10E	II	石鏃	石	13.7	0.32	0.4	0.8	567	破損品			無	無	外刃	61			3	1	真	先利部が欠損	
29	18E	II	石鏃	石	15.8	28.6	0.25	2.8	561	破損品			無	無	外刃	53			3	3	真	先利部が欠損	
30	18E	II	石鏃	石	15.8	28.6	0.25	2.8	561	破損品			無	無	外刃	53			3	3	真	先利部が欠損	
31	21P	IV	石鏃	石	15.3	11.1	0.3	0.6	568	破損品			無	無	外刃	74			3	2	真	先利部が欠損	
32	21P	IV	石鏃	石	15.3	11.1	0.3	0.6	568	破損品			無	無	外刃	74			3	2	真	先利部が欠損	
33	18E	II	石鏃	石	19.3	26.5	0.64	2.5	663	破損品			無	無	外刃	66			1	2	真	先利部が欠損	
34	21G	I	石鏃	石	15.6	22.6	0.3	1.6	564	破損品			無	無	外刃	57			3	3	真	先利部が欠損	
35	5K33	II	石鏃	石	16.8	21.5	0.41	1.5	665	破損品			無	無	外刃	57			3	3	真	先利部が欠損	
36	17H	II	石鏃	石	13.8	22.6	0.27	0.7	513	破損品			無	無	外刃	71			3	3	真	先利部が欠損	
37	21E	II	石鏃	石	14.5	28.3	0.3	2.8	562	破損品			無	無	外刃	71			3	3	真	先利部が欠損	
38	17E	II	石鏃	石	14.5	28.3	0.3	2.8	562	破損品			無	無	外刃	71			3	3	真	先利部が欠損	
39	18E	II	石鏃	石	21.3	27.7	0.79	4.2	570	破損品			無	無	外刃	71			3	3	真	先利部が欠損	
40	17G	II	石鏃	石	15.2	22.9	0.52	2.1	571	破損品			無	無	外刃	68			3	3	真	先利部が欠損	
41	22P	II	石鏃	石	17	22.5	0.6	2.2	572	破損品			無	無	外刃	68			3	3	真	先利部が欠損	
42	17E	II	石鏃	石	14.2	20.3	0.35	1.1	569	破損品			無	無	外刃	62			3	3	真	先利部が欠損	
43	17E	II	石鏃	石	14.2	20.3	0.35	1.1	569	破損品			無	無	外刃	62			3	3	真	先利部が欠損	
44	17E	II	石鏃	石	14.2	20.3	0.35	1.1	569	破損品			無	無	外刃	62			3	3	真	先利部が欠損	
45	5K27	II	石鏃	石	20.2	25.9	0.4	2.4	567	破損品			無	無	外刃	68			3	3	真	先利部が欠損	
46	17F	II	石鏃	石	18.5	23.7	0.52	11.7	569	破損品			無	無	外刃	93			3	3	真	先利部が欠損	
47	5K56	II	石鏃	石	18	23.3	0.28	1.9	669	破損品			無	無	外刃	93			3	3	真	先利部が欠損	
48	17H	II	石鏃	石	18	33.6	0.8	2.5	573	破損品			無	無	外刃	57			3	3	真	先利部が欠損	
49	17H	II	石鏃	石	19.3	16.2	0.47	1.1	568	破損品			無	無	外刃	57			3	3	真	先利部が欠損	
50	5K7	II	石鏃	石	12.5	15.6	0.36	0.4	566	破損品			無	無	外刃	53			3	3	真	先利部が欠損	
51	13D	II	石鏃	石	11	15.3	0.34	0.3	563	破損品			無	無	外刃	78			3	3	真	先利部が欠損	
52	13K	II	石鏃	石	0.72	13.4	0.4	0.3	564	破損品			無	無	外刃	50			3	3	真	先利部が欠損	
53	17H	II	石鏃	石	13.6	26.5	0.36	2	572	破損品			無	無	外刃	50			3	3	真	先利部が欠損	
54	10I	II	石鏃	石	12	21.3	0.23	0.4	573	破損品			無	無	外刃	50			3	3	真	先利部が欠損	

第8表 石器計測表(2) 石盤

番号	出土地点	層位	石 材	最大幅(mm)	長さ(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	種別番号	種別名	厚さ(mm)	重量(g)	備 考
1	275c	II	チャート(Ⅰ)	10	29.8	0.83	2.1	576	破片	破片	不明	21 破片
2	275c	II	チャート(Ⅰ)	12.8	25	0.98	1.8	577	破片	破片	不明	26 破片
3	41D	II	チャート(Ⅰ)	11.2	21.2	0.54	1.9	574	破片	破片	不明	49 破片
4	275c	II	チャート(Ⅰ)	11.2	21.2	0.54	1.9	575	破片	破片	不明	49 破片
5	275c	II	チャート(Ⅰ)	9.5	19.4	0.43	0.8	573	破片	破片	不明	47 破片
6	SK51	I	チャート(Ⅰ)	0.88	92	0.3	1.6	514	破片	破片	不明	56 破片
7	PK55	I	チャート(Ⅰ)	0.89	19.1	0.4	0.6	514	破片	破片	不明	56 破片
8	23D	IV	チャート(Ⅰ)	0.9	20.8	0.43	0.6	514	破片	破片	不明	56 破片

第9表 石器計測表(3) 石匙

番号	出土地点	層位	石 材	最大幅(mm)	長さ(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	種別番号	種別名	厚さ(mm)	重量(g)	備 考
1	18D	II	チャート(Ⅰ)	42.9	75	0.79	25.02	578	破片	破片	不明	21 破片
2	3F	II	チャート(Ⅰ)	34.4	56.2	0.91	12.3	579	破片	破片	不明	26 破片
3	18c	II	チャート(Ⅰ)	55.6	83.4	10.6	23.6	581	破片	破片	不明	47 破片
4	21C	III	チャート(Ⅰ)	24	45.6	0.7	7.8	580	破片	破片	不明	56 破片
5	SK55	II	チャート(Ⅰ)	21.3	22.3	0.60	1.3	513	破片	破片	不明	56 破片
6	23K	II	チャート(Ⅰ)	19.4	20.4	0.5	1.3	582	破片	破片	不明	56 破片

第10表 石器計測表(4) 石盤

番号	出土地点	層位	石 材	最大幅(mm)	長さ(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	種別番号	種別名	厚さ(mm)	重量(g)	備 考
1	19F	II	チャート(Ⅰ)	48.5	47.8	0.43	15.1	584	破片	破片	不明	56 破片
2	25F	II	チャート(Ⅰ)	25.2	49.2	0.32	12.7	583	破片	破片	不明	56 破片

第11表 石器計測表(5) スクレイパー

番号	出土地点	層位	石 材	最大幅(mm)	長さ(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	種別番号	種別名	厚さ(mm)	重量(g)	備 考
1	PK58	I	チャート(Ⅰ)	45	72.8	17.2	36.8	519	破片	破片	不明	56 破片
2	PK75	I	チャート(Ⅰ)	25.5	63.4	11	18.9	518	破片	破片	不明	56 破片
3	SK75	I	チャート(Ⅰ)	37.4	36.6	0.97	13.4	517	破片	破片	不明	56 破片
4	14E	II	チャート(Ⅰ)	30.2	18.4	0.68	4.7	565	破片	破片	不明	56 破片
5	PK98	I	チャート(Ⅰ)	30	21	0.72	4.3	570	破片	破片	不明	56 破片
6	21E	II	チャート(Ⅰ)	23.1	27.4	0.52	3.3	585	破片	破片	不明	56 破片
7	SK58	I	チャート(Ⅰ)	23	11.4	0.4	0.9	586	破片	破片	不明	56 破片
8	SK58	I	チャート(Ⅰ)	22.7	11.9	0.84	4.3	587	破片	破片	不明	56 破片
9	PK78	I	チャート(Ⅰ)	25.6	30.2	12.6	12.4	588	破片	破片	不明	56 破片
10	PK78	I	チャート(Ⅰ)	25.6	30.2	12.6	12.4	589	破片	破片	不明	56 破片
11	PK78	I	チャート(Ⅰ)	25.6	30.2	12.6	12.4	590	破片	破片	不明	56 破片
12	PK78	I	チャート(Ⅰ)	25.6	30.2	12.6	12.4	591	破片	破片	不明	56 破片
13	20F	II	チャート(Ⅰ)	27.8	24.6	0.68	5.7	589	破片	破片	不明	56 破片
14	20F	II	チャート(Ⅰ)	27.8	24.6	0.68	5.7	590	破片	破片	不明	56 破片
15	12C	II	チャート(Ⅰ)	42.4	33.6	15.5	19.9	592	破片	破片	不明	56 破片
16	19C	III	チャート(Ⅰ)	30	37.6	11	15.2	593	破片	破片	不明	56 破片
17	19H	II	チャート(Ⅰ)	54	46.5	32.6	61.5	594	破片	破片	不明	56 破片
18	23F	II	チャート(Ⅰ)	58	64.4	27.6	70.4	585	破片	破片	不明	56 破片
19	10E	II	チャート(Ⅰ)	21.4	15.2	0.62	1.8	586	破片	破片	不明	56 破片
20	20E	II	チャート(Ⅰ)	12.4	17.2	0.35	2.3	587	破片	破片	不明	56 破片

表 13-1 石鏡計測案(7) 打撃石表

番号	出上地点	測定石	材質	長さ(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	秤量器(g)	秤量器(%)	形状	断面形状	穴挿部	寸法(mm)	業材	打撃内	使用	場所	考
1	22E	IV	濃赤凝灰岩	183	90.4	43	1150	568		放射	I	放射	79.1	円筒	79	方型凝灰岩		
2	14K	II	砂岩	89.3	84.4	41.8	670			破損	I	放射	84	短長角片	84	方型凝灰岩		
3	13K	II	砂岩	89.3	56.6	26.2	171.8			破損	I	放射	55.5	短長角片	81	方型凝灰岩		
4	16J	II	砂岩	73.9	59.2	29.3	174.1			破損	I	放射	53.8	短長角片	87	方型凝灰岩		
5	17E	II	砂岩	91.5	72.5	25	151.8			破損	I	放射	72.3	短長角片	48	放射状凝灰岩		
6	SK25	II	砂岩	89.7	57.6	18.6	120.9	524		放射	I	放射	52.2	短長角片	86	放射状凝灰岩		
7	SK28	II	砂岩	123.2	48	11	80.1			放射	I	放射	48.1	短長角片	74	放射状凝灰岩		
8	SK25	II	砂岩	120.1	45	14.7	95	525		放射	I	放射	43.7	短長角片	68	放射状凝灰岩		
9	20F	II	砂岩	77	49.8	15.3	89.2			放射	I	放射	48.2	短長角片	67	放射状凝灰岩		
10	16G	II	砂岩	104.3	45.9	14	98			放射	I	放射	40	短長角片	77	放射状凝灰岩		
11	16E	II	砂岩	98.3	42.8	17.8	102.6			放射	I	放射	43.2	短長角片	56	放射状凝灰岩		
12	SK64	II	濃赤凝灰岩	98.4	47.7	17.3	92.7	604		放射	I	放射	61.8	短長角片	78	放射状凝灰岩		
13	SK64	II	濃赤凝灰岩	170	93	32.2	600			放射	I	放射	93.2	短長角片	65	放射状凝灰岩		
14	14G	II	安山岩	158	65.3	29.8	337.8	589		放射	I	放射	61.8	短長角片	80	放射状凝灰岩		
15	15D	II	砂岩	168	80.7	30.2	519.4			放射	I	放射	74.2	短長角片	80	放射状凝灰岩		
16	16J	II	砂岩	121.9	77	28.5	345.8			放射	I	放射	42.4	短長角片	80	放射状凝灰岩		
17	SK31	II	砂岩	76.8	44	10.9	44			放射	I	放射	58.9	短長角片	80	放射状凝灰岩		
18	24H	II	濃赤凝灰岩	99.9	65.6	31	231.5			放射	I	放射	66.7	短長角片	53	放射状凝灰岩		
19	P175	II	砂岩	96.2	58.2	16.6	64			放射	I	放射	50	短長角片	81	放射状凝灰岩		
20	16I	II	砂岩	120.9	69.5	30.4	271.3			放射	I	放射	38.1	短長角片	92	放射状凝灰岩		
21	23K	II	砂岩	86.7	53	26.9	135.8			放射	I	放射	53	短長角片	52	放射状凝灰岩		
22	13H	II	砂岩	63.7	54.8	16.7	68			放射	I	放射	46.8	短長角片	69	放射状凝灰岩		
23	23K	II	砂岩	99.3	40.2	18.6	94.2			放射	I	放射	44.2	短長角片	75	放射状凝灰岩		
24	13G	II	砂岩	134.9	54.3	0.43	45.3			放射	I	放射	115	短長角片	50	放射状凝灰岩		
25	21E	II	砂岩	66.8	48.3	10.7	41.2			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
26	20D	II	砂岩	83.6	46.8	0.94	58.1			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
27	16I	II	砂岩	79.5	45.8	0.82	36			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
28	14J	II	砂岩	221	115	67	1300	590		放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
29	SK28	II	砂岩	123.4	64.4	26.3	242.1	596		放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
30	SK36	II	砂岩	122.8	61.6	37.4	273.1	528		放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
31	17E	II	砂岩	114.7	60.7	25.2	184			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
32	20H	II	砂岩	102.2	76	20	154.8			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
33	SK16	II	砂岩	107.4	76.3	20	166.1			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
34	17I	II	砂岩	127.8	64.4	12	111			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
35	SK35	II	安山岩	90	51.2	15.5	95	527		放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
36	11C	II	砂岩	69.8	58.6	13.7	62.8			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
37	SK36	II	砂岩	96	46.2	15.4	79.5			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
38	SK22	II	安山岩	92.3	76.5	37.9	234.1	423		放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
39	SK22	II	安山岩	101	59	0.93	43.8	505		放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
40	14I	II	砂岩	101.7	60.6	18.8	135.8			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
41	SK28	II	砂岩	80.6	77	23.8	395.8			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		
42	18J	II	濃赤凝灰岩	93	73.8	21.7	175.4			放射	I	放射	64	短長角片	50	放射状凝灰岩		

第16表 石器計測表① 石核

番号	出上地点	層位	石 材	全長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	検出番号	分類	作業面数	打角	原 形	打 面	備 考
1	SK22	II	チャート	10.7	28.2	23.3	8.3		II	7	83	角礫	面設	
2	18G	II	チャート	30.8	60.8	53.5	110.4	600	I	3	73	亜円礫	上設	
3	SK98		チャート	20.1	45.9	23	20	532	I	5	111	不明	面設	打面側面
4	P175		チャート	13.5	48.7	34.8	25.8		I	5	69	円礫	上設	
5	14II		チャート	70.1	33.3	23.4	54.4	597	II	6	69	亜円礫	面設	打面側面有り、集合資料
6	P123		チャート	53.4	29.6	20.4	29.1	533	II	6	55	亜円礫	面設	打面側面有り
7	13F	II	チャート	25.5	21.9	10.2	7.6	601	II	8	74	角礫	面設	打面側面有り
8	P463		チャート	34.4	17.7	26	16.7	534	II	5	105	不明	面設	
9	14J	II	チャート	75.8	51.7	58.8	229.9	603	III	8	92	角礫	面設	打面側面
10	14D		チャート	25.2	22.6	15.4	7.1	602	III	5	109	亜円礫	面設	
11	SK17		チャート	47.7	39.8	34.8	66.7	535	III	7	94	亜円礫	面設	
12	SK57		チャート	55.5	29.1	25.9	41.1		III	5	116	角礫	面設	打面側面
13	10E	II	チャート	32.4	26.9	16.6	16.3	606	VII	8	不明	不明	面設	
14	19D	II	チャート	29.3	24.6	40.6	32.3		VII	14	93	不明	面設	
15	18F	II	チャート	46.8	46.2	19.5	45.9	604	IV	4	115	亜円礫	上設	打面側面、礫面有り
16	SK88		チャート	51.2	31.9	14.9	28		IV	5	107	不明	面設	
17	SK22		チャート	42.1	35.1	16	19.7		IV	3	124	不明	上設	打面側面側面
18	SK24		チャート	57.3	28.2	23	24.8		IV	5	107	亜円礫	上設	背面側面
19	P298		チャート	47.8	31.2	11.4	13.5		V	10		亜円礫	面設	
20	SK4		チャート	52.7	36.8	20.4	33.3		IV	4	101	亜円礫	上設	腹面側面
21	P120		チャート	38.4	24.5	15	12.6		IV	7	102	不明	上設	腹面側面
22	SK34		チャート	45.3	26.8	13.4	16.3		IV	5	106	亜円礫	上設	腹面側面
23	SK4		チャート	46.9	30.3	16.9	20.3		IV	4	109	不明	上設	
24	SK58		チャート	24.2	21.4	12.6	7.5		IV	4		不明	上設	
25	P16		チャート	26.9	23.9	0.97	7.3		VI	4	94	不明	面設	腹面打面側面
26	13F	IV	チャート	54.4	38.4	17.2	42.3	605	V	6	97	亜円礫	面設	
27	SK29		チャート	45.3	29.6	16.7	24.9		V	5	51	不明		
28	SK79		チャート	38.3	31.5	16.6	18.4	537	VI	7	90	不明		
29	P175		チャート	36.6	25.8	10.3	8.8	536	VI	9		不明		
30	SK35		チャート	56.3	52.4	23.8	81		VI	5	77	不明		
31	SK22		チャート	54.8	48.5	12.8	34		V	13		不明	面設	
32	SK73		チャート	49.6	29.3	11.8	16.1		V	7	81	不明		
33	SK36		チャート	40.3	27.4	12	10.5		VI	4	114	不明		
34	SK38		チャート	40.5	21.2	12.9	8.3		VI	6		不明		
35	SK48		チャート	37.8	11.8	12.4	7.4		VI	5	76	不明		



38	狛士	チャート	39.8	31	0.84	9.7	616	UF	点状	a	f	両面	両側縁	縦長割片
39	22J	チャート	68.7	37.2	0.88	21	615	RF	縦面	a		背面	両側縁	縦長割片
40	23G	チャート	42.5	43.6	11.8	24.8	611	RF	作業面	78	d	両面	下部部	縦長割片
41	17G	チャート	46.7	32.8	12.6	18.2	612	RF	縦面	a	a	両面	両側縁	縦長割片
42	19D	チャート	30.9	28	13.7	13.1	607	RF	縦面	a	d	両面	下部部	縦長割片
43	24H	チャート	29.6	26.4	0.88	7.4	614	RF	除去	c	d	両面	下部部	縦長割片
44	19E	チャート	25.2	28.1	0.81	5.6	613	RF	除去	b	d	両面	下部部	縦長割片
45	19H	チャート	37.1	16.8	0.99	13.5	610	RF	茶材面	82	f	両面	下部部	縦長割片
46	21K	チャート	23.6	19.9	0.63	3.3	609	RF	折痕	a	f	両面	両側縁	縦長割片
47	14E	チャート	36.7	18.5	0.83	6	608	RF	除去	d	d	両面	両側縁	縦長割片

第12表 石器計測表(6) ビース・エスキュー

番号	出土地点	層位	石材	全長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	測定番号	熟成率	分類	刃	厚	断面形状	欠損部	刃幅(mm)	素材	刃角度	使用	底	備考
1	15F	II	チャート赤	34.6	0.98	13.5	6.3			I	片刃丸刃	彎形		58	内縁	71	扁平打痕		長方形	
2	18F	II	チャート	36	35.3	0.88	12.5			I	片刃丸刃	彎形		46.7		63	万部打痕		彎曲	
3	11D	II	チャート	26.8	16	17.4	5.1			I	片刃丸刃	彎形	裏面少々	46.2	内縁	80	裏面打痕		五角形	
4	16E	II	チャート	25.3	18	0.89	4.2			I	片刃丸刃	彎形		26.3	内縁	53	両面打痕有り		五角形	
5	SK36	II	黒曜石	22.9	11.4	0.39	0.8			I	両刃	彎形	裏面	68		68	斜交打痕		三角形	

第14表 石器計測表(8) 磨製石斧

番号	出土地点	層位	石材	全長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	測定番号	熟成率	分類	刃	厚	断面形状	欠損部	刃幅(mm)	素材	刃角度	使用	底	備考
1	SK35	II	燧灰岩	150.2	31.2	429.8	529			I	片刃丸刃	彎形		58	内縁	71	扁平打痕			
2	19F	II	燧灰岩	106.7	51.3	251.8	591			I	片刃丸刃	彎形		46.7		63	万部打痕		裏面	
3	22E	II	燧灰岩	81.8	46.4	113	592			I	両刃丸刃	彎形		46.2	内縁	80	裏面打痕		裏面	
4	13D	I	砂岩	56.5	27.2	0.97	29.1			I	両刃丸刃	彎形		26.3	内縁	53	両面打痕有り		裏面	
5	17C	III	燧灰岩	64.4	40.3	52	395			I	両刃丸刃	彎形		68		68	斜交打痕		裏面	
6	21G	I	燧灰岩	43.8	24.8	0.92	11.9	594		I	両刃	彎形	裏面	24.4		68	両面打痕		裏面	
7	SK35	I	燧灰岩	36.8	24.4	0.69	9.6	530		I	片刃丸刃	彎形		59		59	斜交打痕		裏面	
8	SK68	I	燧灰岩	31	0.93	0.74	3.9	533		II	片刃丸刃	彎形		0.9			斜交打痕		裏面、穴縁	

第15表 石器計測表(9) 石割

番号	出土地点	層位	石材	全長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	測定番号	熟成率	分類	刃	厚	断面形状	欠損部	刃幅(mm)	素材	刃角度	使用	底	備考
1	22E	II	砂岩	51.9	35.5	12	35.5	596		I	破片	破片	両刃直方	中央部のみ	70		両面斜交打痕			

第18表 石器計測表(12) フレイク

番号	出土地点	層位	石材	全長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	測定番号	熟成率	分類	刃	厚	断面形状	欠損部	刃幅(mm)	素材	刃角度	使用	底	備考
1	14H	II	チャート	24.9	46.3	0.66	6.7	599		I	打面調整	打面調整	加撃方向	a	a					自然面裏面
2	14H	II	チャート	45.6	27.9	25.9	20.7	598		I	打面調整	打面調整	加撃方向	a	a					自然面裏面
3	SZ2	II	チャート	38.6	34.8	0.46	4.2	506		I	つじれ	つじれ	加撃方向	a	a					自然面裏面

第19表 石器計測表(3) 石器

番号	出土地点・層位	石	材	押印番号	種類	階状面	磨り込み方向	切刃行程	全長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	保存状態	備考
1	22E	III	砂岩		切目	両面	長軸	II	60.3	38.7	21.3	63.4	劣存	
2	SK79		砂岩	543	切目	両面	長軸	II	49.5	35.5	17.5	40.2	劣存	
3	22D	IV	砂岩		切目	両面	長軸	II	60.8	36.1	14.6	40.9	劣存	
4	19D	III	砂岩		切目	両面	長軸	II	55.6	34.3	14.6	37.9	劣存	
5	SK55		砂岩		切目	両面	長軸	I	48.4	24.4	11.4	27.6	劣存	
6	SK79		砂岩	542	切目	両面	長軸	III	59.1	28	14.5	35	劣存	
7	SK79		砂岩	541	切目	両面	長軸	III	48.8	35.5	13	33.3	劣存	
8	P60		砂岩	549	切目	両面	長軸	II	60.4	49.8	19.1	88.1	9/10存	97.8
9	P60		砂岩	546	切目	両面	長軸	II	61.4	40	20.8	75.1	劣存	
10	P60		砂岩	548	切目	両面	長軸	III	72.4	34.8	23	85.9	劣存	
11	SK79		砂岩	544	切目	両面	長軸	II	48.1	40.5	14.9	40.9	劣存	
12	P429		砂岩		切目	両面	長軸	II	57.6	18.9	11.5	18.9	劣存	
13	SK66		砂岩		切目	両面	長軸	II	50.6	29.8	15.2	25.4	2/3存	38.1
14	SK79		砂岩	538	切目	両面	長軸	I	42.9	12.2	10.2	11.3	劣存	
15	SK74		砂岩		切目	両面	長軸	II	50.9	43.1	14.2	43.8	劣存	
16	SK75		砂岩	16	切目	両面	長軸	II	51.7	21.9	14.6	31.8	9/10存	35.3
17	SK82		砂岩		切目	両面	長軸	II	63.4	37.3	17.3	55.3	劣存	
18	P84		砂岩		切目	両面	長軸	I	67.4	41.1	16.6	66.2	劣存	
19	21E	II	砂岩		切目	両面	長軸	III	51.3	30.2	22.4	45.2	9/10存	51.6
20	P177		砂岩		切目	両面	長軸	II	47.2	25.6	12.6	29.2	劣存	
21	P176		砂岩		切目	両面	長軸	II	71.5	25.8	13.4	23.6	1/2存	47.2
22	SK27		砂岩		切目	両面	長軸	II	46.3	32.1	17.9	38	劣存	
23	SK94		砂岩	339	切目	両面	長軸	III	58.1	38.1	18.4	53.1	4/5存	66.3
24	SK79		砂岩		切目	両面	長軸	III	38.3	30.7	14.4	22.1	5/6存	26.5
25	SK79		砂岩	540	切目	両面	長軸	II	38.5	35.6	12.1	31.7	劣存	
26	P60		砂岩	550	切目	両面	長軸	III	79.2	42.2	23.1	118.8	劣存	
27	P441		砂岩		切目	両面	長軸	II	52.7	27.5	18.8	32.9	3/5存	54.8
28	P60		砂岩		切目	両面	長軸	III	50.3	29.4	15.3	26.8	劣存	
29	15F	II	砂岩		切目	両面	長軸	II	86	37.4	18.1	93.1	9/10存	103.4
30	22E	II	砂岩		切目	両面	長軸	II	66.5	54	22.4	115.9	劣存	
31	14E	I	砂岩		切目	両面	長軸	II	81.6	31.9	18	65.9	劣存	
32	16F	II	砂岩		切目	両面	長軸	II	50.8	41.2	20.8	62.6	劣存	
33	18F	II	砂岩		切目	両面	長軸	II	45	30.8	19.2	36.9	9/10存	41
34	16H	E	砂岩		切目	両面	長軸	II	46.9	30.9	15	25.6	2/3存	38.4
35	22E	II	砂岩		切目	両面	長軸	II	56.7	45.1	19	67.3	劣存	
36	22E	II	砂岩	629	切目	両面	長軸	I	60.5	30	10	29.8	劣存	
37	22D	III	砂岩		切目	両面	長軸	II	50.3	30	14.1	33.1	劣存	
38	19E	II	砂岩		切目	両面	長軸	II	43.4	27.8	14.3	22.7	5/6存	27.2
39	20C	N	砂岩		切目	両面	長軸	II	40.8	30.5	10	15.7	劣存	
40	16E	II	砂岩		切目	両面	長軸	I	50.6	31.9	17.4	43	劣存	

41	14E	II	砂岩		切目	南面	長軸	III	63.9	40.8	13.5	52.2	5/6存	62.6
42	22E	III	砂岩		切目	南面	長軸	II	54.7	40.6	14.1	43.8	完存	
43	17F	E	砂岩		切目	西面	長軸	II	54.4	49.9	13.4	50.8	完存	
44	20D	III	砂岩		切目	南面	長軸	II	57.9	50.9	17.2	79.6	完存	
45	19F	II	砂岩		切目	南面	長軸	I	70.5	34.1	15.9	54.3	完存	
46	20D	III	砂岩		切目	南面	長軸	II	60.5	26	16.7	33.8	完存	
47	21E	II	砂岩		切目	西面	長軸	II	52.9	35.2	14.7	36.9	完存	
48	19F	II	砂岩		切目	西面	長軸	II	49.3	27.6	11.8	23.7	完存	
49	19G	II	砂岩		切目	南面	長軸	II	68.9	25.6	9.3	15.9	完存	
50	14E	II	砂岩		切目	南面	長軸	III	66.6	34.9	17.4	61.2	完存	
51	18D	II	砂岩	635	切目	南面	長軸	III	90	40.5	19.5	108.4	完存	
52	18F	II	砂岩		切目	南面	長軸	III	67.1	21	12.6	30.5	完存	
53	18F	II	砂岩		切目	南面	長軸	III	58.6	30.7	16.7	47.3	完存	
54	19E	III	砂岩		切目	西面	長軸	II	51.7	29.3	17	38.4	完存	
55	16G	II	砂岩		切目	西面	長軸	I	46.1	18.6	13.1	16.9	完存	
56	19H	II	砂岩		切目	西面	長軸	II	54.3	27.1	10.6	22.4	完存	
57	18F	III	砂岩		切目	南面	長軸	II	42.7	31.6	13.5	24.3	完存	
58	17F	III	砂岩		切目	南面	長軸	II	39.5	22.5	13.2	17.2	完存	
59	24G	II	砂岩		切目	南面	長軸	III	42.2	17.9	11.3	11.8	完存	
60	19H	N	砂岩		切目	西面	長軸	II	40	19.5	9.8	11.4	完存	
61	19G	II	砂岩		切目	西面	長軸	I	47.5	29.7	13.7	27.2	6/7存	31.7
62	22K	II	砂岩		切目	西面	長軸	III	66.5	23.4	16.3	37.4	完存	
63	19D	III	砂岩		切目	西面	長軸	II	80.9	37.3	12.7	48	完存	
64	19F	II	砂岩		切目	西面	長軸	I	40.5	17.8	7.9	8.6	9/10存	9.5
65	20D	III	砂岩		切目	南面	長軸	I	42.7	31.2	10.5	18.3	3/4存	24.4
66	10E	III	砂岩		切目	南面	長軸	I	55.4	27.7	14.2	35.6	9/10存	39.5
67	19I	III	砂岩		切目	南面	長軸	II	47.7	35.8	21.8	50.5	完存	
68	16G	II	砂岩		切目	南面	長軸	II	37	22.7	15.5	17.4	完存	
69	18F	II	砂岩		切目	西面	長軸	II	57.1	31.3	13.8	39.1	完存	
70	16E	II	砂岩		切目	西面	長軸	I	62.6	28.3	18.5	45.8	完存	
72	19F	III	砂岩		切目	西面	長軸	III	53.1	44.4	17.2	57	完存	
73	14G	I	砂岩		切目	南面	長軸	II	52.9	41	18.6	59.4	完存	
74	18F	II	砂岩	631	切目	南面	長軸	II	55	34.4	16.4	44.3	完存	
75	16F	II	砂岩		切目	南面	長軸	II	42.4	27.1	12.1	17.3	3/4存	23
76	17I	II	砂岩		切目	南面	長軸	II	40.8	40.8	14.3	5.2	細片	
77	13I	II	砂岩		切目	南面	長軸	III	56.9	32.6	14.3	38.7	完存	
78	SK28	II	砂岩		切目	西面	長軸	III	43	23.4	11.7	12.3	細片	
79	18G	N	砂岩	632	切目	西面	長軸	III	58.5	48.9	14.3	38.4	完存	
80	17I	II	砂岩		切目	南面	長軸	III	56.2	36.6	21.4	53.7	6/7存	62.6
81	SK36	II	砂岩		切目	南面	長軸	II	40	33	17	31.6	完存	
82	SK56	II	砂岩		切目	南面	長軸	II	44	20.8	20.8	14.9	完存	
83	SK94	II	砂岩		切目	南面	長軸	II	51.3	41.1	12	35.8	完存	

番号	出土地点	部位	石	材	埋藏番号	種類	断面形状	開口方向	開口行程	全長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	保存	單元重量
84	18J	II	砂岩			切目	両面	長軸	III	68.4	51.3	20.5	104.7	実存	
85	18E	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	53	30.5	22.4	81.5	実存	
86	SK45	II	砂岩			切目	両面	長軸	I	38.9	30	12	16.4	実存	
87	19D	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	53.1	33	19.7	45.3	実存	
88	21I	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	67	37.1	23.6	67.2	実存	
89	16C	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	57.4	42.6	20.3	71.7	実存	
90	17G	II	砂岩			切目	両面	長軸	III	57.4	48.9	21.7	78.7	実存	
91	19H	I	砂岩			切目	両面	長軸	II	44.8	33.4	16.3	32.2	実存	
92	13D	I	砂岩			切目	両面	長軸	I	49.4	29	13	26.5	実存	
93	18I	II	砂岩			切目	両面	長軸	I	41.4	35	19.6	40.5	実存	
94	22E	II	砂岩	636		切目	両面	長軸	II	75.8	57.8	22	144.1	実存	
95	19G	III	砂岩	634		切目	両面	長軸	III	61	43.6	20	75.5	実存	
96	21D	IV	砂岩	633		切目	両面	長軸	II	67.6	42	11.4	64.3	実存	
97	14E	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	51.9	32.5	17.6	43.4	実存	
98	19F	III	砂岩			切目	両面	長軸	I	39	22	15	17.6	実存	
99	P16	II	砂岩			切目	両面	長軸	I	36.5	27.7	11.6	17.2	実存	
100	15G	III	砂岩			切目	両面	長軸	II				15.5	断片	
101	17E	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	54.2	37.8	22.2	64.3	実存	
102	15I	II	砂岩			切目	両面	長軸	I	50.2	33.9	13.9	34.8	4/5存	43.5
103	17F	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	53	29.6	12.3	21.2	実存	
104	17F	II	砂岩			切目	両面	長軸	II				13	断片	
105	12C	II	砂岩			切目	両面	長軸	III	45.5	34.9	18.5	41.6	実存	
106	16E	II	砂岩			切目	両面	長軸	I	42	28.9	11.3	16.6	実存	
107	14G	I	砂岩			切目	両面	長軸	II	41	27.6	10.5	13.8	実存	
108	19	I	砂岩			切目	両面	長軸	II	66.5	46.2	18.2	68.7	実存	
109	17H	N	砂岩		630	切目	両面	長軸	II	54.7	38.6	11.3	30.2	実存	
110	19G	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	34.5	27	10.6	11.1	9/10存	12.3
111	22I	II	砂岩			切目	両面	長軸	III	81.5	38.7	19.3	83.6	実存	
112	23G	II	砂岩			切目	両面	長軸	III	76.6	30.7	19	51.8	実存	
113	SK62	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	53.8	41.7	11.8	51.8	実存	
114	SK27	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	68	40.8	15.8	61.1	実存	
115	11E	II	砂岩		628	切目	両面	長軸	II	46.7	17.3	10.5	9.8	実存	
116	19F	III	砂岩			切目	両面	長軸	I	55.3	25.5	11.6	23.4	実存	
117	P60	III	砂岩		545	切目	両面	長軸	III	54.4	39.4	22.4	60.9	実存	
118	P185	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	46.4	35.9	12.1	30.9	実存	
119	19F	III	砂岩			切目	両面	長軸	II	52.9	44.9	12.1	42.4	1/2存	84.8
120	SK35	II	砂岩			打+切	両面	長軸	II	48.1	24.1	14.4	22.4	実存	
121	P60	II	砂岩		547	切目	両面	長軸	II	60.5	48.6	21.9	89.3	実存	
122	14E	II	砂岩			切目	両面	長軸	II	37	29.6	14.9	25.4	実存	
123	25F	II	砂岩			打欠	両面	長軸	II	48.1	45.3	15.7	52.2	実存	
124	24E	II	砂岩			打欠	両面	長軸	II	62.7	39.8	12.8	47.4	実存	

125	24E	II	砂岩		打穴	横面	长轴	53.6	55.3	16	75.2	壳存
126	19I	III	砂岩		打穴	侧面	长轴	70.1	50.5	20.3	93.1	壳存
127	SK22		砂岩		打穴	侧面	长轴	69.5	39.2	15.4	52.3	壳存
128	19G	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	45.4	43.8	17.2	44.7	壳存
129	21F	IV	砂岩		打穴	侧面	长轴	50	33.2	16.6	37.6	壳存
130	P21		砂岩		打穴	侧面	反轴	64.2	31.4	17.7	51.2	壳存
131	SK80		砂岩		打穴	侧面	反轴	46.5	46.6	13.1	38.3	壳存
132	19II	I	砂岩		打穴	侧面	反轴	56	51.8	13.1	51.5	壳存
133	24H	I, II	砂岩		打穴	侧面	长轴	55.6	51.2	19.4	72.2	壳存
134	24G	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	57.1	47.3	11.6	43.5	壳存
135	21I	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	49.1	43.2	14.5	43.9	壳存
136	24F	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	55.8	38.9	16.9	47.2	壳存
137	20D	III	砂岩		打穴	侧面	反轴	85.3	44	16.1	85.5	壳存
138	13H	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	62.8	39.9	12	39.8	壳存
139	12I	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	39.7	30	15.5	23.3	壳存
140	24E	II	砂岩	626	打穴	侧面	长轴	80	45.2	20.5	102.3	7/8存
141	24E	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	75.7	55.8	12	114.9	壳存
142	24D	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	60.8	42.6	15.3	55.7	壳存
143	19E	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	51.9	42.5	16	46	壳存
144	18F	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	46.8	28.9	11	23.9	壳存
145	25E	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	44.8	42	16	40.6	壳存
146	26E	I	砂岩		打穴	侧面	长轴	48.1	39.9	13	32.6	壳存
147	26E	I	砂岩		打穴	侧面	长轴	70	44.6	19	51.1	1/2存
148	25F	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	44.1	49	17.4	52.9	壳存
149	14G	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	46.8	34.4	17.4	36.2	壳存
150	26E	I	砂岩		打穴	侧面	长轴	53.1	57.4	19.9	57.4	2/3存
151	SK88		砂岩		打穴	侧面	长轴	64	44.4	28.4	28.4	1/2存
152	19E	III	砂岩		打穴	侧面	长轴	52.5	38.5	11.2	25.1	1/2存
153	17J	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	42.5	27.1	26.8	36.7	壳存
154	26E	I	砂岩		打穴	侧面	长·短	37.7	25.5	15.7	23.1	壳存
155	P175		砂岩	618	打穴	侧面	长轴	33.7	30.9	14.8	21.9	壳存
156	18F	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	38.4	25.5	15.3	21	壳存
157	11F	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	47.3	47.3	13.8	13.8	轴片
158	18F	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	36.2	21.1	30	11.1	壳存
159	17G	I	砂岩		打穴	侧面	长·短	35.4	25.5	19	22.1	壳存
160	P80		砂岩		打穴	侧面	长轴	30.4	27.2	11.5	14.1	壳存
161	19F	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	31.3	26.7	15.2	18	壳存
162	14G	I	砂岩		打+切	侧面	长轴	40.7	28.3	10.6	18.1	壳存
163	14G	I	砂岩		打穴	侧面	长轴	37	32.5	12.5	22.5	壳存
164	12F	II	砂岩		打穴	侧面	长轴	37.9	30.7	8.3	14	壳存
165	20H	II	砂岩	619	打+切	侧面	长轴	50.2	30.2	15.3	35.9	壳存
166	19I	III	黄泥质砂岩		打穴	侧面	长轴	54	42.4	14.6	50.8	壳存

番号	出土地点	層位	石	材	種類	形状	頭	部	状	横り込み方向	切目行程	全長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	保存率	備	考
167	19E	II	瀬飛渡紋岩	623	打欠	両面	長・短					62.4	52.2	17.7	77.6	完好		
168	19H	II	瀬飛渡紋岩	627	打欠	両面	長軸					72.5	57	21.3	124.4	完好		
169	P120	II	瀬飛渡紋岩	624	打欠	両面	長軸					62.2	53.7	21.6	112.1	完好		
170	12E	II	瀬飛渡紋岩	624	打欠	両面	長軸					64.6	50.9	17.5	87.6	完好		
171	24G	E	瀬飛渡紋岩	622	打欠	両面	長軸					72.1	39.1	16.7	61.1	完好		
172	19E	II	瀬飛渡紋岩	624	打欠	両面	長軸					55.4	41.4	16.7	47.3	完好		
173	P124	II	瀬飛渡紋岩	620	打+切	両面	長軸			II		51.9	36.6	26.6	71.1	完好		
174	20F	II	瀬飛渡紋岩	620	打欠	両面	長軸					46.2	39	17.4	44	完好		
175	19E	II	瀬飛渡紋岩	621	打欠	両面	長軸					49.2	46.3	19.3	51.9	完好		
176	19G	III	瀬飛渡紋岩	621	打欠	両面	長軸					44.9	30	15.8	35.4	完好		
177	P67	II	瀬飛渡紋岩	617	打+切	両面	長軸					44.1	32	18	34.8	完好		
178	P407	II	瀬飛渡紋岩	617	打欠	両面	長軸					54.7	36.9	15.2	39.8	完好		
179	13E	II	瀬飛渡紋岩	617	打欠	片面	長軸					41.5	34.5	10.5	19.7	完好		

第21表 石器計測表(05) 石皿

番号	出土地点	層位	石	材	種類	形状	全長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	保存率	備	考
1	22E	II	砂岩	318	345	90	19900	642	完形				
2	17D	II	砂岩	390	348	67	13400	643	完形				磨痕、比喙による割れ有り

第20表 石器計測表(06) 鏡・凹・磨石

番号	出土地点	層位	石	材	種類	形状	全長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	保存率	備	考
1	22E	II	砂岩	98.5	83.4	58.8	710						
2	19H	II	安山岩	92.1	81.1	75.7	760						楕円形
3	14G	II	瀬飛渡紋岩	116.2	92.6	61.2	930						楕円形
4	19G	III	瀬飛渡紋岩	133	79.6	45.4	690						楕円形
5	19T	II	瀬飛渡紋岩	87.6	74.4	36.9	323						扁平
6	19E	III	瀬飛渡紋岩	88	79.2	45.1	412.9						扁平
7	18B	III	砂岩	78.1	72.9	56.5	410						楕円形
8	13G	II	砂岩	57.1	62.5	54.9	261.6						楕円形
9	20F	II	砂岩	80.5	48.8	49.7	257.3						楕円形
10	19G	II	砂岩	71.4	52	38.7	197.3						楕円形
11	21I	II	砂岩	58.5	54.2	33.8	134.8						楕円形
12	13G	II	砂岩	55.4	48.5	40.9	143.9						楕円形
13	12D	II	砂岩	40.1	39	34.3	69						楕円形
14	7M	I	砂岩	43.9	39.8	32.2	72.9						楕円形
15	19M	I	瀬飛渡紋岩	120	104.3	57.1	960						楕円形

16	19G	III	砂岩	112.8	97.7	53.9	810	完形	II	梯凹形
17	19F	III	砂岩	108.9	88.7	56.7	900	完形	II	梯凹形
18	19E	II	灰山岩	86.8	78.6	41.5	392.1	完形	II	梯凹形
19	18H	II	砂岩	96.9	76.7	38.9	345.1	638 破損	II	梯凹形
20	15H	II	砂岩	100.2	89.7	48.4	564.3	破損	II	梯凹形
21	15F	II	砂岩	118.8	56.9	50.9	394.1	破損	II	梯凹形
22	20F	II	砂岩	84.4	67.3	44.9	324.7	完形	II	梯凹形
23	24E	II	砂岩	74.1	71.5	48.5	334.5	完形	II	梯凹形
24	SK22	II	砂岩	73.6	64.5	31.5	168.1	完形	II	梯凹形
25	P70	II	砂岩	72.3	66.2	35.7	180.1	完形	II	梯凹形
26	15E	II	砂岩	108.5	100.7	69.3	1030	503 完形	IV	梯凹形
27	排土	II	砂岩	99.9	86.2	73.4	830	639 完形	I	不定形
28	15E	II	砂岩	120.5	56	30.7	330	502 完形	III	梯凹形
29	18L	II	砂岩	100.1	89.7	41.7	570	637 完形	VI	球
30	17J	II	砂岩	70.4	69.1	64.3	440	完形	I	不定形
31	21I	II	砂岩	92.5	71.8	56.9	470	完形	I	不定形
32	P39	II	砂岩	149.4	59.1	35.8	470	完形	I	梯凹形
33	19G	III	砂岩	119.5	96.2	55.6	940	完形	III	梯凹形
34	19G	III	砂岩	178.1	69.9	36.5	730	完形	III	不定形
35	19G	III	砂岩	130.5	61.7	49.3	550	完形	III	不定形
36	17H	I	砂岩	137.3	59.3	25.6	330	破損	III	長方形
37	26E	I	砂岩	74.5	60.3	25.4	160	完形	III	梯凹形
38	19I	II	砂岩	59.8	55.1	35.1	150	完形	III	梯凹形
39	11G	II	砂岩	55.9	49.1	36.1	130	完形	III	梯凹形
40	11G	II	砂岩	124.2	86.2	71.3	1080	完形	VI	梯凹形
41	19G	II	砂岩	75.8	71.8	70.3	520	完形	VI	真球
42	19F	II	砂岩	106.5	83.8	44.5	550	完形	IV	梯凹形
43	17F	II	砂岩	108.5	103.5	50.6	830	完形	IV	梯凹形
44	20E	III	砂岩	132	87.5	69.1	1410	完形	IV	長方形
45	P243	III	砂岩	110.1	107.5	58.2	990	完形	IV	不定形
46	16E	II	砂岩	100	88.2	53.4	680	完形	IV	梯凹形
47	22E	II	砂岩	133	82.7	50.3	840	破損	IV	梯凹形
48	18G	II	瀉流砂岩	95.3	87	51	590	完形	IV	梯凹形
49	16H	II	砂岩	90.1	90.4	54.2	650	完形	IV	不定形
50	19I	II	砂岩	86	64.3	35.7	260	完形	IV	梯凹形
51	12C	II	砂岩	122.1	80.9	34.2	360	破損	IV	梯凹形
52	26B	I	瀉流砂岩	60.4	46.3	27.5	100	完形	VI	梯凹形
53	排土	I	砂岩	136.8	103	69.6	1290	完形	VI	不定形

## 第3節 古代以降の土器

出土遺物は接合前の破片数で287点と少なく、その内訳は須恵器4、荒肌手山茶碗・小皿21、均質手山茶碗5、古瀬戸36、越前(越前系)21、青磁9、土師器皿5、土師器鍋1、土師器釜1、瀬戸美濃(大窯)10、瀬戸美濃(連房)156、肥前5、土鍾2、不明11である。

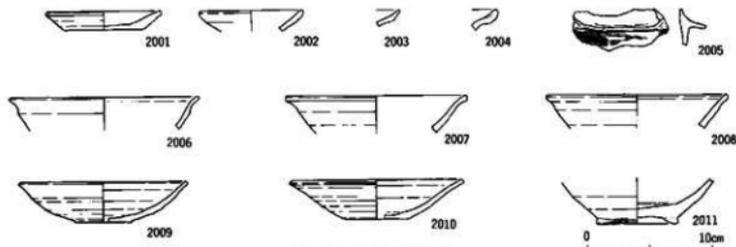
古代の遺物として須恵器が数点出土しているが、いずれも破片で摩滅しており、器形が判別できるものはない。

中世の遺物のうち、中世前期に比定されるものは荒肌手山茶碗・小皿・鉢、青磁、土師器鍋などが、中世後期に比定されるものは均質手山茶碗、荒肌手鉢、古瀬戸、大窯、青磁、越前(越前系)、土師器皿、土師器釜などが出土している。山茶碗・小皿は荒肌手が藤澤編年5～6型式のものが確認でき明らかに瀬戸産といえるものは出土していない。均質手は11型式前半の碗のみが出土しており、小皿は出土していない。古瀬戸は中世遺物のなかで最も破片数が多い。その器種は天日茶碗、鉀皿、柄付片皿、播鉢、有耳壺、瓶子などがあり、いずれも後II期以降に比定される。大窯は灰釉丸皿、志野丸皿、天日茶碗、播鉢、重圈皿などがある。(2026)(2027)の志野丸皿はいずれも削り出し高台である。青磁は碗のみが出土しており、施されている文様は雷文帯(2030)、草花文(2031)、線描連弁文などがある。越前および越前系陶器は16世紀中葉～後葉に比定される壺と播鉢のみである。(2019)は口縁部内面に1条の凹線が巡り、内傾面を有し端部が尖る。また、やや軟質で灰色を呈し、白色粒と灰色粒をわずかに含む。(2020)は、口縁部上面がわずかに凹み、外面に1条の稜を有する。また、内面には粘土接合痕がみられ、接合痕より下方に楕円形の当て具痕が残る。越前系としたものは越前陶器と比べて、壺は口縁部が丁寧に作られ、胎土が精良なものであり、播鉢は卸目の施し方が違うものである。<sup>1)</sup>土師器皿は体部外面上方に横ナデが施され、口縁端部が丸く取まるタイプ(2002)と体部外面に指圧による稜を有し、口縁端部が尖るタイプ(2003)のものがある。土師器の煮沸具はいわゆる伊勢型鍋(2004)と羽釜(2005)が各1点ずつ出土している。

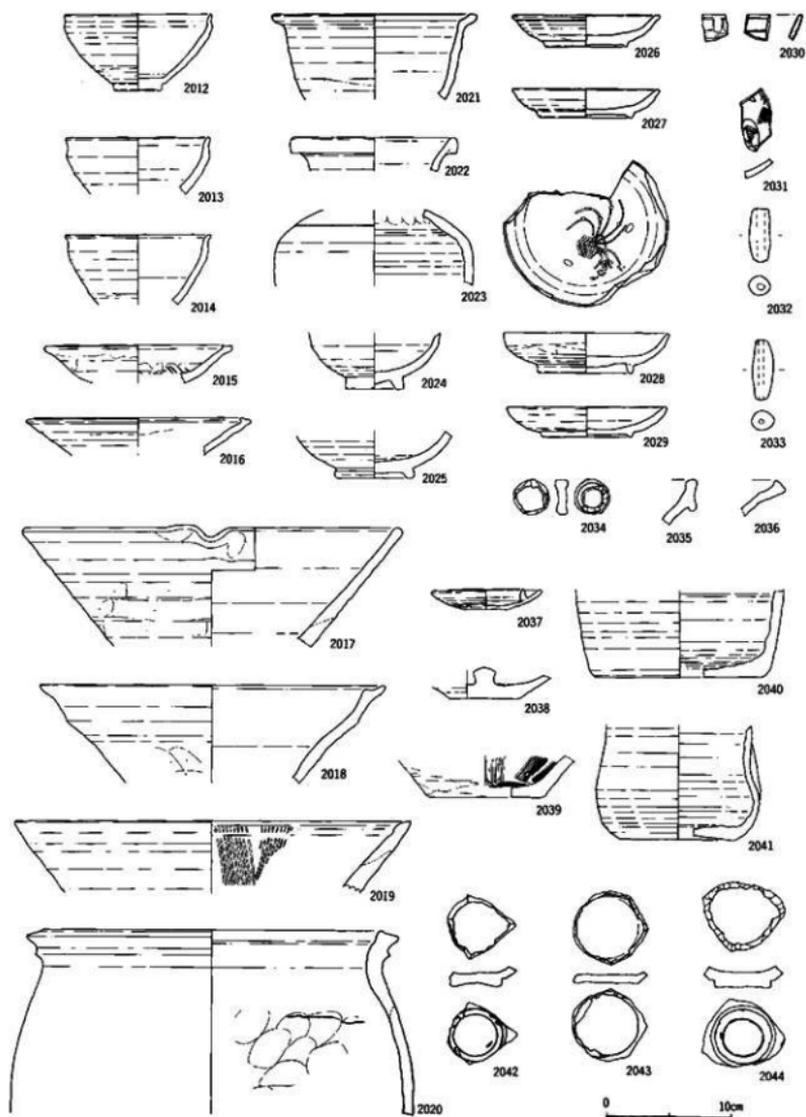
近世の遺物は瀬戸美濃が大部分であり、確認できる器種は丸皿、鉀皿、灯明皿、掬型湯呑、広東茶碗、天目茶碗、丸碗、片口、播鉢、蓋、徳利、土瓶などである。肥前は量的にはわずかであり、二重網目文が描かれている染付碗などが出土している。

(第3節 小野木 学)

1) 岩田隆氏の御教示による。



第74図 中近世陶磁器(1)



第75図 中近世陶磁器(2)

第23表 遺物観察表

番号	遺物名	器種	口徑	底徑	器高	材質	備考
2001	SK93	甍肌手山茶碗	9.0	6.3	1.5		内面に自然釉降灰、板目
2002	SK89	土師器皿	( 8.2)				内面および体部外面上方横ナデ
2003	SK57	土師器皿					体部外面指圧
2004	包含層	土師器鉢					伊勢型鉢
2005	包含層	土師器羽釜					外面刷毛目、内面横付着
2006	包含層	甍肌手山茶碗	(15.4)				
2007	包含層	甍肌手山茶碗	(14.6)				
2008	P21	甍肌手山茶碗	(14.2)				
2009	包含層	均質手山茶碗	(13.7)	( 4.6)	3.4		
2010	包含層	均質手山茶碗	(13.6)	( 5.0)	3.3		
2011	包含層	甍肌手山茶碗		( 6.4)			静止指ナデ調整
2012	包含層	古瀬戸天目茶碗	12.0	3.8	6.2	鉄釉	高台周辺露胎、高台内の削り込みは浅い
2013	包含層	瀬戸美濃天目茶碗	(11.4)			鉄釉	
2014	SI1	瀬戸美濃天目茶碗	(11.6)			鉄釉	体部外面下方露胎
2015	包含層	古瀬戸印皿	(15.0)			灰釉	口縁部周辺のみ施釉
2016	包含層	古瀬戸印皿	(18.0)			灰釉	口縁部周辺のみ施釉
2017	包含層	甍肌手鉢	(30.6)				体部外面下方横方向のヘラ削り、体部外面横付着
2018	包含層	甍肌手鉢	(27.6)				体部外面下方縦方向のヘラ削り、鉄分の吹出しあり
2019	SK89	越前漆鉢	(32.0)				やや軟質、漆目の単位は9条・幅2.8cm
2020	包含層	越前漆鉢	(30.1)				体部内面にて其痕
2021	SK57	古瀬戸柄付片皿	(16.0)			灰釉	体部外面下方露胎
2022	包含層	古瀬戸有耳壺	(12.6)			灰釉	頸部内面下方露胎
2023	包含層	古瀬戸灰子				灰釉	胴部外面に数条の沈線、頸部と体部の境に指痕列直
2024	包含層	瀬戸美濃丸碗		4.6		鉄釉	高台周辺露胎
2025	SI1	瀬戸美濃片口		6.1		灰釉	高台周辺露胎
2026	包含層	瀬戸美濃志野丸皿	(11.8)	6.3	2.6	長石釉	高台周辺露胎、底部内外面にビン痕あり
2027	包含層	瀬戸美濃志野丸皿	(11.8)	( 7.2)	2.4	長石釉	全面に施釉、底部内外面にビン痕あり
2028	包含層	瀬戸美濃丸皿	13.1	7.5	3.3	灰釉	底部内面に擦線、高台周辺露胎、底部内面にビン痕あり
2029	包含層	瀬戸美濃丸皿	12.6	7.2	2.5	灰釉	全面に施釉、底部内面にビン痕あり
2030	包含層	青磁碗				青釉	外面に雷文帯、内面に2条の沈線
2031	包含層	青磁碗				青釉	内面に草花文
2032	SK57	土鉢					長さ4.3cm、重さ10.8g
2033	SK12	土鉢					長さ4.8cm、重さ11.7g
2034	包含層	加工円蓋				長石釉	小坪の底部を転用
2035	包含層	瀬戸美濃漆鉢				漆釉	
2036	包含層	瀬戸美濃漆鉢				漆釉	
2037	包含層	瀬戸美濃灯明皿	( 8.4)	( 3.6)	1.6	漆釉	体部外面下方～底部外面釉の拭い取り
2038	包含層	瀬戸美濃蓋		5.5		漆釉	底部周辺露胎
2039	包含層	瀬戸美濃漆鉢	( 8.9)			漆釉	底部外面周辺釉の拭い取り、漆目の単位は8条・幅2.1cm
2040	包含層	瀬戸美濃漆鉢	(13.4)			鉄釉	
2041	包含層	瀬戸美濃漆鉢	( 9.2)			漆釉	底部外面釉の拭い取り
2042	SK42	加工円蓋		4.2		鉄釉	天目茶碗の底部を転用、外面に横付着
2043	包含層	加工円蓋		5.0			甍肌手小皿の底部を転用
2044	包含層	加工円蓋		4.4		鉄釉	天目茶碗の底部を転用、外面に横付着

※括弧の ( ) は推定値であることを示す。

## 第4節 その他の遺物

### 1. 銭貨類

本遺跡では、101枚(901~996)の銭貨が出土している(第24・25表)。そのうちの87枚(901~987)はビット433(P433)より、さし(緋)の状態で出土した(図版10)。

これらはすべて渡来銭で、開元通寶(621年 唐)から淳熙元寶(1174~ 南宋)までの21種類、87枚である。このうち6枚には背文がみられる(901~904、906、907)。

988~996は包含層からの出土で988は北宋からの渡来銭、989~995は江戸時代に鑄造された寛永通寶である。なお、明治・昭和時代の1銭5枚も出土している。

### 2. 和鏡(松鶴鏡)

和鏡(1000)は、直径8.0cm、縁厚0.6cmの直角式縁で、鏡背文様は亀鈕を中心に松の葉を全体に散らし、上方に二羽の鶴を配している。これらの文様は亀・鶴・松のスタンプを使用(型押し)したと考えられ、文様は古いものをそのまま使用しているが、法量の小型化、型押しという粗製乱造の流れより15世紀~16世紀前半、室町時代の鏡と考えられる。<sup>1)</sup>

なお、鏡の鈕の部分には、麻と考えられる繊維片が残っていた。<sup>2)</sup>

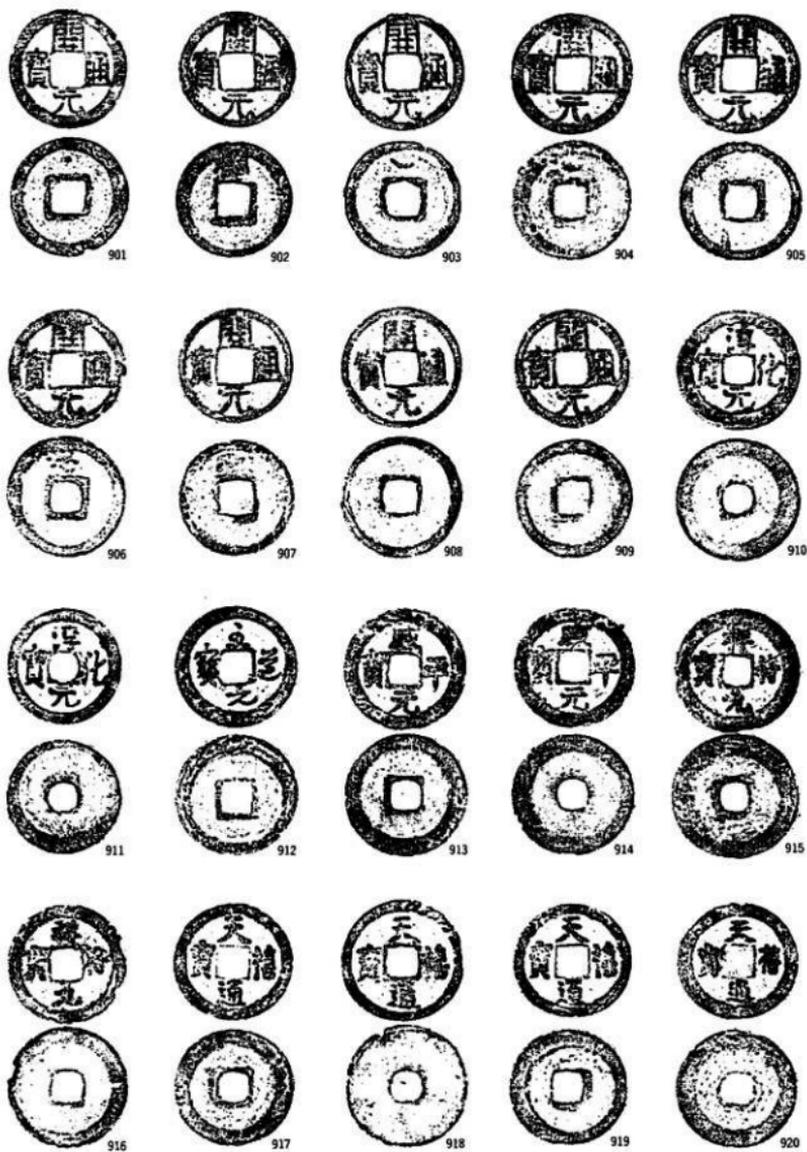
松のスタンプは全部で26単位みられるが、これらは大きく6つの要素に分けられそうである。まず内区には鶴の周囲に配された5単位、亀の後ろ足の外側に外向して配された2単位、亀の足に対応する形で内向して配された4単位と、これらの間を埋める形で左向きに配されている3単位の計14単位がみられる。外区には内区の鶴および亀の足に対応する形で外向して配された6単位とそれらの間を埋める形で内向して配された6単位の計12単位がみられる。松の葉については、中央と左右の3つの部分からなり、1つの型を3回押しで描かれていると考えられる。葉の下の枝の部分は棒状の工具の刺突により表現されていると思われる。なお、外区の松は幅が狭い為、横長に表現せざるをえなかったと考えられる。<sup>3)</sup>

1) 京都国立博物館 久保智康氏の御教示による。なお、型押しのスタートは、亀の鈕からと考えられ、これだけの型押しの残るのは珍しいとのことである。

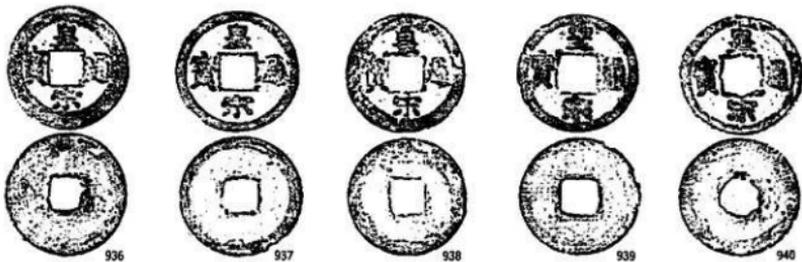
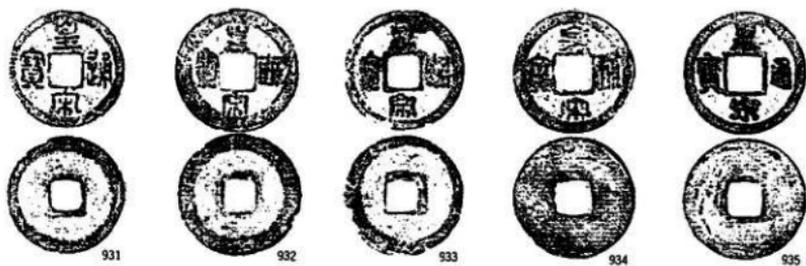
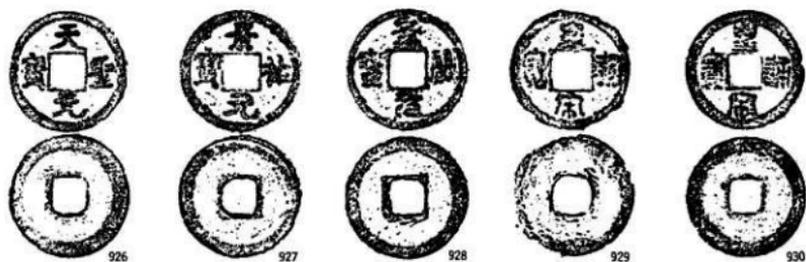
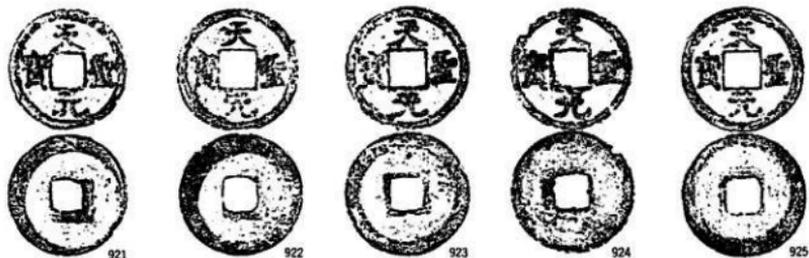
2) 岐阜県繊維試験場 川出初好技師の鑑定による。光学顕微鏡による観察で植物繊維にまちがいがなく、麻の可能性が高いとのことである(図版56)。

3) 当センター 成瀬正勝・澤村雄一郎の御教示による。

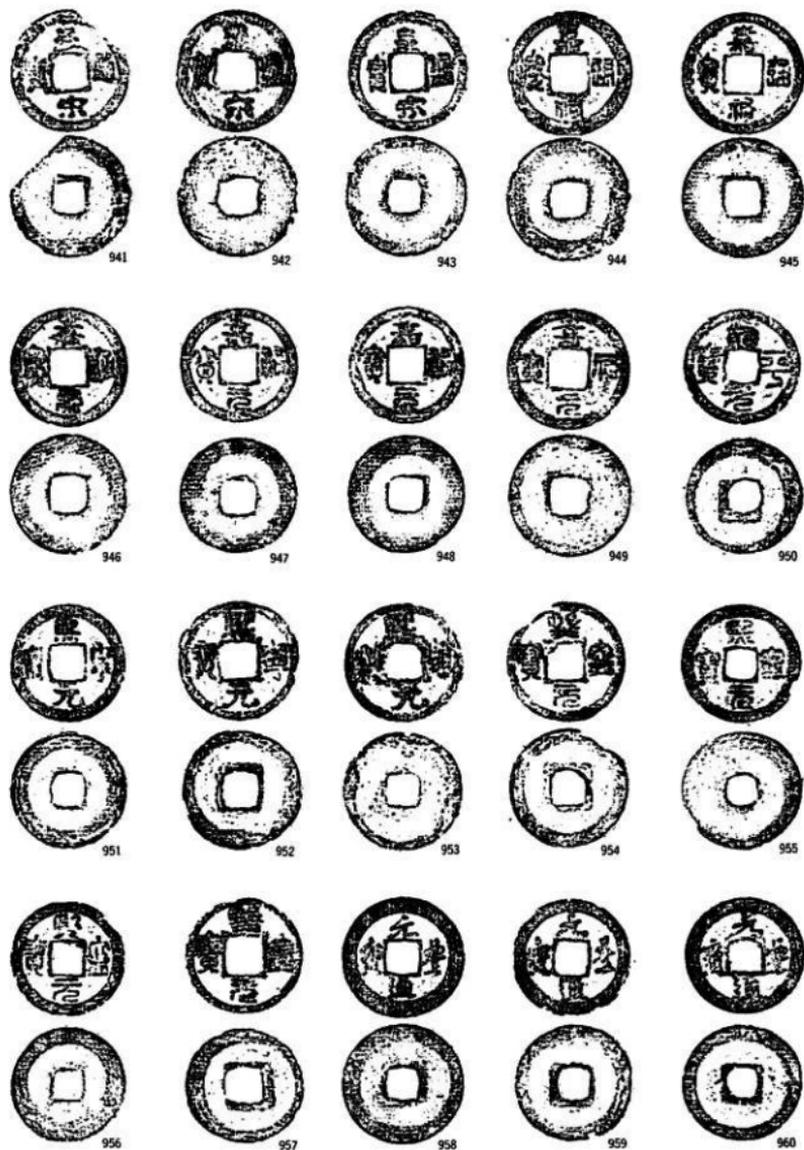
なお、和鏡の実測、トレースも澤村氏による。



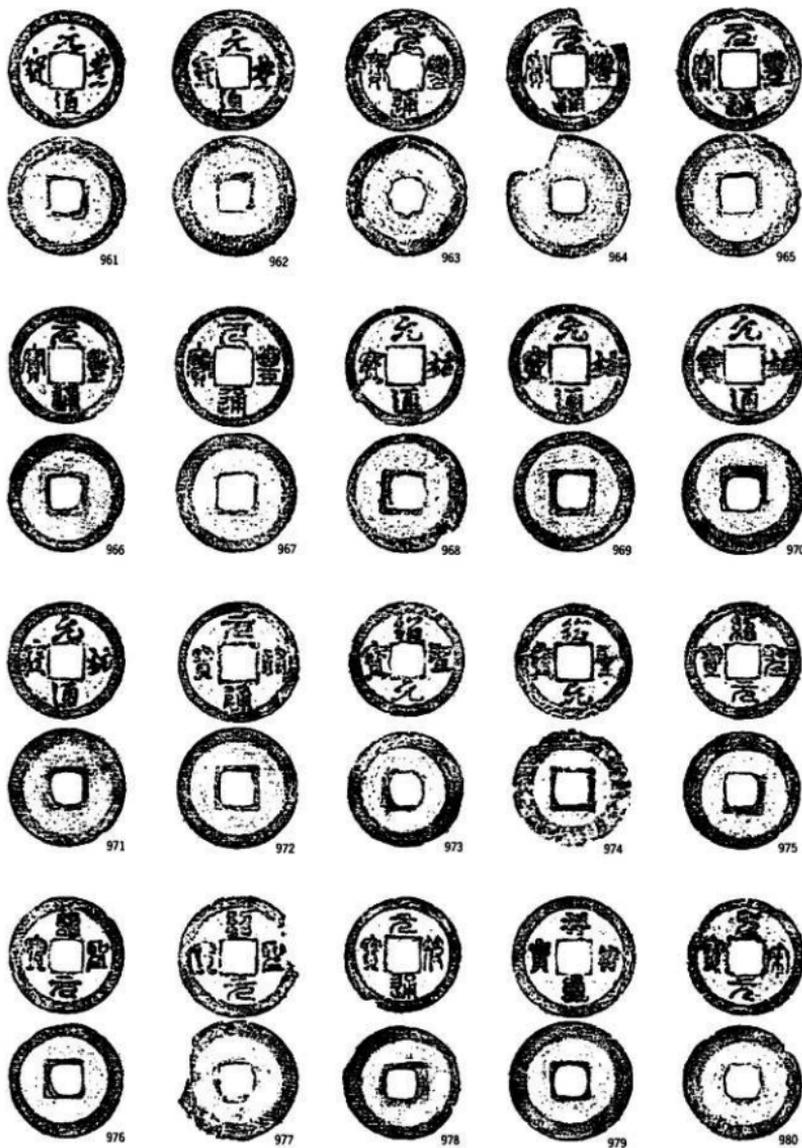
第76図 さし銭拓影(1) (S=1/1)



第77回 さし銭拓影(2) (S=1/1)



第78図 さし錢拓影(3) (S=1/1)



第79図 さし鉄拓影(4) (S=1/1)



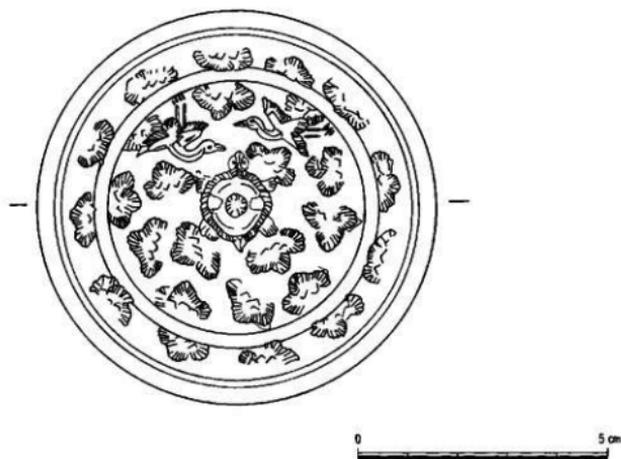
第80図 さし鉄拓影・鉄貨拓影(5) (S=1/1)

第24表 さし鏡・鏡貨計測表 (1)

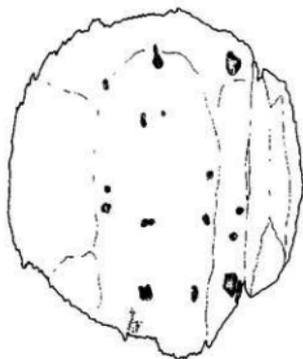
No	出土地点	鏡 貨 名	書体	紋様	径 (cm)	孔徑 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	材質	初 鑄 年 代	西 暦	備 考	遺物番号
1	P 433 II	開元通寶	真	対角	2.45	0.66	0.12	2.9	銅	唐 武 德 4 年	621		901
2	P 433 II	開元通寶	真	対角	2.33	0.68	0.12	3.2	銅	唐 武 德 4 年	621		902
3	P 433 II	開元通寶	真	対角	2.38	0.71	0.12	2.9	銅	唐 武 德 4 年	621		903
4	P 433 II	開元通寶	真	対角	2.44	0.66	0.13	3.1	銅	唐 武 德 4 年	621	□は	904
5	P 433 II	開元通寶	真	対角	2.41	0.66	0.12	3.4	銅	唐 武 德 4 年	621	□	905
6	P 433 II	開元通寶	真	対角	2.44	0.62	0.14	3.4	銅	唐 武 德 4 年	621		906
7	P 433 II	開元通寶	真	対角	2.30	0.71	0.13	3.1	銅	唐 武 德 4 年	621		907
8	P 433 II	開元通寶	真	対角	2.45	0.67	0.15	3.3	銅	唐 武 德 4 年	621		908
9	P 433 II	開元通寶	真	対角	2.34	0.67	0.11	2.7	銅	唐 武 德 4 年	621		909
10	P 433 II	淳化元寶	真	右側	2.45	0.60	0.15	3.7	銅	北宋 淳 化 元 年	990		910
11	P 433 II	淳化元寶	真	右側	2.35	0.57	0.13	3.2	銅	北宋 淳 化 元 年	990		911
12	P 433 II	至道元寶	真	右側	2.48	0.62	0.13	3.5	銅	北宋 至 道 元 年	995		912
13	P 433 II	咸平元寶	真	右側	2.49	0.60	0.14	4.1	銅	北宋 咸 平 元 年	998		913
14	P 433 II	咸平元寶	真	右側	2.45	0.62	0.10	3.1	銅	北宋 咸 平 元 年	998		914
15	P 433 II	祥符元寶	真	右側	2.53	0.61	0.13	3.2	銅	北宋 大 中 祥 符 元 年	1008		915
16	P 433 II	祥符元寶	真	右側	2.46	0.61	0.13	3.0	銅	北宋 大 中 祥 符 元 年	1008		916
17	P 433 II	天禧通寶	真	右側	2.40	0.61	0.14	3.8	銅	北宋 天 禧 元 年	1017		917
18	P 433 II	天禧通寶	真	右側	2.46	0.62	0.15	3.5	銅	北宋 天 禧 元 年	1017		918
19	P 433 II	天禧通寶	真	右側	2.35	0.63	0.13	3.2	銅	北宋 天 禧 元 年	1017		919
20	P 433 II	天禧通寶	真	右側	2.41	0.62	0.14	3.5	銅	北宋 天 禧 元 年	1017		920
21	P 433 II	天聖元寶	真	右側	2.46	0.65	0.15	3.2	銅	北宋 天 聖 元 年	1023		921
22	P 433 II	天聖元寶	真	右側	2.48	0.71	0.14	3.4	銅	北宋 天 聖 元 年	1023		922
23	P 433 II	天聖元寶	真	右側	2.51	0.66	0.14	3.9	銅	北宋 天 聖 元 年	1023		923
24	P 433 II	天聖元寶	真	右側	2.45	0.70	0.12	2.9	銅	北宋 天 聖 元 年	1023		924
25	P 433 II	天聖元寶	真	右側	2.47	0.71	0.14	3.8	銅	北宋 天 聖 元 年	1023		925
26	P 433 II	天聖元寶	真	右側	2.45	0.72	0.12	3.3	銅	北宋 天 聖 元 年	1023		926
27	P 433 II	景祐元寶	真	右側	2.46	0.71	0.14	3.7	銅	北宋 景 祐 元 年	1034		927
28	P 433 II	景祐元寶	真	右側	2.44	0.71	0.12	2.9	銅	北宋 景 祐 元 年	1034		928
29	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.41	0.78	0.13	3.3	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039		929
30	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.40	0.67	0.12	3.4	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039		930
31	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.39	0.65	0.13	3.4	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039		931
32	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.48	0.69	0.11	2.9	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039	□は寶か	932
33	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.44	0.66	0.13	3.4	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039	□は皇か	933
34	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.49	0.70	0.12	3.4	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039		934
35	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.48	0.72	0.14	3.8	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039	□は皇か	935
36	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.52	0.69	0.11	3.4	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039		936
37	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.49	0.69	0.15	3.5	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039		937
38	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.44	0.71	0.11	2.9	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039		938
39	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.42	0.73	0.13	3.4	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039		939
40	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.44	0.83	0.13	3.3	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039		940
41	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.47	0.85	0.14	2.5	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039	□は皇、右ノ欠	941
42	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.45	0.78	0.12	3.0	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039	□は通か	942
43	P 433 II	皇宋通寶	真	対角	2.43	0.67	0.14	3.8	銅	北宋 皇 宋 元 年	1039	□は皇か	943
44	P 433 II	嘉祐通寶	真	右側	2.50	0.74	0.12	2.8	銅	北宋 嘉 祐 元 年	1056		944
45	P 433 II	嘉祐通寶	真	右側	2.44	0.73	0.13	3.5	銅	北宋 嘉 祐 元 年	1056		945
46	P 433 II	嘉祐通寶	真	右側	2.41	0.75	0.09	2.6	銅	北宋 嘉 祐 元 年	1056	□は嘉か	946
47	P 433 II	嘉祐通寶	真	右側	2.31	0.67	0.10	2.8	銅	北宋 嘉 祐 元 年	1056		947
48	P 433 II	嘉祐通寶	真	右側	2.35	0.69	0.13	3.1	銅	北宋 嘉 祐 元 年	1056		948
49	P 433 II	嘉祐通寶	真	右側	2.47	0.77	0.13	3.5	銅	北宋 嘉 祐 元 年	1056		949
50	P 433 II	治平元寶	真	右側	2.35	0.65	0.15	3.3	銅	北宋 治 平 元 年	1064	□は治か	950

第25表 さし銭・銭貨計測表 (2)

No.	出土地点	種	銭貨名	書体	説明	典	径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	初鑄年代	西暦	備考	遺物番号
51	P-433	II	熙寧元寶	瓦	右面		2.37	0.69	0.14	3.5	銅	北宋 熙寧元年	1068		951
52	P-433	II	熙寧元寶	瓦	右面		2.38	0.71	0.11	2.5	銅	北宋 熙寧元年	1068		952
53	P-433	II	熙寧元寶	瓦	右面		2.38	0.64	0.13	3.7	銅	北宋 熙寧元年	1068	□は穿か	953
54	P-433	II	熙寧元寶	瓦	右面		2.41	0.71	0.13	3.1	銅	北宋 熙寧元年	1068	右上・傷欠け	954
55	P-433	II	熙寧元寶	瓦	右面		2.39	0.61	0.13	3.4	銅	北宋 熙寧元年	1068	右下・傷欠け	955
56	P-433	II	熙寧元寶	瓦	右面		2.37	0.59	0.16	4.1	銅	北宋 熙寧元年	1068		956
57	P-433	II	熙寧元寶	瓦	右面		2.35	0.77	0.11	2.3	銅	北宋 熙寧元年	1068	□は熙寧か	957
58	P-433	II	元豐通寶	瓦	右面		2.49	0.67	0.11	3.3	銅	北宋 元豐元年	1078		958
59	P-433	II	元豐通寶	瓦	右面		2.41	0.66	0.13	3.1	銅	北宋 元豐元年	1078	□は寶か	959
60	P-433	II	元豐通寶	瓦	右面		2.38	0.61	0.14	3.1	銅	北宋 元豐元年	1078		960
61	P-433	II	元豐通寶	瓦	右面		2.40	0.69	0.14	3.1	銅	北宋 元豐元年	1078		961
62	P-433	II	元豐通寶	瓦	右面		2.45	0.63	0.13	3.8	銅	北宋 元豐元年	1078		962
63	P-433	II	元豐通寶	瓦	右面		2.45	0.71	0.13	3.5	銅	北宋 元豐元年	1078		963
64	P-433	II	元豐通寶	瓦	右面		2.49	0.68	0.14	3.4	銅	北宋 元豐元年	1078	右七欠損	964
65	P-433	II	元豐通寶	瓦	右面		2.47	0.71	0.14	3.8	銅	北宋 元豐元年	1078		965
66	P-433	II	元豐通寶	瓦	右側		2.40	0.67	0.14	4.0	銅	北宋 元豐元年	1078		966
67	P-433	II	元豐通寶	瓦	右面		2.43	0.73	0.13	3.6	銅	北宋 元豐元年	1078		967
68	P-433	II	元祐通寶	瓦	右面		2.44	0.71	0.12	2.8	銅	北宋 元祐元年	1086		968
69	P-433	II	元祐通寶	瓦	右面		2.43	0.69	0.13	3.7	銅	北宋 元祐元年	1086		969
70	P-433	II	元祐通寶	瓦	右面		2.45	0.69	0.15	4.0	銅	北宋 元祐元年	1086		970
71	P-433	II	元祐通寶	瓦	右側		2.40	0.66	0.13	3.6	銅	北宋 元祐元年	1086		971
72	P-433	II	元祐通寶	瓦	右面		2.45	0.70	0.12	3.1	銅	北宋 元祐元年	1086		972
73	P-433	II	紹聖元寶	瓦	右面		2.34	0.66	0.16	3.6	銅	北宋 紹聖元年	1094		973
74	P-433	II	紹聖元寶	瓦	右面		2.35	0.67	0.11	2.4	銅	北宋 紹聖元年	1094	□は聖元か	974
75	P-433	II	紹聖元寶	瓦	右側		2.38	0.66	0.13	3.3	銅	北宋 紹聖元年	1094		975
76	P-433	II	紹聖元寶	瓦	右面		2.37	0.63	0.13	3.3	銅	北宋 紹聖元年	1094	□は紹聖	976
77	P-433	II	紹聖元寶	瓦	右面		2.47	0.70	0.14	3.2	銅	北宋 紹聖元年	1094	右一傷欠損	977
78	P-433	II	元符通寶	瓦	右面		2.33	0.62	0.12	3.0	銅	北宋 元符元年	1098		978
79	P-433	II	元符通寶	瓦	右面		2.45	0.65	0.11	2.9	銅	北宋 大中祥符2年	1069	□は通か	979
80	P-433	II	聖宋元寶	瓦	右側		2.37	0.70	0.14	3.5	銅	北宋 建中靖國元	1101		980
81	P-433	II	大觀通寶	瓦	対角		2.43	0.66	0.15	3.6	銅	北宋 大觀元年	1107		981
82	P-433	II	政和通寶	瓦	対角		2.42	0.62	0.12	3.6	銅	北宋 大觀元年	1111		982
83	P-433	II	政和通寶	瓦	対角		2.63	0.73	0.12	3.8	銅	北宋 大觀元年	1111	□は政通か	983
84	P-433	II	政和通寶	瓦	対角		2.37	0.63	0.15	3.5	銅	北宋 大觀元年	1111	右上・傷欠損	984
85	P-433	II	淳熙元寶	瓦	右面		2.43	0.60	0.14	4.0	銅	南宋 淳熙元年	1174		985
86	P-433	II	淳熙元寶	不明	不明		2.35	0.65	0.10	2.3	銅	不明	不明		986
87	P-433	II	淳熙元寶	不明	不明		2.23	0.72	0.10	1.4	銅	不明	不明		987
88	H-10	II	政和通寶	瓦	対角		2.46	0.65	0.11	2.3	銅	北宋 大觀元年	1111		988
89	G-15	II	寬永通寶	瓦	対角		2.32	0.58	0.10	2.2	銅				989
90	H-10	II	寬永通寶	瓦	対角		2.07	0.65	0.12	2.0	銅				990
91	H-10	II	寬永通寶	瓦	対角		2.38	0.56	0.14	2.7	銅				991
92	J-13	II	寬永通寶	瓦	対角		2.40	0.61	0.12	2.6	銅				992
93	I-19	I	寬永通寶	瓦	対角		2.29	0.64	0.11	2.5	銅				993
94	J-18	II	寬永通寶	瓦	対角		2.39	0.65	0.16	2.4	銅				994
95	K-23	II	寬永通寶	瓦	対角		2.47	0.50	0.12	3.1	銅				995
96	E-16	II	□□通寶	瓦	右側		2.46	不明	0.13	1.2	銅	不明	不明	右上1/2欠損	996
97	J-17	II	I 銭				2.76		0.18	5.9	銅	明治10年	1877		
98	J-21	II	I 銭				2.78		0.14	6.0	銅	明治15年	1882		
99	C-17	II	I 銭				2.31		0.14	3.5	銅	昭和10年	1935		
100	J-17	II	I 銭				2.28		0.13	3.6	銅	昭和12年	1937		
101	J-18	II	I 銭				1.60		0.26	1.4	銅	昭和19 or 20年	不明		



1000



1001



第81図 和鏡・木製品

第26表 岐阜県内の知識一覧①

時代	名	基	直径mm	高さcm	幅広mm	重量g	線	厚	産	所	注	所	出典・特記事項
1	平安	磁器瓦葺	11.5	0.9	0.2	192g	内輪式半輪	扁	菊花唐中隆型	各務原市新加 平力藤神社遺	所	各務原市史	所定・出典・特記事項
2	平安	山吹瓦葺	10mm余り	0.5					扁	繁志公型	同	同	同
3	平安	山吹瓦葺	10mm余り	0.5					上	同	同	同	同
4	平安	山吹瓦葺	10mm余り	0.5					上	八百津町 大谷神社遺	同	同	同
5	平安	山吹瓦葺	9.2						上	伊勢市西野 聖徳白山神社遺	同	同	同
6	平安	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
7	平安	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
8	平安	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
9	平安	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
10	平安	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
11	鎌倉	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
12	鎌倉	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
13	鎌倉	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
14	鎌倉	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
15	鎌倉	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
16	鎌倉	山吹瓦葺	11.4	0.8	0.4	205g	内輪式半輪	扁	略花唐大方向亀型	各務原市新加 平力藤神社遺	所	各務原市史	所定・出典・特記事項
17	鎌倉	山吹瓦葺	10.8×11.0				外輪式半輪	扁	略花唐大方向亀型	上取原市中野町 上取原中長	同	同	同
18	鎌倉	山吹瓦葺	19.5						上	白鳥町吉原 長徳神社遺	同	同	同
19	鎌倉	山吹瓦葺	11.5						上	同	同	同	同
20	鎌倉	山吹瓦葺	11.5						上	同	同	同	同
21	鎌倉	山吹瓦葺	14.0×10.6						上	同	同	同	同
22	鎌倉	山吹瓦葺	6.8						上	同	同	同	同
23	鎌倉	山吹瓦葺	9.8						上	同	同	同	同
24	鎌倉	山吹瓦葺	9.8						上	同	同	同	同
25	鎌倉	山吹瓦葺	9.8						上	同	同	同	同
26	鎌倉	山吹瓦葺	9.8						上	同	同	同	同
27	鎌倉	山吹瓦葺	8.5						上	同	同	同	同
28	鎌倉	山吹瓦葺	8.5						上	同	同	同	同
29	鎌倉	山吹瓦葺	11.3	0.6	0.5	257g	筒弁式半輪	扁	略花唐大方向亀型	各務原市新加 平力藤神社遺	所	各務原市史	所定・出典・特記事項
30	鎌倉	山吹瓦葺	10.7	0.7	0.25	304g	筒弁式半輪	扁	略花唐大方向亀型	神岡町吉田1788	同	同	同
31	鎌倉	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
32	鎌倉	山吹瓦葺	11.0	0.9					上	同	同	同	同
33	鎌倉	山吹瓦葺	8.0	0.45					上	同	同	同	同
34	鎌倉	山吹瓦葺	7.8	1.0					上	同	同	同	同
35	鎌倉	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
36	鎌倉	山吹瓦葺	36.0						上	同	同	同	同
37	鎌倉	山吹瓦葺	10.4						上	同	同	同	同
38	鎌倉	山吹瓦葺	11.8	1.2	0.5	450g	筒弁式半輪	扁	略花唐大方向亀型	尾花野神社遺	同	同	同
39	鎌倉	山吹瓦葺	11.8	1.2	0.5	497g	筒弁式半輪	扁	略花唐大方向亀型	尾花野神社遺	同	同	同
40	鎌倉	山吹瓦葺	12.0	1.4	0.5	384g	筒弁式半輪	扁	略花唐大方向亀型	尾花野神社遺	同	同	同
41	鎌倉	山吹瓦葺	24.6	0.6	0.5	860g	筒弁式半輪	扁	略花唐大方向亀型	尾花野神社遺	同	同	同
42	不明	山吹瓦葺							上	尾花野神社遺	同	同	同
43	不明	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
44	不明	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
45	不明	山吹瓦葺							上	同	同	同	同
46	平安	山吹瓦葺	11.4	0.9	0.6	236g	筒弁式半輪	扁	略花唐大方向亀型	尾花野神社遺	同	同	同
47	平安	山吹瓦葺							上	尾花野神社遺	同	同	同

① 尾花野氏の集居に一部加算

### 3. 木製品

木製品 (1001) は、和鏡埋納遺構より和鏡と共に (和鏡の上に重なるようにして) 出土した。長径約10.2cm、短径約8.4cm、厚さ0.8~1.2cmの円盤形を呈しており、元の形については不明であるが、円形合子型の鏡筐の上板の可能性が考えられる。<sup>1)</sup>

針葉樹の板目材を使用しており、ヒノキ科ヒノキ属と考えられる (第4章)。

表面 (第81図左側) はあまり腐食を受けていないように思われるが、加工痕については不明である。裏面 (右側) は、かなり腐食を受けているが部分的に黒色の部分がみられ、元は全体に塗ってあったものと考えられる。この黒色の物質については、黒漆の可能性も考えられたため分析を行なったが、明瞭な下地や塗膜は観察できなかった。ただし、生漆が浸透している可能性は考えられるとのことである (第4章)。

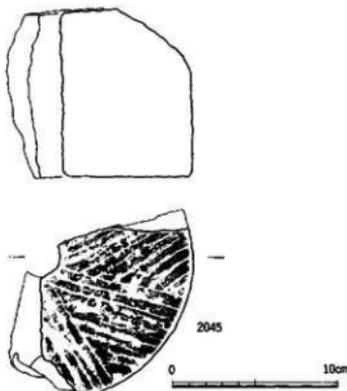
1) 京都国立博物館 久保智康氏の御教示による。

### 4. 茶臼

1点 (2045) 出土した。上臼の一部で欠損により4分の1程度が残存している。径は約19.2cm、中心の穴 (供給口) の口径は約3.2cmで、高さは10.2cmである。上の面は中央の供給口に向かってゆるやかに下がっている。摺り合わせ面 (下の面) の目は8分角で、1区角に9本の副溝が0.6cmのほぼ等間隔で刻まれている。摺り合わせ面はよく磨耗し、副溝もかなり荒れており、その使用の度合いがうかがえる。石材は、安山岩である。<sup>1)</sup>

1) 戸入村平遺跡でも、茶臼 (安山岩製か) 7点が出土している。また山手宮前遺跡では石臼2点が出土している (第8集)。

(第4節 小谷和彦)



第82図 茶 臼

## 第4章 自然科学分析

本書では、上開田村平遺跡の自然科学分析として、和鏡と共に出土した木製品の樹種同定および木片表面の黒色物質の分析、焼礫集積遺構（SI3）出土炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定、土坑出土炭化材の樹種同定および種実同定、便所様遺構（SK20・5・6・10・11）の土壌分析を髙バレオ・ラボ、柳吉田生物研究所および岐阜県公衆衛生検査センターに依頼して行った。以下その報告を掲載する。

なお、和鏡の紐の分析および中世墓（SK98）より出土した人間の歯の鑑定結果については本文中に掲載した。また、土坑34（SK34）出土黒曜石片の原産地分析については、霧ヶ峰産との報告を得ている。<sup>1)</sup>

### 1) 第11集 戸入村平遺跡 P304

#### 第1節 木製品の分析

##### (1) 岐阜県上開田村平遺跡出土木製品の樹種調査結果

柳吉田生物研究所 汐見 真  
京都造形芸術大学 岡田 文男

上開田村平遺跡出土の木製品の調査結果を報告する。調査方法は、木製品の表面から安全カミソリで木口、柀目、板目の各切片を採取し検鏡したものである。

ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)

試料 和鏡と共に出土した木製品

木口では仮導管をもち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柀目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。

以上の検鏡結果から、上記試料はヒノキ科ヒノキ属と考えられる。

〈参考文献〉

- |           |                                 |            |
|-----------|---------------------------------|------------|
| 島地 謙・伊藤隆夫 | 「日本の遺跡出土木製品総覧」                  | 雄山閣 (1988) |
| 島地 謙・伊藤隆夫 | 「図説木材組織」                        | 地球社 (1982) |
| 北村四郎・村田 源 | 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」                | 保育社 (1979) |
| 〈使用顕微鏡〉   | Nikon MIKROFLEX UFX-DX Type 115 |            |

##### (2) 岐阜県上開田村平遺跡より和鏡と共に出土した木片表面の黒色物質の分析

京都造形芸術大学 岡田 文男

木片表面の黒色部分から微少片を採取し、薄片に仕上げた断面の顕微鏡観察を行い、黒色物質について検討した。その結果写真断面に見られるように(図版56)、木材表面近くが黒色化しているが、明瞭な下地や塗膜は観察できなかった。但し生漆が浸透している可能性は考えられる。

## 第2節 炭化材の分析

### (1) 上開田村平遺跡 SI3 出土炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定値

植田弥生・藤根 久 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

当遺跡は岐阜県揖斐郡森橋村上開田村平に所在し、周囲は標高700m前後の山に囲まれその山間部を北西から南東に流下する揖斐川の右岸の標高約300mの河岸段丘上に立地する。ここでは縄文時代早期の焼礫集積遺構 SI3 から出土した炭化材173点の樹種同定結果と2試料の放射性炭素年代測定結果を報告する。

SI3は径約4m、深さ約20cmの円形で縄文時代早期の焼礫集積遺構としては規模が大きく、5~30cm大の被熱を受けた円礫が多数出土し、これらの礫に混じり多量の炭化材が出土した。山間部のそして縄文時代早期のひとつの集積遺構から出土した多数の炭化材樹種が検討された遺跡はあまり知られていない。従って当遺跡の炭化材調査は今まで知られていない山間部の縄文時代早期の木材利用とその木材を入手した遺跡周辺の森林環境を知る貴重な資料である。

#### 2. 試料と樹種同定の方法

遺構に散在していた円礫を取り上げた後の底面付近より出土した炭化材173点を樹種同定した。試料は遺構をSW区、NW区、NE区、SE区に4分割し、その出土位置と番号(第83図)および大きさが記録され取り上げられている。遺構の底面付近からは多数の不定形ピットが検出されこのような発掘状況から、竪穴住居跡を焼礫集積遺構として転用した可能性も考えられている。炭化材は礫を暖め恒温を維持して調理や暖を取るための燃料材であったと考えられるものである。

放射性炭素年代用の試料は、比較的大きな炭化材で異なる樹種であり出土位置も離れているNW19とSW30の2試料について行われた。測定は学習院大学の木越邦彦教授に依頼した。

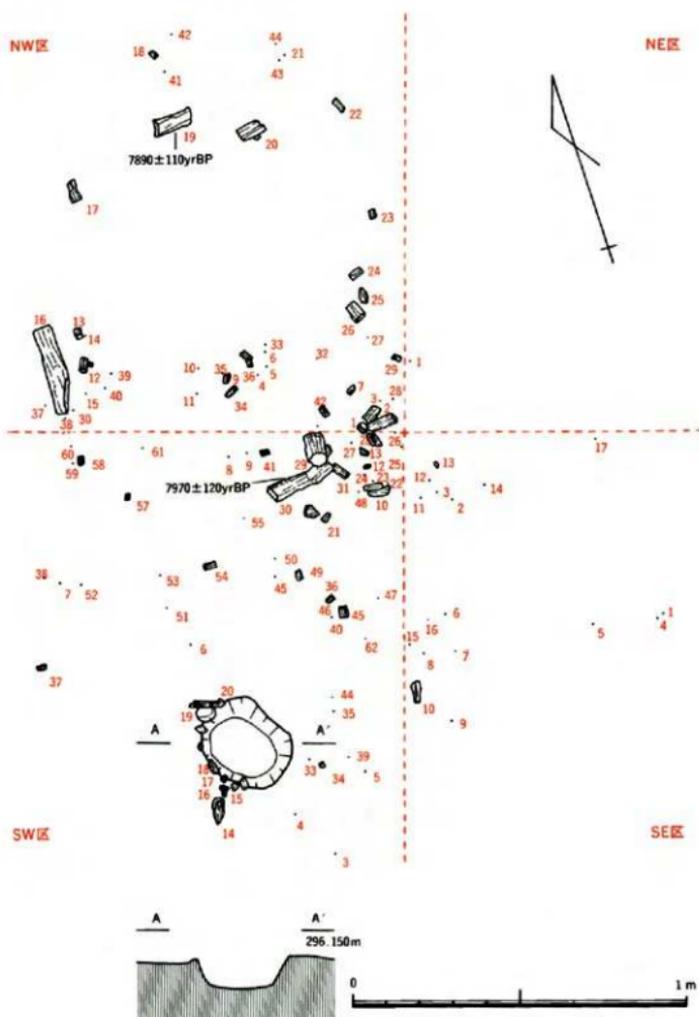
樹種同定は炭化材の3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察を行った。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮な平滑面を出し、接線断面(板目)と放射断面(柾目)は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

#### 3. 結果

試料ごとの同定結果を第27・28表に示し、放射性炭素年代の測定値は各試料の下段に記した。第29表に各分類群ごとの出土点数を集計した。

放射性炭素年代の測定結果は、NW19(カツラ)は $7890 \pm 110$ yrBP (B. C. 5940, GaK 17451)、SW30(クリ)は $7970 \pm 120$ yrBP (B. C. 6020, GaK-17452)であった。年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。2試料ともに約7900yrBPの年代値が得られたことから、SI3は考古遺物や発掘状況から考えられていた縄文時代早期の遺構であることが支持された。

炭化材の樹種同定は、試料の不明(欠番とした)や組織の状況が悪く同定できなかった試料(不可



第83図 SI3炭化材出土状況と取り上げ番号

とした)を除き、173点を観察した結果、23分類群が検出された。クスノキ科、ユズリハ属、散孔材A、散孔材B以外はすべて落葉広葉樹材であった。クスノキ科は現在の立地環境から落葉性のクロモジ属と思われるが材組織からは確定できていない。クリが48点で最も多く、次にブナ属の30点、ヤシヤブシ亜属24点、カエデ属18点、コナラ節12点、エノキ属とカツラが各6点、トネリコ属が5点であり、あとの分類群は3点以下である。クリ、ブナ属、ヤシヤブシ亜属、カエデ属、コナラ節の順に出土数が特に多く全体の約76%を占めていた。炭化材は遺構の中央部からSW区とNW区にかけて多く分布しており、大きな炭化材も多い(第15図)。出土数が多かったクリとカエデ属はすべての地区から出土し、そのほかの樹種も特に偏った産出状況は見られなかった。

以下に樹種同定の根拠とした材組織の記載を分類順に記す。

1) ヤシヤブシ亜属 *Alnus* subgen. *Alnaster* カバノキ科 図版57 1a.-1c. (SW 2) 2a.-2c. (SW54)

単独または2～3個の小型の管孔が複合し分布数はやや疎らな散孔材。散在状と接線状の木部柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は20本前後の階段穿孔である。放射組織は単列同性で集合放射組織は見られず一部で放射組織がやや密に集まる部分が見られた程度である。放射組織と道管との壁孔は小型で交互状に密在する。

ヤシヤブシ亜属は山地に生育する落葉小高木または低木である。寒帯から温帯上部に生育するミヤマハンノキ、暖帯から温帯の山中の痩せ地や崩壊地に生育するヒメヤシヤブシ、関東から紀伊半島の暖帯の海岸近くの山地に分布するオオバヤシヤブシ、本州南部太平洋側に分布するヤシヤブシがある。

2) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* subgen. *Alnus* カバノキ科 図版57 3a.-3c. (NW39)

小型の管孔が放射方向に2～数個複合し分布し、短接線状の柔組織が顕著で、集合放射組織の部分で年輪界が樹心方向に引き込まれる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は階段状である。放射組織は異性、単列のものと集合状のものがあり、道管との壁孔は小さく交互状に密在する。

ハンノキ亜属は暖帯から亜寒帯の陽光地に生育する落葉樹で7種が含まれる。低湿地に普通のハンノキ、川岸に生育するカワラハンノキ、山中に生育するミヤマカワラハンノキ・ヤマハンノキ・ケヤマハンノキなどがある。材組織からこれらを識別することはできていない。

3) ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版58 4a. 4c. (SW 4)

丸みをおびた小型の管孔が密在し、晩材部では極めて小型となり分布数も減る散孔材。道管の壁孔は交互状でその孔口はレンズ状に大きく水平に開いている部分もあり、穿孔は階段数が10～20本の階段穿孔と単穿孔がある。放射組織は異性、1～3細胞幅のものと10細胞幅以上で背の高い広放射組織がある。

ブナ属は温帯の極相林の主要構成樹種の落葉高木である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより低地から生育しているイヌブナの2種がある。

4) コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版58 5a.-5c. (SW52)

年輪の始めに中型～大型の管孔が1層配列し、晩材部では薄壁で角形の小型管孔が火炎状や放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

5) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版58 6a.-6c. (NW51)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し徐々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火災状に配列し、木部柔組織が接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

6) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版59 7a.-7c. (NW34)

年輪の始めに中型の管孔が1～2層配列し、晩材部では小型の管孔が集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形である。ケヤキの放射組織の上下端には結晶細胞が顕著に見られるのが特徴であるが当遺跡の試料では不明瞭であった。エノキ属の材組織とも類似するが放射組織の鞘細胞が見られないためケヤキと同定した。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅いが狂いが出やすいので十分な乾燥が必要な材である。

7) エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版59 8a.-8c. (SW90)

中型の管孔が1～2層配列し、晩材部では非常に小型の管孔が多数集合し塊状・斜状・接線状に配列する散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単一である。放射組織は方形と平伏細胞からなる異性で縁に鞘細胞がある。

エノキ属は落葉性の高木で、本州以南の低地から山地に普通のエノキ、北海道以南の山地に生育するエゾエノキ、近畿以西の山地にまれに生育するコバノチョウセンエノキがある。

8) カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 図版59 9a.-9c. (NW47)

小型で多角形の管孔が年輪内に密にし年輪界ではやや径を減じ、管孔の占有面積が多い散孔材。道管の壁孔はまばらな交互状あるいは階段状で水平に開いたその孔口の長さは不揃いであり、穿孔は横棒の数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、1～3細胞幅、多列部の上下端に方形・直立細胞が単列で1～3細胞層ある。

カツラは北海道から九州の暖帯から温帯の渓谷に生育する落葉高木である。

9) クスノキ科 Lauraceae 図版60 10a.-10c. (NW54)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合しやや疎らに分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細かならせん肥厚がある。放射組織は平伏・方形細胞を含む異性、1～2細胞幅、上下端に大きな油細胞が見られる。管孔が大きく、油細胞の出現頻度の高いクスノキ以外の樹種であるが各属の材組織は類似しておりこれ以上は区別できなかった。

クスノキ科は主に暖帯に分布する常緑性の高木または低木であるが、温帯下部の山中に主に生育するクロモジ属は落葉性であり、生育地から推定するとクロモジ属の可能性が高い。

10) ヤマザクラ *Prunus jamosakura* Sieb. et Zucc. バラ科 図版60 11a.-11c. (NW17)

小型の管孔が様々な方向に複合し徐々に径を減じながら均一に散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性に近い異性、3細胞幅のものが多い。

ヤマザクラは関東以西の暖帯～温帯の山中に生育する落葉高木である。

11) ユズリハ属 *Daphniphyllum* ユズリハ科 図版60 12a.-12c. (NW60)

非常に小型の管孔がほぼ単独で均一に分布する散孔材。道管の壁孔はまばらな交互状または階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、1~2細胞幅、2細胞幅部分は膨らまずその上下端の単列部とはほぼ同じ幅であり、道管との壁孔は交互状または階段状である。

ユズリハ属は本州中南部以南の暖帯の海岸や山中に生育する常緑高木または低木である。本州中南部以南の暖帯に分布するユズリハとその変種で本州北中部の日本海側から北海道に分布するエゾユズリハ、本州中南部以南の暖帯~亜熱帯に分布するヒメユズリハがある。

12) ヌルデ *Rhus javanica* L. ウルシ科 図版61 13a.-13c. (SW26)

年輪の始めに中型の管孔が孔圏を形成し徐々に径を減じ、晩材部では非常に小型の管孔が塊状や放射方向に複合して接線状や斜状に配列する環孔材。木部柔組織は周囲状、特に晩材部では複合管孔の周囲に多い。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管には明瞭ならせん肥厚がある。放射組織は異性、1~2細胞幅、輪郭はやや不齊、道管との壁孔はやや大きなレンズ状の孔口が交互状に配列する。

ヌルデは北海道以南の温帯から熱帯にまで広く分布し山野に普通の落葉小木である。

13) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版61 14a.-14c. (SW63)

小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合し均一に分布し年輪界は不明瞭な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1~2細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。軸方向に連なる結晶細胞のストランドがある。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹で約26種と多くの変種が知られている。

14) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 図版61 15a.-15c. (SW47)

小型~中型の管孔が単独または2~数個が複合し、年輪界でやや径を減じる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性、道管との壁孔の孔口はやや大きくハチの巣状である。

トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木である。

15) ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科 図版62 16a.-16c. (SB8)

年輪の始めに中型の管孔が1~2層配列し、晩材部は単独または放射方向に2~3個が複合した非常に小型で厚壁の管孔が周囲状・翼状の柔組織に囲まれ分布する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、1~4細胞幅、上下端に方形・直立細胞が単列で伸び、結晶細胞がある。

ケンボナシ属は暖帯の山中に生育する落葉高木である。本州・四国に分布するケンボナシと北海道から九州に広く分布するケンボナシがある。

16) キブシ *Stachyurus praecox* Sieb. et Zucc. キブシ科 図版62 22a.-22c. (NW12)

非常に小型の管孔がほぼ単独で均一に分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が30本前後の階段穿孔、内腔にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1~2細胞幅、上下端の単列部は方形・直立細胞からなり、道管との壁孔は小型で交互状に配列する。散在柔細胞がある。

キブシは北海道以南の暖帯から温帯の山野に生育する落葉低木または小高木である。

17) ウコギ属 *Acanthopanax* ウコギ科 図版62 17a.-17c. (SE4)

複数の小型管孔が複合し斜状や波状に配列し、年輪始めの管孔はやや大きい散孔材。道管壁孔の孔口は大きく、穿孔は単一である。放射組織は異性、主に3~4細胞幅の紡錘形、道管との壁孔もやや大きく交互状である。

ウコギ属は暖帯から温帯の山中に生育する落葉低木で、北海道から本州に普通に生育するヤマウコギ、北海道以南の浅山に分布するケヤマウコギ、近畿地方以西に分布するオカウコギなどがある。ただしコシアブラの材は、次に記すコシアブラの材組織記載の特徴により他のウコギ類とは区別される。

18) コシアブラ *Acanthopanax sciadophylloides* Fr. et Sav. ウコギ科 図版62 18a.-18c. (SW71)

年輪の始めに中型~やや小型の管孔が単独で間隔を開け配列し、晩材部は非常に小型の管孔が単独または2~数個が放射方向や斜状に複合し分布する環孔材。道管の壁孔は孔口が大きく交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、おもに2細胞幅、道管との壁孔も孔口が大きく交互状である。

コシアブラは落葉高木で、北海道以南の山地に普通に見られ、材は年輪の始めにやや大型の管孔が間隔をあけて配列することから他のウコギ類とは区別される。

19) リョウブ *Clithra barvinervis* Sieb. et Zucc. 図版61 19a.-19c. (SW1)

中型の管孔がおもに単独で散在する散孔材。年輪始めと年輪界では管孔の径がやや小さい。道管の壁孔は交互状、穿孔は階段数の多い階段穿孔である。放射組織は異性、単列と3細胞幅の紡錘形のものも多く、直立細胞は非常に大きい。

北海道南部の暖帯から温帯下部の山中に普通の落葉高木である。

20) エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版61 20a.-20c. (SW37)

小型で厚壁の管孔が単独または2~4個が放射方向に複合して分布し、晩材部では径が減少し分布数も減る散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は横棒数が少ない階段穿孔である。放射組織は異性、1~4細胞幅、多列部の上下端は方形・直立細胞からなり、道管との壁孔は小型で交互状である。

エゴノキ属は暖帯から温帯下部の山野や川辺に生育する落葉高木である。エゴノキ・ハクウンボク・コハクウンボクがある。

21) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版61 21a.-21c. (SW33)

中型~大型の管孔が2~3層配列し、晩材部は単独または2個が複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材。周囲状柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、1~3細胞幅、道管との壁孔は小さく交互状である。

トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木で、シオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。

22) 散孔材A diffuse-porous wood A 図版62 23a.-23c. (SE14)

非常に小型の管孔が単独または2~3個が複合し散在している散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は階段穿孔で横棒は太く明瞭であるがその数は状況が悪く確認できなかった。放射組織は同性に近い異性、1~2細胞幅、道管との壁孔は対列状で孔口が大きい部分が一部で見られた。分類群は絞れなかった。

23) 散孔材B diffuse-porous wood B 図版62 24a.-24c. (SW82)

小型～中型の丸い管孔が単独または主に2～3個が複合して分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、1～3細胞幅である。カエデ属の根材に似るが、道管内腔のらせん肥厚は確認できておらず、分類群は絞れなかった。

#### 4. まとめ

当遺跡が所在する徳山地域は北陸地方と東海地方の境界に位置し、四方を高い山に囲まれている。現在の徳山地域の植生はスギ・ヒノキの植林やミズナラ・クリなどの2次林が多いが、潜在自然植生はブナ・ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林帯～クリを中心とする中間温帯林である(千藤, 1994、藤岡, 1997)。縄文時代早期のSI3から出土した炭化材の樹種構成は、ブナ属・コナラ節・クリ・カエデ属・コシアブラ・カツラ・トチノキ・リョウブなどまさに冷温帯落葉広葉樹林から中間温帯林の構成樹種と類似していた。検出された炭化材173点からは23分類群が検出され、様々な樹種を利用していたことが明らかになった。その中でも特にクリが48点と多く、次にブナ属、ヤシャブシ亜属、カエデ属が多くこれらが全体の76%を占めていた。しかし当時も生育していたであろうミズナラやコナラなどが属するコナラ節の材は12点であり、クリやブナ属に比べ以外に出土点数は少なかった。

千野(1991)はおもに関東地方の資料であるが、縄文時代の炉穴・集石・住居跡の炉跡から出土した燃料材を検討した結果、クリが多いことを示し、またひとつの遺構から出土した種類数は1種のみか1～2種類であったことを指摘している。当遺跡の結果もクリが多い点では千野(1991)と同様であったが、種類数は23分類群も検出され多かった。岐阜県北東部の山間部に位置する西田遺跡の縄文時代早期の3基の集石遺構から出土した炭化材29点の樹種は、クマシデ属が20点で最も多くクワ属とカツラが各3点、ブナ属・コナラ節・クリが各1点であり、各集石遺構から出土した種類数は1～3分類群であった(植田, 1997)。西田遺跡ではクリは少なくクマシデ属が多かった。当遺跡の出土樹種数が多いのは検討試料数が多かったからなのか、西田遺跡のようにクリが優占しない遺構はどのような分布範囲にあるのかなど、今後の調査の蓄積が必要である。

#### 引用文献

- 千野裕道、1991、縄文時代に二次林はあったか—遺跡出土の植物性遺物からの検討—、215-249、「研究論集X」、東京都埋蔵文化財センター。  
 千藤克彦、1994、自然環境、1-2、「戸入村平遺跡」、水資源開発公団 財団法人岐阜県文化財保護センター。  
 藤岡比呂志、1997、自然環境、1-5、「山手宮前遺跡」、水資源開発公団 財団法人岐阜県文化財保護センター。  
 植田弥生、(1997)、西田遺跡出土炭化材の樹種同定、「西田遺跡」、岐阜県土木部 財団法人岐阜県文化財保護センター。

第27表 焼礫集積遺構 SI 3 出土炭化材の樹種同定結果(1)

地点 No.	樹 種	木口径と全長 L (mm)	備 考	地点 No.	樹 種	木口径と全長 L (mm)	備 考
SW 1	リョウブ	25×14 L 25		SW 46	ブナ属	21×11 L 31	
SW 2	ヤシロシ亜属	10×6 L 20		SW 47	カエデ属	18×15 L 22	
SW 3	ブナ属	7×5 L 8		SW 48	クリ	14×13 L 21	
SW 4	ブナ属	13×13 L 25		SW 49	ブナ属	13×8 L 14	
SW 5	エノキ属	6×5 L 7		SW 50	クリ	13×15 L 20	
SW 6	ブナ属	10×6 L 13		SW 51	クリ	16×12 L 16	
SW 7	クリ	16×15 L 15		SW 52	コナラ属	20×6 L 23	
SW 8	クリ?	7×3 L 17		SW 53	コナラ属	17×8 L 18	
SW 9	クリ	8×3 L 16		SW 54	ヤシロシ亜属	22×15 L 34	
SW 10	ヤシロシ亜属	38×31 L 62		SW 55	ブナ属	24×15 L 21	
SW 11	ヤシロシ亜属	6×3 L 9		SW 56	ブナ属	4×4 L 20	
SW 12	クリ	17×10 L 18		SW 57	クリ	4×2 L 10	
SW 13	ブナ属	20×16 L 24		SW 58	ヤシロシ亜属	30×18 L 21	
SW 14	ブナ属	18×12 L 48		SW 59	クリ	4×8 L 15	
SW 15	ブナ属	23×17 L 29		SW 60	コナラ属	12×9 L 14	
SW 16	ケヤキ	25×23 L 43		SW 61	コナラ属	7×5 L 9	
SW 17	ケヤキ	19×18 L 49		SW 62	ブナ属	16×16 L 20	
SW 18	欠番			SW 63	トナノキ	10×7 L 18	
SW 19	カエデ属	26×17 L 34		SW 64	クリ	22×11 L 25	
SW 20	カエデ属	36×27 L 26		SW 65	ヤシロシ亜属	15×12 L 21	
SW 21	ハンノキ芽属	16×12 L 21		SW 66	コナラ属	25×22 L 24	
SW 22	ブナ属	13×7 L 21		SW 67	コナラ属	21×19 L 37	
SW 23	ヤシロシ亜属	7×5 L 11		SW 68	ヤシロシ亜属	11×8 L 14	
SW 24	ブナ属	9×7 L 17		SW 69	コナラ属	19×13 L 28	
SW 25	クリ?	11×9 L 14		SW 70	コナラ属	24×21 L 32	
SW 26	クリ	13×9 L 16		SW 71	コシアラ	24×16 L 28	
SW 27	クリ	25×23 L 32		SW 72	ヤシロシ亜属	27×17 L 41	
SW 28	クリ	24×16 L 48		SW 73	クリ	13×12 L 16	
SW 29	ケヤキ	10×4 L 17		SW 74-1	ヤシロシ亜属	25×20 L 20	
SW 30	クリ	50×30 L 180		SW 74-2	ブナ属	L	
*C 測定値: 7970±120yrBP GaK-17452				SW 75	ヤシロシ亜属	20×15 L 19	
SW 31	カエデ属	28×20 L 32		SW 76	ブナ属	20×13 L 25	
SW 32	ブナ属	12×7 L 12		SW 77	ブナ属	20×16 L 30	
SW 33	トネリコ属	22×10 L 24		SW 78	ブナ属	18×14 L 22	
SW 34	ヤシロシ亜属	22×14 L 24		SW 79	クリ	18×16 L 18	
SW 35	カエデ属	5×4 L 15		SW 80	ブナ属	10×11 L 16	
SW 36	ヤシロシ亜属	11×10 L 16		SW 81	ブナ属	14×13 L 17	
SW 37	エゴノキ属	22×25 L 33		SW 82	散孔材B	14×10 L 19	
SW 38	ヤシロシ亜属	13×9 L 24		SW 83	ヤシロシ亜属	20×14 L 26	
SW 39	カエデ属	20×11 L 22		SW 84	ブナ属	13×9 L 11	
SW 40	散孔材A	18×18 L 30		SW 85	ブナ属	9×18 L 37	
SW 41	クリ			SW 86	クリ	16×8 L 19	
SW 42	ブナ属	15×8 L 22		SW 87	ブナ属	9×4 L 16	
SW 43	コナラ属	17×13 L 27		SW 88	コナラ属	22×16 L 20	
SW 44	ブナ属	24×12 L 14		SW 89	ヤシロシ亜属	20×14 L 18	
SW 45	カエデ属	18×14 L 31		SW 90	エノキ属	20×11 L 30	

第28表 焼礫集積遺構 SI 3 出土炭化材の樹種同定結果(2)

地点 No.	樹 種	木口径と全長 L (mm)	備 考	地点 No.	樹 種	木口径と全長 L (mm)	備 考
NW 1	クリ	8×13 L 12		NW 9	トネリコ属	19×10 L 24	
NW 2	クリ	33×20 L 58		NW 10	カエデ属	26×24 L 16	
NW 3	カエデ属	16×14 L 12		NW 11	ブナ属	12×10 L 17	
NW 4	欠番			NW 12	ガマズミ属	22×12 L 60	
NW 5	クリ	16×13 L 33		NW 13	ヤシロシ亜属	28×16 L 27	
NW 6	クリ	20×11 L 22		NW 14	クリ	17×12 L 20	
NW 7	コナラ属	19×13 L 35		NW 15	カエデ属	20×19 L 20	
NW 8	ブナ属	22×16 L 26		NW 16	ヤシロシ亜属	40×31 L 148	

地点No	樹種	木口径と全長L(mm)	備考
NW 17	ヤマザクラ	19×4 L 16	
NW 18	カツラ	16×12 L 29	
NW 19	カツラ	33×59 L121	
		<sup>14</sup> C 測定値: 7890±110yrBP GaK-1745I	
NW 20	クリ	14×13 L118	
NW 21	コシアブラ	20×12 L 17	
NW 22	ガマズミ属	34×22 L 85	
NW 23	カエデ属	11×5 L 15	
NW 24	カエデ属	24×30 L 44	
NW 25	カエデ属	45×25 L 70	
NW 26	ヌルデ	70×40 L100	
NW 27	カエデ属	16×9 L 29	
NW 28	トネリコ属	13×8 L 17	
NW 29	クリ	67×43 L117	
NW 30	ヤシヤブシ亜属	18×12 L 23	
NW 31	ブナ属	17×14 L 25	
NW 32	クリ	10×11 L 28	
NW 33	トネリコ属	12×11 L 17	
NW 34	エノキ属	12×8 L 27	
NW 35	クリ	19×13 L 18	
NW 36	クリ	19×11 L 18	
NW 37	ヤシヤブシ亜属	12×11 L 13	
NW 38	ヤシヤブシ亜属	12×8 L 19	
NW 39	ヤシヤブシ亜属	11×16 L 16	
NW 40	クリ	15×11 L 13	
NW 41	カツラ	17×11 L 15	
NW 42	カツラ	14×8 L 15	
NW 43	クリ	19×8 L 22	
NW 44	クリ	8×6 L 12	
NW 45	カエデ属	15×7 L 19	
NW 46	クリ	16×9 L 20	
NW 47	カツラ	18×11 L 25	
NW 48	カツラ	17×15 L 36	
NW 49	クリ	11×8 L 20	
NW 50	クリ	18×11 L 28	
NW 51	クリ	16×13 L 18	
NW 52	クリ	7×4 L 13	

地点No	樹種	木口径と全長L(mm)	備考
NW 53	欠番		
NW 54	クスノキ科	15×10 L 13	
NW 55	クリ	8×7 L 14	
NW 56	クリ	9×7 L 27	
NW 57	クリ?	12×8 L 13	
NW 58	ブナ属	6×3 L 9	
NW 59	ブナ属	16×10 L 23	
NW 60	ユズリハ属	17×14 L 24	
SE 1	クリ	18×10 L 18	
SE 2	エノキ属	22×23 L 24	
SE 3	エノキ属	12×11 L 23	
SE 4	ウコギ属	13×14 L 19	
SE 5	コシアブラ	25×17 L 29	
SE 6	トチノキ	18×9 L 37	
SE 7	トチノキ	26×13 L 23	
SE 8	ケンボナンシ属	12×8 L 26	
SE 9	ケンボナンシ属	15×12 L 27	
SE 10	欠番		
SE 11	トネリコ属	13×6 L 18	
SE 12	クリ	6×5 L 7	
SE 13	エノキ属	25×17 L 33	
SE 14	散孔材A	7×2 L 7	
SE 15	クリ	15×11 L 17	
SE 16	不可	13×12 L 17	
SE 17	欠番		
SE 18	ヤシヤブシ亜属	18×14 L 19	
SE 19	クリ	32×16 L 34	
SE 20	クリ	9×6 L 11	
SE 21	カエデ属	19×17 L 16	
SE 22	カエデ属	12×8 L 17	
SE 23	クリ	13×7 L 17	
SE 24	ヤシヤブシ亜属	13×12 L 16	
SE 25	クリ	19×11 L 25	
NE 1	カエデ属	14×11 L 14	
NE 2	コナラ属	18×12 L 17	
NR 3	クリ?	14×14 L 19	

第29表 焼燼集積遺構 SI 3 出土炭化材の樹種

分類群	SW	NW	SE	NE	合計
ヤシヤブシ亜属	16	6	2		24
ハンノキ亜属	1				1
ブナ属	25	5			30
コナラ属	10	1		1	12
クリ	19	21	7	1	48
ケヤキ	3				3
エノキ属	2	1	3		6
カツラ		6			6
クスノキ科	1				1
ヤマザクラ	1				1
ユズリハ属	1				1
ヌルデ	1				1
トチノキ	1	2			3

分類群	SW	NW	SE	NE	合計
カエデ属	7	8	2	1	18
ケンボナンシ属			2		2
キヤブシ		2			2
ウコギ属			1		1
コシアブラ	1	1	1		3
リョウブ	1				1
エゴノキ属	1				1
トネリコ属	1	3	1		5
散孔材A	1		1		2
散孔材B	1				1
合計	90	58	22	3	173

## (2) 上開田村平遺跡出土炭化材樹種同定および種実同定

藤根 久・吉川純子 (パレオ・ラボ)

## 1. はじめに

上開田村平遺跡は、開田字北カイ戸に所在する縄文時代中期を主体とする遺跡である。

ここでは、この遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行う。

## 2. 炭化材の処理方法と記載

試料は、実体顕微鏡下で横断面について観察し、同定できる試料と同定できない試料とに分類する。これら同定できない試料と同定される典型試料は、片刃カミソリなどを用いて試料の横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柃目と同義）の3断面について作り、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子製 JSM T-100型）で観察する。

第30表にその結果を示す。樹種の同定は、現生標本との比較により行う。以下に、標本の記載と同定の根拠を示す。

第30表 上開田村平遺跡土坑出土炭化材の樹種

No.	遺構・層位	時代	樹種および種子
35	34土坑	中末～後期	材 : クリ 種子 : クリ・種子(1)、種子破片6個 トチノキ・種子破片(9)、種皮破片(4) 堅果・種子破片3個
36	35土坑	中末～後期	材 : クリ 種子 : クリ・種子破片(10)、トチノキ・種子破片(2)
37	70土坑	中末	種子 : モモ・食痕のある核(1)
38	88七坑	中末	材 : ブナ属・クリ・ハンノキ節 種子 : クリ・種子(1)
39	98土坑	不明	材 : スギ

スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. fil.) D. Don スギ科 図版65 1a~1c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行はゆるやかである（横断面）。分野壁孔は、水平方向に長軸をもった典型的なスギ型で、1分野に2個見られる（放射断面）。放射組織は、柔細胞からなり、2～19細胞高からなる（接線断面）。

以上の形質から、スギの材と同定される。スギは東北地方から九州にかけて分布する常緑針葉樹で、温帯から暖帯にかけて分布する。

ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版65 2a~2c.

丸い小型の管孔がほぼ単独で散在し、晩材部にかけて径を徐々に減ずる散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一あるいは数本の横棒からなる階段状である（接線組織および放射断面）。放射組織は同性で、細胞幅の広い複合放射組織からなる（接線組織）。

以上の形質から、ブナ科のブナ属の材と同定される。日本に分布するブナ属の樹木には、温帯に生育するブナ (*F. crenata*) と中間温帯に分布するイヌブナ (*F. japonica*) の2種類がある。いずれも樹高25~30mに達する落葉広葉樹で、北海道から九州の温帯に分布する。

ハンノキ節 *Alnus* sect. *Gumnothysus* カバノキ科 図版65 3a~3c.

中型の管孔が放射方向または塊状に2~4個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、10本程度の階段状である(放射断面)。放射組織は同性で単列もしくは集合放射組織からなる(接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科のハンノキ属ハンノキ節の材と同定される。ハンノキ節の材には、平野部の水湿地に生育するハンノキ (*A. japonica*)、平野部から山地の斜面にかけて生育するヤマハンノキ (*A. hirsuta*)、そして山地に生育するヤシャブシ (*A. firma*) などが分布している。ハンノキ節の樹木は、いずれも樹高20m、幹径50mに達する落葉広葉樹である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版66 4a~4c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロ - スの見られるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は柔細胞で単列同性であり、時に2細胞幅で、2~20細胞高である(接線断面)。

以上の形質からブナ科のクリ属クリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

### 3. 炭化種実の記載 図版66

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.: 堅果の硬い果皮は炭化するときにはじけ飛んだよう残っていない。子葉の周囲の薄い渋皮も取れている。

モモ *Prunus persica* Batsch: ほぼ完形に近い核を出土した。縦長レンズ形で表面にははっきりした深い溝状の彫紋が縦にはいる。形態としては野モモ型である。ここで出土したものは片側が半円形にえぐられている。歯の跡がはっきりしないが、げっ歯類にかじられた跡と思われる。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume: 種子の破片を出土した。硬い種皮ははがれにくいらしく、炭化しても種子の周囲に付着しているものがある。

堅果: ブナ科、あるいはトチノキなどの果実の種子の部分が炭化して破片になったと思われるが、特徴に欠けるため、種類は不明である。この場合は割れ方がトチノキに似ている。

### 第3節 土 壌 の 分 析

#### (1) 上開田村平遺跡の便所様遺構の土壌分析について

財団法人岐阜県公衆衛生検査センター

##### 1. はじめに

旧徳山村上開田村平遺跡の発掘調査により、便所様遺構として多くの土坑が検出された。これらの土坑の機能を明らかにするために、埋土を採取し、土壌中の遺物を顕微鏡等により観察するとともに、土壌中の成分分析が必要とされる。

便所であることを証明するために、哺乳類の糞便に特有なコプラスタノールの検出及び脂肪酸組成の確認、消化しきれなかった食物残渣の確認、便所特有の昆虫や寄生虫卵の存在の確認をするとともに、土壌の性状分析を行った。

上開田村平遺跡の土壌について顕微鏡観察及び成分分析結果を次に示す。

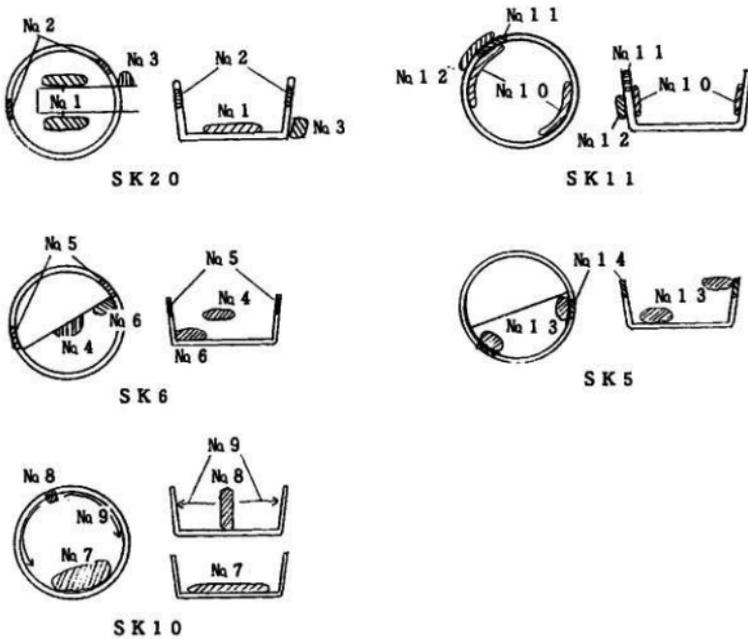
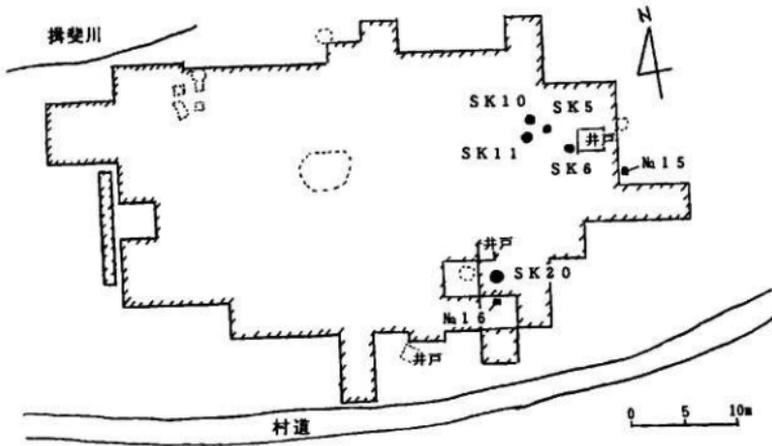
##### 2. 試料採取位置及び試料名

遺構名	SK20			SK 6		
試料No	1	2	3	4	5	6
種 類	底 表 面 部 土	壁 貼 り 粘 土	外 黒 色 側 土	中 心 部 土	底 土 部	壁 貼 り 粘 土

遺構名	SK10			SK11		
試料No	7	8	9	10	11	12
種 類	壁 底 表 面 土 黒	壁 面 底 部 粘 土	壁 付 着 ブ ミ 状 物 質	壁 黒 表 面 上	壁 貼 り 粘 土	壁 外 側 粘 土

遺構名	SK 5		対 照 試 料	
試料No	13	14	15	16
種 類	壁 黒 表 面 土	壁 貼 り 粘 土	黒 色 土	黒 色 土

注) SK 6 及び SK 5 には大きな石が含まれていた。



第84図 上開田村平道跡便所様遺構試料採取位置

### 3. 調査項目

#### 1) 顕微鏡による観察

寄生虫卵及び遺物

#### 2) 土壌中の脂質の分析

##### (1) ステロール

コブラスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンベステロール、スチグマステロール、シトステロール

##### (2) 脂肪酸

パルミチン酸、ヘキサデセン酸、ステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸、アラキジン酸、エイコサジエン酸、アラキドン酸、エイコサペンタエン酸、リグノセリン酸、ネルボン酸

#### 3) 土壌中の一般性状分析

水分、pH、電気伝導率、強熱減量、元素分析（炭素、水素、窒素）、金属類（ケイ素、カルシウム、マグネシウム、鉄、アルミニウム、チタン、リン、ナトリウム、カリウム、マンガン）、水溶性陰イオン（硫酸イオン、塩素イオン）、無機態窒素（アンモニア態窒素、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素）

### 4. 調査方法

#### 1) 顕微鏡による観察

土壌をウォーターフローテーションにより処理し、選別した区分について顕微鏡観察を行った。

ウォーターフローテーションとは、円筒形の水槽内に土壌を入れ、下の水槽側面から水道水を噴出させて泡を発生させ、粘土を分解し、同時に浮遊してくる微細遺物を水槽の上部からあふれさせて採集するものである。

ウォーターフローテーションによりあふれた水を500 $\mu$ mのふるいに通し、通過した水に飽和食塩水を等量入れ、静置した後、上澄について寄生虫卵及び花粉を400倍の顕微鏡で観察した。次に、500 $\mu$ mのふるい上の残渣は炭化種子、材骨及び昆虫等の有無について実体顕微鏡で観察した。また、ウォーターフローテーションにより円筒内に残った土壌についても2000 $\mu$ m及び500 $\mu$ mのふるいで篩分けし、顕微鏡観察を行った。

#### 2) 脂質の分析

##### (1) 脂肪の抽出

土壌約200gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理する。上澄液をろ過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をし、この操作をさらに2回繰り返して脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層をエバポレーターで減圧濃縮して残留脂肪を分離、秤量する。秤量後、クロロホルムに再溶解し、半量をステロール分析用に、残り半量を脂肪酸分析用とする。

##### (2) ステロール

脂肪抽出液に、内部標準溶液(5 $\alpha$  コレスタン)を正確に加え、クロロホルムを揮散させる。これに1N水酸化カリウムエタノール溶液5mlを加え、冷却管を付して静かに約1時間ケン化する。ケン

化終了後、室温に冷却し、容量50mlの分液漏斗に移し、10mlの水で試験管を洗いながら、分液漏斗に入れ、さらにエチルエーテル10mlを加えて振り混ぜる。静置後、下層を先の共栓付き試験管に取り、これにエチルエーテル10mlを加え振り混ぜる。

エーテル層を分液漏斗に移し、さらにこれを繰り返す。抽出液を水で洗浄し、無水硫酸ナトリウムで脱水後、エーテル層を別の共栓付き試験管に少しずつ移す。エーテルを揮散させた後、エタノール1mlに溶解し、ガスクロマトグラフィー(GC)用試料とした。GC用試料をGCに導入して測定した。

測定機器及び条件は次のとおりである。GC：島津製GC-14A、検出器：FID、カラム：SPB 1、30m×0.53mm I.D.、膜厚0.50 $\mu$ m、カラム温度：200℃から300℃まで毎分10℃の速度で昇温、流速：5 ml/min。

### (3) 脂肪酸

脂肪酸抽出液のクロロホルムを揮散し、内部標準物質としてマルガリン酸を正確に加える。ついで0.5N水酸化ナトリウムメタノール溶液6mlを加え、冷却器を付して油滴が消失し、均一な溶液となるまで約10分間水浴上で加熱する。加熱を続けながら冷却器の上部から三フッ化ホウ素メタノール試薬7mlを加え2分間沸騰を続ける。さらにヘキサン5mlを冷却器上部から加え、1分間沸騰を行った後、加熱を止める。

冷却器を外し、ヘキサン溶液がフラスコの首に達するまで塩化ナトリウム飽和水溶液を加える。約1mlのヘキサン溶液を試験管に移し、少量の無水硫酸ナトリウムを加えて脱水し、これをGC用試料とした。GC用試料をGCに導入して測定した。

測定機器及び条件は次のとおりである。GC：島津製GC-14A、検出器：FID、カラム：SUPELCO-WAX10、30m×0.53mm I.D.、膜厚0.50 $\mu$ m、カラム温度：210℃から240℃まで毎分5℃の速度で昇温、流速：5 ml/min。

## 3) 一般性状分析

### (1) 水分

土壌をあらかじめ恒量にした容器にとり、乾燥器で105℃、2～3時間乾燥、放冷後、重量を秤量し、残留物の重量から固形物量を求めたのち、100から固形物量を減じ求めた。

### (2) pH

土壌に水を2.5倍量入れ攪拌後、懸濁液についてガラス電極 pH計を用いて測定した。

### (3) 電気伝導率

土壌に水を5倍量入れ、1時間攪拌後、懸濁液について電気伝導率計を用いて測定した。

### (4) 強熱減量

土壌を風乾後、あらかじめ恒量にした容器にとり、マッフル炉で600℃、1～2時間灰化、放冷後、重量を秤量し、残留物の重量から強熱残分を求める。強熱残分を100から減じ求めたものが強熱減量である。

### (5) 元素分析

土壌を燃焼ボードにとり、元素分析装置に導入、試料を800℃で燃焼させ、その時発生する燃焼ガスから炭素、水素、窒素の含量を求めた。

測定機器は、柳本製 CHNコーダー、MT-5型を用いた。

## (6) 水溶性陰イオン

土壤に水を5倍量入れ攪拌後、ろ過し試料溶液とする。試料溶液をイオンクロマトに導入、測定した。

測定機器及び条件は次のとおりである。イオンクロマト：柳本製L-5000(ノンプレッサー方式)、検出器：電気伝導度、カラム：ShodexIC-524、10cm×4.6mmI.D.、溶離液：2.5mM フタル酸、流速：1.5ml/min。

## (7) 無機態窒素

## ① アンモニア態窒素

土壤約10gに2N塩化カリウム液100mlを正確に加えて1時間振り混ぜた後、静置し、上澄液を傾斜法によってろ過し、試料液とする。試料液一定量を正確にとり、セミマイクロ蒸留法によって蒸留し、4%ホウ酸液でアンモニアを捕集する。

アンモニア捕集液を1/50N硫酸標準液で滴定した。

## ② 亜硝酸態窒素

土壤約20gに硝酸カルシウム0.2gと蒸留水100mlを加え10分間振り混ぜた後、静置、ろ過し試料液とする。

試料液一定量を正確にとり、スルファニルアミド液1mlを加えて混合、5分後N-(1-ナフチル)-エチレンジアミン液1mlを加えてよく混合、20分間放置した後、定容、波長520nmで比色定量した。

## ③ 硝酸態窒素

土壤約10gを蒸留フラスコにとり4%ホウ酸液5mlを吸収液として蒸留する。留出したアンモニアを1/200N硫酸標準液で滴定する。次に、新しく4%ホウ酸液5mlを吸収液とし、蒸留フラスコにスルファミン酸液1mlを加え、よく振り混ぜて亜硝酸態窒素を分解した後、デバルタ合金粉末0.2gを添加し、前と同様にして蒸留を行い、留出液を滴定し、前の滴定値を差し引いて硝酸態窒素量とした。

## (8) 金属類

風乾土壤をテフロン製容器にとり、塩酸及びフッ化水素酸を加え、圧力分解装置を用い、室温で10分間圧分解した後、4%ホウ酸溶液で定容、ろ過し、試料溶液とした。

試料溶液を発光分光分析法により測定を行った。

測定機器及び条件は次のとおりである。高周波プラズマ発光分光分析装置：NIPPON JARELL-ASH製ICP-575II、高周波出力：1.4kW、アルゴンガス：18ℓ/min、補助ガス(プラズマガス)：1.0ℓ/min、キャリアーガス：1.5ℓ/min。

## 5. 調査結果

## 1) 土壤の顕微鏡観察

顕微鏡観察の結果は次のとおりである。

写真に示すように2種類の寄生虫卵が認められた。寄生虫卵は2ヶ所から確認し、No.2は横川吸虫卵、No.3は蛔虫の不授精卵と推定された(図版67)。

横川吸虫卵は、 $28\sim 32\times 15\sim 18\mu\text{m}$  の大きさで、第1中間宿主はカワニナ、第2中間宿主はアユ、シラウオ、ウグイなどの淡水魚で、アユ、シラウオなどを生食することにより感染する。蛔虫卵は、 $83\sim 98\times 40\sim 60\mu\text{m}$  の大きさで、宿主はヒトである。成熟卵の経口摂取により感染する。

遺物は、花粉と思われるものが、No.1～No.8、No.11及びNo.13より確認された。また、 $500\mu\text{m}$  のふるい上の残渣より、種子と思われるものがNo.4及びNo.5より、昆虫の一部と思われるものがNo.5～No.7より確認された。

## 2) 脂質

脂質は、構造的な違いから誘導脂質、単純脂質及び複合脂質に大別される。これらの脂肪群のうち、ステロール、脂肪酸は動植物によって少しずつ組成が異なる。ステロール及び脂肪酸の主な存在部位を第31表及び第32表に示す。

ステロールは、炭素数27 (コレステロール、コプラスタノール) のものは動物に、炭素数28 (エルゴステロール、カンベステロール) のものは微生物に、炭素数29 (スチグマステロール、シトステロール) のものは植物に多く含有する。

脂肪酸は、炭素の鎖がまっすぐにのびた飽和型 (パルミチン酸、ステアリン酸など) と鎖の途中に二重結合のある不飽和型 (オレイン酸、リノール酸、リノレン酸など) がある。飽和型脂肪酸の多い脂肪は獣肉・食肉脂に属する。また、不飽和型脂肪酸の多い脂肪は、植物油・魚油に属する。

第31表 ステロール

ステロール	炭素数	主な存在
コプラスタノール	C27	動物の糞
コレステロール	C27	各種動物
エルゴステロール	C28	酵母、バツカク
カンベステロール	C28	アブラナ、ダイズ
スチグマステロール	C29	ダイズ、カラバルマメ
シトステロール	C29	高等植物

H) 数字は炭素数である。

第32表 脂肪酸

脂肪酸	炭素数	主な存在
パルミチン酸	C16:0	一般動物脂質、木ロウ
ヘキサデセン酸	C16:1	魚油、乳脂、種子油、細菌脂質
ステアリン酸	C18:0	一般動物脂質、牛脂
オレイン酸	C18:1	一般動物脂質
リノール酸	C18:2	一般動物脂質
リノレン酸	C18:3	一般動物脂質
アラキジン酸	C20:0	落花生油、なたね油
エイコサジエン酸	C20:2	魚油
アラキドン酸	C20:4	肝臓、脳、副腎、卵脂質
エイコサペンタエン酸	C24:5	魚油
リグノセリン酸	C24:0	脳複合脂質、みつろう
ネルボン酸	C24:1	脳複合脂質、さめ肝油

H) 数字は炭素数と二重結合の数である。

ステロール及び脂肪酸の分析結果を第33表に、ステロール組成及び脂肪酸組成を第34表と図85及び図86に示した。なお、No.9は試料が少量のため分析は行わなかった。

ステロールの結果は次のとおりである。

コブラスタノールは、No.1～No.5、No.7、No.8、No.10、No.12及びNo.13より検出され、8.3～150 $\mu$ g/kgで、最大値はNo.5であった。

コレステロールは、すべて検出され、66～830 $\mu$ g/kgの範囲で、平均値は397 $\mu$ g/kg、最大値はNo.10であった。

エルゴステロールは、No.5、No.11、No.12及びNo.14より検出され、20～99 $\mu$ g/kgの範囲で、最大値はNo.5であった。

カンベステロールもエルゴステロールと同じ試料で検出され、33～890 $\mu$ g/kgの範囲であった。

スチグマステロールは、No.1、3～14より検出され、70～1,600 $\mu$ g/kgで、最大値はNo.1であった。

シトステロールはすべて検出され、48～1,100 $\mu$ g/kgの範囲で、平均値441 $\mu$ g/kg、最大値はNo.10であった。

対照試料は、No.15、No.16ともコブラスタノールを除いた5種類のステロールが検出され、コレステロール及びシトステロールは試料より高い数値であった。

ステロール組成では、No.4とNo.8、No.10とNo.13、No.11とNo.14及びNo.15とNo.16のパターンが類似していた。

スティグマステロール及びシトステロールは土中での植物腐敗によるものであるが、両方で、45～80%と半分以上を占め、特にNo.1、No.6及びNo.11は70%以上と大半を占めた。また、コレステロール及びコブラスタノールは、動物によるものであるが、両方で、20～50%であった。そのうち、コブラスタノールは0～10%と少ないが、コレステロールが腸管内で微生物分解を受けたものであり、コブラスタノールの検出された試料は糞便が残留することが示唆される。

脂肪酸は、パルミチン酸、ヘキサデセン酸、ステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸及びアラキジン酸の7種類が検出された。これらは主に中級脂肪酸で、そのうちパルミチン酸、ステアリン酸、オレイン酸が多く検出された。

主な脂肪酸の結果は次のとおりである。

パルミチン酸3,900～44,000 $\mu$ g/kg、平均値10,115 $\mu$ g/kg、ステアリン酸730～24,000 $\mu$ g/kg、平均値1,997 $\mu$ g/kg、オレイン酸1,300～53,000 $\mu$ g/kg、平均値8,338 $\mu$ g/kg、リノール酸490～13,000 $\mu$ g/kg、平均値3,566 $\mu$ g/kgであった。

脂肪酸組成は、いずれの試料もほとんど同じでパルミチン酸が20～50%と一番多く、次にオレイン酸が20～40%、ステアリン酸及びリノール酸が10～20%という傾向であった。対照はリノール酸が30～40%と一番多く、次にパルミチン酸、オレイン酸及びステアリン酸が10～30%という傾向であった。

パルミチン酸が一番多いのは、オレイン酸、リノール酸などの不飽和脂肪酸が長い年月の間に一部分解しパルミチン酸が生成したためと思われる。また、オレイン酸は主として動物脂肪に多く含まれるが、根、茎、種子などの植物脂肪にも一部含まれる。

表33表 ステロール及び脂肪酸分析結果

遺構名	SK20			SK6			SK10		
	試料 No.	1	2	3	4	5	6	7	8
脂肪量 (%)	0.076	0.024	0.033	0.030	0.035	0.019	0.024	0.009	
ステロール (μg/kg)									
コブラスタノール	68	50	12	72	150	ND	54	8.3	
コレステロール	760	130	210	330	700	66	280	250	
エルゴステロール	ND	ND	ND	ND	99	ND	ND	ND	
カンベステロール	ND	ND	ND	ND	890	ND	ND	ND	
スタグマステロール	1600	ND	190	78	1100	170	100	100	
シトステロール	960	230	140	260	670	48	520	180	
脂肪酸 (μg/kg)									
バルミチン酸	44000	8100	3900	6100	4600	8500	9600	4500	
ヘキサデセン酸	4000	2800	ND	ND	ND	ND	240	ND	
ステアリン酸	24000	3500	2100	730	2200	3400	4100	1300	
オレイン酸	53000	6700	1300	5200	3000	3800	4600	2300	
リノール酸	13000	3800	ND	490	ND	ND	2400	830	
リノレン酸	5000	ND	ND	ND	ND	ND	1400	ND	
アラキジン酸	2700	1100	1800	1600	1600	1200	1500	520	
エイコサジエン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
アラキドン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
エイコサペンタエン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
リグノセリン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
ネルボン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	

遺構名	SK11			SK5		対照		
	試料 No.	10	11	12	13	14	15	16
脂肪量 (%)	0.041	0.030	0.021	0.023	0.015	0.026	0.024	
ステロール (μg/kg)								
コブラスタノール	40	ND	16	67	ND	ND	ND	
コレステロール	830	350	760	260	240	860	1500	
エルゴステロール	ND	50	98	ND	20	90	120	
カンベステロール	ND	51	710	ND	33	550	390	
スタグマステロール	740	140	640	250	70	46	140	
シトステロール	1100	540	610	270	210	840	1500	
脂肪酸 (μg/kg)								
バルミチン酸	11000	14000	7200	5400	4600	14000	11000	
ヘキサデセン酸	1100	5400	42	ND	400	3500	900	
ステアリン酸	4100	4800	2500	2000	1300	14000	4300	
オレイン酸	5500	11000	4600	4000	3400	22000	12000	
リノール酸	1500	3300	1100	860	1100	32000	21000	
リノレン酸	4300	ND	ND	ND	ND	7000	6100	
アラキジン酸	2100	3300	1700	ND	ND	270	2900	
エイコサジエン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
アラキドン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
エイコサペンタエン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
リグノセリン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
ネルボン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	

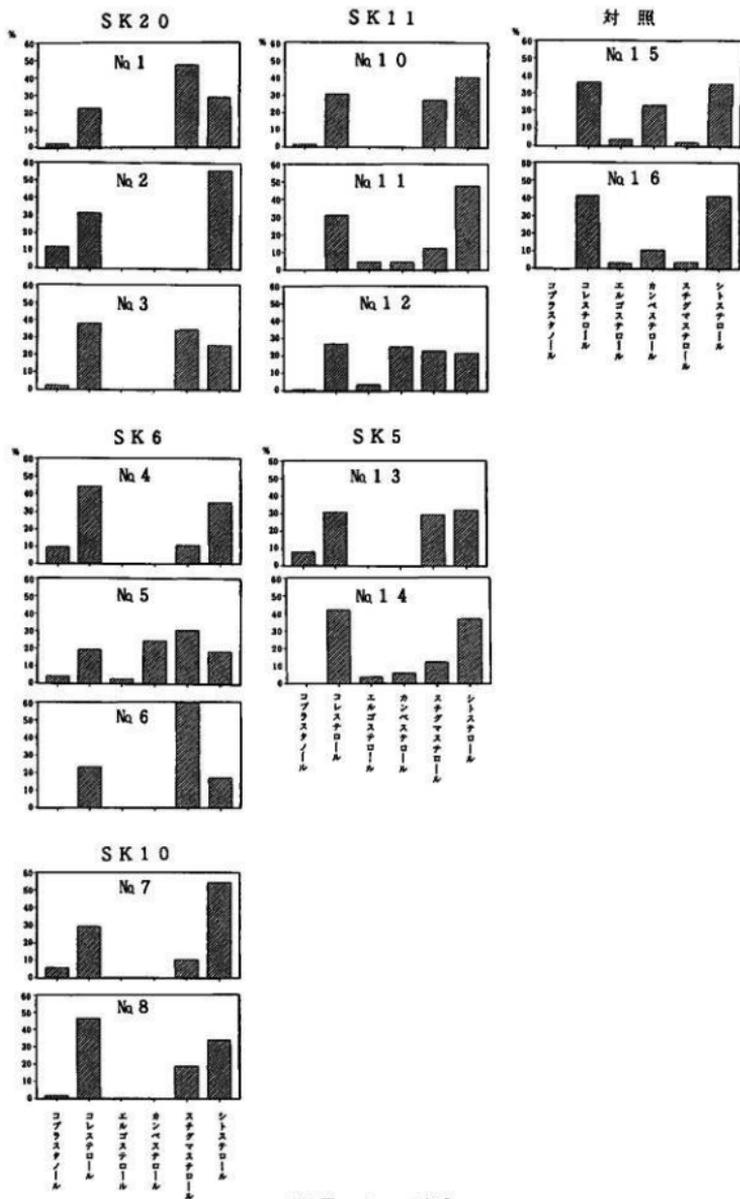
注) ND とは不検出の意味である。

第34表 ステロール組成及び脂肪酸組成

遺構名	SK20			SK6			SK10	
	1	2	3	4	5	6	7	8
試料 No								
脂 肪 量 (%)	0.076	0.024	0.033	0.030	0.035	0.019	0.024	0.009
ステロール (%)								
コプラスタノール	2.0	12.2	2.2	9.7	4.2	ND	5.7	1.5
コレステロール	22.4	31.7	38.0	44.6	19.4	23.2	29.4	46.4
エルゴステロール	ND	ND	ND	ND	2.7	ND	ND	ND
カンベステロール	ND	ND	ND	ND	24.7	ND	ND	ND
ステグマステロール	47.2	ND	34.4	10.5	30.5	59.9	10.5	18.6
シトステロール	28.3	56.1	25.4	35.1	18.6	16.9	54.5	33.4
脂 肪 酸 (%)								
パルミチン酸	30.2	31.2	42.9	43.2	40.4	45.0	40.3	47.6
ヘキサデセン酸	2.7	10.8	ND	ND	ND	ND	1.0	ND
ステアリン酸	16.5	13.5	23.1	5.2	19.3	20.1	17.2	13.8
オレイン酸	36.4	25.8	14.3	36.8	26.3	22.5	19.3	24.3
リノール酸	8.9	14.6	ND	3.5	ND	ND	10.1	8.8
リノレン酸	3.4	ND	ND	ND	ND	ND	5.9	ND
アラキジン酸	1.9	4.2	19.8	11.3	14.0	7.1	6.3	5.5
エイコサジエン酸	ND							
アラキドン酸	ND							
エイコサペンタエン酸	ND							
リグノセリン酸	ND							
ネルボン酸	ND							

遺構名	SK11			SK5		対照	
	10	11	12	13	14	15	16
試料 No							
脂 肪 量 (%)	0.041	0.030	0.021	0.023	0.015	0.026	0.024
ステロール (%)							
コプラスタノール	1.5	ND	0.6	7.9	ND	ND	ND
コレステロール	30.6	30.9	26.8	30.7	41.9	36.0	41.1
エルゴステロール	ND	4.4	3.5	ND	3.5	3.8	3.3
カンベステロール	ND	4.5	25.1	ND	5.8	23.1	10.7
ステグマステロール	27.3	12.4	22.6	29.5	12.2	1.9	3.8
シトステロール	40.6	47.7	21.5	31.9	36.6	35.2	41.1
脂 肪 酸 (%)							
パルミチン酸	37.2	33.5	42.0	44.0	42.6	15.1	18.9
ヘキサデセン酸	3.7	12.9	0.2	ND	3.7	3.8	1.5
ステアリン酸	13.9	11.5	14.6	16.3	12.0	15.1	7.4
オレイン酸	18.6	26.3	26.8	32.6	31.5	23.7	20.6
リノール酸	5.1	7.9	6.4	7.0	10.2	34.5	36.1
リノレン酸	14.5	ND	ND	ND	ND	7.5	10.5
アラキジン酸	7.1	7.9	9.9	ND	ND	0.3	5.0
エイコサジエン酸	ND						
アラキドン酸	ND						
エイコサペンタエン酸	ND						
リグノセリン酸	ND						
ネルボン酸	ND						

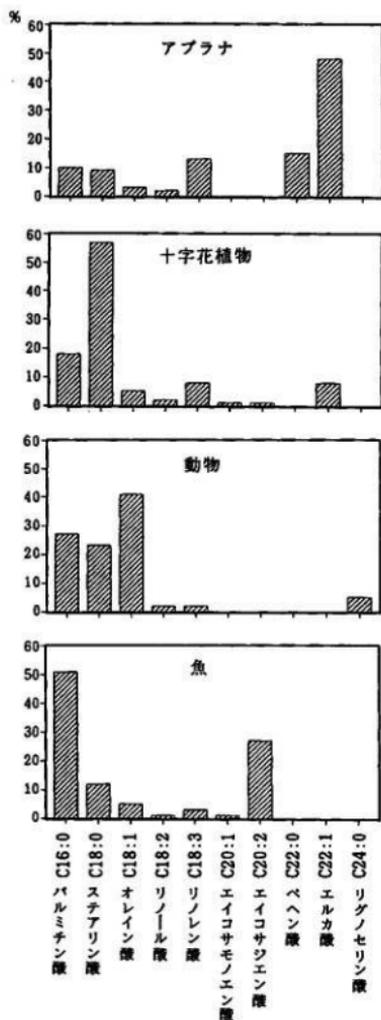
注) NDとは不検出の意味である。



第85図 ステロール組成



中野益雄の「残留脂肪分析の現状」には、第87図に示すように植物、動物及び魚の脂肪酸組成があり、植物にはエルカ酸、動物にはリグノセリン酸、魚にはエイコサジエン酸が特有に検出されているが、これらの組成と類似しているものは今回の試料中にはなかった。



第87図 動植物等の脂肪酸組成

## 3) 一般性状分析

分析結果を第35表及び第36表に示した。結果は次のとおりである。

水分は、11.9~20.7%の範囲で、平均値15.8%であった。試料を粘土状土壌 (Na 2、Na 6、Na 8、Na 11、Na 12及びNa 14) と、黒色土壌 (Na 1、Na 3~Na 5、Na 7、Na 10及びNa 13) に分けると、前者は4.4~15.9%、後者は16.9~20.7%と後者が高値であった。

pHは、5.1~7.3の範囲であった。SK 6のNa 4~Na 6が6.6~7.3と中性で、それ以外の試料は微酸性であった。また、SK 11のNa 10~Na 12は微酸性でも低い値であった。

電気伝導率は、16~57 $\mu$ S/cmの範囲で、Na 1は43 $\mu$ S/cm、Na 4は57 $\mu$ S/cmと高値であった。

有機物量を表す強熱減量は、4.2~9.6%で対照試料の約13%に比べて低値であった。

炭素も有機物量の一部であるが、粘土状土壌は0.26~1.4%、黒色土壌は1.3~4.9%で、後者が高値であった。

全窒素も炭素と同様に、粘土状土壌は0.03~0.12%、黒色土壌は0.11~0.35%と後者が高値であった。

無機態窒素は、土中ではアンモニア態窒素から亜硝酸態窒素を経て硝酸態窒素に分解される。アンモニア態窒素は、8.8~48 mg/kgの範囲で、対照試料の約8 mg/kgと比較すると高く、特にNa 8及びNa 14は、34 mg/kg及び48 mg/kgと高値であった。

硝酸態窒素も対照試料の1.3 mg/kgに比べて多く、特にNa 1及びNa 7は、20 mg/kg及び12 mg/kgと高値であった。

硫酸イオンは、5.1~27 mg/kgの範囲である。対照試料の5 mg/kgと比較すると多く、特にNa 1及びNa 5は、27 mg/kg及び26 mg/kgと高値であった。

塩素イオンは、2.2~4.4 mg/kgの範囲で、対照試料の2.1~3.9 mg/kgとほぼ同値であった。

金属は、主成分はけい素、アルミニウム及び鉄で、けい素は22~30%、アルミニウムは6.5~8.9%、鉄は2.0~4.1%の範囲でいずれの試料もほぼ同様な数値であった。対照試料と比較しても主成分はほぼ同様な数値であった。

Na 9は壁表面に帯状に付着していたものを採取したものである。付着物は2種類に分類されたが、植物が炭化したものをNa 9-1、植物の茎、根をNa 9-2とした。分類した付着物は試料量が少なく、強熱減量、元素分析、金属分析について行った。

分析の結果、Na 9-1、Na 9-2とも、強熱減量が60~80%、炭素が30~50%と高く有機物量が多い。金属では、Na 9-1、Na 9-2ともけい素が2.5~7.4%と一番多かったが、Na 9-1はカルシウムも1.4%と多かった。

第35表 一般性状分析結果

遺構名			SK20			SK6			SK10		
試料	Na		1	2	3	4	5	6	7	8	9
水	分	%	20.7	4.4	19.3	18.6	19.8	15.7	17.5	13.9	2.3
	pH		5.5	5.9	6.0	7.3	6.8	6.6	6.9	5.9	5.7
電気伝導率	$\mu\text{S}/\text{cm}$		43	21	26	57	36	32	28	16	55
強熱減量	%		10.3	6.5	9.6	8.2	5.4	4.4	7.0	4.3	6.2
炭素	%		2.3	0.47	4.9	2.5	1.3	1.0	1.5	0.26	1.0
水素	%		0.80	0.54	1.0	0.78	0.58	0.52	0.68	0.52	0.60
全窒素	%		0.20	0.09	0.35	0.15	0.11	0.09	0.11	0.03	0.08
アンモニア態窒素	mg/kg		14	21	13	8.8	13	15	17	34	28
亜硝酸態窒素	mg/kg		0.03	0.02	0.04	0.50	0.06	0.03	0.03	0.02	0.02
硝酸態窒素	mg/kg		20	2.8	2.8	5.1	5.8	7.0	12	2.6	3.5
硫酸イオン	mg/kg		27	8.5	12	17	26	13	12	6.1	26
塩素イオン	mg/kg		3.6	3.4	2.4	2.9	2.9	3.1	3.4	2.2	5.3
けい素	%		25	29	24	22	24	25	25	28	26
アルミニウム	%		6.8	8.3	7.1	6.5	6.9	7.0	7.6	8.6	8.0
鉄	%		3.4	3.8	4.1	3.7	3.9	2.8	2.7	2.1	2.2
マグネシウム	%		0.69	0.70	0.72	0.75	0.70	0.61	0.61	0.61	0.57
カリウム	%		0.62	2.0	1.1	1.2	1.5	1.1	1.7	2.2	2.0
ナトリウム	%		0.39	0.28	0.49	0.67	0.85	0.53	0.46	0.21	0.45
カルシウム	%		0.74	1.2	0.67	0.70	0.74	0.32	0.53	0.49	0.58
チタン	%		0.30	0.23	0.35	0.86	0.52	0.50	0.24	0.15	0.22
マンガ	%		0.20	0.24	0.27	0.24	0.24	0.14	0.19	0.17	0.16
			0.094	0.033	0.14	0.16	0.14	0.070	0.096	0.033	0.044

遺構名			SK10		SK11			SK5		対照	
試料	Na		9-1	9-2	10	11	12	13	14	15	16
水	分	%	—	—	17.7	11.9	14.5	16.9	14.6	14.9	15.2
	pH	—	—	5.3	5.2	5.1	5.5	5.9	5.8	5.9	—
電気伝導率	$\mu\text{S}/\text{cm}$		—	—	26	24	20	19	16	29	30
強熱減量	%		79.7	58.5	7.2	5.5	6.4	6.8	4.2	13.0	12.1
炭素	%		46	27	2.3	1.4	1.4	1.6	0.38	0.59	0.76
水素	%		2.9	3.6	0.67	0.67	0.63	0.67	0.50	0.30	0.35
全窒素	%		0.49	0.97	0.15	0.10	0.12	0.13	0.05	0.07	0.06
アンモニア態窒素	mg/kg		—	—	14	24	9.8	14	48	8.2	7.5
亜硝酸態窒素	mg/kg		—	—	0.02	<0.01	0.01	0.02	0.01	0.01	0.01
硝酸態窒素	mg/kg		—	—	7.4	5.6	4.2	6.1	3.7	1.2	1.3
硫酸イオン	mg/kg		—	—	12	9.5	8.4	9.4	5.1	5.0	4.8
塩素イオン	mg/kg		—	—	3.0	4.4	2.4	2.3	3.2	3.9	2.1
けい素	%		2.5	7.4	27	30	26	27	28	24	25
アルミニウム	%		2.1	3.1	7.8	8.2	7.5	8.1	8.9	7.8	8.1
鉄	%		1.0	0.99	3.7	2.0	3.7	3.1	3.0	3.0	3.0
マグネシウム	%		0.12	0.18	0.63	0.52	0.63	0.69	0.73	0.44	0.48
カリウム	%		0.60	0.32	1.5	1.8	1.5	1.5	2.0	1.8	1.9
ナトリウム	%		0.55	0.28	0.52	0.21	0.81	0.43	0.16	0.13	0.15
カルシウム	%		0.09	0.22	0.57	0.51	0.71	0.88	1.2	0.43	0.32
チタン	%		1.4	0.51	0.26	0.14	0.21	0.27	0.28	0.42	0.39
マンガ	%		0.05	0.15	0.30	0.28	0.31	0.31	0.33	0.21	0.25
			0.040	0.034	0.062	0.020	0.048	0.13	0.038	0.038	0.033

注) —は分析せず。

第36表 主成分組成

遺構名		SK20			SK6			SK10		
試料	No	1	2	3	4	5	6	7	8	9
強熱減量	%	10.3	6.5	9.6	8.2	5.4	4.4	7.0	4.3	6.2
SiO <sub>2</sub>	%	53.5	62.1	51.4	47.1	51.4	53.5	53.5	59.9	55.6
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	%	12.9	15.7	13.4	12.3	13.0	13.2	14.4	16.3	15.1
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	%	4.9	5.4	5.9	5.3	5.6	4.0	3.9	3.0	3.1
MgO	%	1.1	1.2	1.2	1.2	1.2	1.0	1.0	1.0	0.9
K <sub>2</sub> O	%	0.7	2.4	1.3	1.4	1.8	1.3	2.0	2.6	2.4
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	%	0.9	0.6	1.1	1.5	1.9	1.2	1.1	0.5	1.0
Na <sub>2</sub> O	%	1.0	1.6	0.9	0.9	1.0	0.4	0.7	0.7	0.8
CaO	%	0.4	0.3	0.5	1.2	0.7	0.7	0.3	0.2	0.3
TiO <sub>2</sub>	%	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.2	0.3	0.3	0.3

遺構名		SK10		SK11			SK5		対照	
試料	No	9-1	9-2	10	11	12	13	14	15	16
強熱減量	%	79.7	58.5	7.2	5.5	6.4	6.8	4.2	13.0	12.1
SiO <sub>2</sub>	%	5.4	15.8	57.8	64.2	55.6	57.8	59.9	51.4	53.5
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	%	4.0	5.9	14.7	15.5	14.2	15.3	16.8	14.7	15.3
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	%	1.4	1.4	5.3	2.9	5.3	4.4	4.3	4.3	4.3
MgO	%	0.2	0.3	1.0	0.9	1.0	1.1	1.2	0.7	0.8
K <sub>2</sub> O	%	0.7	0.4	1.8	2.2	1.8	1.8	2.4	2.2	2.3
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	%	1.3	0.6	1.2	0.5	1.9	1.0	0.4	0.3	0.3
Na <sub>2</sub> O	%	0.1	0.3	0.8	0.7	1.0	1.2	1.6	0.5	0.4
CaO	%	2.0	0.7	0.4	0.2	0.3	0.4	0.4	0.6	0.5
TiO <sub>2</sub>	%	0.1	0.2	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.3	0.4

## 6. まとめ

便所様遺構の土壌分析を行った結果は次のとおりである。

顕微鏡観察により SK20より蛔虫卵及び横川吸虫卵が確認された。

これらの寄生虫卵が確認されたことにより、住民が生野菜を食べていたことや、コイ科やアユを主とする淡水魚の生食か、完全に火のおらない魚を食べていたことが推定できる。

脂肪酸分析では、組成パターンは上中の植物腐植によくみられるもので特徴のあるものはなかったが、ステロール分析では、コプラスタノールが SK20、SK6、SK10、SK11及び SK5のすべての遺構より検出されており、糞便の残留の可能性が示唆された。

一般性状分析では、主成分は一般土壌とほぼ同様な組成であり、アンモニア態窒素や塩素イオンなど特に特徴を示す結果は得られなかった。

今回、便所様遺構の土壌を顕微鏡観察、残存脂肪酸の組成分析、一般性状分析により解析を行ったが、寄生虫卵の発見やコプラスタノールの検出により遺構が便所であったと推定される。

最後に、寄生虫卵の同定に貴重な助言をいただいた岐阜大学医学部柏谷助教授に感謝します。

## 参 考 文 献

- 1) 中野益男：「残留脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻(6)、pp.124 (1984)
- 2) 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男：「中野A遺跡の土壌に残存する脂肪の分析」、『函館市中野A遺跡』、pp.275-280、(財)北海道埋蔵文化財センター (1991)
- 3) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教博、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、pp.40 (1984)
- 4) 粕川昭平、金原正明、金原正子：「藤原京跡の便所遺構」、pp.8-15、奈良国立文化財研究所 (1992)

## 第5章 結 語

平成4年度に行われた上開田村平遺跡の1,930㎡の発掘調査によって検出された層序、遺構、そして出土遺物の概要は次のように要約できるであろう。

基本的層序は、表土および耕作土（第Ⅰ層）と、暗褐色土（第Ⅱ層）、暗黄褐色土（第Ⅲ層）、そして黄褐色砂質土（第Ⅳ層）、黄褐色砂礫層（第Ⅴ層）で、第Ⅱ層が主に中期末葉～後期前半の遺物を含む包含層であり、第Ⅲ層からは早・前期の遺物が出土した。

出土遺物の総点数は、約1万5千点におよび、縄文土器約13,000点、石器2,050点といった縄文時代の遺物が中心である。これらの土器のうち時期を判断できる土器からみると、中期末葉のものかほとんどで、それ以外に早前期や後晩期のもみられる。中世から近世にかけての遺物も287点出土した。

縄文時代については、遺構としてが跡4基、埋設土器2基、焼礫集積遺構1基、集石遺構5基、土坑・ピット184基他を検出した。焼礫集積遺構は、径約4mと大規模で、1万余個の礫と共に多数の炭化材を検出し、出土遺物や放射性炭素年代測定の結果より、早期末葉頃と考えられる。それ以外の遺構は中期末葉から後期前半にかけての時期と考えられる。

出土した土器の大半は、中期後葉でも後半に限定される中期末葉のものかほとんどであり、「山手宮前遺跡」（第8集）でみられたような近畿・中国地方の黒木Ⅱ式、東海地方の咲畑式や、「戸入村平遺跡」（第4集）の第4号住居跡でみられたような東海地方の咲畑式・神明式にあたるものはほとんど見当らない。加曾利E式の影響を受けた東海地方の島崎Ⅲ式、檜岡区画内に矢羽根状沈線（葉脈状文）を充てる北陸地方の大杉谷式に相当する土器や、山形口縁や突起状を呈する近畿地方の北白川C式に類似するものが中心である。これらの中には、区画文がくずれ、不整円環文や不規則な渦状の沈線文を引き、施充文様に刺突文を多用する特徴的な土器（20）もみられる。これらの土器は、福井・岐阜・滋賀県境の越美・伊吹山系の遺跡でみられる土器である。<sup>31</sup>

深鉢B類に分類した土器には、山形口縁を呈したり、箱状突起をもつもの、口縁部の内面を肥厚させたり、折り返して内面や上に面を作出するものなどがみられる。これらは、北白川C式深鉢C類<sup>32</sup>に類似する土器で、小波状から山形口縁へ、内面肥厚から折り返しと変化し、箱状突起もみられるようになったと考えられる。<sup>33</sup>

本遺跡で出土した中期末葉の土器群は、徳山地域の中期後葉の土器編年を考えていく上で好資料といえよう。

石器についてみると、石錐、特に切目石錐の出土が多く中でもピット60（P60）・SK79からは、それぞれ切目石錐が6点・7点とまとまって出土しており注目する必要がある。剥片石器の石材としては、チャートがほとんどであった。

なお、遺構の配置や遺物の出土状況をみると、川側に対して開く半円状の分布がみられ（第8図）戸入村平遺跡（第4集）や山手宮前遺跡（第8集）でみられたような馬蹄形の分布が、やや弱いながらも本遺跡でもみられ、その時期は中期末葉頃と考えられる。

次にその他の時代としては、さし錢の出土したピット、和鏡埋納遺構、中世壺、積石塚といった中近世の遺構や、厩跡、鍛冶遺構、井戸跡、ホーロ、カマバ、芋穴といった近世から近現代の民俗的な

遺構を多数検出し、また、中近世陶磁器類も出土した。これらは、上開田地区の成り立ちや、昭和62年1月に廃村となった旧徳山村の人々の暮らしを伝える遺構である。

中でも15世紀～16世紀前半と考えられる和鏡の出土した和鏡埋納遺構や、さし銭・中世墓の検出は、中世にさかのぼる上開田地区の人々の生活の痕跡を示す遺構として注目されるものであり、このことは1156（保元元年）年に創祀された六社神社の神宝であった1406（応永13）年銘のある野口<sup>9）</sup>の年代と符合するものである。また、厩跡等の近世から近現代にかけての民俗的な遺産（遺構）を検出し、記録できたことも貴重な成果であった。

（小谷和彦）

- 1) 上平吹遺跡（福井県南条郡南条町）や起し又遺跡（滋賀県坂田郡伊吹町）でも刺突を充填した土器が出土している。

福井県教育委員会 1971「北陸自動車道関係遺跡調査報告書 上平吹遺跡」

伊吹町教育委員会 1998「起し又遺跡発掘調査報告書II」による。

- 2) 京都大学埋蔵文化財調査センター 1985「京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ 北白川追分町縄文遺跡の調査」

- 3) 武藤貞昭氏のご教示による。

- 4) 徳山村史編集委員会 1973「徳山村史」

## 引用・参考文献

## 〈縄文土器関係〉

- 小江慶雄 1954 「滋賀県雁淵遺跡発見の縄文式土器」『京都学芸大学学報』A(文科) No.5  
 京都教育大学考古学研究会 1989 「考古学資料室所蔵遺物の資料紹介」『史林』第22号  
 浅井町役場企画広報課 1998 『雁淵遺跡』ふるさと浅井歴史・文化再発見  
 泉拓良 1982 「西日本縄文土器再考—近畿地方縄文時代中期後半を中心に—」  
     『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集  
 京都大学埋蔵文化財研究センター 1985 『京都大学埋蔵文化財調査報告III  
     —北白川追分町縄文遺跡の調査—』  
 泉拓良 1988 「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』  
 京都大学文学部博物館 1991 『先史時代の北白川』  
 泉拓良 1996 「縄文土器出現」『歴史発掘』2  
 増子康真 1969 「木曾川下流域の縄文中期後半期土器について」『古代学研究』第54号  
 紅村弘・増子康真他 1977 『東海先史文化諸段階 資料編I』  
     1978 『東海先史文化諸段階 資料編II』  
 増子康真 1978 「縄文中期後半土器の編年—東海地方西部地域—」『古代人』34(名古屋考古学会)  
 増子康真 1981 「第3章 東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階』(本文編)  
 増子康真 1986 「東海西部沿海地域縄文中期土器型式の検討—北屋敷式の細別と咲畑式の再検討—」  
     『知多古文化研究』2(知多古文化研究会)  
 増子康真 1988 「近畿地方縄文中期後半土器編年の問題点—東海西部との対比から—」  
     『求真能道・巽三郎先生古稀記念論集』  
 吉田英敏 1989 『塚原遺跡・塚原古墳群』(関市教育委員会)  
 吉田英敏他 1994 『川合遺跡群』(可見市教育委員会)  
 南知多教育委員会 1983 『林ノ峰貝塚I』  
 南久和 1984 「相対的編年の方法論に関する試論(改稿)—北陸の縄文時代中期の編年他9編—」  
     『南久和著作集』第1集  
 南久和 1997 「葉脈状文」『古代』第103号  
 福井県教育委員会 1976 『北陸自動車道関係遺跡調査報告書 上平吹遺跡』  
 大野市教育委員会 1985 『右近次郎遺跡II』  
 木下哲夫 1985 「大杉谷小考—縄文時代中期後葉における研究史から見た越前での一断相—」  
     『古代探叢II』  
 福井県 1986 『福井県史 資料編13考古—本文編—』  
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1988 『鳴鹿手島遺跡』  
 橋崎彰一 1965 「中野遺跡」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(日本国有鉄道)  
 北勢町教育委員会 1993 『川向遺跡発掘調査報告』  
 伊吹町教育委員会 1998 「起し又遺跡発掘調査報告書II」  
 網谷克彦 1992 「中野遺跡」(福井県三方町教育委員会)  
 千葉豊 1989 「縄文土器群の成立と展開」『史林』72巻6号  
 千葉豊・富井真 1993 「浜詰遺跡発掘調査概要」(網野町教育委員会)  
 富井真 1994 「北白川追分町遺跡出土の縄文土器—北白川C成立を考える—」  
     『京都大学埋蔵文化財研究センター紀要XII』

- 働大阪文化財センター 1992 『小阪遺跡』  
 永峯光一編 1981 『縄文土器大成2-中期』  
 小林達雄・小川忠博 1988 『縄文土器大観』各巻  
 小林達雄他 1981 『縄文文化の研究4・縄文土器II』  
 小林達雄 1994 『縄文土器の研究』  
 戸沢充則編 1994 『縄文時代研究事典』

#### 〈石器関係〉

- 金沢市教育委員会 1984 『金沢市新保本町チカモリ遺跡—石器編—』  
 富山県教育委員会 1990 『北陸自動車道遺跡調査報告書—朝日町編5— 境A遺跡石器編』  
 鈴木道之助 1991 『石器入門事典—縄文—』

#### 〈その他の時代関係〉

- 藤澤良祐 1991 『瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年—』  
 『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要X』  
 藤澤良祐 1994 『山茶碗研究の現状と課題』『三重県埋蔵文化財センター 研究紀要第3号』  
 働瀬戸市埋蔵文化センター 1994 『東海の中世墓』  
 日本貨幣商協同組合 1983 『日本貨幣カタログ』  
 兵庫埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覧』  
 小野木学 1996 『岐阜県下の礎』『出土銭貨』第5号  
 久保智康 1987 『平安後期出土鏡の研究序説』『東アジアの考古と歴史』下  
 広瀬都賀 1938 『扶桑紀年銘鏡図説』『大阪市立美術館学報』1  
 1974 『和鏡の研究』  
 前田洋子 1981 『和鏡の変遷』『考古学ジャーナル』No.185  
 大垣市教育委員会 1997 『曾根八千町遺跡』大垣市埋蔵文化財調査報告書第6集  
 南山大学人類学博物館 1983 『正家積石塚群』  
 各務原市埋蔵文化財調査センター 1994 『北山遺跡B・C地区発掘調査報告書』  
 伊吹町教育委員会 1994 『伊吹町内遺跡発掘調査II 石臼生産遺跡』  
 名古屋博物館 1979 『臼—食の道具』  
 徳山村教育委員会 1987 『徳山の山村生産用具—実測図編—』  
 浅野弘光 1992 『厩考—基礎文化の崩壊—』  
 働岐阜県文化財保護センター 1995 『下巾上遺跡』

#### 〈旧徳山村の遺跡関係〉

- 小川栄一 1952 『美濃の石器時代文化』  
 徳山村史編集委員会 1973 『徳山村史』  
 小澤一弘 1975 『美濃徳山村宮ヶ原遺跡出土の縄文時代遺物』『古代文化』第27巻第10号  
 伊藤楨樹・篠田通弘 1982 『美濃徳山村の切目石鉢（越美山系をめぐって）』『岐阜史学』第76号  
 徳山村の歴史を語る会 1984 『徳山村のあけぼのを求めて—岐阜県揖斐郡徳山村遺跡分布調査中間報告—』  
 徳山村の歴史を語る会 1984 『徳山村の遺跡（増補版）』  
 篠田通弘 1986 『大昔の徳山村—縄文人の息吹きを追って—』（徳山村教育委員会）  
 岐阜県 1972 『岐阜県史 通史編原始』  
 岐阜県教育委員会 1984 『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書』

- 岐阜県教育委員会 1989 【はいづめの遺跡】  
岐阜県教育委員会 1991 【小の原遺跡・戸入障子墓遺跡】  
御岐県文化財保護センター 1993 【追分遺跡・下関田村平遺跡】  
御岐県文化財保護センター 1994 【戸入村平遺跡】  
御岐県文化財保護センター 1994 【長吉遺跡・普賢寺跡】  
御岐県文化財保護センター 1997 【山手宮前遺跡】  
御岐県文化財保護センター 1998 【上原遺跡Ⅰ】

# 圖 版



上開田地区遠景写真  
1978年撮影

(東より)



上開田村平遺跡調査前  
遠景

(北東より)



上開田村平遺跡調査前  
近景

(北東より)

作業風景



作業風景



作業風景及び土層

(南より)





第1号炉跡  
(SB1)

(西より)



第2号炉跡  
(SB2)

(南より)



第3号炉跡  
(SB3)

(南西より)

第 4 号炉跡  
(SB 4)

(南東より)



第 1 号土器埋設遺構  
(SZ 1)

(南より)



第 2 号土器埋設遺構  
(SZ 2)

(南東より)





焼礫集積遺構  
(SI 3)  
検出状況

(西より)



焼礫集積遺構  
(SI 3)  
四分劃

(西より)



焼礫集積遺構  
(SI 3)  
完礫状況

(東より)

第 1 号集石遺構  
(SI 1)

(南西より)



第 2 号集石遺構  
(SI 2)

(南より)



第 4 号集石遺構  
(SI 4)

(西より)





第 5 号集石遺構  
(SI 5)

(北西より)



第 6 号集石遺構  
(SI 6)

(南西より)



Pit60  
切目石鍾集積出土状況

和鏡埋納遺構

(南より)



和鏡埋納遺構  
和鏡出土状況

(北より)



和鏡埋納遺構  
和鏡出土状況

(西より)





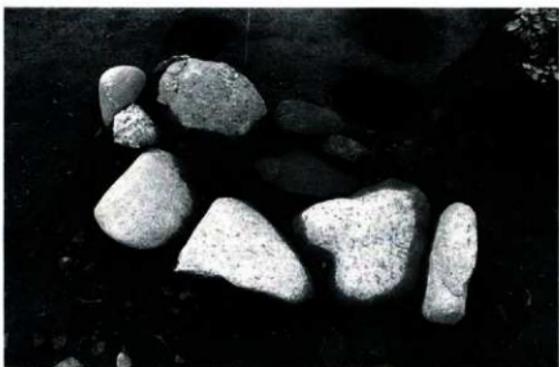
SK88

(南西より)



SK97

(北東より)



SK98

(南より)

SK98  
完堀状況

(北東より)



Pit433  
さし鍬出土状況

(北より)



Pit433  
さし鍬出土状況

(北より)





積石塚  
半 截

(東より)



積石塚  
天目茶碗  
出土状況



SK 5 (右上)  
SK 6 (左下)

(東より)

SK11

(南より)



SK20  
完備状況

(南より)



SK20  
タガの跡

(南東より)





SK68  
ホー口

(西より)



SK67  
芋穴

(北より)



SK69  
芋穴

手前は SB 4

(南より)



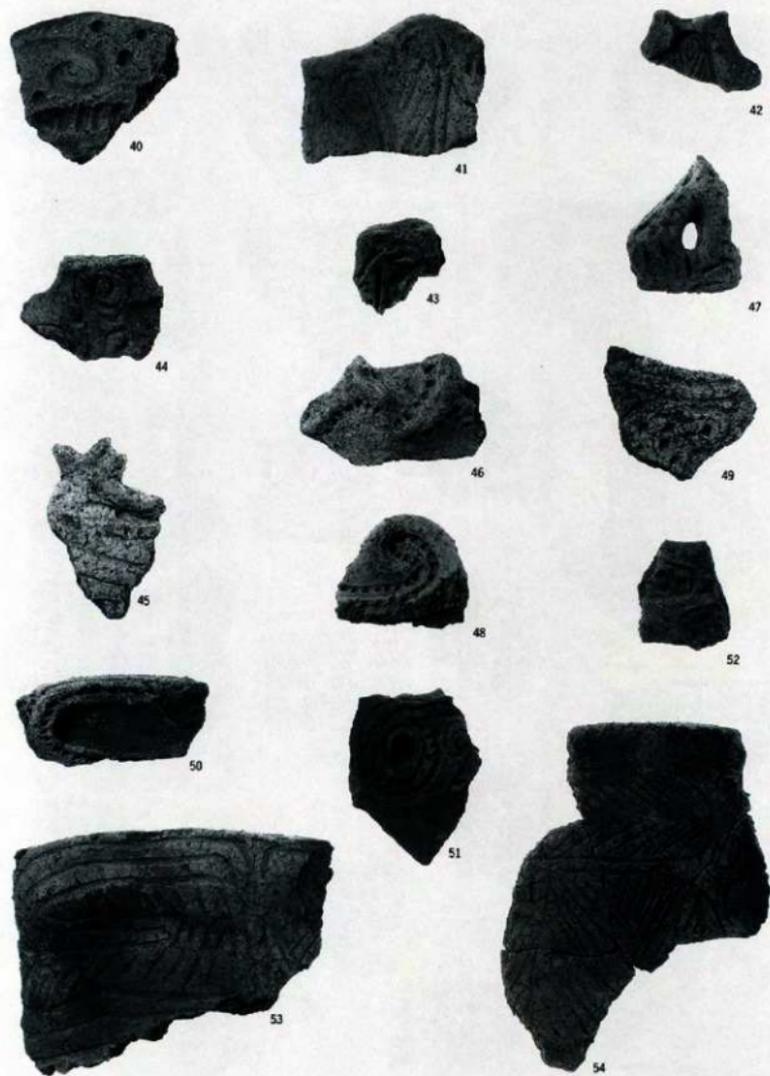
遺構 (SB・SI・SZ) 出土土器



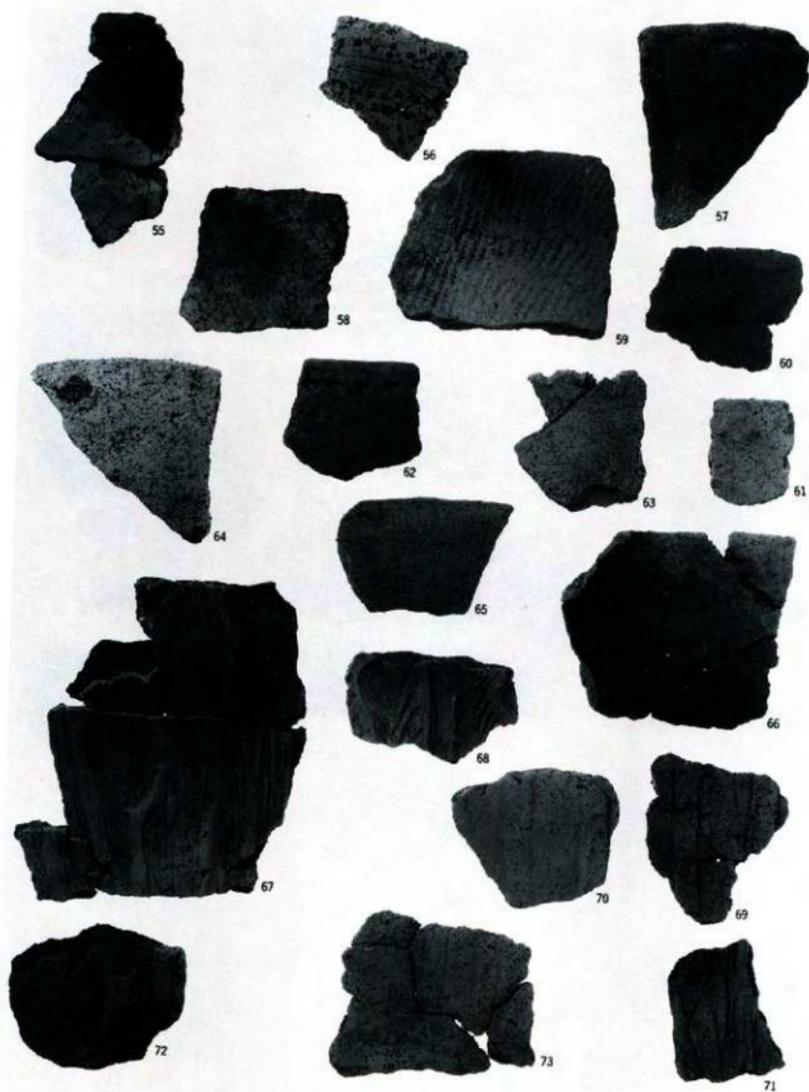
土坑・ピット出土土器(1)



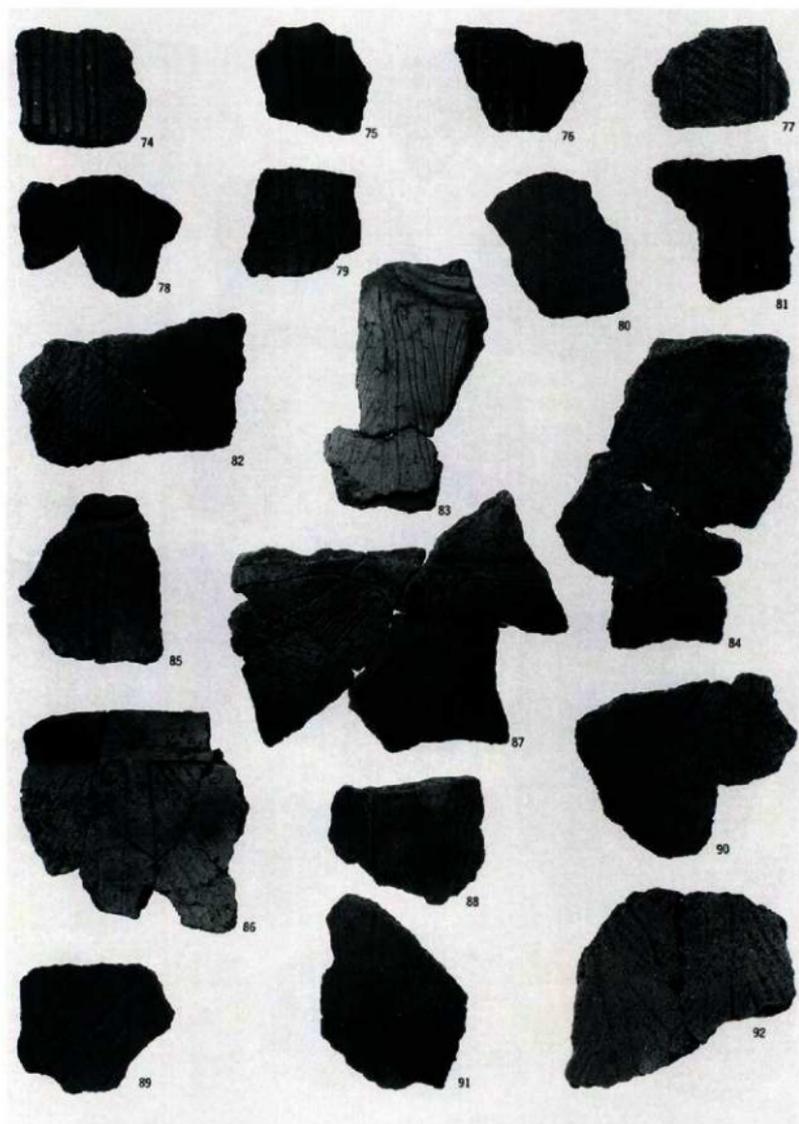
土坑・ピット出土土器(2)  
 中期深鉢 A-1・A-2 類



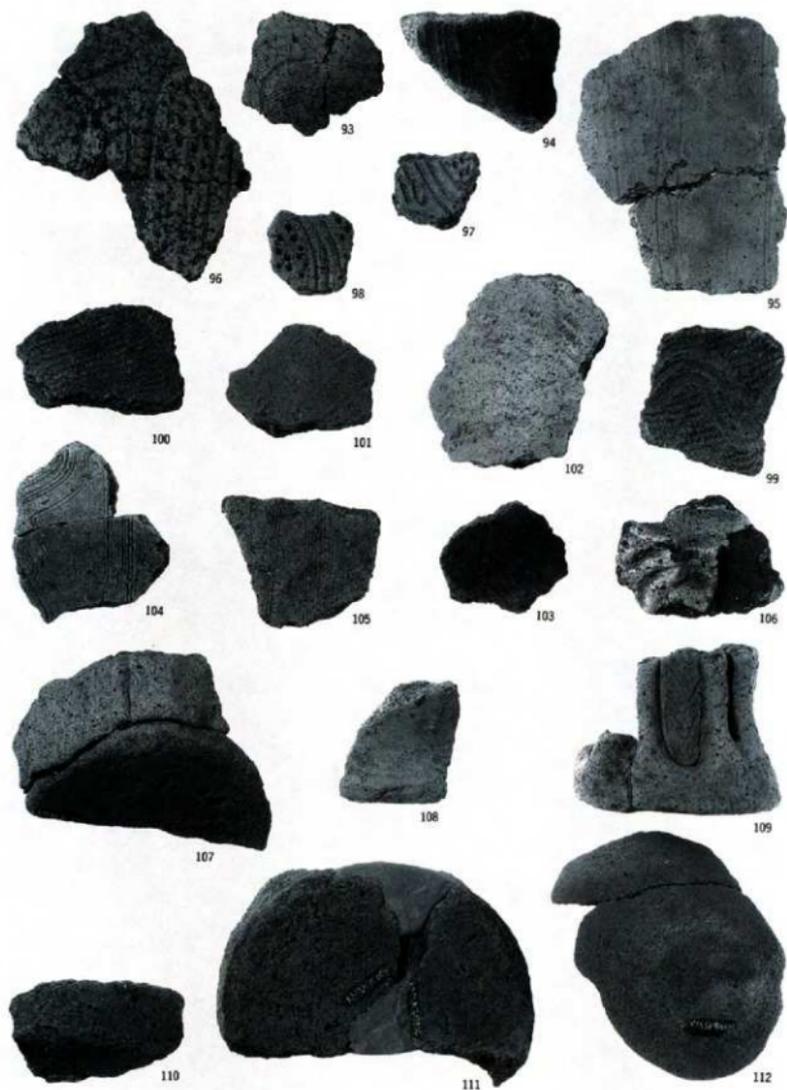
土坑・ピット出土土器(3)  
中期深鉢A-3・B・C類



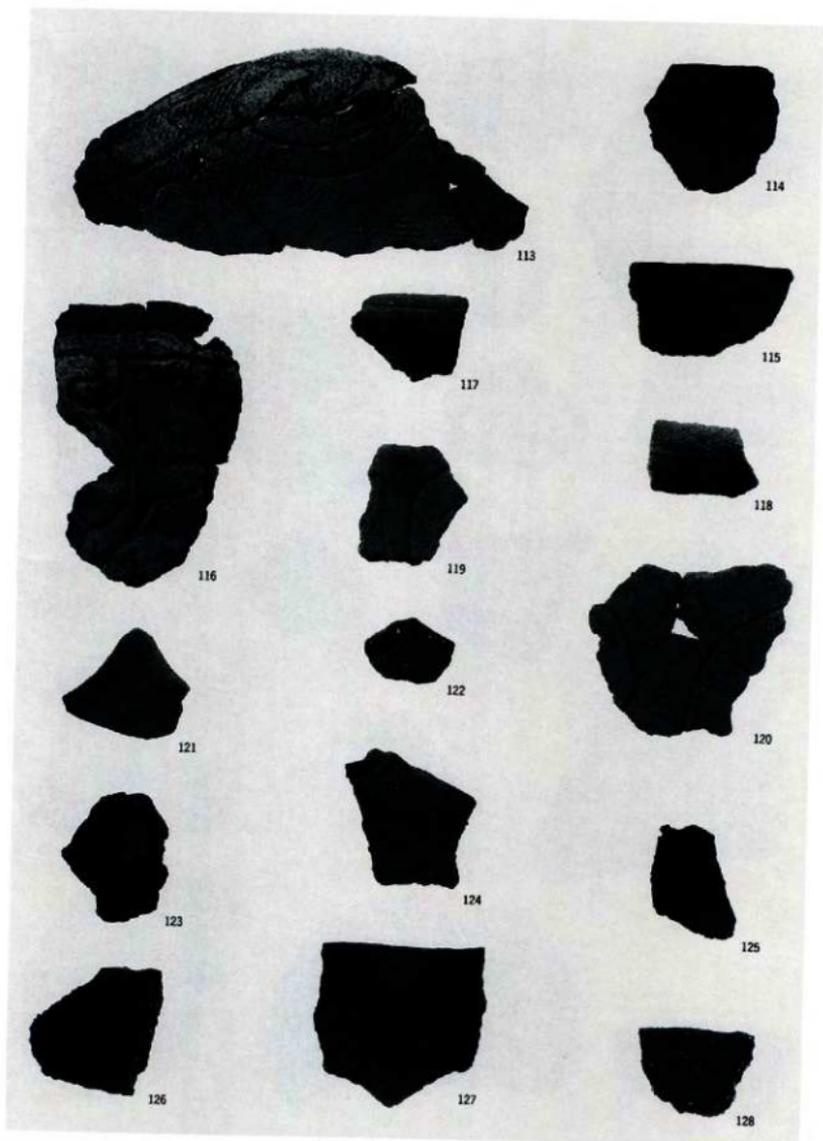
土坑・ピット出土土器(4)  
 中期深鉢C・D類、胴部2-b類



土坑・ピット出土土器(5)  
中期新部 3-a・3-b類



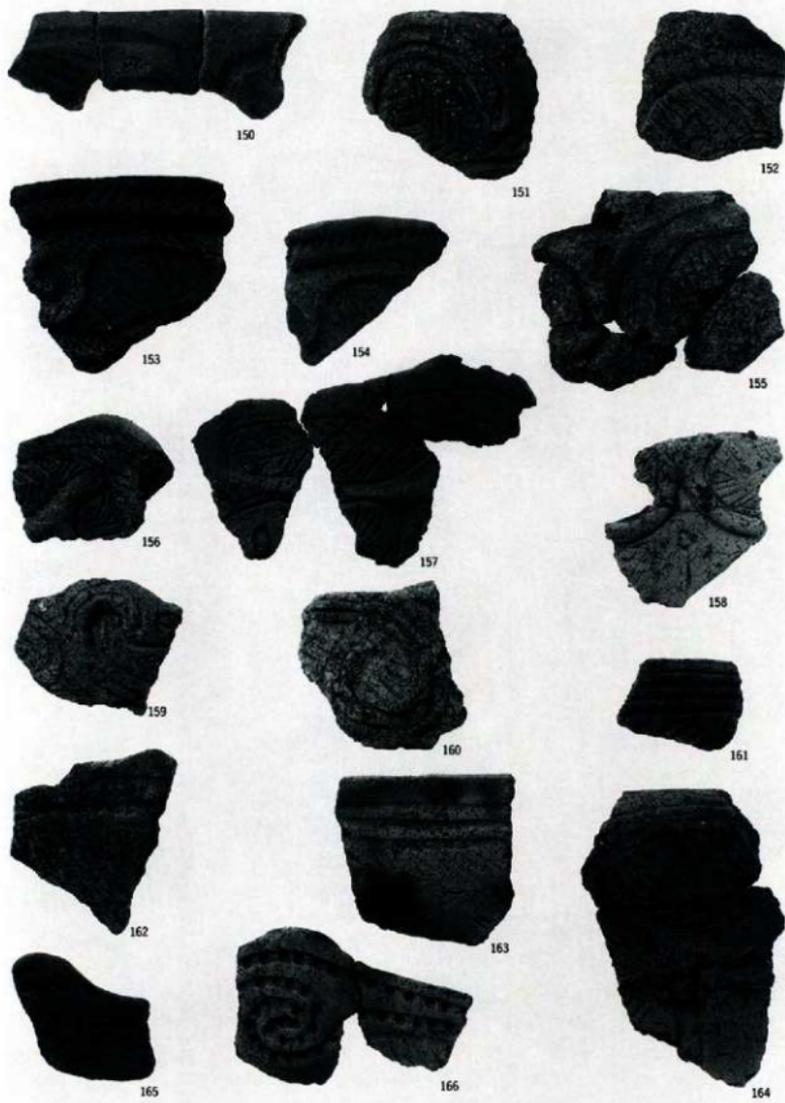
土坑・ピット出土土器⑥  
 中期胴部3-c・d、4、5、6類、壺、底部、胸部



土坑・ピット出土土器(7)  
後期



包含層出土土器(1)  
早期、前期、中期A-1-a・A-1-c類



包含層出土土器(2)  
中期A-1-b・A-2類



167



168



169



170



171



172



173



174



175



177

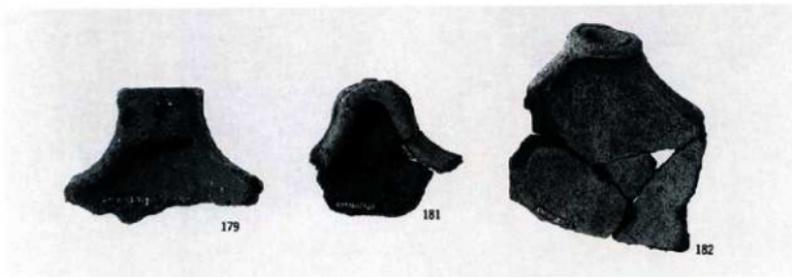
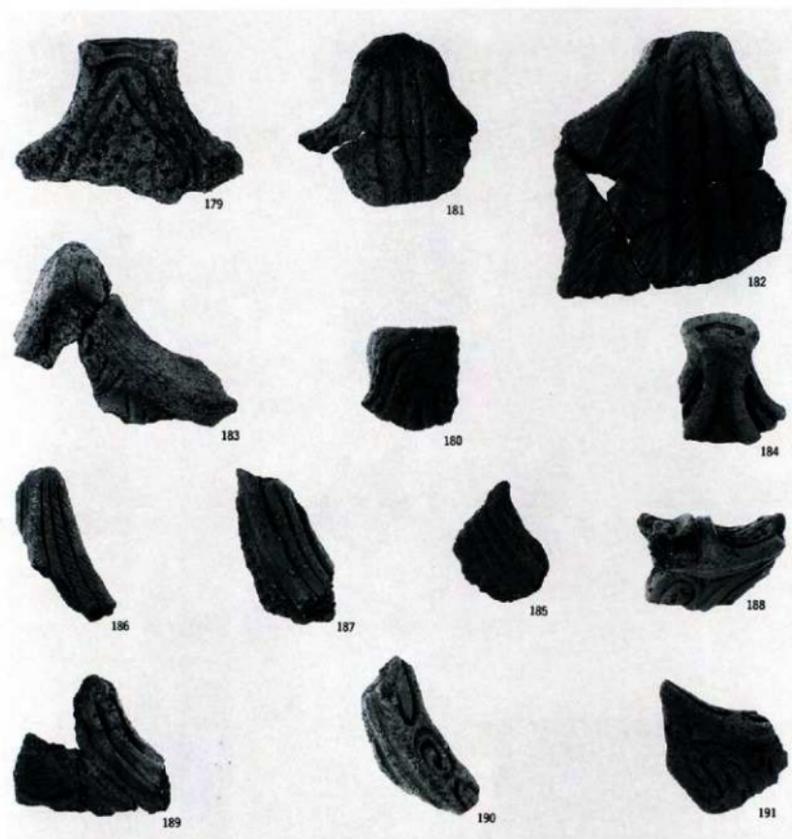


176



178

包含層出土土器(3)  
中期A-3・B-1-a類



包含層出土土器(4)  
中期B-1-a類



192



193



194



195



196



197



198



199



200



203



201



202



198

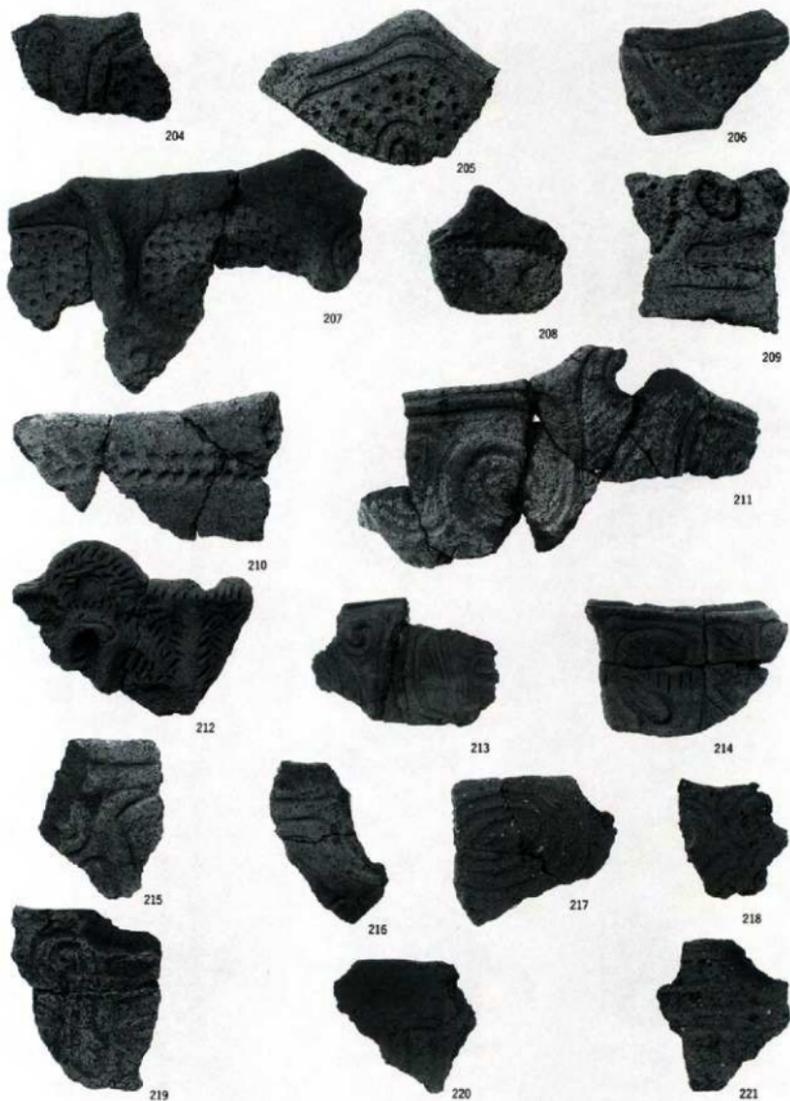


203



202

包含層出土土器(5)  
中期B-1-b・B-2類



包含層出土土器(6)  
中期B-3・C類



222



223



224



226



225



227



228



229

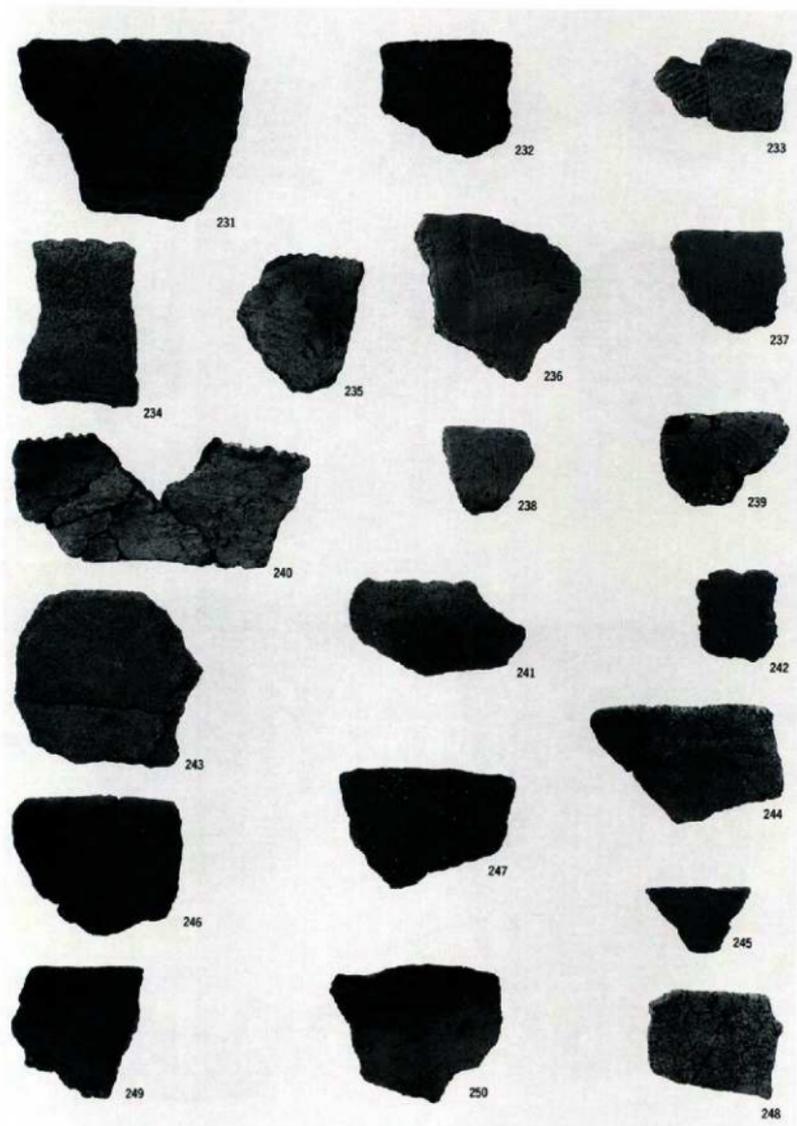


230

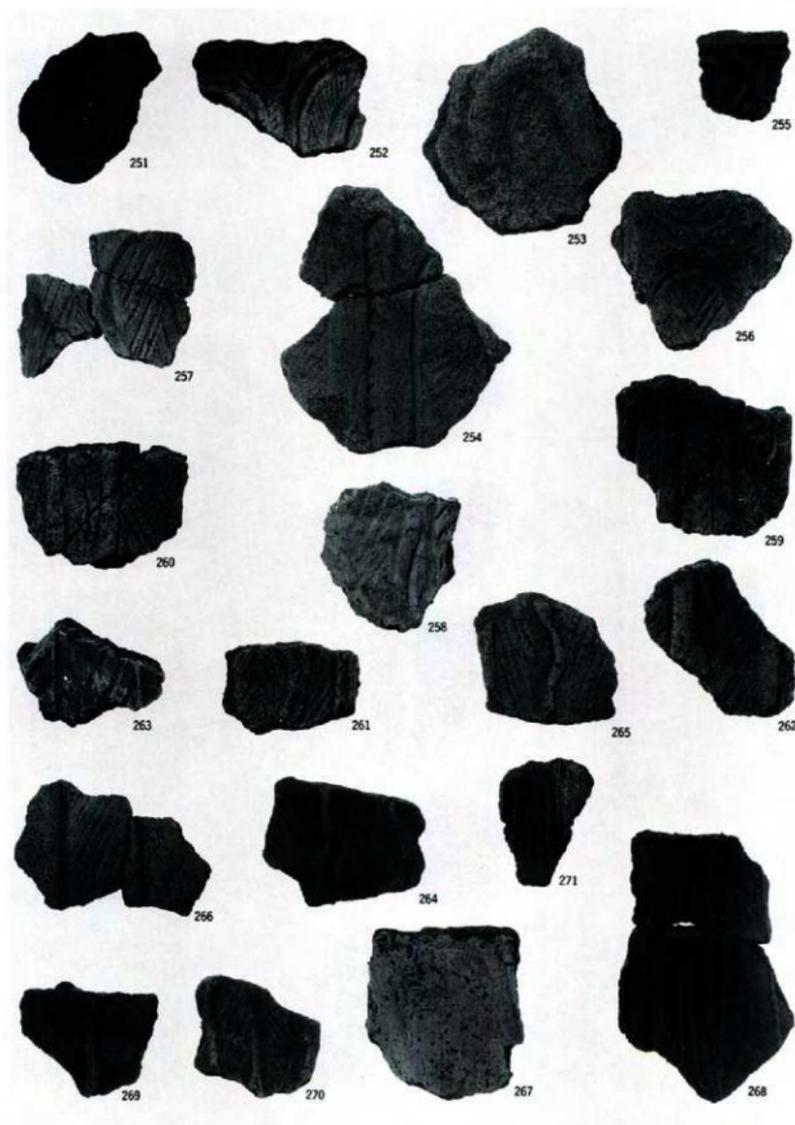


361

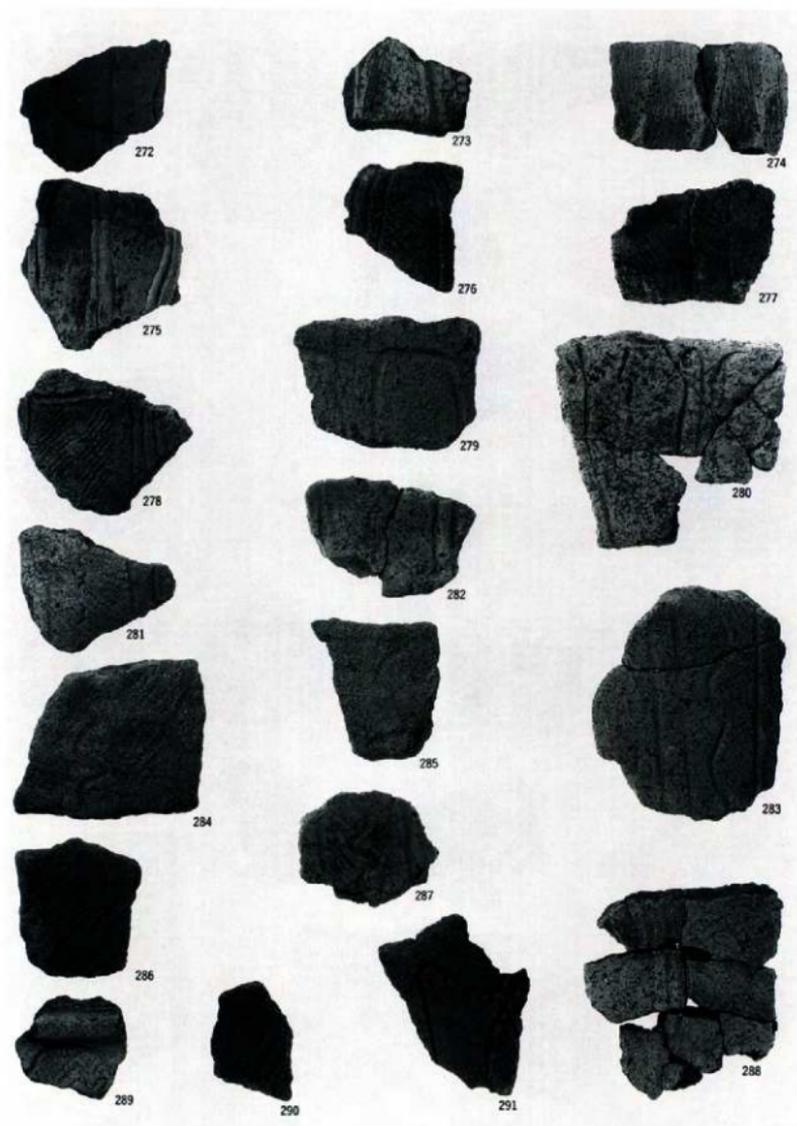
包含層出土土器(7)  
中期B-4・D-2類、底部



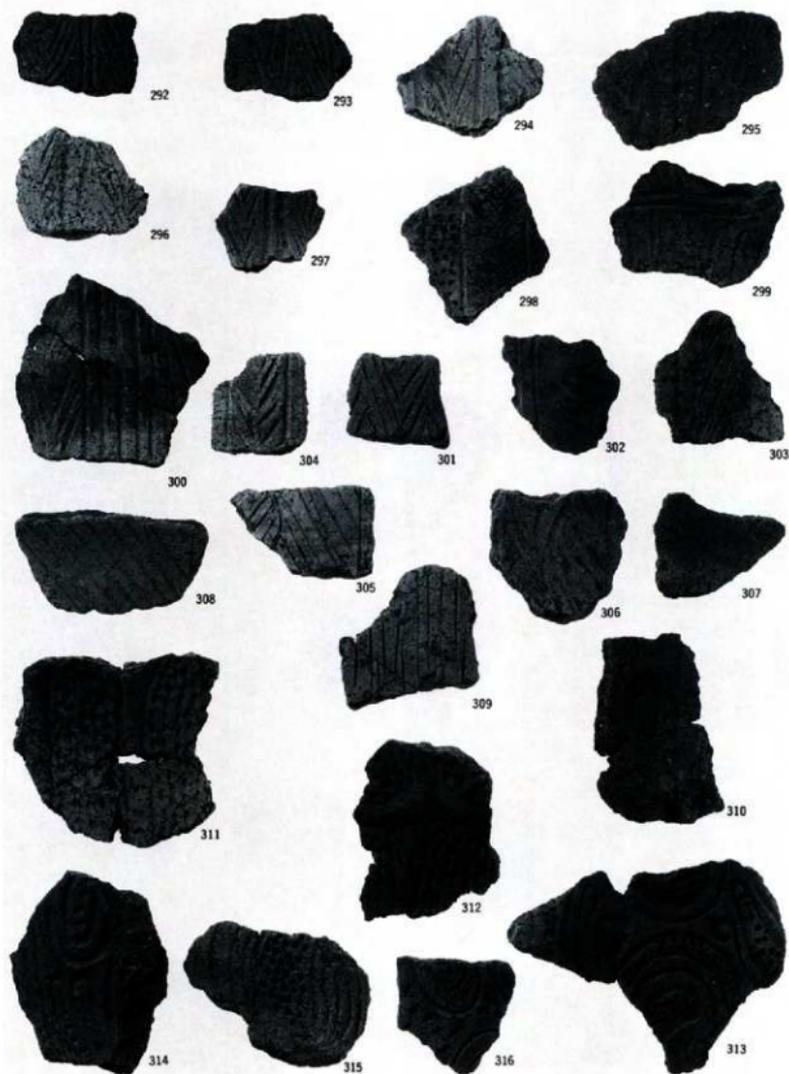
包含層出土土器⑧  
中期D-1・D-2・D-3類



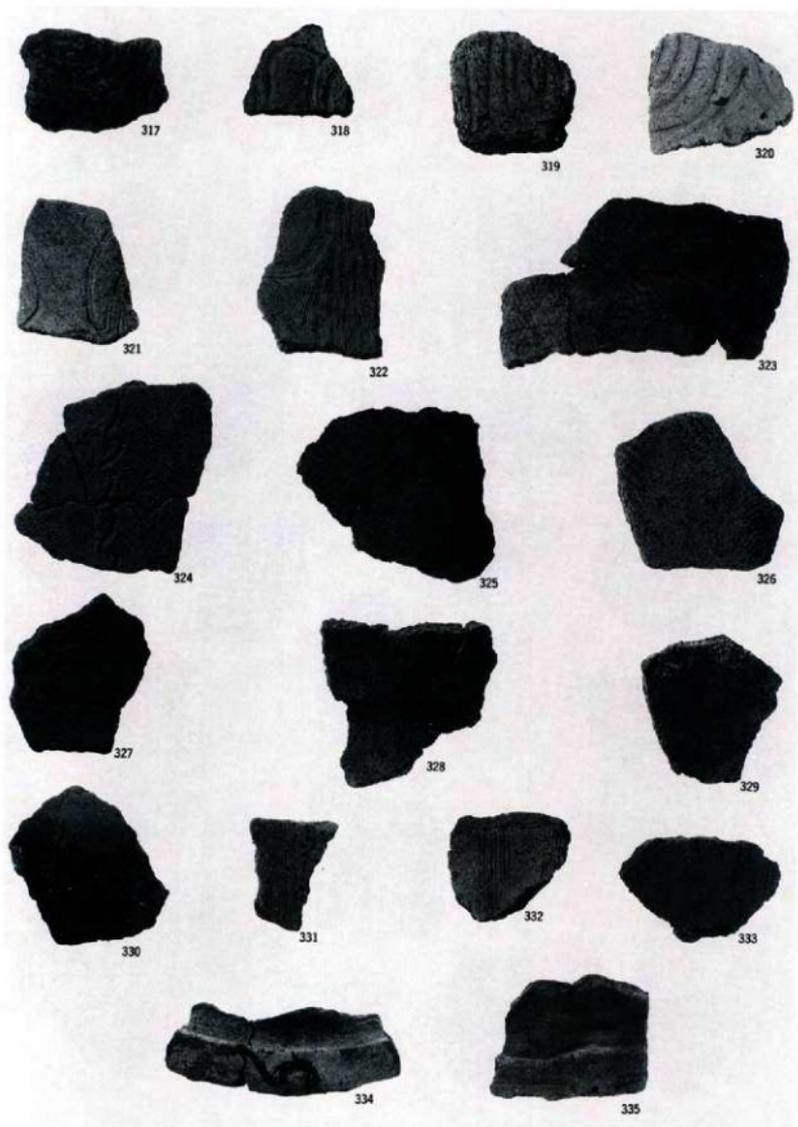
包含層出土土器(9)  
中期新部 1、2-a・b類



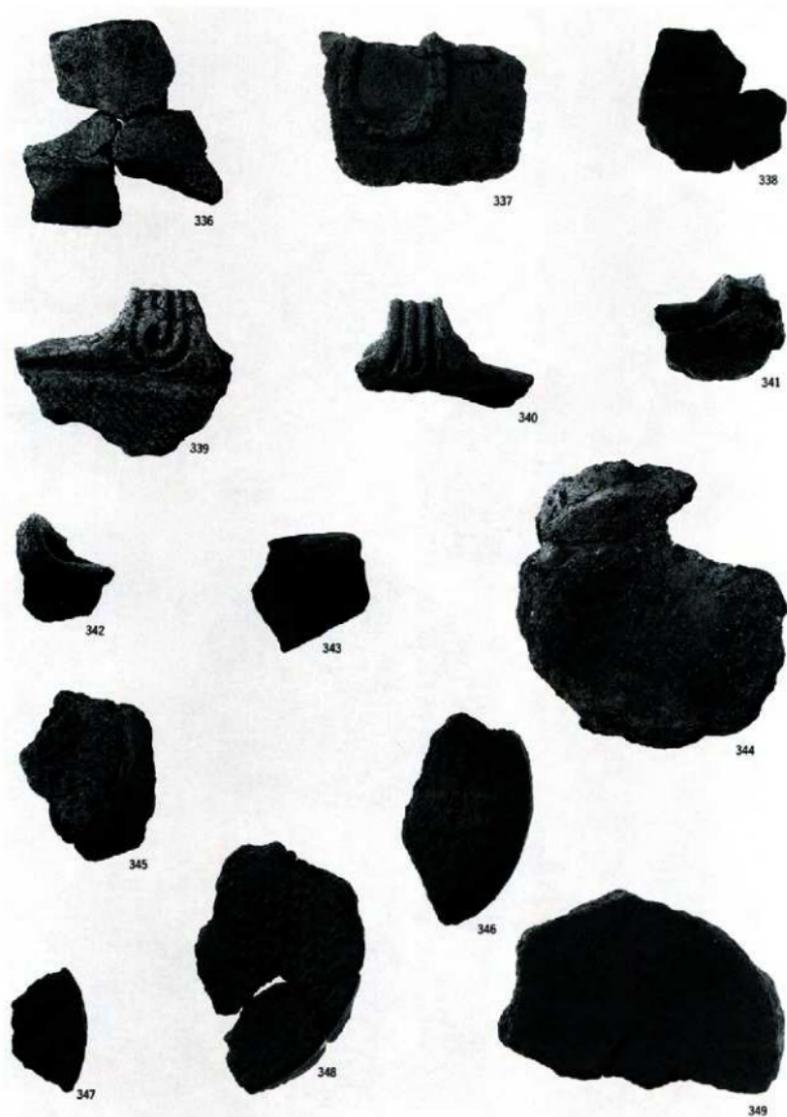
包含層出土土器⑩  
中期嗣部 2-c・d、3-a・b 類



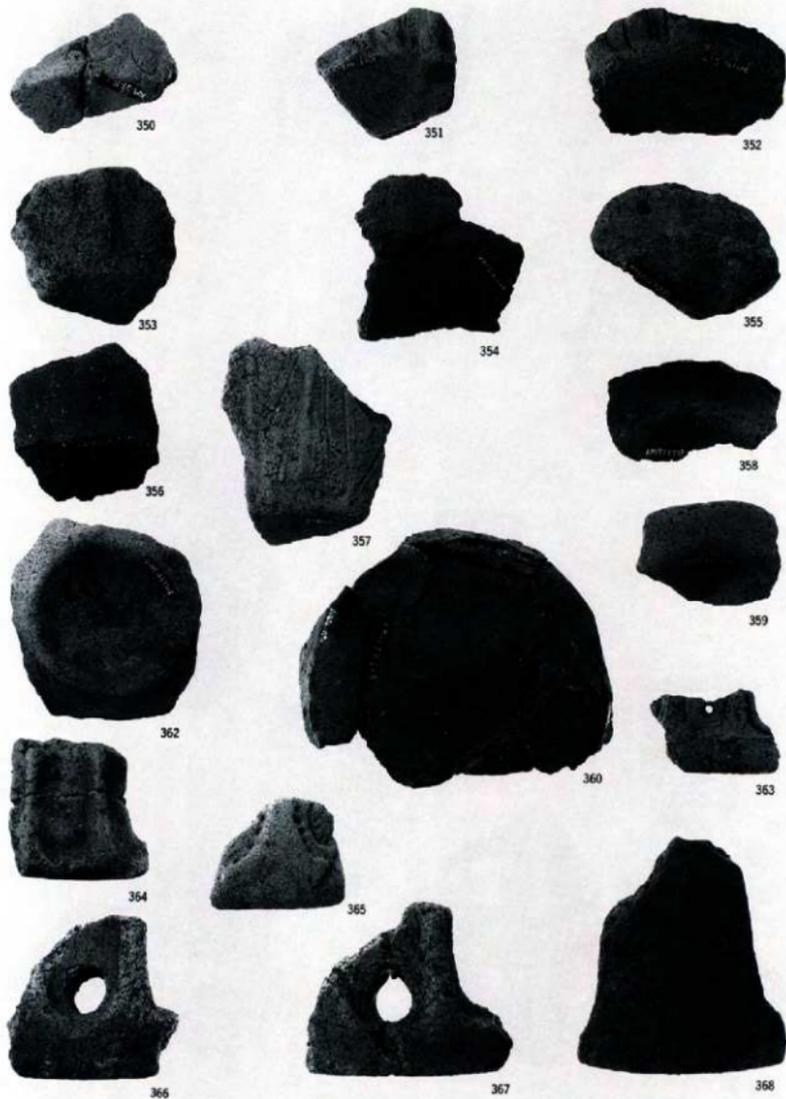
包含層出土土器Ⅱ  
 中期胴部 3-b・c、4類



包含層出土土器(1)  
中期胴部 5、6-a·b·c·d類、壺類



包倉層出土土器(13)  
壺類、淺鉢、底部



包含層出土土器(4)  
底部、脚部



369



370



371



372



373



374



375



376



377



378



379



380



381



383



384

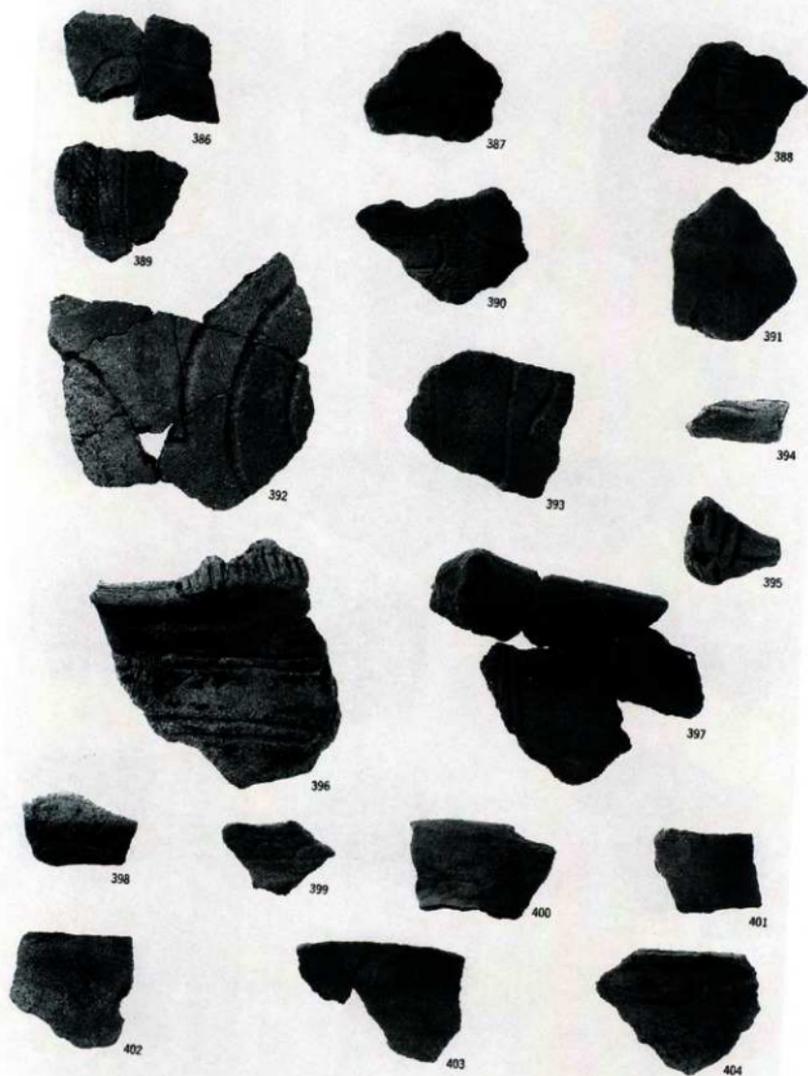


382

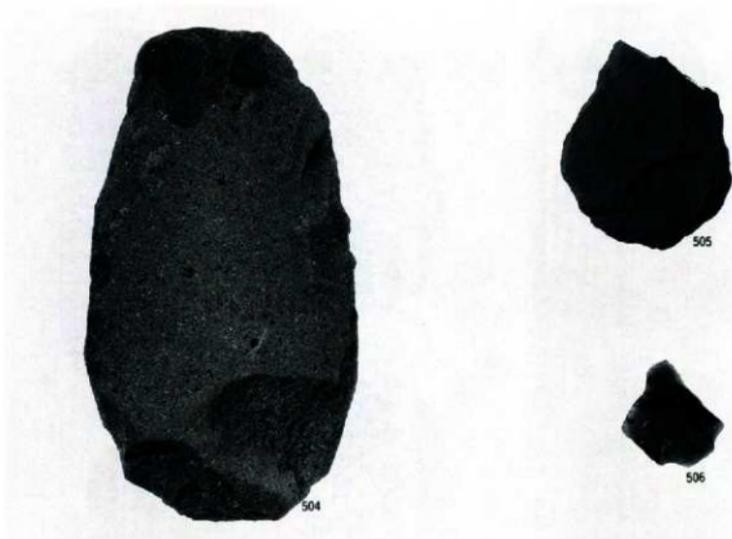


385

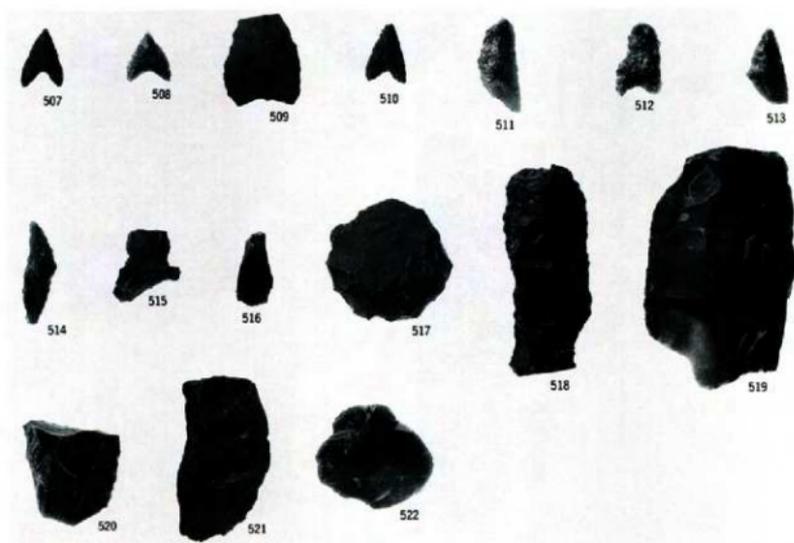
包含層出土土器(15)  
後期



包含層出土土器⑩  
後期、晩期



第2号墳出土石器



土坑・ピット出土石鏃、石匙、ピエス・エスキュー、スクレイパー、RF、UF  
遺構出土石器(1)



土坑・ピット出土打製石斧、磨製石斧  
遺構出土石器(2)



532



533



534



535



536



537

土坑・ピット出土石核



538



539



540



541



542



543



544



545



546



547



548



549



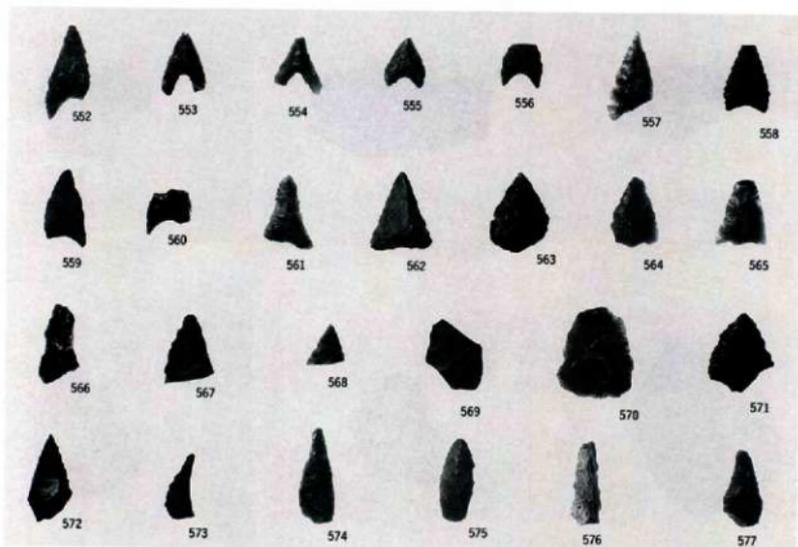
550



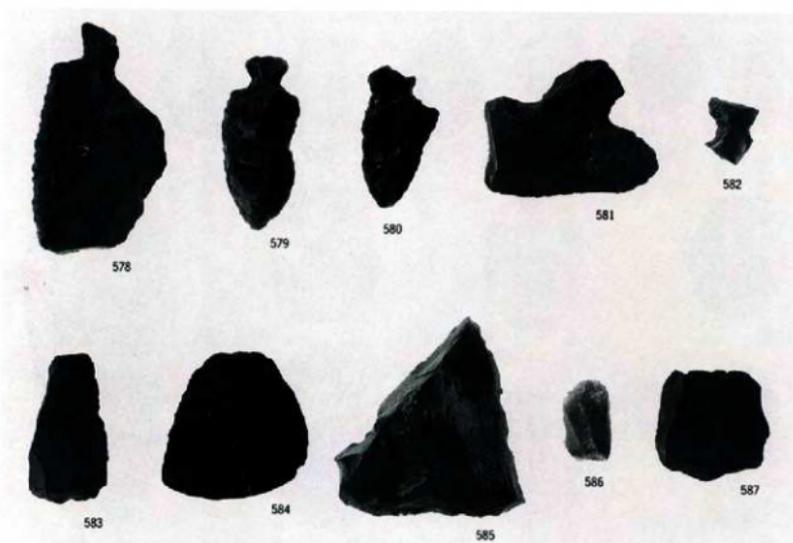
551

土坑・ピット出土石核 (538~544 SK79, 545~550 Pt60)、蔵石

遺構出土石器(3)



石鏃、未製品、石錐



石匙、スクレイパー、ピエス・エスキュー

包含層出土石器(1)



588



589



590

打製石斧



591



592



593



594

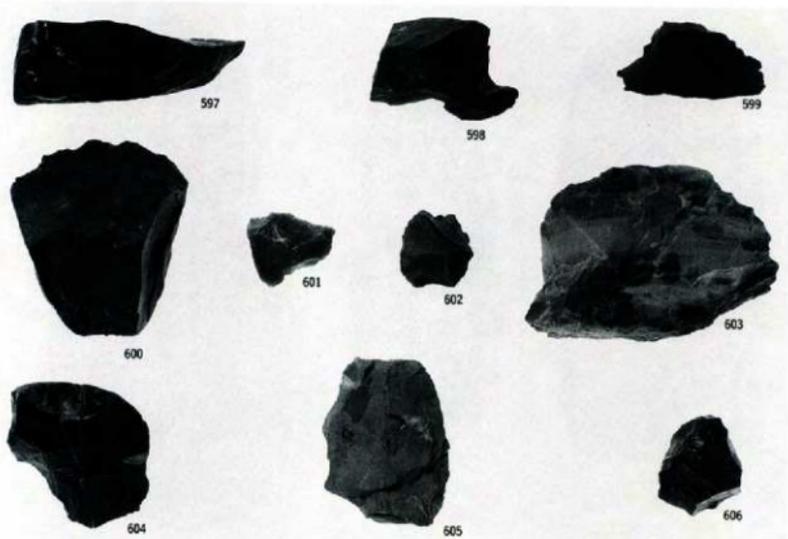


595

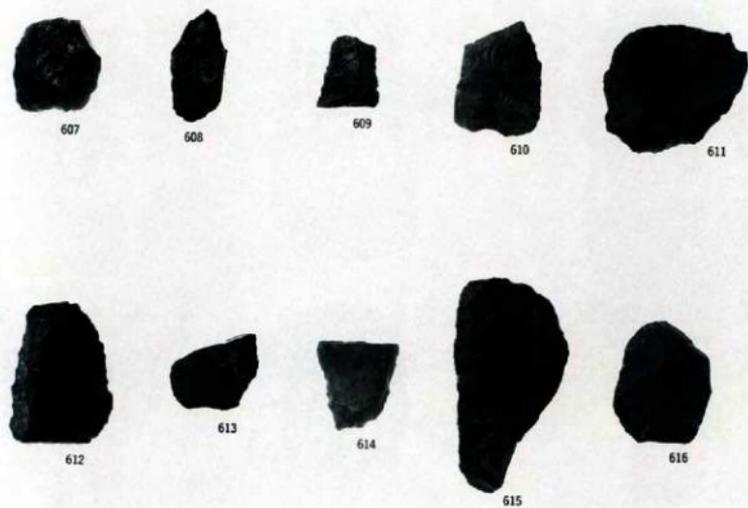


596

磨製石斧、石劍  
包含層出土石器(2)

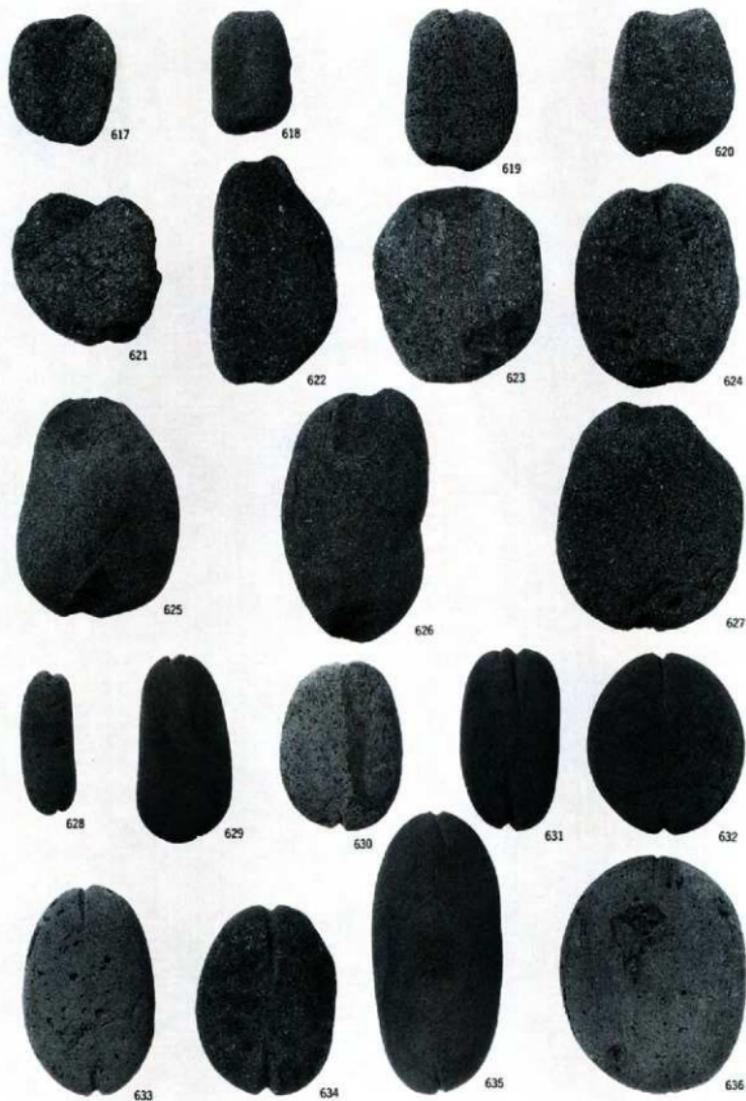


石 種

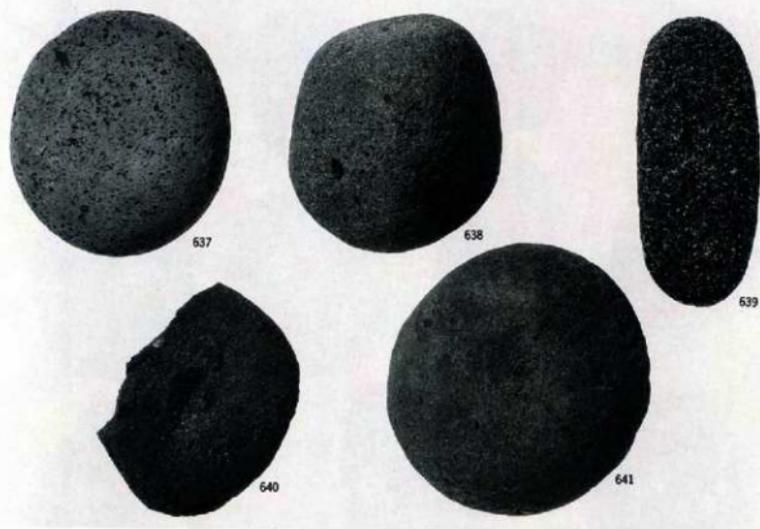


RF, UF

包含層出土石器(3)



打穴石鏃、切目石鏃  
包含層出土石鏃(4)



敲石、凹石、磨石



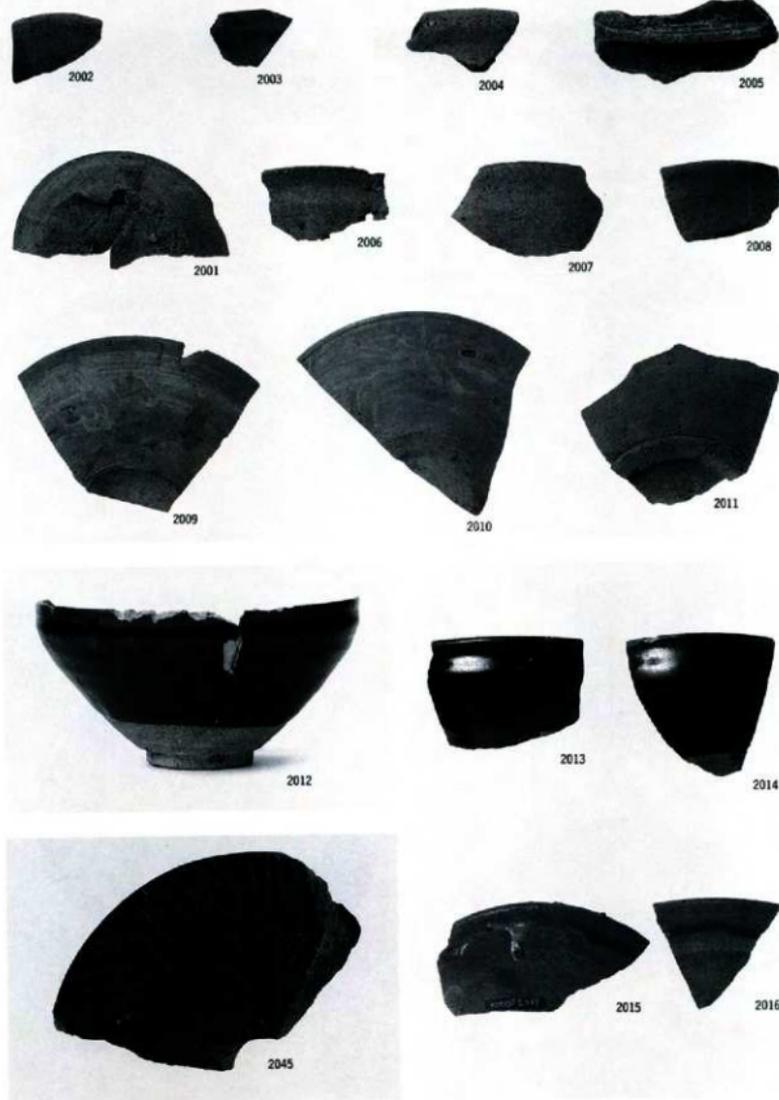
642



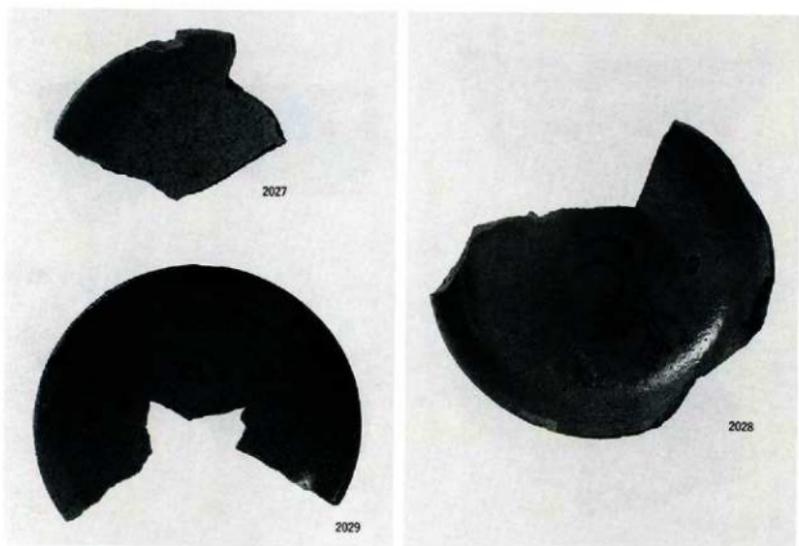
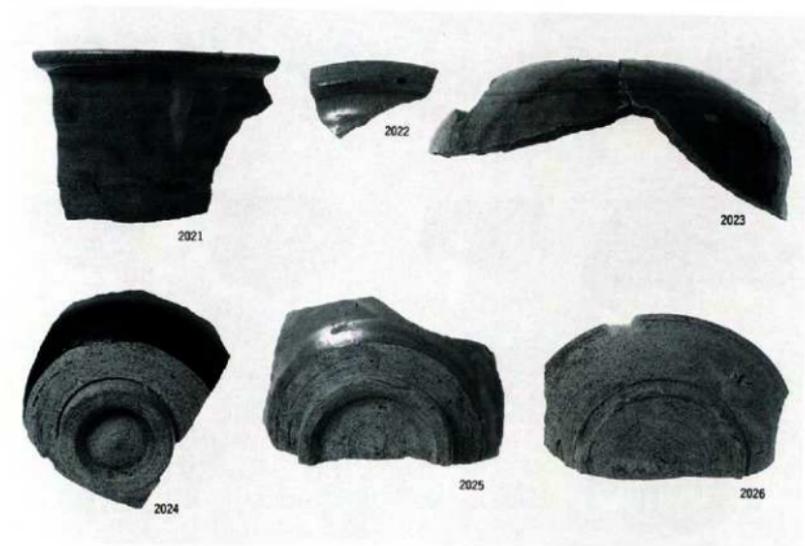
643

石 皿

包含層出土石器(5)



中近世陶磁器(1)、茶臼





2030



2031



2032



2033



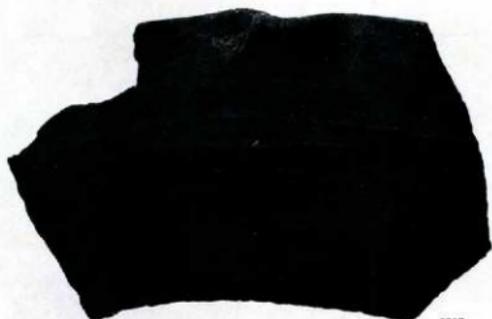
2034



2035



2036



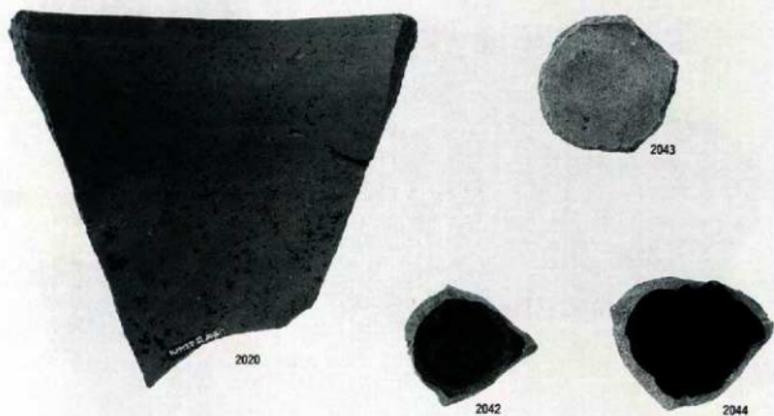
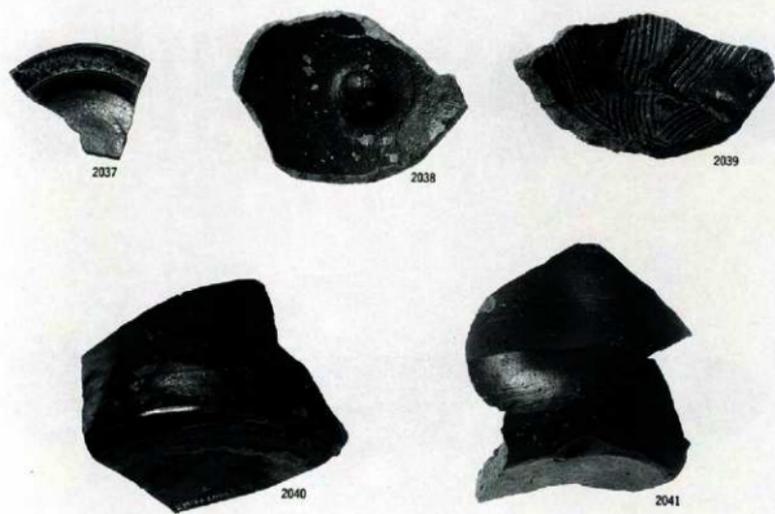
2017



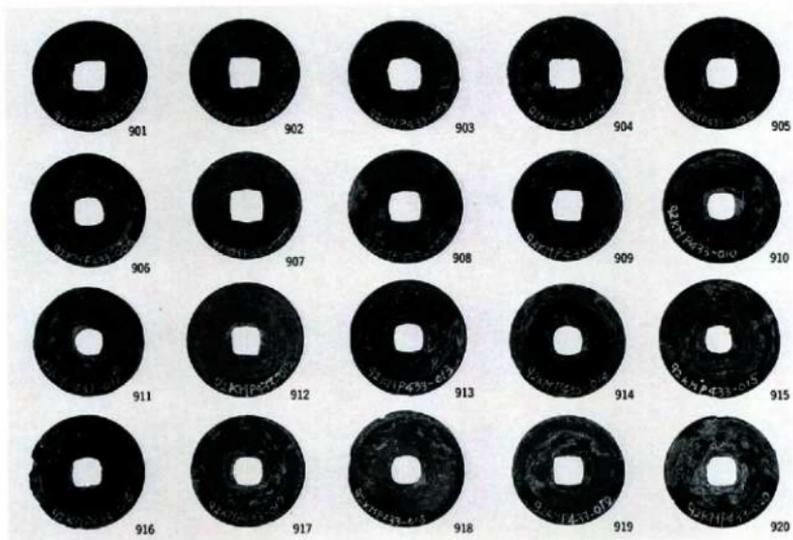
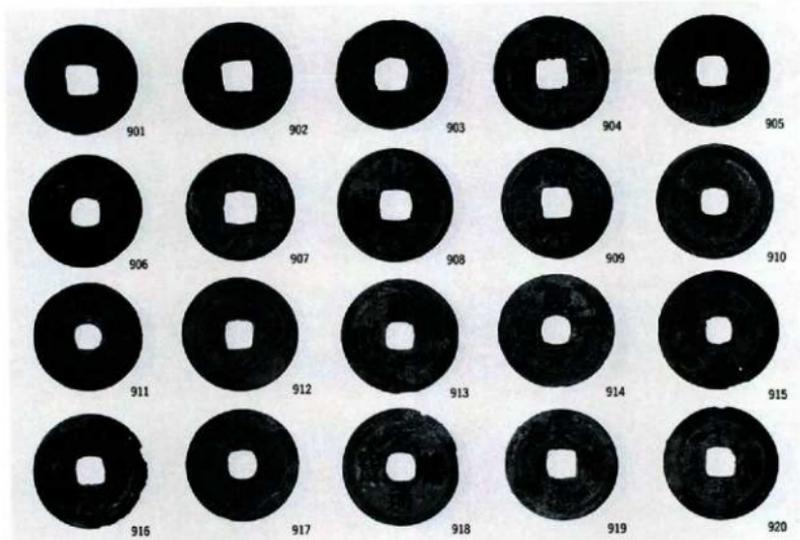
2018



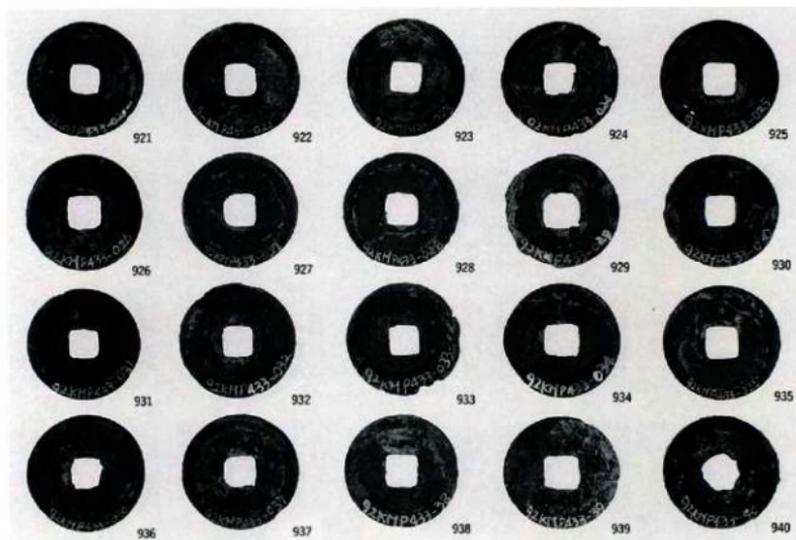
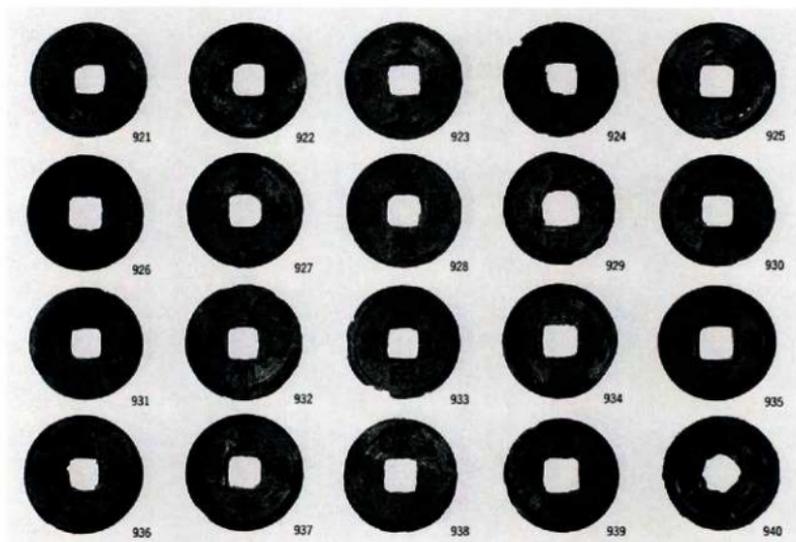
2019



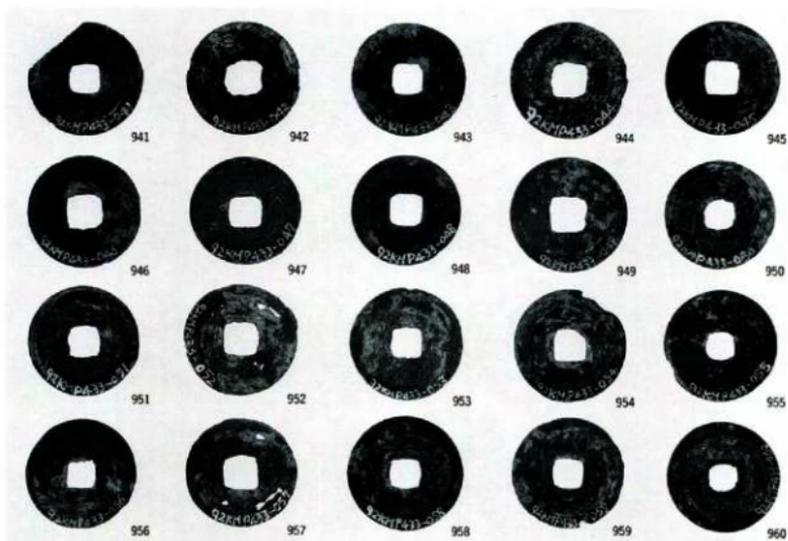
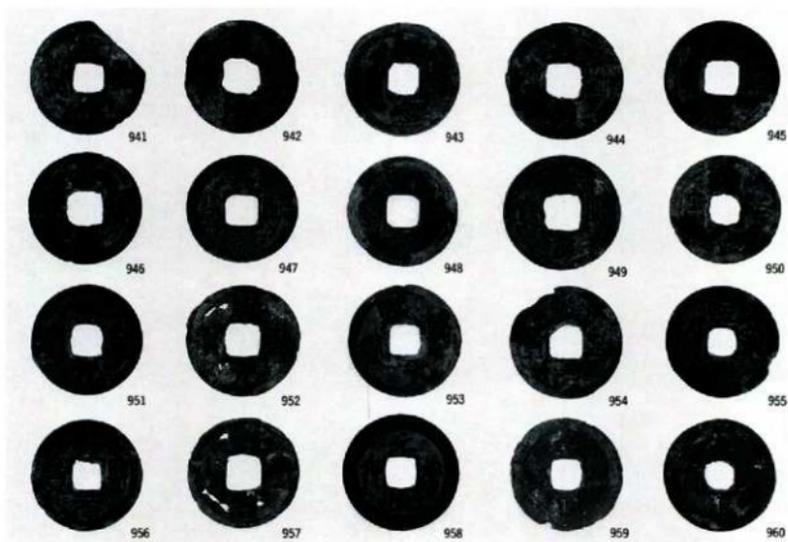
中近世陶磁器(4)



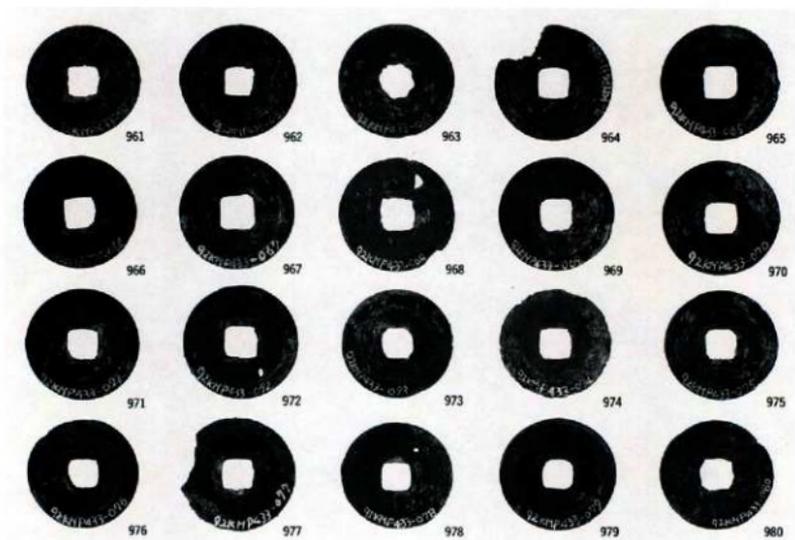
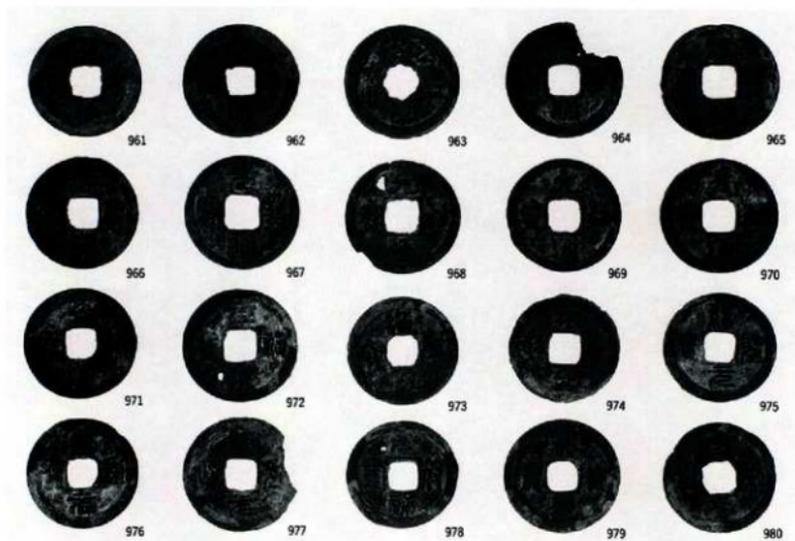
さし 銭 (1)



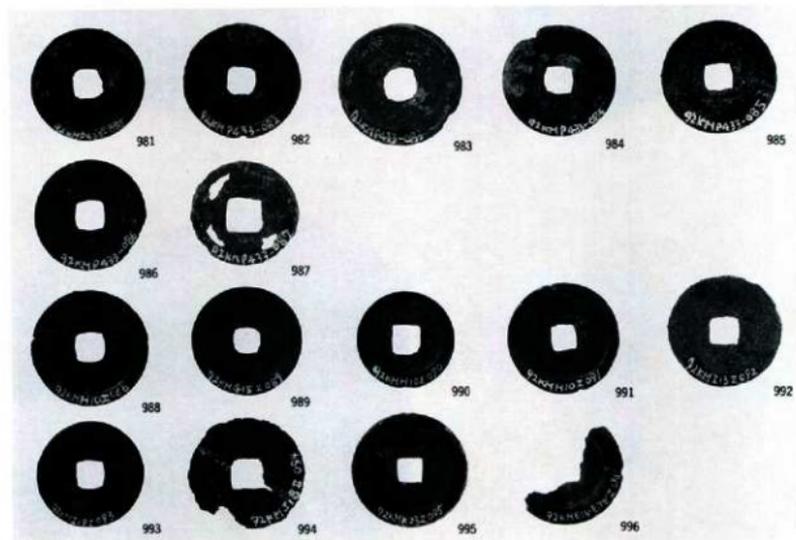
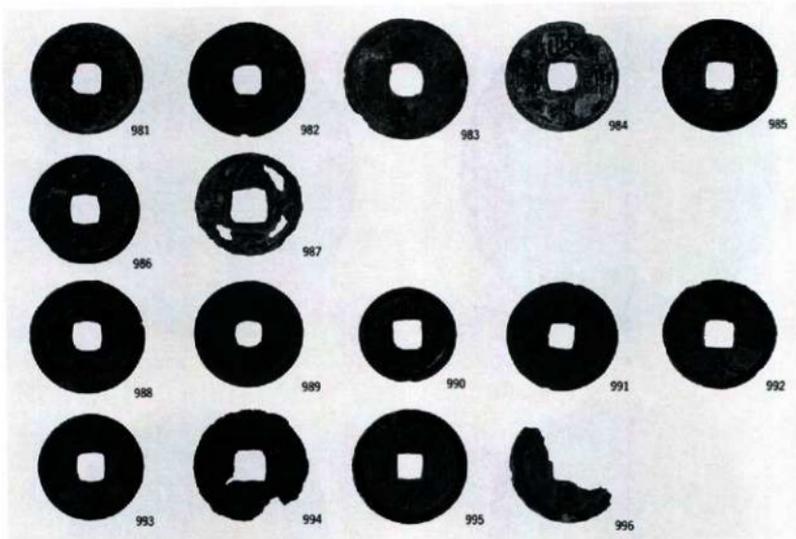
さし 銭 (2)



さし銭 (3)



さし 銭 (4)

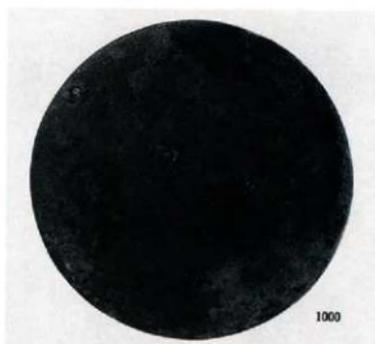


さし銭5、銭貨類



1000

和鏡(表)



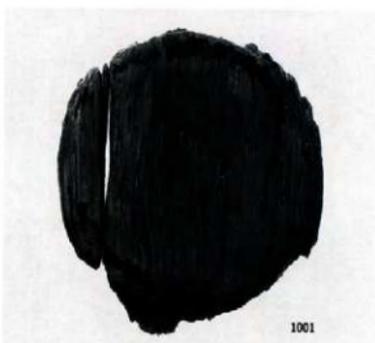
1000

和鏡(裏)



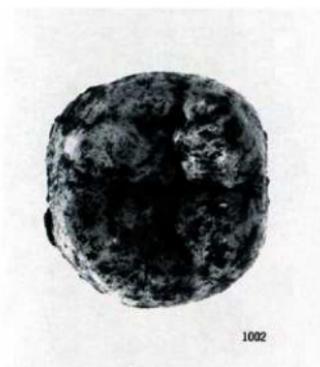
1001

木製品(表)



1001

木製品(裏)



1002

SK98出土産



同上(部分拡大) 黒色物質付着の様子

1001

和鏡、木製品、歯



和鏡紐



和鏡と共に出土した木製品表面の黒色物質の断面写真

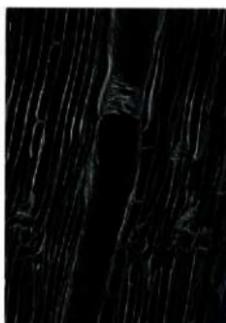
上岡田村平遺跡 SI 3 出土炭化材(1)



1a. ハンノキ属ヤシヤブシ亜属(横断面)  
SW 2 bar:0.5mm



1b. 同左(接線断面) bar:0.1mm



1c. 同左(放射断面) bar:0.1mm



2a. ハンノキ属ヤシヤブシ亜属(横断面)  
SW 54 bar:0.5mm



2b. 同左(接線断面) bar:0.1mm



2c. 同左(放射断面) bar:0.1mm



3a. ハンノキ属ハンノキ亜属(横断面)  
NW 39 bar:0.5mm



3b. 同左(接線断面) bar:0.1mm



3c. 同左(放射断面) bar:0.1mm

上岡田村平遺跡 SI 3 出土炭化材(2)



4a. ブナ属 (横断面)  
SW 4 bar:0.5mm



4b. 同左 (接線断面) bar:0.1mm



4c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm



5a. コナラ属コナラ節 (横断面)  
SW32 bar:0.5mm



5b. 同左 (接線断面) bar:0.1mm



5c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm



6a. クリ (横断面)  
NW51 bar:0.5mm



6b. 同左 (接線断面) bar:0.1mm



6c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm

上関田村平遺跡 SI 3 出土炭化材③



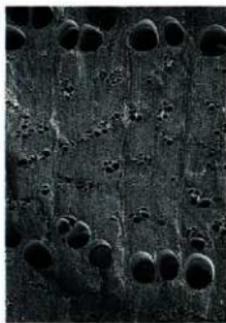
7a. ケヤキ (横断面)  
NW34 bar:0.5mm



7b. 同左 (接線断面) bar:0.1mm



7c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm



8a. エノキ属 (横断面)  
SW90 bar:0.5mm



8b. 同左 (接線断面) bar:0.1mm



8c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm



9a. カツラ (横断面)  
NW47 bar:0.1mm



9b. 同左 (接線断面) bar:0.1mm



9c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm

上関田村平遺跡 SI 3 出土炭化材(4)



10a. クスノキ科 (横断面)  
NW54 bar:0.5mm



10b. 同左 (縦線断面) bar:0.1mm



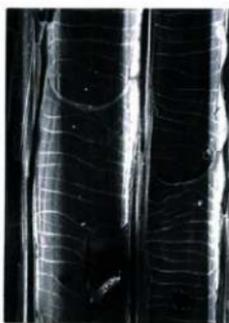
10c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm



11a. ヤマザクラ (横断面)  
NW17 bar:0.5mm



11b. 同左 (縦線断面) bar:0.1mm



11c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm



12a. ヌズリハ属 (横断面)  
NW60 bar:0.5mm



12b. 同左 (縦線断面) bar:0.1mm

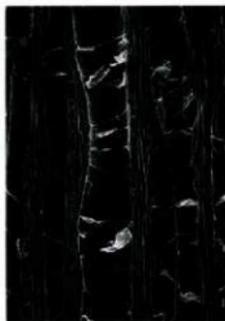


12c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm

上開田村平遺跡 Si 3 出土炭化材⑤



13a. スルナ (横断面)  
SW26 bar0.5mm



13b. 同左 (縦線断面) bar0.1mm



13c. 同左 (放射断面) bar0.1mm



14a. カエデ属 (横断面)  
SW47 bar0.5mm



14b. 同左 (縦線断面) bar0.1mm



14c. 同左 (放射断面) bar0.1mm



15a. トナノキ (横断面)  
SW63 bar0.5mm



15b. 同左 (縦線断面) bar0.1mm



15c. 同左 (放射断面) bar0.1mm

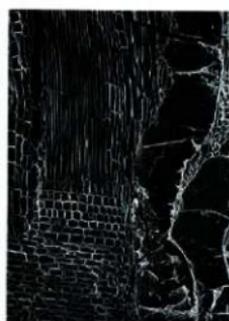
上岡田村平遺跡 SI 3 出土炭化材⑥



16a. ケンボネ属 (横断面)  
SE 8 bar:1mm



16b. 同左 (縦線断面) bar:0.1mm



16c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm



17a. ワコギ属 (横断面)  
SE 4 bar:0.5mm



17b. 同左 (縦線断面) bar:0.1mm



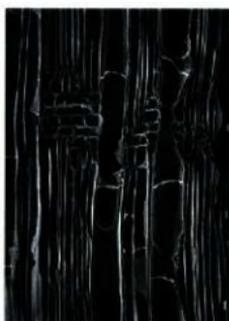
17c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm



18a. コシアブラ (横断面)  
SW71 bar:0.5mm



18b. 同左 (縦線断面) bar:0.1mm



18c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm

上関田村平遺跡 SI 3 出土炭化材(7)



19a. リョウフ (横断面)  
SW1 bar0.5mm



19b. 同左 (接線断面) bar0.1mm



19c. 同左 (放射断面) bar0.1mm



20a. エブナキ属 (横断面)  
SW37 bar0.5mm



20b. 同左 (接線断面) bar0.1mm



20c. 同左 (放射断面) bar0.1mm



21a. トネリコ属 (横断面)  
SW33 bar0.5mm



21b. 同左 (接線断面) bar0.1mm



21c. 同左 (放射断面) bar0.1mm

上開田村平遺跡 SI 3 出土炭化材⑧



22a. キブシ  
NW12 bar:0.5mm



22b. 同左 (縦線断面) bar:0.1mm



22c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm



23a. 散孔材A (横断面)  
SE14 bar:0.5mm



23b. 同左 (縦線断面) bar:0.1mm



23c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm



24a. 散孔材B (横断面)  
SW82 bar:1mm



24b. 同左 (縦線断面) bar:0.1mm



24c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm

上関田村平遺跡土坑出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真(1)



1a. スギ(横断面) 98土坑 bar:0.5 $\mu$ m



1b. 同(接線断面) bar:0.5 $\mu$ m



1c. 同(放射断面) bar:0.05 $\mu$ m



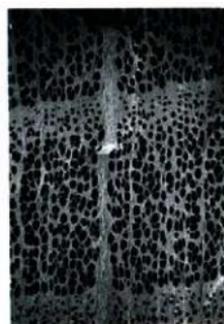
2a. ハンノキ節(横断面)98土坑 bar:1 $\mu$ m



2b. 同(接線断面) bar:0.1 $\mu$ m



2c. 同(放射断面) bar:0.5 $\mu$ m



3a. フナノ属(横断面) 98土坑 bar:1 $\mu$ m



3b. 同(接線断面) bar:0.5 $\mu$ m



3c. 同(放射断面) bar:0.5 $\mu$ m

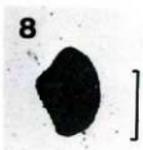
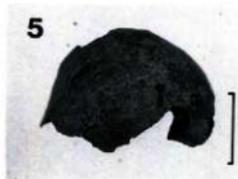
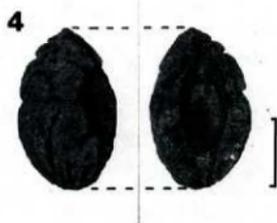
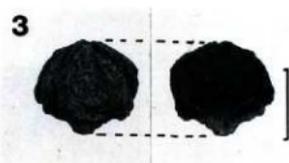
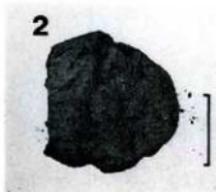
上開田村平遺跡土坑出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真(2)



4a. クリ (横断面) 34土坑 bar0.1μm

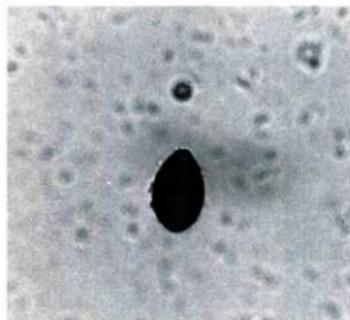
4b. 同 (縦断面) bar0.1μm

4c. 同 (放射断面) bar0.1μm



徳山地区遺跡上開田村平出土の炭化種実 目盛りは1cm

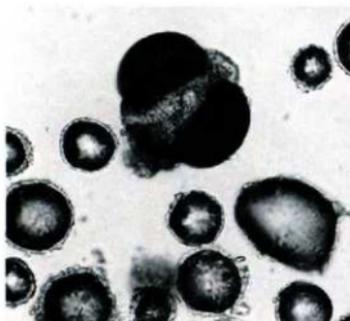
1. クリ, 種子 (92KM SK34) 2. クリ, 種子破片 (92KM SK34) 3. クリ, 種子破片 (92KM SK88) 4. モモ, 食痕のある核 (92KM SK70) 5. トチノキ, 種皮破片 (92KM SK34) 6. トチノキ, 種子破片 (92KM SK34) 7. 堅果, 破片 (92KM SK34) 8. 堅果, 破片 (92KM SK34)



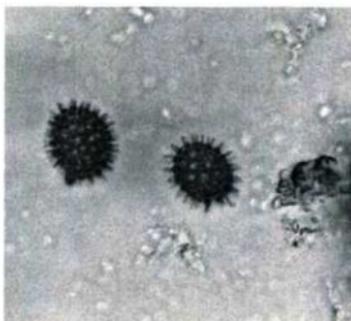
No. 2 横川吸虫卵 (×200)



No. 3 蛔虫不授精卵 (×100)



(×100)



(×200)



(×200)



(×200)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	かみかいでんむらだいらいせき						
書名	上開田村平遺跡						
副書名	徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	第6集						
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第25集						
編著者名	武藤貞昭・安田(大知)正枝・小野木学・高橋幸仁・小谷和彦・植田弥生他						
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜県岐阜市三田洞東1丁目26番地の1						
発行年月日	西暦1999年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
所取遺跡名	所在名	市町村	遺跡番号				
上開田村平遺跡	岐阜県揖斐郡 藤橋村大字 開田字北カイ戸	21407	06693	35° 41' 41"	136° 28' 40"	19920506 ↓ 19921130 19930506 ↓ 19930716 1,930㎡	徳山ダム建設事業に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上開田村平遺跡	集落	縄文時代 中期末葉  中近世	炉跡 4基 埋設土器 2基 焼礫集積遺構 1基 集石遺構 5基 和鏡埋納遺構 1基 積石塚 1基 厩跡 5基 他	縄文土器13,000点 石器 2,050点 中近世陶磁器 287点 銭貨 101枚 和鏡 1面 木器 1点	・縄文時代中期末葉の土器がまともに出土 ・径約4mの焼礫集積遺構検出 ・さし銭出土 ・厩跡・ホーロ他の民俗的な遺構も記録		

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第25集

## 上 開 田 村 平 遺 跡

徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集

1999年3月31日 刊行

編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター  
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印刷 西濃印刷株式会社

「上開田村平遺跡」発掘調査報告書正誤表

ページ	訂正箇所	誤	正
10	第2表	慶長14年(1600)	慶長14年(1609)
21	第12表	(水糸高) 286.80m	296.80m
31	第3表	(SK19の遺物番号) 23	23
32	第4表	(P73の遺物番号) 49	49
31~ 33	第3~ 5表	(表の右下) 中末は中期中葉	中末は中期末葉
46	12行目	直径約90cmの	長径約90cmの
52	第33図	15の拓影の傾き	15の拓影の口縁を水平にする
71	27行目	(232)と(235)は	(234)と(235)は